

発掘調査報告第7集

県営ほ場整備事業大田切(3)地区(昭和52年度分)

埋蔵文化財緊急発掘調査

# 原 垣 外 遺 跡

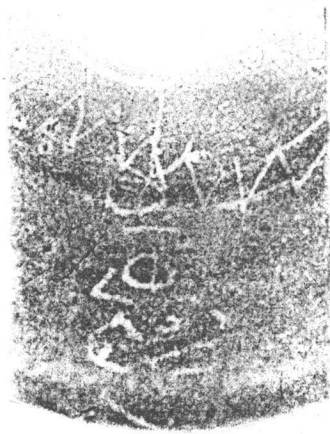
——緊急発掘調査報告書——

1 9 7 8

南信土地改良事務所

駒ヶ根市教育委員会

# 原 垣 外 遺 跡



(第27号住居址出土須恵器蓋拓影図)

# 序 文

北は大田切川、南は中田切川を境界とする駒ヶ根市赤穂地区は、広い扇状台地上に展開し、その間には、古田切川・上穂沢川・辻沢川などの小河川が東流し、田切地形を形成しております。

赤穂地区には100箇所を超える遺跡があり、中央アルプス山麓や小河川に沿って集中してみられ、古くからその濃密な遺跡群は学界の注目するところでありました。

昭和45年以来県営ほ場整備事業が行われ、それに先立って藤助畑・大城林・舟山遺跡など多くの発掘調査を行ってきております。

今回発掘調査を行った原垣外遺跡は古くから知られており、調査の結果報告書にみられるとおり多くの遺構・遺物が発見され貴重な遺跡であることがわかりました。

縄文時代の住居址30軒、奈良から平安時代にかけての住居址13軒、さらに大土坑群の発見とその成果は目をみはるものがあり、今後の研究上重要な役割を果たすものと確信をいたしております。

長期にわたる発掘調査にあたられた友野良一団長を初め、快く発掘作業に参加して下さった地元の方々、事業に対し深いご理解をいただいた大田切土地改良区並びに南信土地改良事務所の方々、地主の方々等、多くの皆さまのご協力、ご厚志によって無事初期の目的を果たすことができました。

ここに関係者の皆さま方に心から感謝申し上げますとともに、この報告書が学界のお役に立つことを念願する次第であります。

昭和53年3月10日

駒ヶ根市教育長 木 下 衛

# 凡 例

1. この報告書は昭和52年度に実施した原垣外遺跡のもので、文化庁補助事業と南信土地改良事務所の委託事業とを併せたものである。報告書の構成はそれ故変則となっていることをご了解いただきたい。
2. 本報告書は契約期間内にまとめることが要求されているため、調査によって検出された遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおき、資料の再検討は後日の機会にゆだねることとした。
3. 遺構のうち住居址は気賀沢進・宮下喜代子が土壇は小原晃一が製図した。焼土はドットで表し、炉内埋設土器は0で表示し、埋甕はウメと表示し、柱穴の深さは床面からの深さをcmで表している。縮尺は各図に示してある。
4. 土器の実測・製図は気賀沢進・小原晃一があたった。
5. 石器の実測・整図は小原晃一・宮下喜代子・新井美智子があたった。
6. 土器の復元は和田武夫があたった。
7. 本報告書の執筆分担は次のとおりである。

気賀沢進—第Ⅰ・Ⅱ章、Ⅲ章第1・2節、3節5  
小原晃一—第Ⅲ章第3節1～4
8. 炭化物の整理作業は小林喜美江氏の手をわずらわした。
9. 遺物及び実測図類は市立博物館に保管してある。
10. 土師、須恵、灰釉については田畑辰雄氏より教示いただくことが多かった。ここに記して謝したい。



# 目 次

序 文	
凡 例	
目 次	
挿図目次	

## 第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過	1
第2節 調査会の組織	1
第3節 発掘作業経過	2

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 位置及び地形	3
第2節 歴史的環境	3

## 第Ⅲ章 発掘調査

第1節 調査概要	11
第2節 住居址と遺物	12
第3節 土壇と遺物	189

# 挿 図 目 次

第1図 原垣外遺跡位置図	4
第2図 原垣外遺跡地形図	5
第3図 原垣外遺跡付近遺跡分布図	6
第4図 原垣外遺跡グリット図	8
第5図 原垣外遺跡遺構図	9
第6図 第13号住居址実測図	12
第7図 第13号住居址竈実測図	13
第8図 第13号住居址出土土器	14
第9図 第14号住居址実測図	15
第10図 第14号住居址竈実測図	16
第11図 第14号住居址出土土器	17
第12図 第14号住居址出土土錘・有孔小珠	18
第13図 第14号住居址出土石器	18
第14図 第15号住居址実測図	19
第15図 第15号住居址出土土器	20

第16图	第15号住居址覆土出土石器	21
第17图	第15号住居址出土石器	22
第18图	第15号住居址床面出土石器	23
第19号	第16・17号住居址实测图	24
第20图	第16号住居址床面出土土器	25
第21图	第16号住居址覆土出土石器	25
第22图	第17号住居址床面出土土器	26
第23图	第17号住居址出土石器	27
第24图	第18・21号住居址实测图	28
第25图	第18号住居址出土土器	29
第26图	第18号住居址覆土出土石器	30
第27图	第21号住居址床面出土土器	31
第28图	第21号住居址床面出土石器	32
第29图	第22・26号住居址实测图	33
第30图	第22号住居址床面出土土器	34
第31图	第22号住居址床面出土石器	35
第32图	第23号住居址实测图	36
第33图	第23号住居址床面出土土器	36
第34图	第23号住居址出土石器	37
第35图	第23号住居址出土石器	38
第36图	第24号住居址实测图	39
第37图	第24号住居址竈实测图	39
第38图	第24号住居址床面出土土器	40
第39图	第24号住居址出土石皿	41
第40图	第26号住居址覆土出土土器	42
第41图	第26号住居址床面出土土器	43
第42图	第26号住居址覆土出土石器	44
第43图	第25号住居址实测图	45
第44图	第25号住居址埋甕实测图	47
第45图	第25号住居址土器接合图1~11	49
第46图	第25号住居址出土土器接合资料1~8	50
第47图	第25号住居址出土土器接合资料9・10	51
第48图	第25号住居址出土土器接合资料11・12	52
第49图	第25号住居址出土土器接合图13	53
第50图	第25号住居址出土土器接合资料13	53
第51图	第25号住居址土器接合图14	54

第52図	第25号住居址出土土器接合資料14	54
第53図	第25号住居址土器接合図15	54
第54図	第25号住居址出土土器接合資料15	54
第55図	第25号住居址土器接合図16	55
第56図	第25号住居址出土土器接合資料16	55
第57図	第25号住居址土器接合図17	56
第58図	第25号住居址出土土器接合資料17	56
第59図	第25号住居址土器接合図18	57
第60図	第25号住居址出土土器接合資料18	57
第61図	第25号住居址土器接合図19	57
第62図	第25号住居址出土土器接合資料19	58
第63図	第25号住居址土器接合図20	59
第64図	第25号住居址出土土器接合資料20	59
第65図	第25号住居址土器接合図21	59
第66図	第25号住居址出土土器接合資料21	59
第67図	第25号住居址出土土器接合資料22～24	60
第68図	第25号住居址覆土出土土器	61
第69図	第25号住居址覆土出土土器	62
第70図	第25号住居址覆土出土土器	63
第71図	第25号住居址覆土出土土器	64
第72図	第25号住居址覆土出土土器	65
第73図	第25号住居址覆土出土土器	66
第74図	第25号住居址覆土出土土器	67
第75図	第25号住居址覆土出土土器	68
第76図	第25号住居址覆土出土土器	69
第77図	第25号住居址覆土出土土器	70
第78図	第25号住居址覆土出土土器	71
第79図	第1・3号住居址実測図	73
第80図	第1号住居址出土土器	75
第81図	第1号住居址床面出土土器	76
第82図	第1号住居址覆土出土土器	77
第83図	第1号住居址覆土出土土器	78
第84図	第1号住居址床面出土土器	79
第85図	第1号住居址床面出土土器	80
第86図	第3号住居址出土土器	81
第87図	第3号住居址覆土出土土器	82

第88图	第3号住居址出土石器·····	83
第89图	第3号住居址床面出土石器·····	84
第90图	第3号住居址床面出土石器·····	85
第91图	第3号住居址床面出土石器·····	86
第92图	第2号住居址实测图·····	86
第93图	第2号住居址床面出土石器·····	87
第94图	第2号住居址出土石器·····	88
第95图	第4号住居址实测图·····	89
第96图	第4号住居址出土石器·····	90
第97图	第4号住居址出土石器·····	91
第98图	第4号住居址覆土出土石器·····	93
第99图	第4号住居址覆土出土石器·····	94
第100图	第4号住居址製鉄址实测图·····	95
第101图	第6号住居址实测图·····	96
第102图	第6号住居址床面出土石器·····	97
第103图	第6号住居址出土石器·····	98
第104图	第6号住居址床面出土石器·····	99
第105图	第8号住居址实测图·····	100
第106图	第8号住居址床面出土石器·····	101
第107图	第8号住居址床面出土石器·····	102
第108图	第8号住居址床面出土石器·····	103
第109图	第8号住居址床面出土石器·····	104
第110图	第9号住居址实测图·····	105
第111图	第9号住居址覆土出土石器·····	106
第112图	第9号住居址床面出土石器·····	106
第113图	第9号住居址出土石器·····	107
第114图	第10号住居址实测图·····	108
第115图	第10号住居址覆土出土石器·····	109
第116图	第10号住居址覆土出土石器·····	110
第117图	第10号住居址覆土出土石器·····	111
第118图	第11号住居址实测图·····	112
第119图	第11号住居址覆土出土石器·····	113
第120图	第11号住居址床面出土石器·····	114
第121图	第11号住居址覆土出土石器·····	115
第122图	第11号住居址出土石器·····	116
第123图	第11号住居址床面出土石器·····	117

第124図	第12号住居址実測図	118
第125図	第12号住居址床面出土土器	119
第126図	第12号住居址床面出土土器	120
第127図	第12号住居址出土土器	121
第128図	第19号住居址竈実測図	122
第129図	第19号住居址実測図(折り込み)	123
第130図	第19号住居址出土土器	125
第131図	第19号住居址出土土器	126
第132図	第19号住居址出土土器	127
第133図	第19号住居址出土土器	128
第134図	第19号住居址覆土出土石器	131
第135図	第19号住居址床面出土石器	132
第136図	第20号住居址実測図	134
第137図	第20号住居址覆土出土土器	135
第138図	第20号住居址床面出土土器	136
第139図	第20号住居址床面出土土器	137
第140図	第20号住居址出土土器	138
第141図	第20号住居址床面出土土器	139
第142図	第20号住居址床面出土石皿多孔石	140
第143図	第27号住居址実測図	141
第144図	第27号住居址竈実測図	142
第145図	第27号住居址出土土器	143
第146図	第27号住居址出土土器	144
第147図	第27号住居址出土石器	145
第148図	第28・29号住居址実測図	146
第149図	第28号住居址竈実測図	147
第150図	第28号住居址出土土器	148
第151図	第29号住居址出土土器	149
第152図	第30・31・33号住居址実測図	150
第153図	第30号住居址出土土器	152
第154図	第30号住居址覆土出土石器	153
第155図	第30号住居址出土石器	154
第156図	第30号住居址床面出土石皿	155
第157図	第31号住居址覆土出土土器	156
第158図	第31号住居址床面出土土器	157
第159図	第31号住居址床面出土石器	158

第160图	第32号住居址实测图·····	159
第161图	第32号住居址出土土器·····	160
第162图	第32号住居址覆土出土石器·····	161
第163图	第32号住居址床面出土石器·····	162
第164图	第33号住居址出土土器·····	164
第165图	第33号住居址床面出土石器·····	165
第166图	第33号住居址床面出土石器·····	166
第167图	第34号住居址实测图·····	167
第168图	第34号住居址出土土器·····	168
第169图	第34号住居址床面出土石器·····	169
第170图	第34号住居址床面出土石器·····	170
第171图	第35·41号住居址实测图·····	172
第172图	第35号住居址竈实测图·····	173
第173图	第35号住居址出土土器·····	173
第174图	第36号住居址实测图·····	174
第175图	第36号住居址竈实测图·····	175
第176图	第36号住居址出土土器·····	177
第177图	第36号住居址出土土器·····	178
第178图	第36号住居址出土土器·····	179
第179图	第36号住居址出土鉄製品·····	179
第180图	第37号住居址实测图·····	181
第181图	第37号住居址竈实测图·····	181
第182图	第37号住居址出土土器·····	182
第183图	第37号住居址出土土器·····	183
第184图	第39号住居址实测图·····	185
第185图	第39号住居址出土土器·····	186
第186图	第40号住居址实测图·····	187
第187图	第40号住居址床面出土土器·····	187
第188图	土坛实测图·····	208
第189图	土坛实测图·····	209
第190图	土坛实测图·····	210
第191图	土坛实测图·····	211
第192图	土坛实测图·····	212
第193图	土坛实测图·····	213
第194图	土坛实测图·····	214
第195图	土坛实测图·····	215

第196図	土坂実測図	216
第197図	土坂実測図	217
第198図	土坂出土土器	218
第199図	土坂出土土器	219
第200図	土坂出土土器	220
第201図	土坂出土土器	221
第202図	土坂出土土器	222
第203図	土坂出土土器	223
第204図	土坂出土土器	224
第205図	土坂出土土器	225
第206図	土坂出土土器	226
第207図	土坂出土石器	226
第208図	土坂出土石器	227
第209図	土坂出土石器	228
第210図	土坂出土石器	229
第211図	土坂出土石器	230
第212図	土坂出土石器	231
第213図	土坂出土石器	232
第214図	土坂出土石器	233
第215図	土坂84実測図	234
第216図	土坂88実測図	235
第217図	土坂97実測図	236
第218図	クリ・不明遺体の個体変異図	238

# 第Ⅰ章 発掘調査の経緯

## 第1節 発掘調査に至るまでの経過

県営ほ場整備事業に伴う発掘調査の経費のうち、農家負担分については、文化財保護担当部局において負担するようにとの指示があったため、当該対象遺跡のうち原垣外遺跡の一部を原垣外B遺跡として文化庁補助事業として市教育委員会で実施することとし、昭和52年1月22日予算175万円の補助事業計画書を長野県教育委員会へ提出する。

5月4日補助金の内定があり、5月17日補助金交付申請書を提出するとともに必要な予算措置を行う。南信土地改良事務所より発掘調査の依頼があったため市博物館を中心に調査会を結成して発掘調査を行うこととし、6月3日土地改良事務所長と市長との間に「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約」を取り交わし、市長と調査会会長との間で再委託契約を結び事業を実施することとなった。

また補助事業についても原垣外B遺跡発掘調査会へ委託をして事業を行うこととし、7月30日市長と会長との間に「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を取り交わした。

補助事業と南信土地改良事務所からの委託調査を併行して行うこととなり、休耕作物の収穫を待って8月1日より原垣外遺跡の調査を開始した。補助事業の対象地区については8月22日より実施した。

## 第2節 調査会の組織

### ○原垣外遺跡発掘調査会

会 長 宮 下 清 計（市教育長）

木 下 衛（ 〳 ）後任（S 52・10・1～ ）

理 事 有 賀 勤（市教育次長）

〳 下 村 忠比古（市文化財審議会副委員長）

〳 宮 下 一 郎（市文化財審議会委員）

〳 松 村 義 也（ 〳 ）

〳 伊 藤 和 正（市博物館長）

監 事 松 崎 保 穂（市文化財保存会長）

〳 佐 藤 雪 洞（駒ヶ根郷土研究会会長）

幹 事 松 崎 勝 治（市教委社会教育係長）

原 寛 恒（市教委社会教育係）

井 上 かほる（市博物館）

気賀沢 進（ 〳 ）



## ○調査団

団 長	友 野 良 一	(日本考古学協会会員) 〈発掘担当者〉
調査員	気賀沢 進	(長野県考古学会会員・市博物館) 〈発掘担当者〉
〃	和 田 武 夫	( 〃 )
〃	北 沢 雄 喜	( 〃 )
〃	田 中 清 文	( 〃 )
〃	吉 沢 文 夫	( 〃 )
〃	丸 山 弥 生	( 〃 )
〃	小 原 晃 一	( 〃 )
〃	伊 藤 修	( 〃 )
〃	小 林 喜美江	(信州大学農学部在学)
指 導	丸 山 徹一郎	(県指導主事)
〃	関 浩 一	( 〃 )
〃	今 村 善 興	( 〃 )
〃	樋 口 昇 一	( 〃 )
〃	山 田 端 穂	( 〃 )
〃	伴 信 夫	( 〃 )
〃	笹 沢 浩	( 〃 )
〃	青 沼 博 之	( 〃 )
〃	小 林 秀 夫	( 〃 )
〃	林 茂 樹	(日本考古学協会会員)
〃	渡 辺 誠	(平安博物館)

(敬称略・順不同)

## 第3節 発掘作業経過

7月30日友野団長・和田調査員・気賀沢で遺跡の下見を行い、発掘区域の最終確認を行う。

8月1日発掘調査器材の運搬を行い午後よりグリット設定をする。つづいて2日現地にて結団式を行い、調査を開始する。

発掘調査は第1節で述べたとおり、二つの事業を併行して行うもので、補助事業は8月22日より対象区域の調査を行った。併行して進められた原垣外遺跡の発掘調査がすべて終了したのは9月30日であった。

調査団員、県教育委員会、土地改良区関係者、南信土地改良事務所、地主の方々を始め多くの関係者のご理解・ご指導をいただき、また長期間の発掘に常に献身的に作業に従事していただいた地元の皆様方のご協力、ご配慮によって、ここに初期の目的を果たし、調査を終了することができましたことについて心から感謝の意を申し上げる次第であります。

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 位置及び地形

当遺跡は駒ヶ根市赤穂市場割原垣外地籍に所在する。国鉄飯田線小町屋駅より東へ1.5km、県立赤穂高校の東に位置している。標高は645m前後である。

伊那谷は長野県の南部にあり、東に赤石山脈、中央構造線をはさんで戸倉山・高鳥谷山を初めとする前山の伊那山脈が並行して走る。西には木曽山脈があり、天竜川をはさんで南北に並走する。

伊那盆地は、沖積世以前にこの高峻な両側の山地からの過剰堆積により山麓に大小いくつかの扇状地が形成されている。

駒ヶ根市赤穂地区は市の境界となっている北の大田切川、南の中田切川によって形成された二つの大きな扇状地の複合した地域である。これらの両河川にはさまれた赤穂地区は中が更にいくつかの小河川が東流して田切地形を造っていることで有名である。赤穂地区の遺跡はそれらの小河川の沿岸にほとんどが分布している。

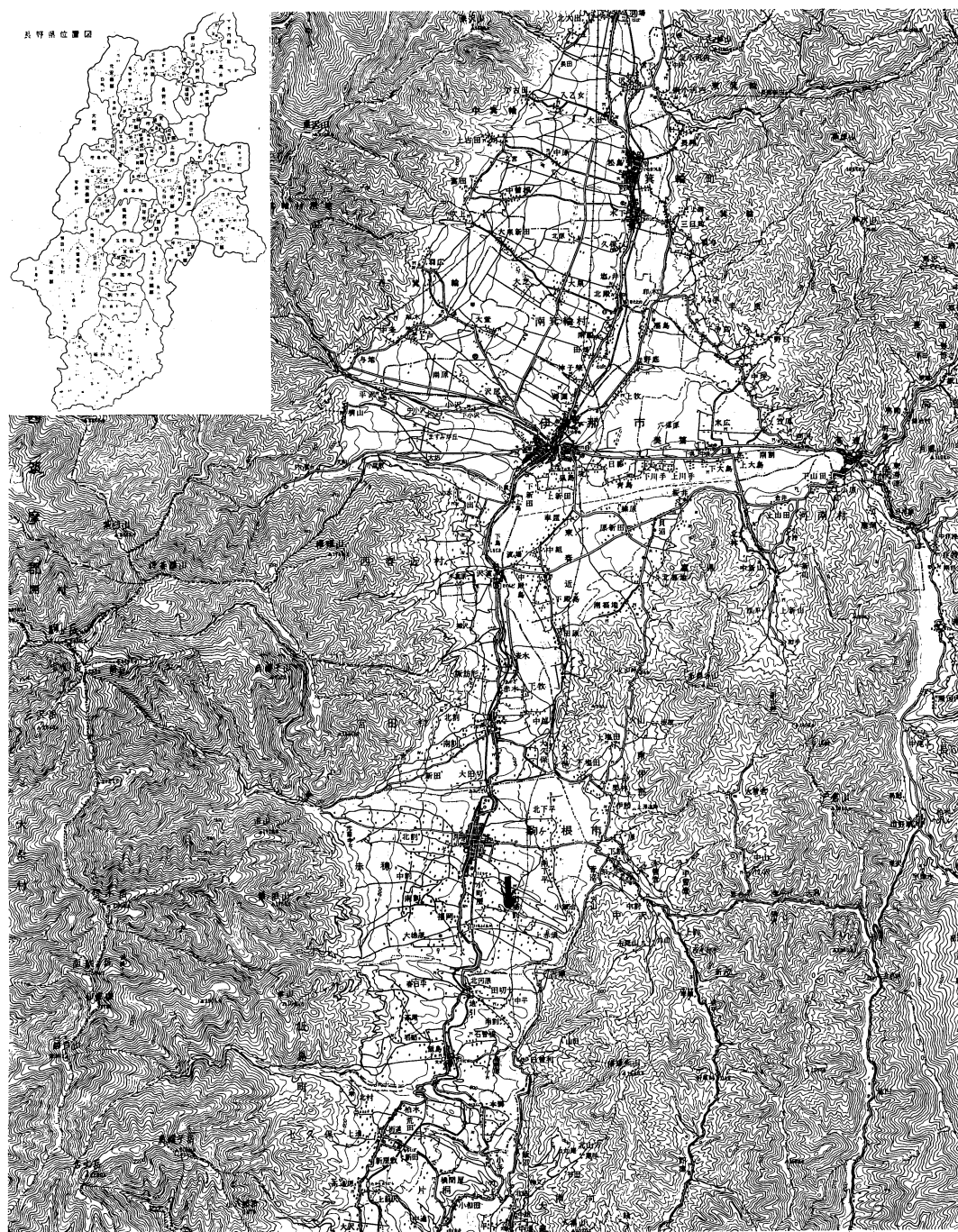
当遺跡は小河川によって開析された台地上の南側斜面に位置している。南にはねずみ川、さらに一段下がって上穂沢川が深いV字谷を形成している。北を流れる七免川は前者に比べ小さな河川で当遺跡あたりから天竜川に向かってV字谷を形成し始めている。上穂沢川は赤穂地区を南北に分断する河川で、遠く中央アルプスに源を発し、国道153号線付近より深いV字谷を形成している。上穂沢川と同様中央アルプスに源を発したねずみ川は上穂沢川との距離を東流するに従ってちぢめ、当遺跡の南においては、上穂沢の左岸段丘上を開析して流れ、当遺跡の東方約1.8kmで合流して天竜川に注いでいる。

当遺跡の地層については簡単にふれてみたい。現況が水田のためノーマルな状態を示めてはいない。耕作土(客土)を第Ⅰ層とし、地地下に埋土部分では第Ⅱ層の黒色土(旧表土)さらに暗褐色土(第Ⅲ層)の漸移層があり、第Ⅳ層がローム層となっている。第Ⅱ層とⅢ層は、開田の破壊の度合いによって当然違いがみられるわけで、所によって第Ⅳ層のローム層にまで破壊の及んでいることもある。埋土のみられる部分では旧表土の一部を客土として一部はね、埋土(第Ⅰ層)を行うことが古い開田には往々してみられるので黒色土についても一定していない。漸移層は15~20cmほどである。

### 第2節 歴史的環境

昭和28年に行った赤穂地区の遺跡分布調査によると、遺跡数77か所、遺物出土地点230か所に及んでいる。最近の分布調査によって遺跡数100か所ほどとなっている。

赤穂地区における遺跡の分布状態をみると大部分が東流する小河川に沿っている。



第1図 原垣外遺跡位置図 ( $S = \frac{1}{200,000}$ )



第2図 原垣外遺跡地形図 ( $S = \frac{1}{2,000}$ )



- 1 南原    2 丸山南    3 蟹沢    4 水落し    5 如来寺    6 荒神沢    7 尾崎  
8 中通下    9 御射山    10 七免川    11 小鍛冶古墳群    12 上の原

第3図 原垣外遺跡付近遺跡分布図 ( $S = \frac{1}{20,000}$ )

では原遺垣外遺跡付近の遺跡について簡単にふれておきたい。

**1 南原遺跡** 上穂沢川の右岸、天竜川第一段丘上突端に位置している。昭和50年に発掘調査が行われ、縄文時代中期中葉の住居址9軒とその他土壌を確認している。打製石器を多量に出土し、石器の原石・剥片さらに石器加工具と考えられる石器など特殊石器群を持つもので、石器製作址の性格を持つ集落として非常に注目される。

**2 丸山南遺跡** 南原遺跡の西方段丘上に位置し、昭和51年秋発掘調査が行われている。縄文時代中期後葉の大集落址で、53軒の竪穴住居址を確認している。遺跡は東西200m、南北50～70mの大規模なもので、集落全体を調査でき縄文時代集落研究上貴重な遺跡である。

**3 蟹沢遺跡** 丸山南遺跡の南西、中田切川の低位段丘面にある。遺跡は狭い範囲である。縄文時代晩期から弥生時代初頭にかけての条痕文系土器が発見されている。

**4 水落し遺跡** 辻沢川の流末低位段丘上にある。縄文時代中期・晩期の土器が採集されている。

**5 如来寺遺跡** 上穂沢川の右岸低位段丘上に位置する。縄文時代晩期の上伊那における標識遺跡として有名である。なお当遺跡の西丘陵上には縄文時代早期末葉の条痕文系土器群を主体とする舟山遺跡がある。

**6 荒神沢遺跡** 如来寺遺跡の対岸上穂沢川段丘上とにある。縄文時代晩期氷式の土器を出土する良好な遺跡である。また東には開田によって破壊されたが、丸塚古墳があったことが知られている。

**7 尾崎遺跡** 原垣外遺跡の対岸、ねずみ川と上穂沢川によって開析された台地の先端部に位置する。最近の分布調査によって発見された遺跡で縄文時代中期と思われる。遺跡は広い。

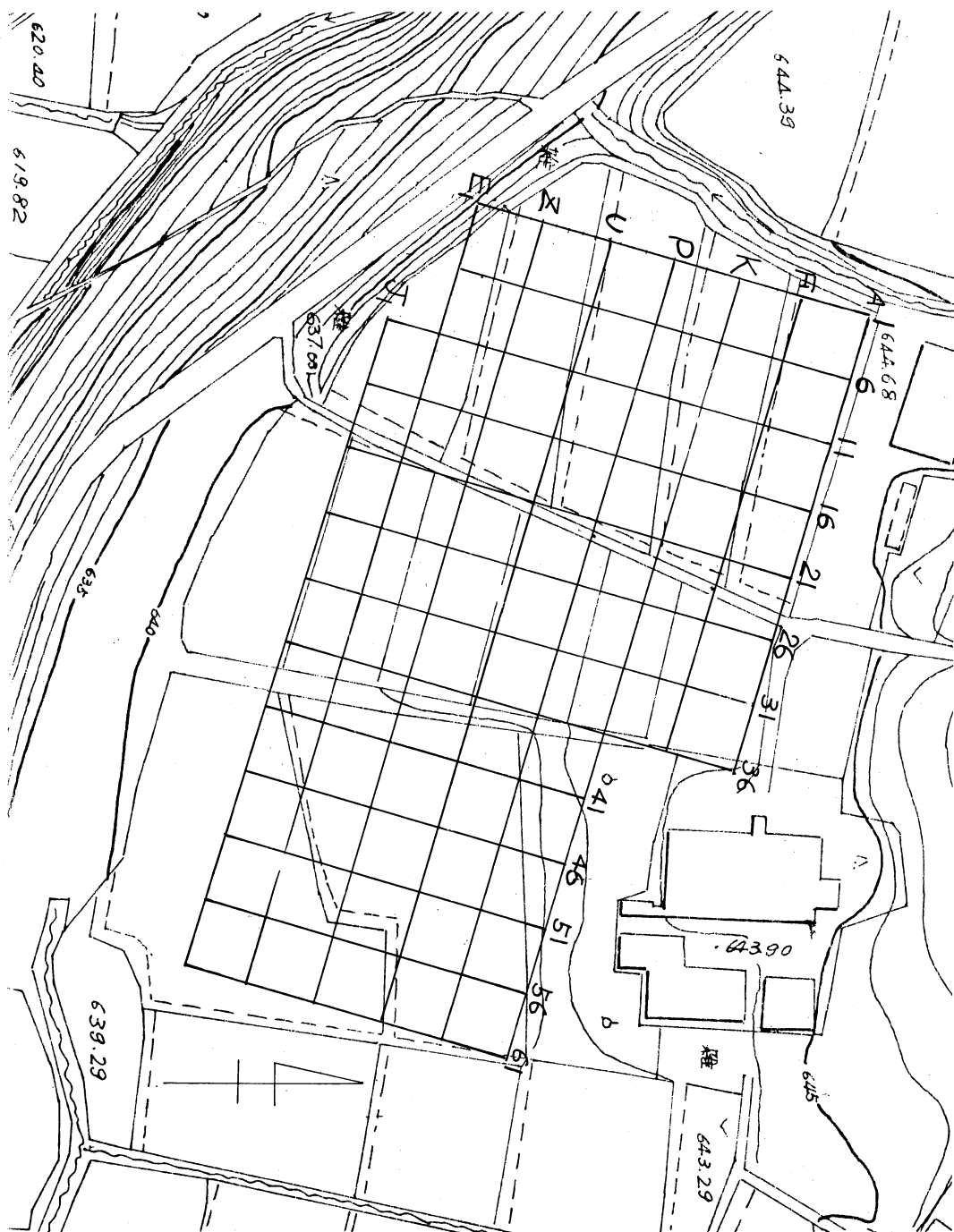
**8 中通下遺跡** 上穂沢川の左岸段丘上にあり、北にはねずみ川が流れている。昭和34年の道路改修中に発見された遺跡で平安時代後期の遺物が多量に出土している。灰釉陶器の双耳壺は優品で猿投産のものである。他に須恵器の瓶や土師器の皿などがある。付近一帯に広がる大遺跡で赤穂地区の歴史解明には欠かせない遺跡である。

**9 御射山遺跡** 原垣外遺跡の北、七免川をはさんで対岸にあたる。北には宮沢川が流れる。遺跡はこの両小河川によってはさまれた丘陵上にある。歴史の古い美女ヶ森大御食神社一帯から東に広がる大遺跡である。昭和50年に遺跡の東部分の調査が行われ、平安時代の住居址が9軒確認されている。先の中通下遺跡同様重要な遺跡である。

**10 七免川遺跡** 御射山の南を流れる七免川の左岸低位段丘上に位置する遺跡である。開田による破壊が激しいが、弥生時代後期の遺物が多量に出土している。また縄文時代中期から後期の遺物も発見されており複合遺跡である。

**11 小鍛冶古墳群** 御射山遺跡の東、天竜川の第二段丘上に位置する。段丘下は小鍛冶の元村である。大正15年に発行された鳥居龍蔵博士になる「先史及原始時代の土伊那」によると9基の古墳が確認されているが、その後の開墾により破壊され現在完全な形で残るものは4基である。

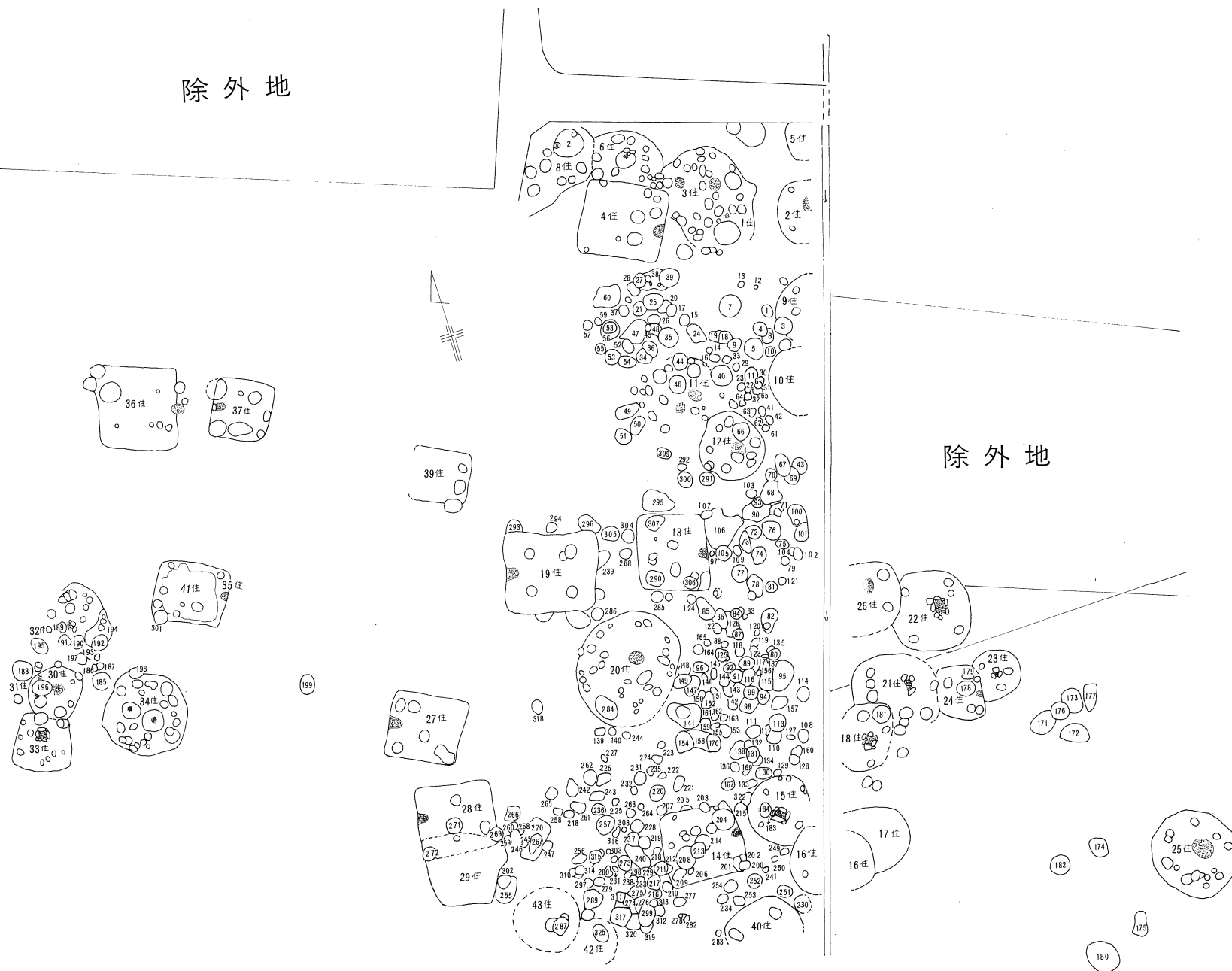
**12 上の原遺跡** 小鍛冶古墳群の南部分にあたる所で、故下村修氏が桑畑の深耕されたロー



第4図 原垣外遺跡グリット図 ( $S = \frac{1}{1,000}$ )

除外地

除外地



第5図 原垣外遺跡遺構図 (S =  $\frac{1}{400}$ )



ムブロック中より御子柴形尖頭器 5 点と若干離れた所よりブレイドを採集している

## 第Ⅲ章 発掘調査

### 第 1 節 調査概要

原垣外遺跡の発掘調査はすでに述べたとおり、文化庁補助事業と南信土地改良事務所からの委託事業を同時に行う必要があり調査区域の設定には苦慮した。

ほ場整備事業除外区域の南西部を基点としてほぼ東西に 123 ……、南北に A B C と 2 m グリットを設定して遺構確認をまって全面発掘へと切り換える方法を探った。補助事業の対象地域は 31-P ~ E<sub>1</sub> より東を一応の目安としたが、調査の結果は遺構が密集していたため若干入り組んでいる。

確認された遺構は縄文時代中期の住居址 30 軒、奈良から平安時代の住居址 12 軒、大半が縄文時代中期に属すると思われる土壌 300 基余りである。

### 第 2 節 住居址と遺物

#### 1 第 13 号住居址 (第 6 ~ 8 図)

##### 遺構 (第 6・7 図)

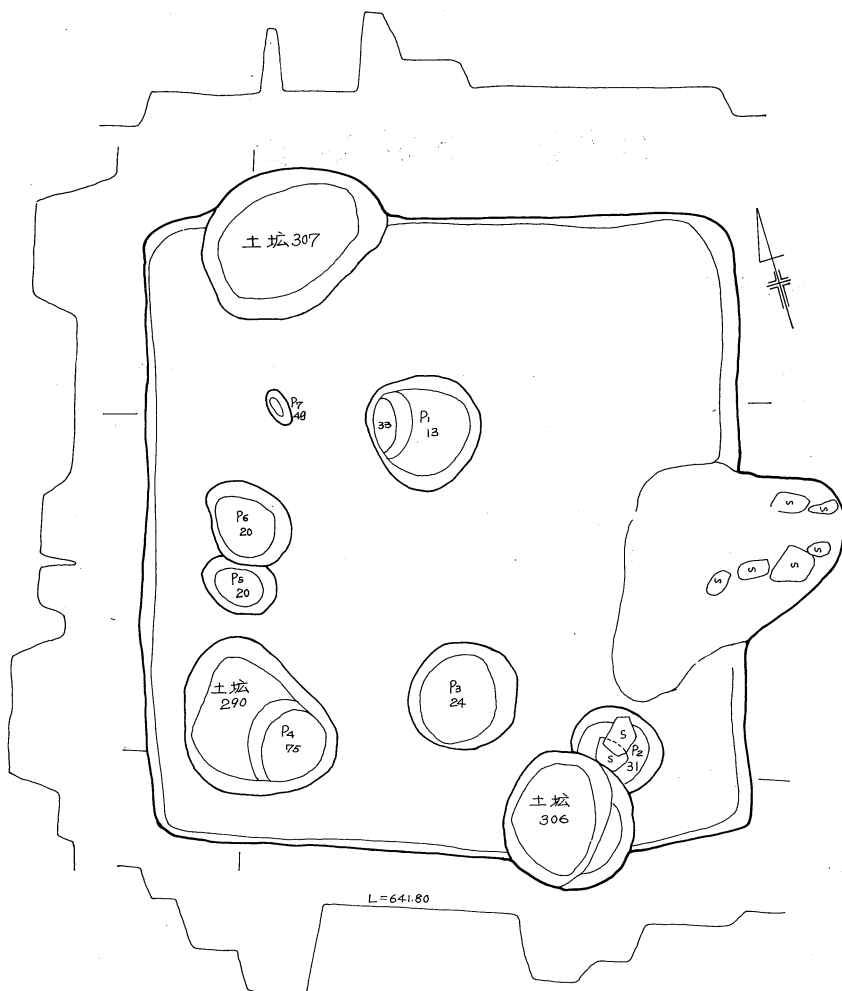
本住居址は遺構のほぼ中央に位置し、北東には第 12 号、西には第 19 号、南西には第 20 号住居址が近接している。また付近には数多くの土壌がみられ、住居址内にも土壌が 3 基ある。

掘り込みはローム層より 5 cm ほど上部漸移層からで、ハードロームまでは掘り込みは達していない。

プランは正方形でコーナーの丸味は北側では強く、南辺はやや外に張っている。大きさは一辺 4.75 m を測る。主軸方向 S - 108° - W である。壁高は比較的浅く最高で 28 cm、南東コーナーにかけて低くなり 15 cm ほどである。壁はゆるやかな立ち上がりをみせており、南東コーナー付近では非常にゆるやかなものとなっている。

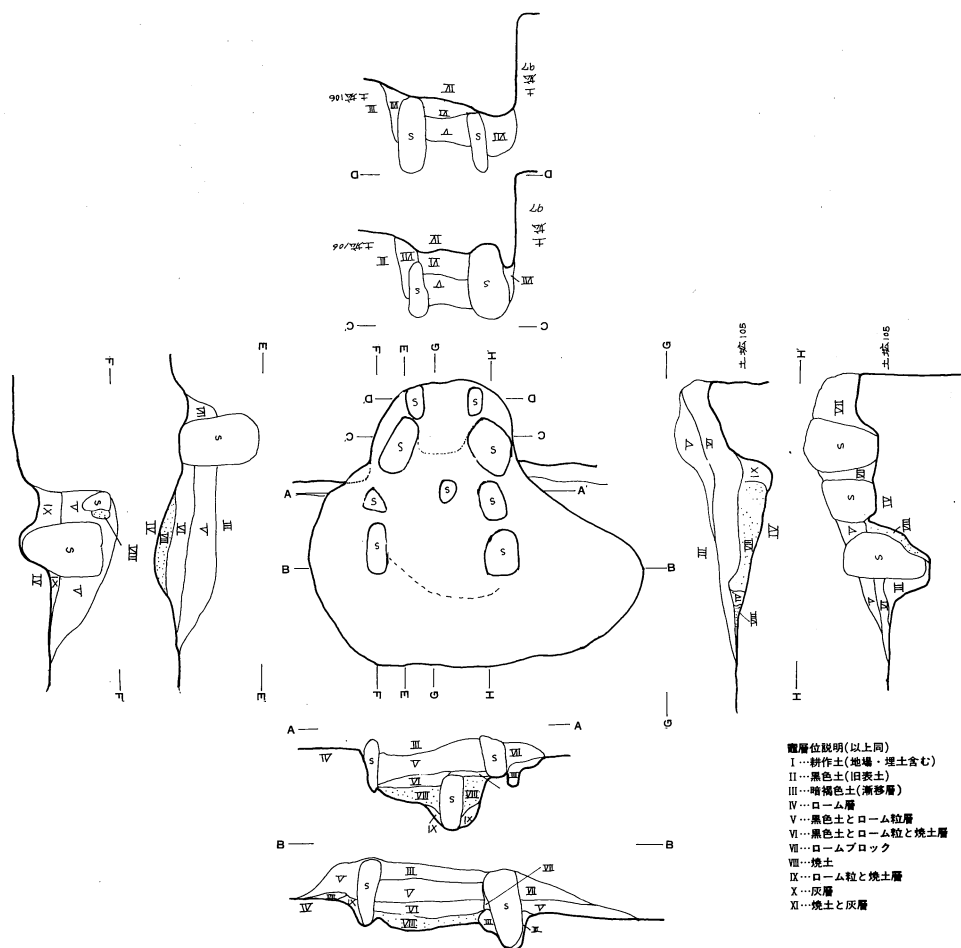
床面は竈付近にわずかなタタキが認められるほかは非常に軟弱である。主柱穴は P<sub>2</sub>、P<sub>4</sub>、P<sub>7</sub> と考えられ北東部には発見されていない。P<sub>3</sub>、P<sub>5</sub>、P<sub>6</sub> は支柱穴であろうか。住居址内に後から掘られた土壌が 3 基ある。壁を破壊したり柱穴と重複することから土壌としたものである。

竈は東壁やや南寄りにあり石心ローム造りで残存状態は良い。東壁への扶り込みは 15° の傾斜で 20 cm ほど煙道部を張り出すように切り込んでいる。また袖部においては石をすえるためにやや壁を切り込んでいる。火床面の掘り込みは 70 × 50 cm の楕円形を呈し深さは 15 cm 奥へ行くほど深くなっている。火床中央やや奥に火床面を 10 cm ほど掘り込んで支石がすえられている。煙道



第6図 第13号住居址実測図 (S =  $\frac{1}{60}$ )

部は両袖に河原石が縦長にすえられている。袖部は両側に3個の河原石を用い外側を主体にロームで固めてある。燃烧部側にロームで固めた痕跡がはっきりみられないのは天井部の崩落に伴い内面の焼土などと混在したものであろうか。焼土は燃烧部に厚く堆積しており、煙道部には、黒色土とローム粒に混じって焼土がみられる。当住居址には土壌が密集しており、竈の左奥袖部は土壇 106 の覆土をわずかに削って構築している。



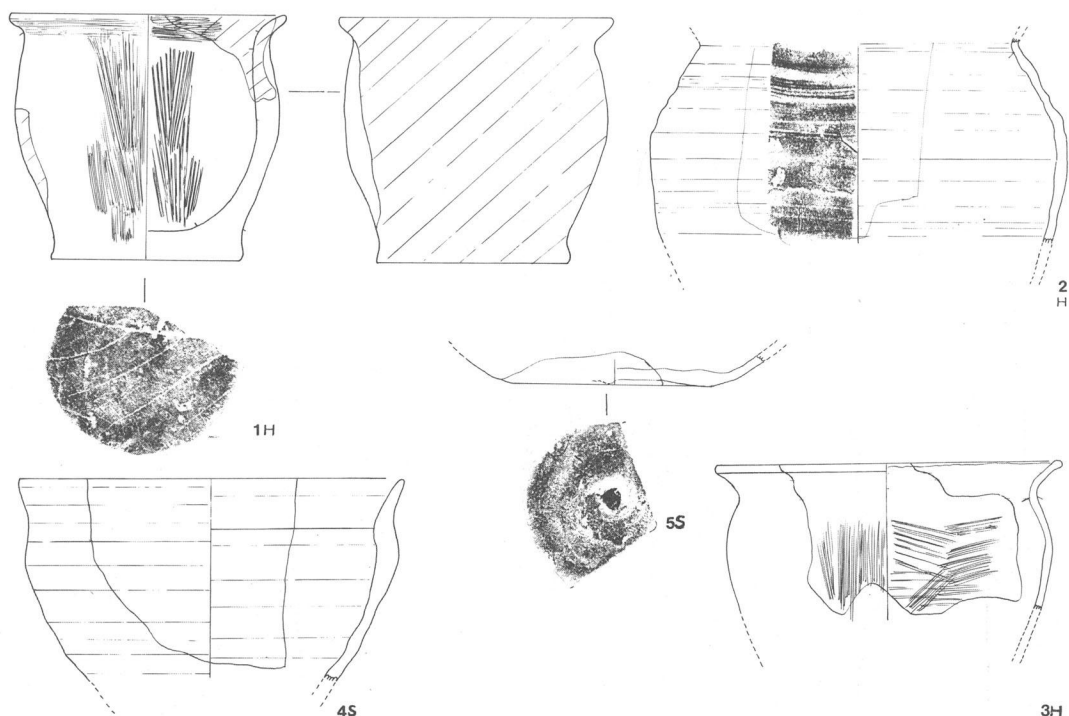
第7図 第13号住居址竈実測図 (S =  $\frac{1}{40}$ )

## 遺物 (第8図)

出土土器は出土土器数量表にみるとおり少ない。本住居址の覆土中には一部に埋土による攪乱部分がみられ、その土中より縄文時代中期の土器及び石器に混じって、土師器・須恵器が少量出土している。本住居址に帰属させるには問題があるので出土土器数量表からは除いてある。

第8図-1・2・4は共に竈燃焼部内より出土したものである。

1は土師器の小形甕形土器で図示する如くほぼ半分ほどしかない。口縁部は短く強く外反する。口唇外部は丸味を持たせている。最大径は口縁にある。胴上半部はゆるやかなふくらみを持ち、底部にかけてやや急なカーブを示し底部は張り出している。木葉底である。胎土は砂粒を含み悪い。色調は全体に黒色で一部に赤褐色のところもみられる。内部は黒色で、焼成時におけるものである。全体にぶ厚く雑な作りである。口唇外部は横なで調整がみられ、体部はハ



第8図 第13号住居址出土土器（ $\frac{1}{3}$ ）

ケ目 調整 がみられる。内面は口唇部に数回にわたる左から右のヘラ磨きを施し、その下部には横ナデが施される。体部は外面より太いハケ目が強く上から下に2回に施される。口径11、低径7.5、器高9.7cmを測る。

2は4分の1ほどの体部破片からの復元図のため定かでないが、甕形土器である。黒褐色を呈しロクロ作りの土師器である。幅広な指頭痕を残し凹凸が激しい。胎土はわずかに砂粒を含むが、全体にち密である。ロクロの回転方向は不明である。内面頸部付近には横ナデがみられる。

3は竈の南床面より出土した小形甕形土器で4分の1ほどの破片から復元したものである。胎土は非常にち密で肌色に焼かれている。口縁部は強く張り出し、口唇は丸味を持たせ内部折り返口縁風に段を持つ。1同様最大径は口縁部にある。胴部の最大径はやはり胴上半部にみられる。口

器 形	部 分	土師	須恵	小計
坏	実 測		1	1
	口縁部		2	2
	体 部		2	2
	底 部		2	2
高台付坏	底 部		3	3
甕	実 測	3		3
	体 部	20	2	22
鉢	実 測		1	1
蓋	天井部		2	2
小 計		23	15	38

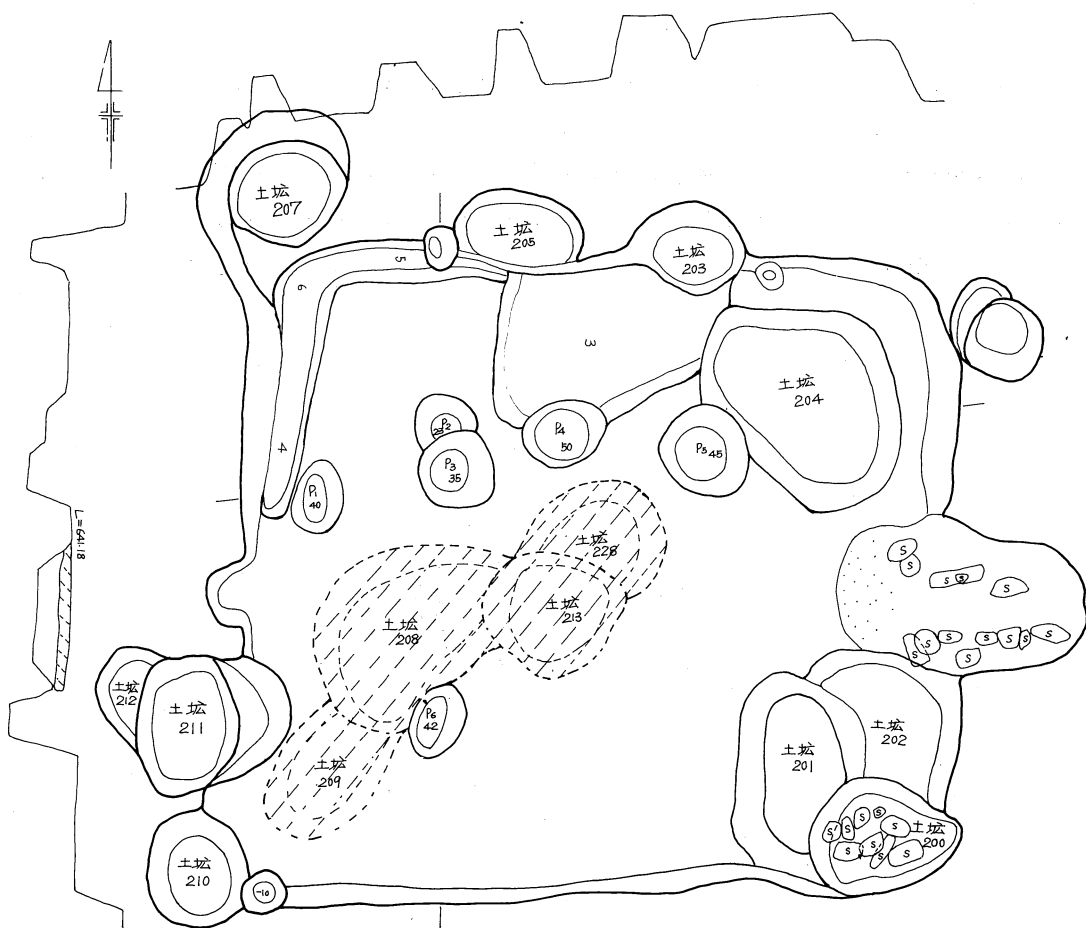
第13号住居址出土土器数量表

縁部は内外とも横ナデを施す。体部は外面は上から下のハケ目が、内面は横方向（右→左）に外面より太いハケ目が数回にわたって行われ、ところどころに右上から左下への同様のハケ目がみられる。

4は須恵器の鉢形土器で4分の1ほどの破片からの図上復元である。体部上半部は厚く底部に近づくにつれ薄くなり強いシメがうかがわれる。右回りのロクロ作りである。胎土は砂粒を多く含み粗い。青味の強い青灰色を呈している。

5は坏形土器の底部破片で須恵器である。ロクロは右回転で回転ヘラ切り技法による切り離し後に回転ヘラ削りで調整を行っているが、切り離し時にヘラが深く入りすぎ中央が凹むため、調整が中央までとどかず縁辺のみにみられる。砂粒含み青灰色を呈す。

その他の土器としては土師器の甕が多く、須恵器では坏が多い。高台付坏もみられる。灰釉



第9図 第14号住居址実測図 (S =  $\frac{1}{60}$ )

陶器は伴出していない。

時期は奈良時代後半から平安時代初頭に位置するであろう。

## 2 第14号住居址（第9～13図、図版3）

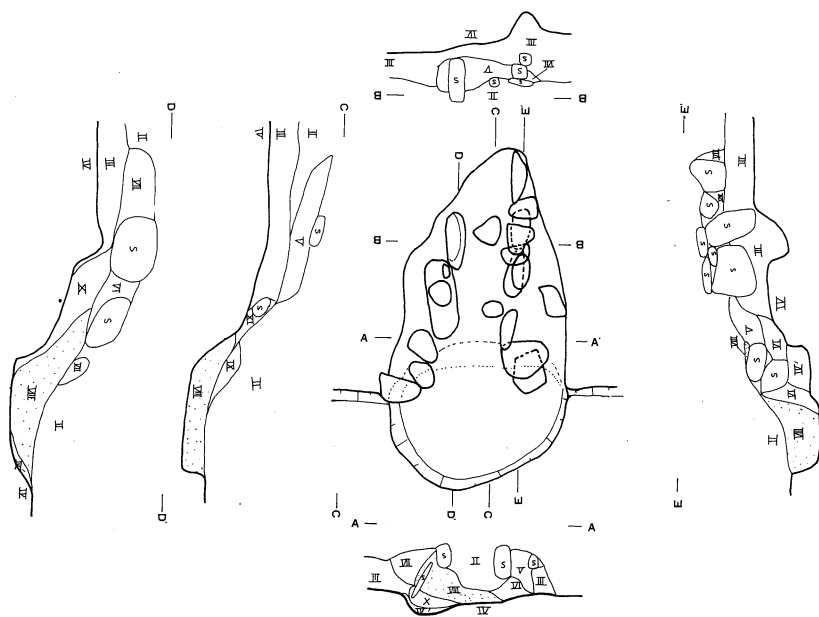
### 遺構（第9・10図）

本住居址は遺構群のほぼ中央南端に位置し、東には第15号、南には第40号住居址があり、それらの間には土壌群がある。

遺構は暗褐色土の漸移層から切り込みローム層を20～25cmまで掘り込んでいる。S-90°-Eに主軸をもつ長方形の住居址で5.3～5.7×5.1～5.3mある。壁は土壌に掘られていたため上部プランはあまりはっきりしない。壁高は40～50cmでほぼ一定している。壁の立ち上がりは直に近い。コーナは丸味が強い。床面は全体に良好であるが、後から土壌に掘られており残る部分は少ない。また床面中央部から南西コーナーにかけては縄文時代の土壌の上に貼り床を行っている。北西部には20～30cm幅の周溝がめぐらされる。深さはほぼ一定しており4～6cmの浅いものである。

主柱穴はP<sub>3</sub>、P<sub>5</sub>、P<sub>6</sub>の3本が確認されている。南東部は土壌によって破壊されたものと考えられる。

竈は東壁やや南寄りにある。煙道部は石組みで造られているが、燃烧部の袖部分については後から流れ込んだ石がみられるのみである。燃烧部は焼土が厚く堆積しているだけではっきりしないが、煙道部の造りからして当然石心の袖があったことが想像され、破壊されたものであ

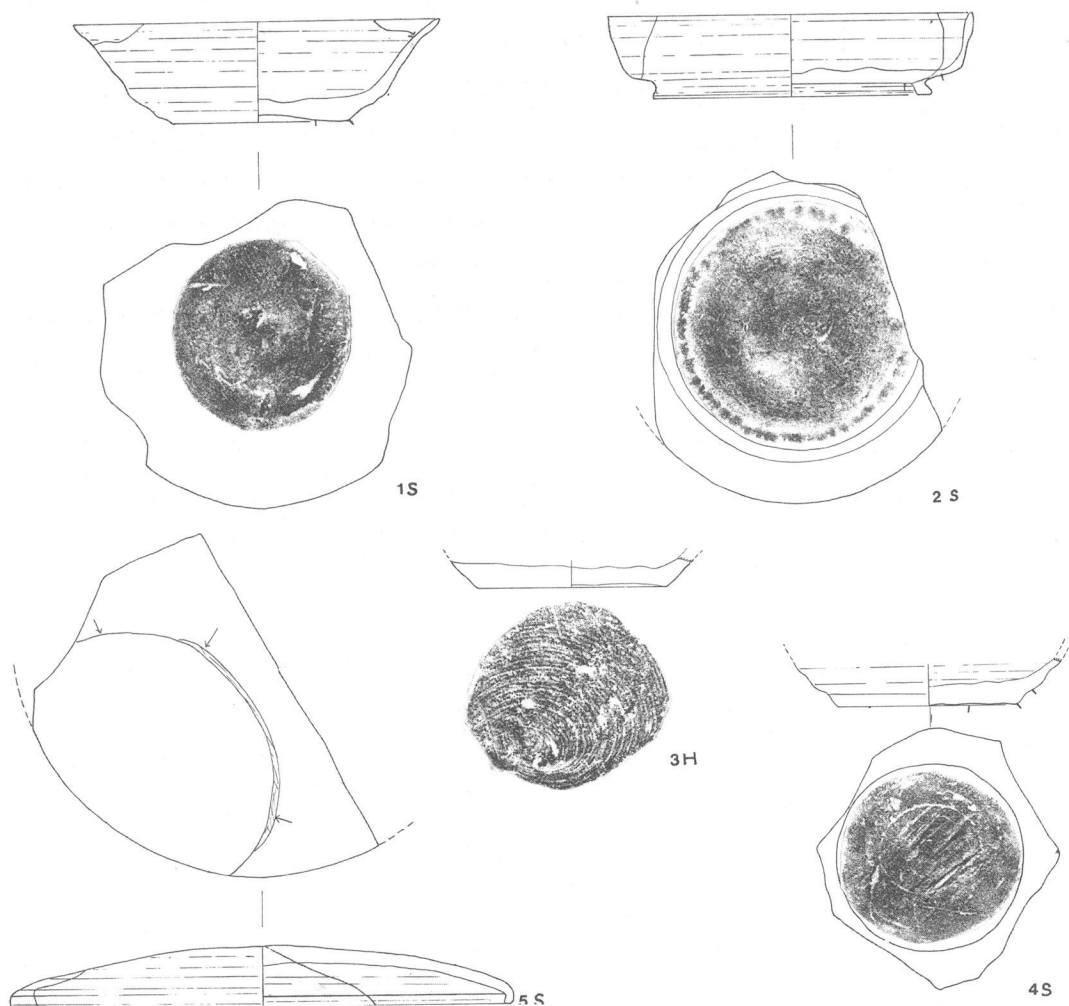


第10図 第14号住居址竈実測図 (S = 40°)

ろう。東壁への掘り込みは20cmほど約50度の角度で火床部を掘り込み、さらに50度前後の角度で50cmほど漸移層を掘り込んで煙道の一部としている。火床の掘り込みは75×95cmの楕円形を呈し床面からの深さは15cmで平底である。煙道部は全長 1.1 m あり、漸移層上部をやや掘り込んで石を組みロームブロックで固めている。焼土は燃焼部に厚く堆積している。

#### 遺物（第11～13図）

出土遺物が多い。土師器では第11図－3の坏を除きすべて甕である。出土土器数量表では、判別でき得る限り同一個体のものは1点としてあるので、10個以上の甕の存在が知れよう。須恵器では坏が卓越している。他に甕と蓋・壺がある。その他の遺物として石器と土錘、有孔小



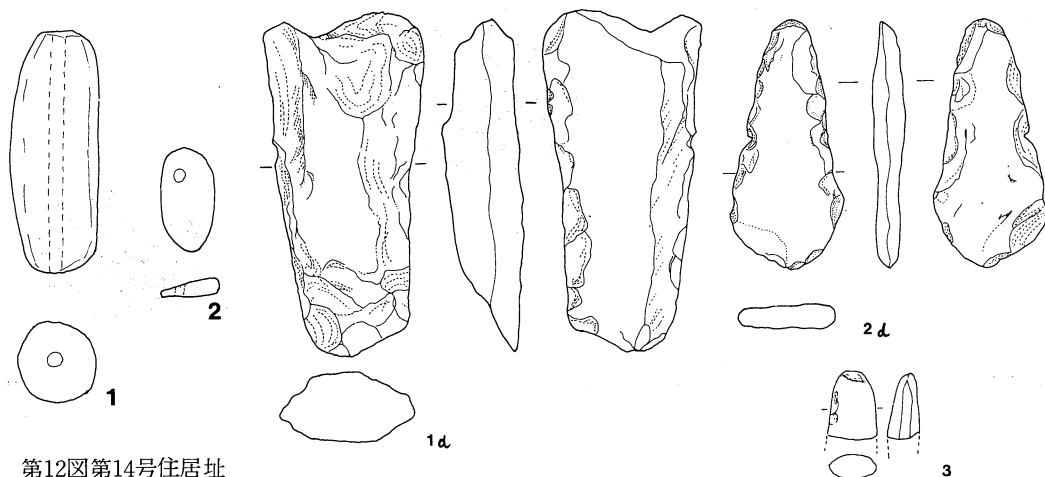
第11図 第14号住居址出土土器（ $\frac{1}{3}$ ）

器形	部分	土師	須恵	小計
坏	実測		2	2
	口縁部		3	3
	体部		3	3
	底部	1	2	3
高台付坏	実測		1	1
	底部		1	1
甕	口辺部	13	1	14
	体部	43		43
	底部	11		11
蓋	実測		1	1
	天井部		1	1
壺	体部		1	1
小計		68	16	84

第14号住居址出土土器数量表

3は土師器の坏の底部で胎土には砂粒及び雲母を含み褐色を呈している。左回転のクロクを使用し回転糸切り技法で切り離される。底部内部には指頭による 広なロクロ痕が残る。

4は須恵器の坏の底部から体部下にかけてのもので、砂粒をわずかに含み、青灰色を呈している。左回転のロクロを用いる。切り離し技法は明確でないが回転ヘラ切り技法と思われる。



第12図第14号住居址  
出土土錘・有孔小珠 (1/2)

第13図 第14号住居址出土石器 (1/2)



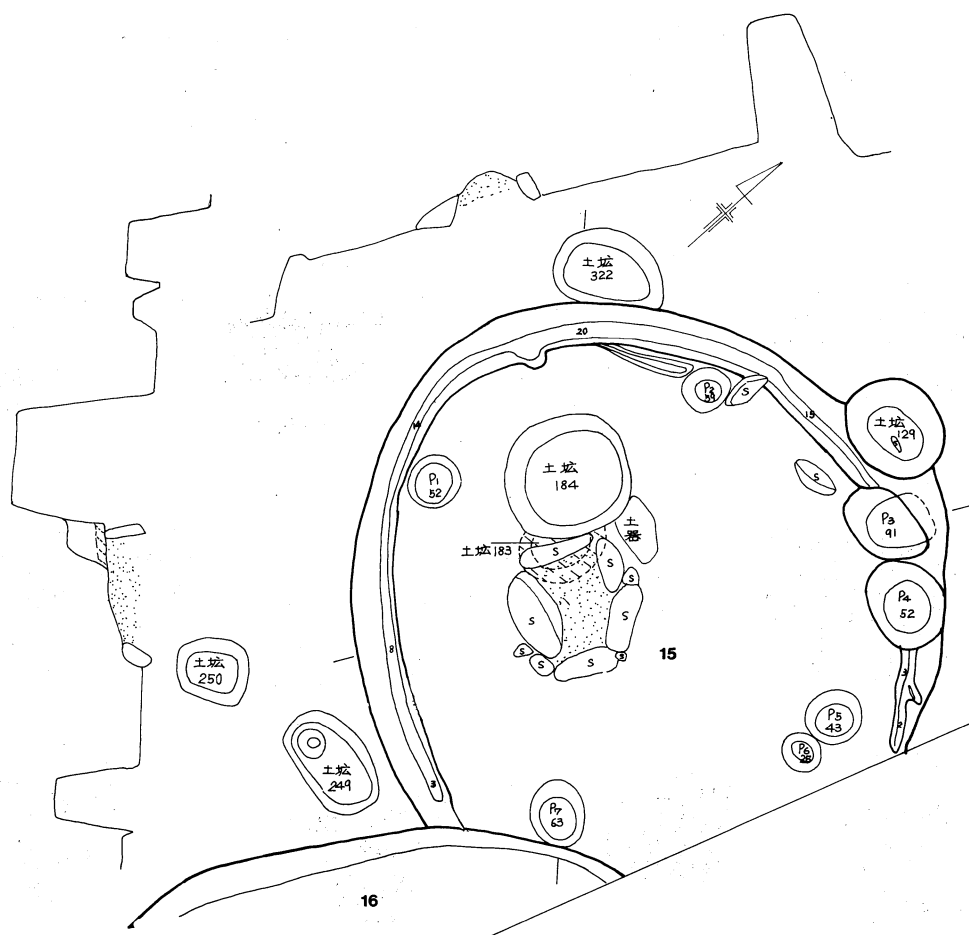
その後切り離し痕を手持ちのヘラで削り落しながら、調整は丹念に縁辺及び体部下部まで及んでいる。

5は須恵器の坏蓋である。ロクロ引きであるが回転は不明である。口縁部はわずかで内湾する。天井部はゆるやかなカーブを描き、口縁と天井部の高さは1:0.125である。天井部から口縁にかけて自然の釉がかかり重ね焼き痕が残る。釉は濃緑色を呈し、あわ状で一定していない。胎土はち密で灰白色を呈す。

これらの土器の時期であるが、奈良時代後半から平安時代初頭に位置するであろう。

第12図-1は土鍾である。長さ6.5cm、径2cmほどのほぼ円形で中央部3mmの孔がある。重量は45gである。住居址北壁ぎわ中央部より出土している。

土鍾とほぼ同じ所からひすい製の有孔小珠（第12図-2）が出土している。2.8×1.5cmの小



第14図 第15号住居址実測図 (S = )

形のものである。両面は平坦に磨かれ、孔のある方が薄くなっている。

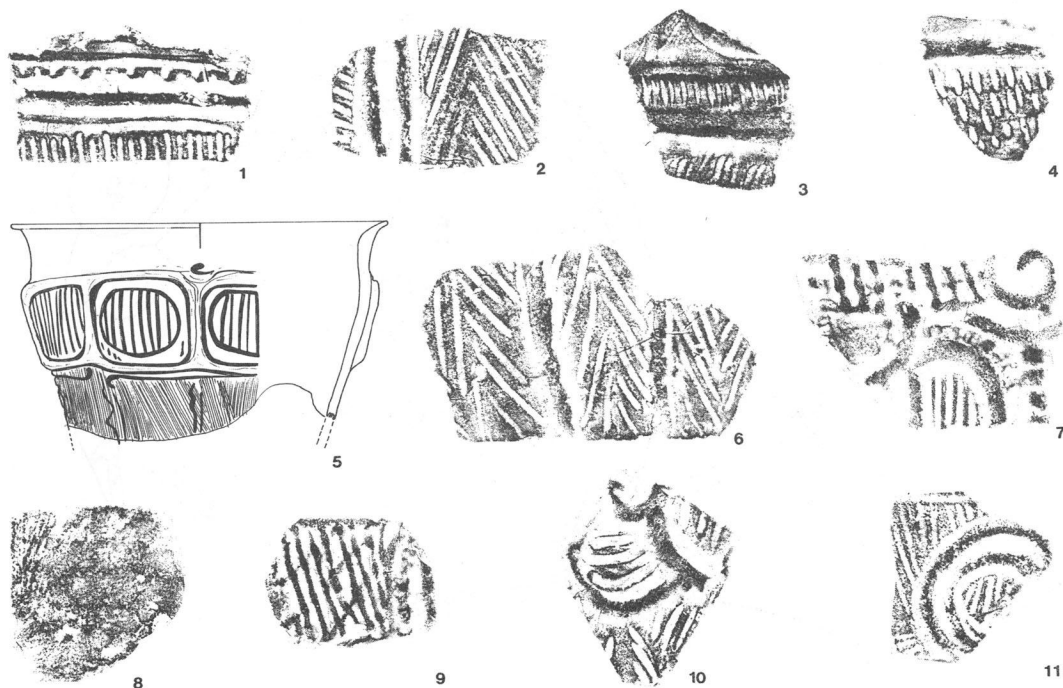
本住居址に所属するものかは明確でないが、床面上より、打製石斧（第13図－1・2）と磨製石斧（第13図－3）1点が出土している。打製石斧はa類に属すもので、1は逆撓形、2は撓形である。磨製石斧は定角石斧で刃部を欠損している。頭部に敲打痕がみられる。

### 3 第15号住居址（第14～18図、図版3）

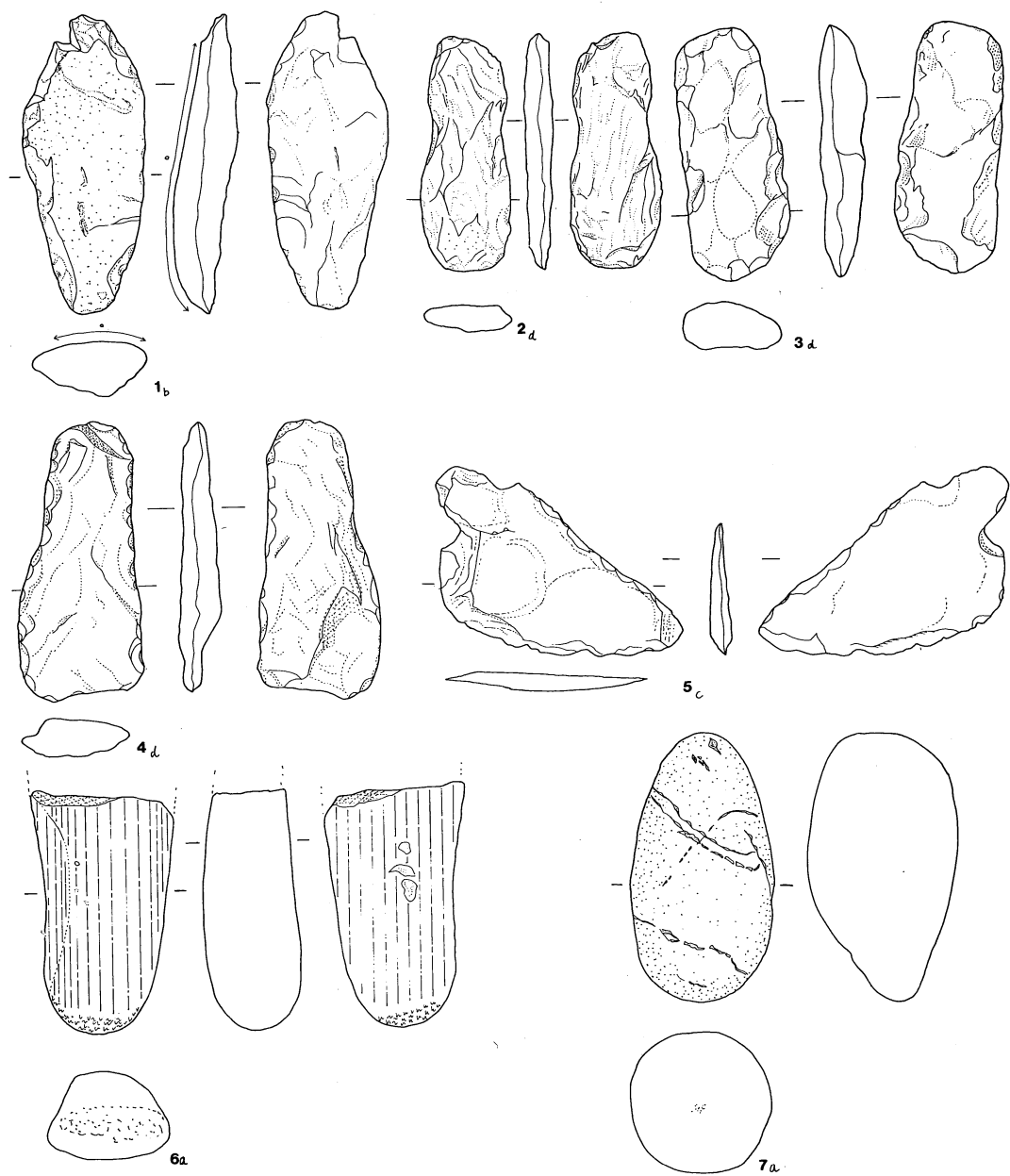
#### 遺構（第14図）

本住居址は西に第14号住居址があり、南東部は第16号住居址によって切られている。また東側は井が通り調査できずに終わっているためプランは定かでないが5×4.7mの楕円形を呈すと思われる。主軸方向S-67°-Eである。ローム層を30～35cm掘り込んでおりハードロームまでは達していない。壁の立ち上がりはゆるやかである。床面はタタキがみられ非常に良好である。第16号住居址との床面差は8cmである。

主柱穴はP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>7</sub>の4本と考えられる。炉は住居址やや南西寄りに位置し、五角形ぎみの石組み炉である。大きさは1.1×1.0mで内側は75×40cmを測る。炉石はすべて縦長にすえられ、石の間には小石が埋めてある。内部は丸底形を呈し炉石からの深さは30～35cmを測る。焼土は底に20cmほど堆積している。炉の西側部分は貼り床がされておりその下部に土壌183が



第15図 第15号住居址出土土器（5は⅞他は⅝、1～4は覆土、5～11は床面出土）



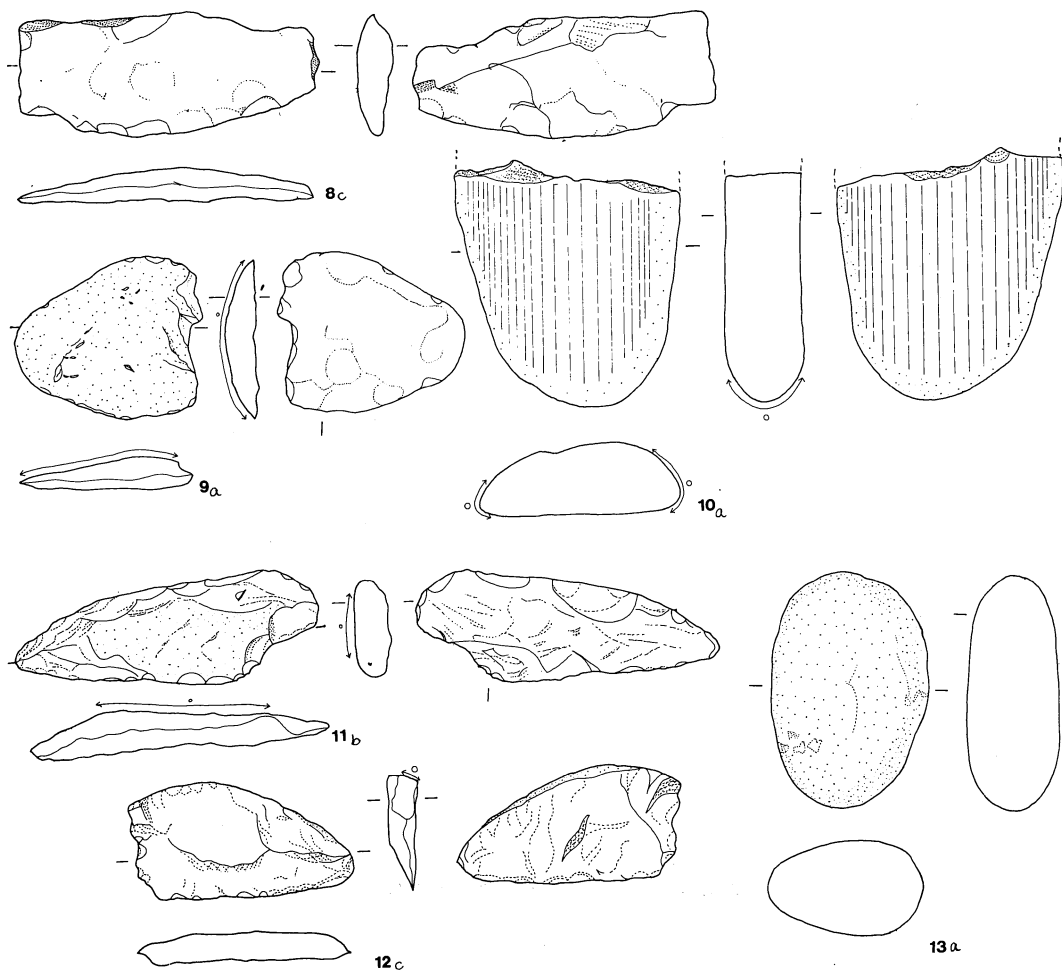
第16図 第15号住居址覆土出土石器 (1/3)

あり、さらに土壌 184 が切っている。北壁にP<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>がある。共に深いもので、住居址に所属するものか土壌なのかは不明である。壁下には周溝がまわる。

炉の北側床面上に深鉢形土器（第15図－5）がつぶれて出土している。

#### 遺物（第15～18図）

出土土器は少ない。覆土出土のもの（第15図－1～4）と床面出土のもの（5～11）とには時期差はない。器形を知り得るものは5のみである。深鉢形土器で胴下半部を欠く。口唇は強く外に張る。頸部に8個の方形区画角文帯を配し内部は太い沈線で埋める。胴部はワラビ手状の沈線を横走させその下部に直線と蛇行の懸垂沈線文をやはり8分画に施し、内部は細線が縦走あるいは斜走する。他はすべて深鉢形土器の破片である。時期は曾利Ⅱ式に比定される。



第17図 第15号住居址出土石器（ $\frac{1}{2}$ 、8・9は覆土、10～13は床面出土）

石器は覆土中より打製石斧9点、大形粗製石匙1点、敲打器2点、横刃形石器2点、床面よりは磨き石1点、大形粗製石匙1点、磨石1点、搔器4点、横刃形石器1点が出土している。

その他硬砂岩の剥片が4点、緑泥岩の剥片が4点出土している。ともに覆土出土である。また黒耀石のフレイク及びチップは床面より24片、覆土より13片出土している。

1～4は打製石斧である。1はつるはし状に刃部が尖るものである。2は胴中央部がくびれ分銅形、3・4は短冊形である。

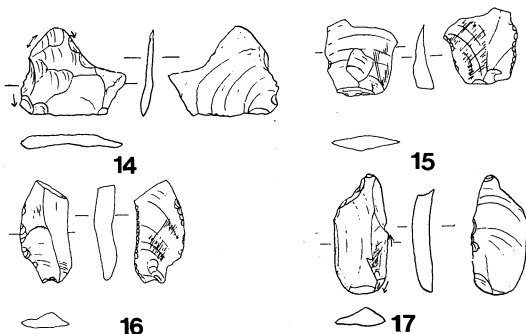
1は片面に礫表皮を残すもの(b類)、2～4はまったく礫表皮のみられないものである。

5、11はともに横形の大形粗製石匙である。5はc類、11はb類である。

6・7は敲打器で、先端を利用したa類である。6は両面に磨きがみられる。

10は磨き石で台形の大きな自然石を磨いたものでa類に入る。13は磨石、8・9・12は横刃形石器である。石質は1・3～12が硬砂岩製、2は緑泥岩、13は砂岩である。

14～17は黒耀石製の搔器・削器である。いずれも剥片の一部にリタッチを加えた簡単なものである。



第18図 第15号住居址床面出土石器(1/2)

#### 4 第16号住居址(第19～21図、図版4)

##### 遺構(第19図)

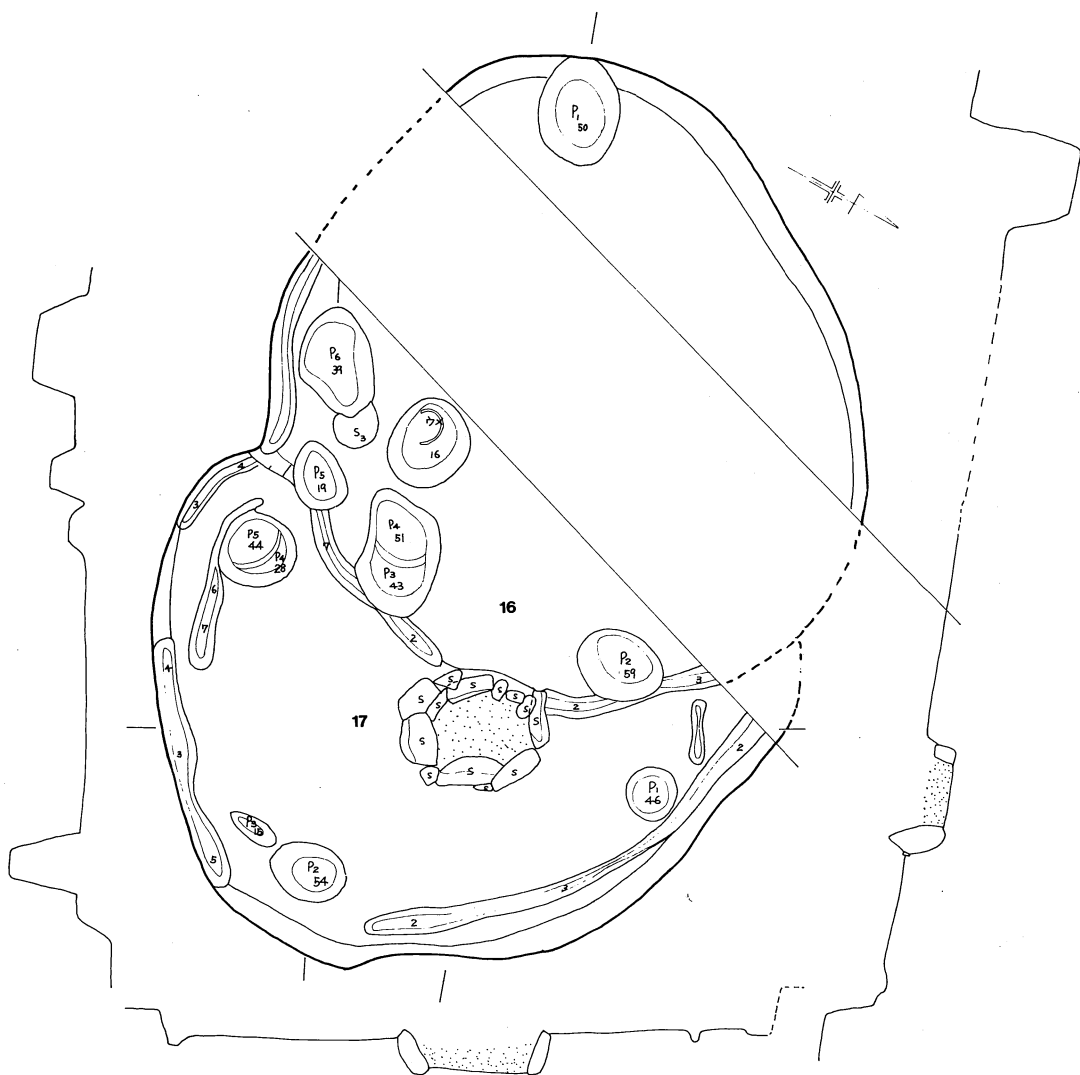
本住居址は第18号住居址の南にあり、北西部で第15号住居址を東側では第17号住居址を切っている。住居址の中央部に井が通るため2m幅で残したため炉などは不明である。プランは楕円形を呈し、大きさは5.2×4.7mを測ると思われる。ローム層を掘り込むがハードロームまでは達していない。壁高は西側では50cmを測るが、東側は開田時に削られておる。現高は25cmである。床面は非常に固く良好である。主柱穴はP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>と考えられ1本は発見できないが4本と考えられる。第15号住居址との床面差は8cm、第17号住居址との床面差は10cm前後である。

炉は井の未発掘部分にあるものと考えられる。

P<sub>4</sub>の西に70×60cm、深さ16cmのピットがあり、深鉢形土器(第20図-1)の胴部が半分ほど埋められていた。埋甕と考えたい。

P<sub>6</sub>の東ふちに砂岩質の平坦な石がある。平盤石皿の機能を持つものであろうか。

住居址の東側に幅の狭い周溝がとぎれとぎれにみられる。井をはさんだ西側部分では確認されていないので途中でなくなるのであろう。



第19図 第16・17号住居址実測図 (S = 60)

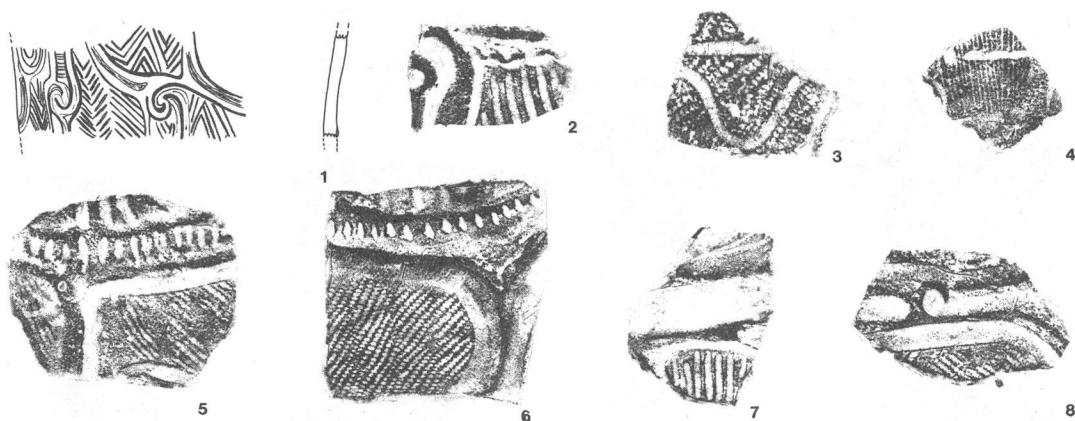
#### 遺物 (第20・21図)

出土土器は少ない。P<sub>4</sub>の西より発見された埋甕 (第20図-1) は胴中部で5分の3ほどしかない。隆帯による唐草風の文様と太い綾杉状の沈線が特徴である。5～8は加曽利E的要素を持つものである。

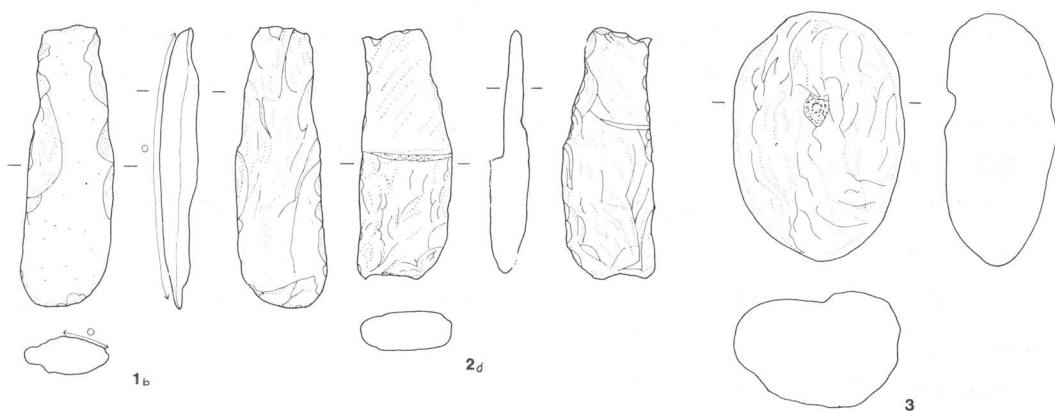
時期は曽利Ⅱ式でも新しい時期に属するである。

石器も少ない。土器・石器とも未発掘部分があるため現出土量では決められないことは確かである。

石器 (第21図) はすべて覆土出土のものである。1・2は短冊形の打製石斧で1はb類、2はd類である。石質は緑泥岩、2は粘板岩である。3は砂岩製の凹石で片面のみ凹んでいる。



第20図 第16号住居址床面出土土器（1は $\frac{1}{2}$ 、他は $\frac{1}{4}$ 、1は埋甕）



第21図 第16号住居址覆土出土土器（ $\frac{1}{4}$ ）

## 5 第17号住居址（第19・22・23図、図版4）

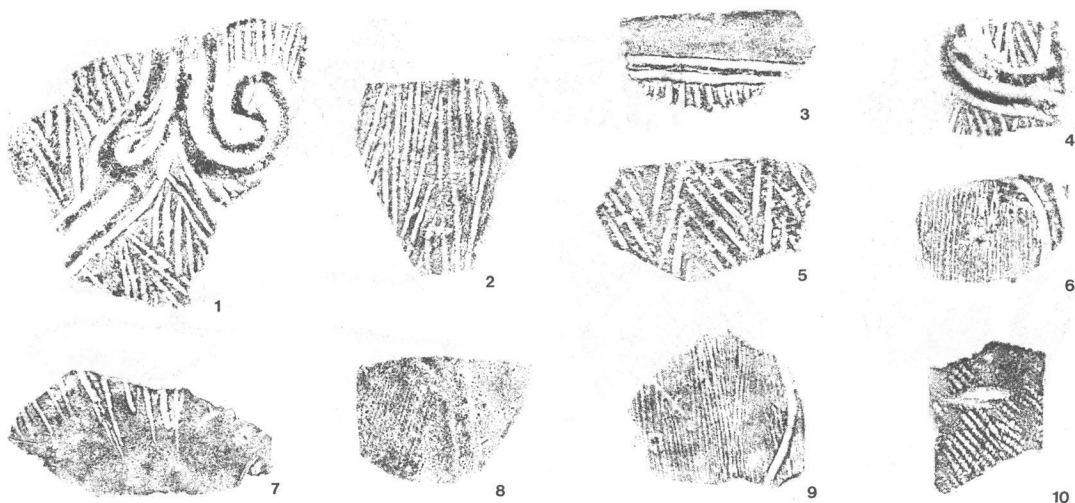
### 遺構（第19図）

本住居址は炉より西側半分を第16号住居址に切られている。プランは円形で大きさは4.8 mほどと思われる。

開田時にローム層まで削られているため、壁高ははっきりしない。現高は20cm前後である。

壁の立ち上がりはゆるやである。床面はタタキが良く行われ良好である。第16号住居址との床面差は10cm前後を測る。

主柱穴は $P_1$ 、 $P_2$ 、 $P_3$ がそれと思われ4本であろう。壁下にはとぎれとぎれであるが、幅の狭い浅い周溝がみられ一周するものと考えられる。



第22図 第17号住居址床面出土土器（㍉）

炉は住居址のほぼ中央に位置すると思われ石組み炉である。プランは西側がやや外反するが長方形で、大きさは外形 90×120 cm、内形 50×70cm である。西側を除く三方は自然石を縦長にすえている。西側は割り石を用い小石などを底につめて二段に炉石を積み、一部上の石は抜かれている。内部は平底で炉石からの深さは 40cm 前後、焼土は 20cm ほど堆積している。

#### 遺物（第22・23図）

出土土器（第22図）はすべて床面出土のもので少ない。すべて深鉢形土器の破片で器形を知り得るものない。

3 は口縁部に近いものである。1～5・7 は同一個体である。6・8・9 はハケ目状の沈線が施される。

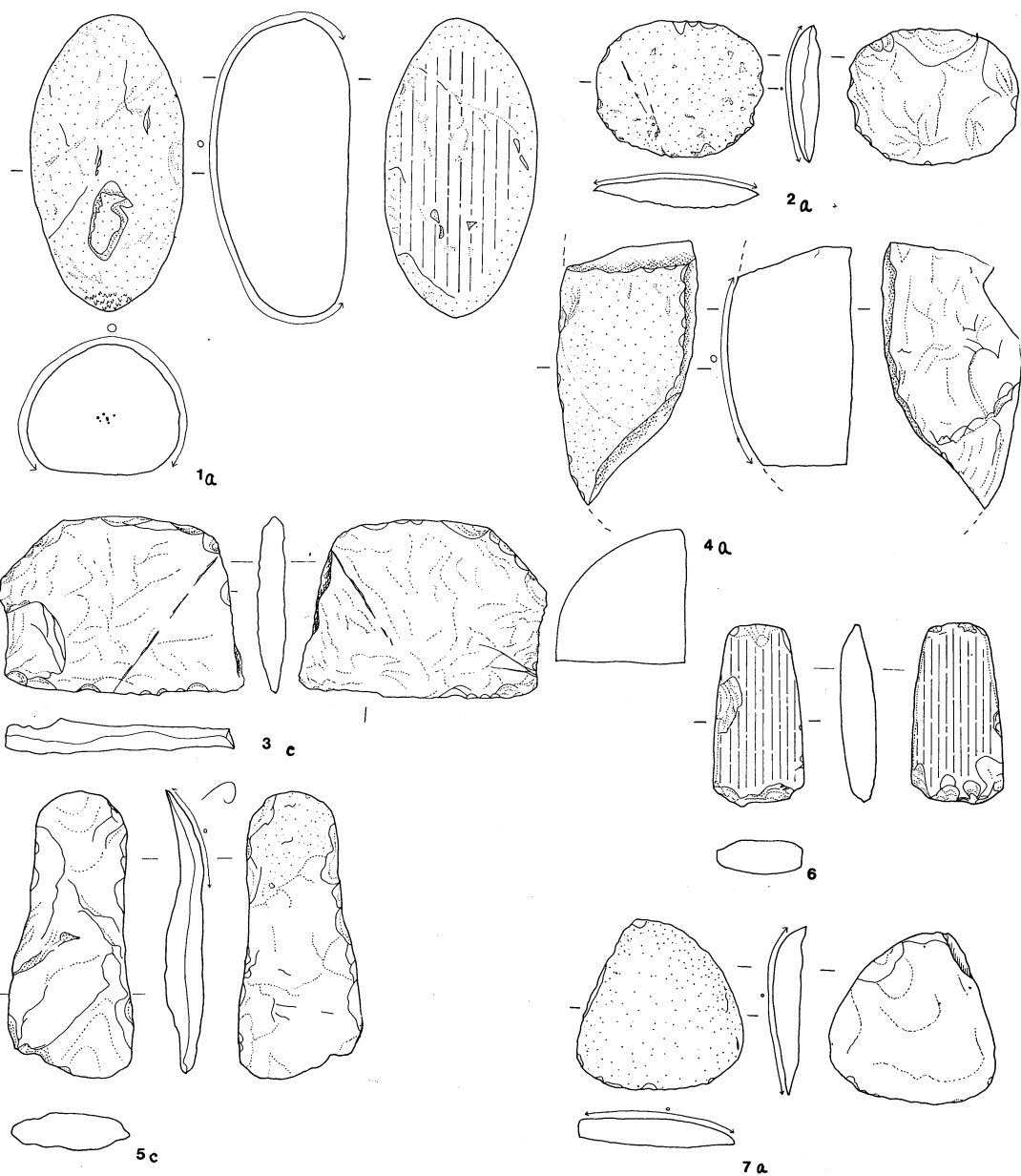
時期は曾利Ⅱ式に比定される。

石器は全部で 12 点と少ない。覆土よりは欠損した打製石斧 3 点、敲打器 1 点、横刃形石器 2 点、石核 2 点が出土している。床面よりは打製石斧 2 点、磨製石斧 1 点、横刃形石器 1 点が出土している。その他硬砂岩の剥片の a 類が 3 点みられた。

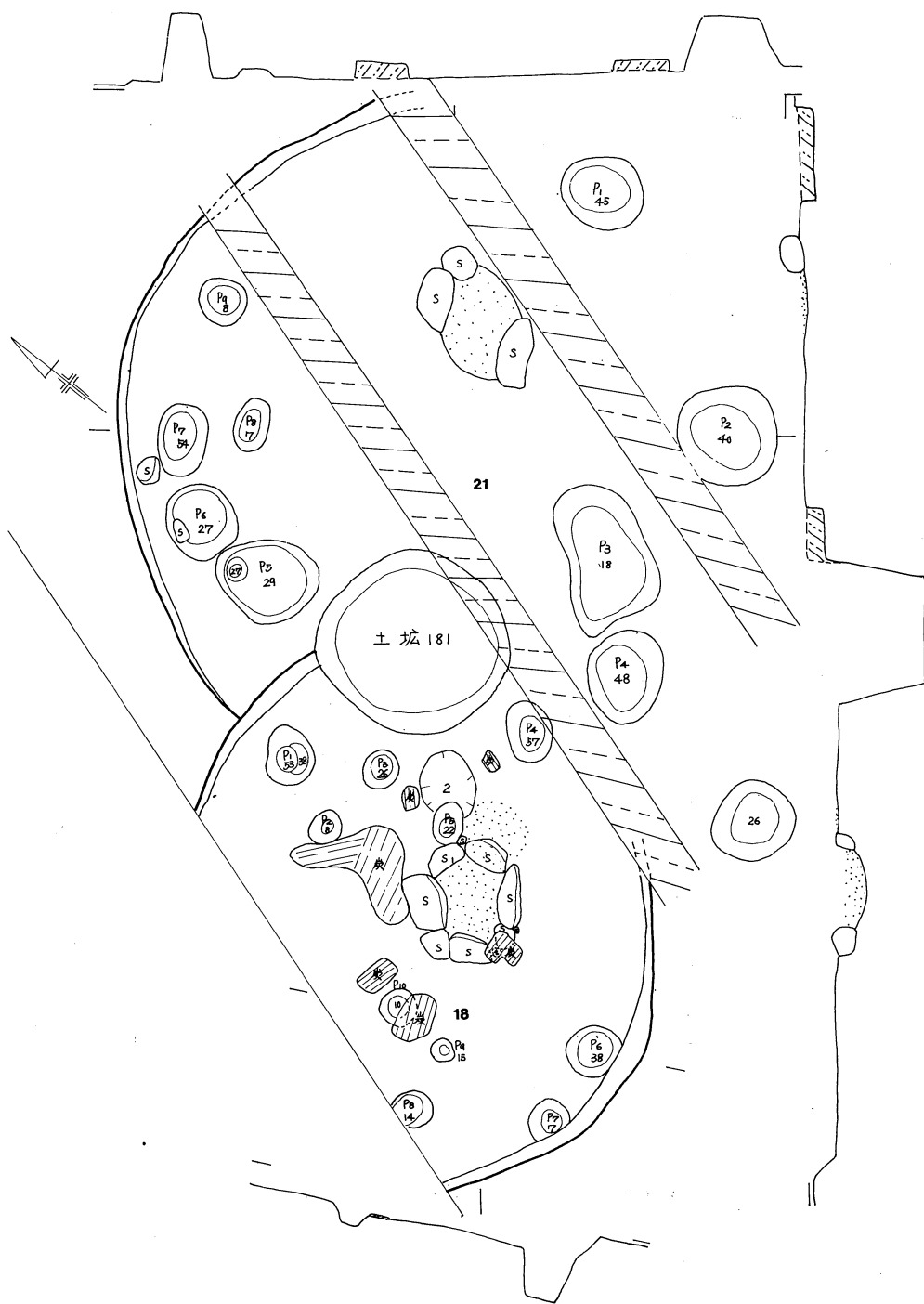
第23図—1 は硬砂岩製の敲打器で片面平坦の方が磨かれ、一方を敲打している。2・3・7 は横刃形石器で 2・7 は a 類、3 は c 類に属する。5 は打製石斧で短冊形である。頭部付近に礫表皮を残す c 類である。欠損品が 4 点あるが分銅形 1 点のほかは短冊形である。6 は磨製の定角石斧で刃部は破碎されている。頭部にかなりの敲打痕がのこる。4 は石核で大割りの a 類に属するもので他にもう 1 点出土している。

石質は、6・7 の緑泥岩を除き他はすべて硬砂岩である。





第23図 原垣外第17号住居址出土石器 (1/3、1～4は覆土・5～7は床面出土)



第24図 第18・21号住居址実測図 (S = 80)



第25図 第18号住居址出土土器 (1/3、1～4は覆土、5～20は床面出土)

## 6 第18号住居址（第24～26図、図版4）

### 遺構（第24図）

本住居址は南に第17・16号住居址があり、北東部では第21号住居址を切っている。また西側部分は井のため未発掘部分となっている。さらに第21号住居址を切っている北東部はトレンチャーによる破壊がみられ、プランは楕円形を呈すると思われるが定かでない。大きさは推定 4.9 × 4.3 m を測るであろう。主軸方向は S-49°-W である。

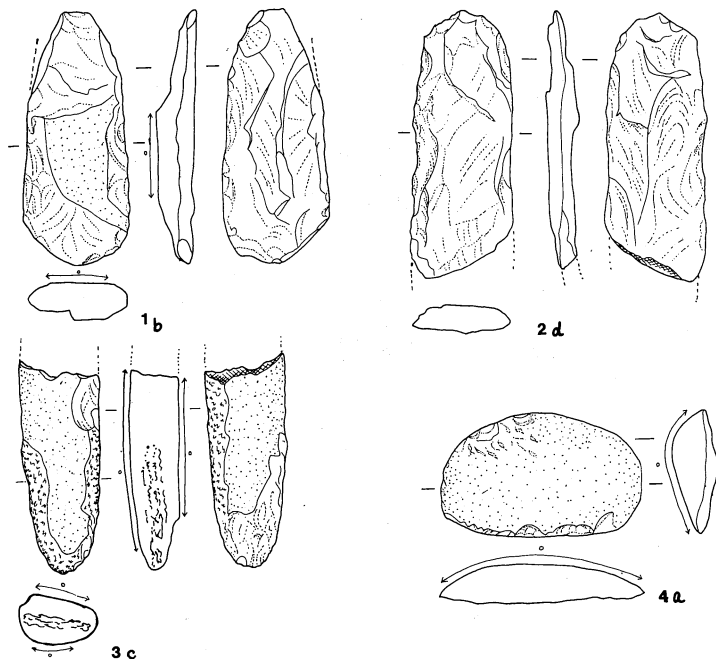
壁高は現高15cmであるが、開田時に相当削られていると思われる。床面はタタキが良く行われ良好である。第21号住居址との床面差は西側で15cmである。

この住居址は火災にあった住居址で覆土内には焼土が一面にみられ、頭大からこぶし大の自然石が無数放り込まれていた。焼土の下には炭化物が5cmほどの厚さでみられた。柱材と思われるようなしっかりしたものは図示した位いで、ほとんどは屋根のふき材と思われるものでいわゆるワラ灰状になっていた。焼土中に投げ込まれた自然石であるが、遺跡のある台地上にはまったく石は存在せず、南の谷を流れるねずみ川あるいは上穂沢川までいかなければ手にはいらないもので、これを考えると失火による火災でなく、ある目的を持った放火と考えられる。火災にあったにしては遺物が少ないこともこれをうなづかせるものであろう。目的が何であったかは憶測の域を出ない。

主柱穴はP<sub>1</sub>、P<sub>4</sub>、P<sub>6</sub>が考えられ未発掘部分の1個を考え4本であろう。

炉は住居址のほぼ中央に位置し、北東部が八の字になる五角形の石組み炉である。大きさは外形100×100、内形65×40cmで、外形は方形に近いが、内形は細長くなっている。炉石はすべて花崗岩で北西のS<sub>1</sub>を除き自然石からなり縦長にすえている。S<sub>1</sub>は花崗岩の割り石で他と同様縦長利用である。内部は丸底で炉石からの深さは30cm前後、焼土は20cmの堆積である。炉の北東わきに焼土が薄く発見されている。

図示した炭化材（炭の表示）は栗材である。住居址の北東壁をこわって土壌18l



第26図 第18号住居址覆土出土石器（ $\frac{1}{3}$ ）

がある。

#### 遺物 (第25・26図)

先に述べたように出土遺物は火災にあったわりに少ない。住居址の覆土のすぐ上には田の埋土があり、覆土中の遺物と混在している。

土器 (第25図) はすべて深鉢形土器の破片で器形を知り得るものはない。1～3は結節縄文を持つもので、床面出土の土器より後出するものである。5～9は大形の深鉢形土器の口縁部である。10・11・20は縄文地に沈線を施すもので加曽利E式要素を持つもので曽利期の初期に出土することが知られている。

床面出土土器からして住居址は曽利Ⅱ式のものである。

石器はすべて覆土出土のもので打製石斧6点、敲打器1点、横刃形石器1点の計8点と少ない。その他硬砂岩の剥片がa類2片、b類1片が出土している。第26図-1・2は打製石斧とともに短冊形である。他の4点も同様である。1は一部片面に礫表皮を残すものでb類、2はd類に属する。1・2とも石質は硬砂岩である。3は凝灰岩製の敲打器で、棒状の自然石を敲打するものでc類に属する。4は横刃形石器でa類である。

### 7 第21号住居址 (第24・27・28図)

#### 遺構 (第24図)

本住居址は北の第22・26号、東の第24号住居址と近接し、北西部は第18号住居址によって切られている。また、開田時の削土とトレンチャーの攪乱によって南から東にかけてはまったく壁がわからない状態である。

プランは一応円形を呈すと思われ、P<sub>2</sub>、P<sub>4</sub>まで住居址内とすると大きな住居址である。床面は西側に一部残るのみで東側はわずかであるが削られている。

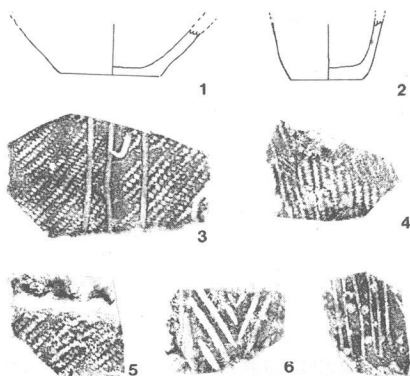
主柱穴はP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>4</sub>、P<sub>5</sub>などが考えられるが本数は定かでない。炉は住居址中央東寄りにある。耕作時に抜かれたものか炉石は3個残るだけである。内部はわずかに掘られ底にうすく焼土が残っている。

#### 遺物 (第27・28図)

住居址の検出状態からして土器、石器ともに少ない。

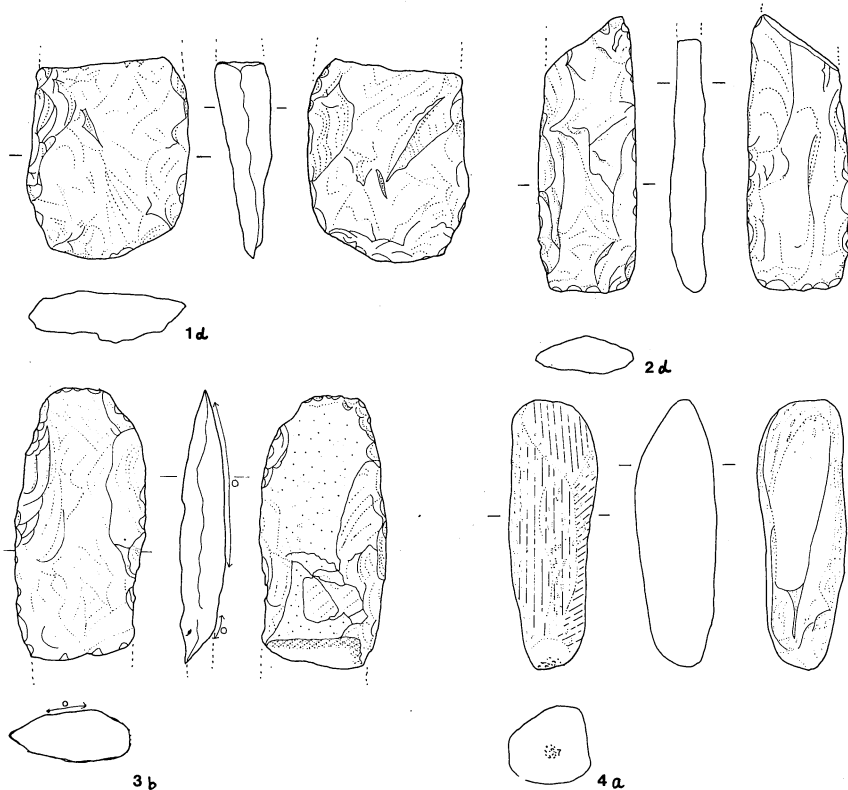
第27図-1は浅鉢土器の底部であろうか。2は小形の深鉢形土器の底部である。3には磨り消しの発達が見られない。時期は曽利Ⅱ式である。

石器は床面より出土した打製石斧3点と敲打器1点の4点だけである。第28図-1～3は硬砂岩製の短冊形の打製石斧ですべて欠損品である。4は砂岩の一端で敲打するものでa類に属する。石の稜毎に磨かれている。



第27図 第21号住居址床面出土土器

(1・2は㍉・他は㍉)



第28図 第21号住居址床面出土石器（ $\frac{1}{3}$ ）

## 8 第22号住居址（第29～31図、図版4・5）

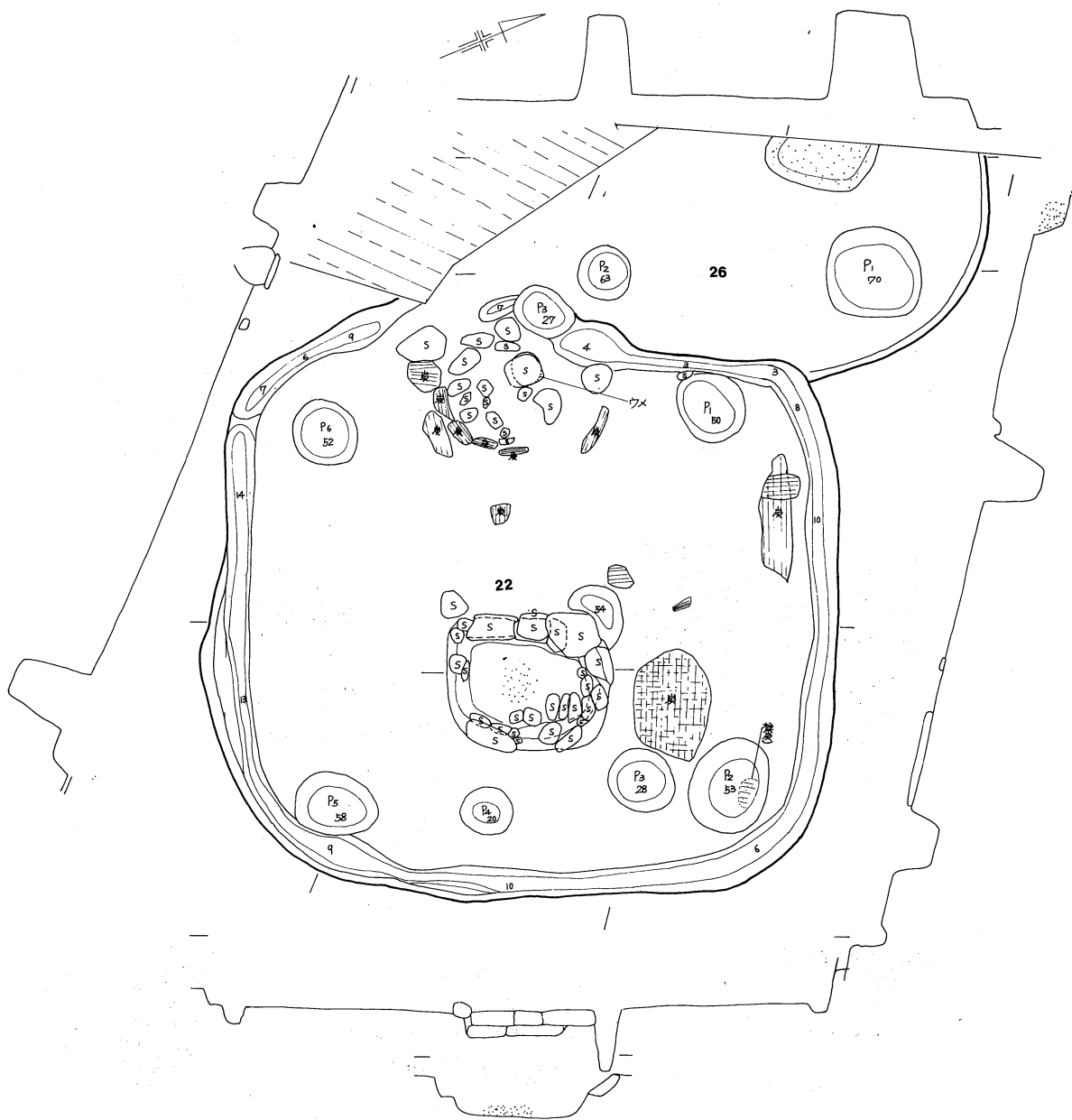
### 遺構（第29図）

本住居址は第18・21・23号住居址の北にあり、調査区域の北限である。住居址の中央より北側は畑のため壁が削られることなく残っている。北西部で第26号住居址と重複する。貼り床がみられなかったことから第26号住居址を切っていると考えられる。

プランは隅丸長方形で大きさは5.0×5.5 mである。辺は全体にふくらみを持っている。主軸方向はS-111°-Wである。

第18号住居址同様この住居址も火災にあったもので、焼土が厚く覆いその下に炭化物が5～10cmの厚さでみられた。第18号住居址でみられた自然石の投げ込みはなく西壁近くにわずかに焼土中に石がみられた程度である。P<sub>2</sub>内より柱と思われる炭化材がみられたほかは大部分が屋根のふき材でワラ灰状になっていた。

先にふれた通り住居址の北側は畑のため壁が削られることなく残っており、壁高は30cmを測



第29図 第22・26号住居址実測図 (S =  $\frac{1}{60}$ )

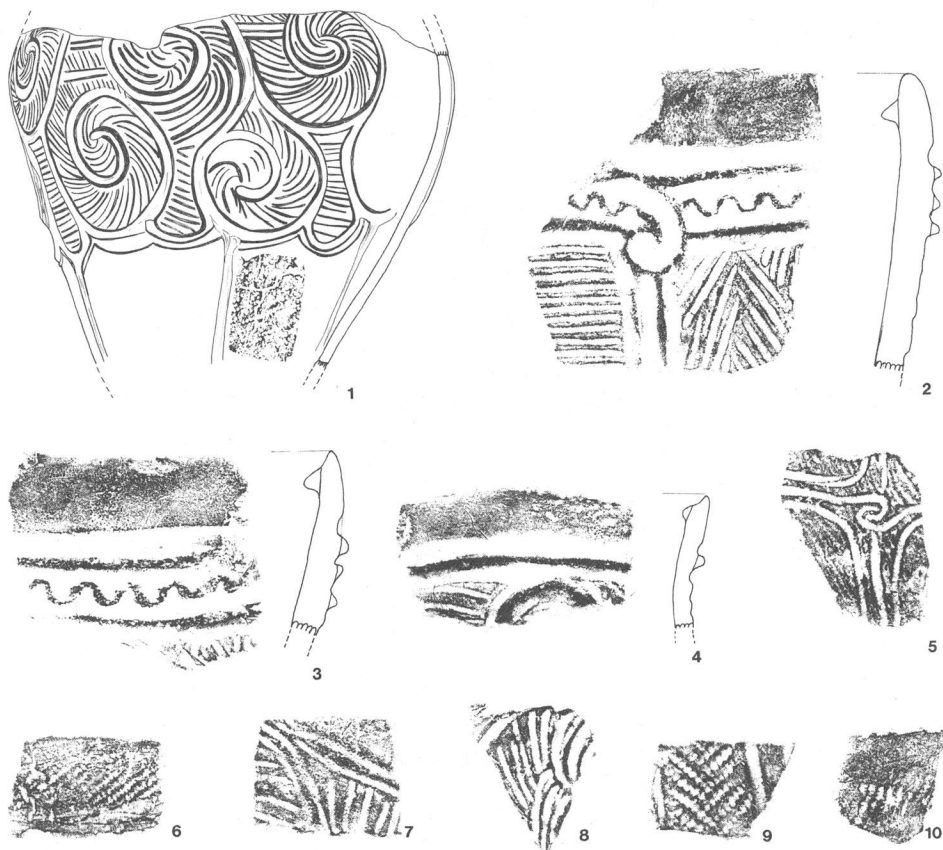
る。南側での現高は10cm前後でかなり削土されたことがうかがわれる。

床面はタタキが良く行われ非常に良好である。主柱穴はP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>5</sub>、P<sub>6</sub>の4本と考えられ、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>は支柱穴であろう。第26号住居址との床面差は8cm前後である。

周溝は南西コーナーで一担とぎれるが西壁中央やや南寄りを残してめぐられる。周溝のない部分が多分入口であったろうと推測される。また焼土中の自然石もその部分にのみ認められている。またP<sub>1</sub>とP<sub>6</sub>のほぼ中間北から回る周溝の切れた西側のすぐわきに口縁部をわずかと底部を欠く正位の埋甕が発見されている。5cmほど床面より頭を出し、その上には、平坦な丸い砂岩がおかれていた。内部は住居址覆土と同様な土で埋まっており、内部よりは何も検出されなかった。

炉は住居址中央やや東寄りにあり長方形のしっかりした石組み炉で南側と東側から北側にかりての一部は炉石が抜かれている。大きさは外形120×150cm、内形は70×100cmと思われる。

一部炉石の残っている北側と東側では自然石を縦長にすえている。西側は花崗岩の割り石で

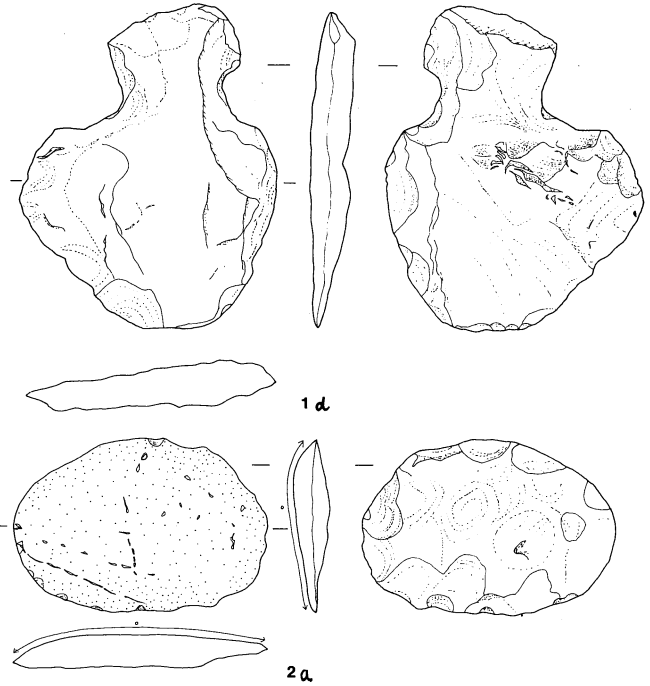


第30図 第22号住居址床面出土土器（1は壺、他は片、1は埋甕）



2段に組んである。第17号住居址の炉と非常に似ている。内部は焼土がわずかにみられただけで、炭化物で充満していた。炉の炭化物の上に厚く焼土がみられたことからして炉石は焼失前に抜かれたものと考えられる。第18号住居址同様遺物の少ない点もこれを裏付けるものであろう。

図示した炭化材（炭と表示）はすべて栗材である。P<sub>2</sub>内部に直角にささっていた柱材は栗で直径8cmと5cmの二股で、股を下にして10cmの長さで残っていた。炉の北側に3～5mmほどの細い炭化物が交互に5段ほどみられたが、取り上げることができずに終わり、性格は不明である。



第31図 第22号住居址床面出土石器（ $\frac{1}{3}$ ）

#### 遺物（第30・31図）

すでに述べたとおり出土遺物は少ない。器形を知り得るものは第30図—1の埋甕のみで、他は深鉢形土器の破片である。

1は口縁部をわずかと底部を欠くもので、口縁部に比して底部は小さい。文様は胴上半部と下半部とにわかれ、上半部には隆帯による唐草文様を施し、内部は太目の沈線で埋めている。下半部は懸垂する隆帯によって6分画され、その間は縄文が浅く施されている。この種の土器としては縄文が施されることは珍しいことである。2・3は同一個体で大形の深鉢形土器の口縁部である。

時期は曾利Ⅱ式に比定される。

石器は床面より第31図—1の大形粗製石匙と2の横刃形石器の2点が出土したのみである。他に硬砂岩の剝片1片がある。1・2とも石質は硬砂岩である。

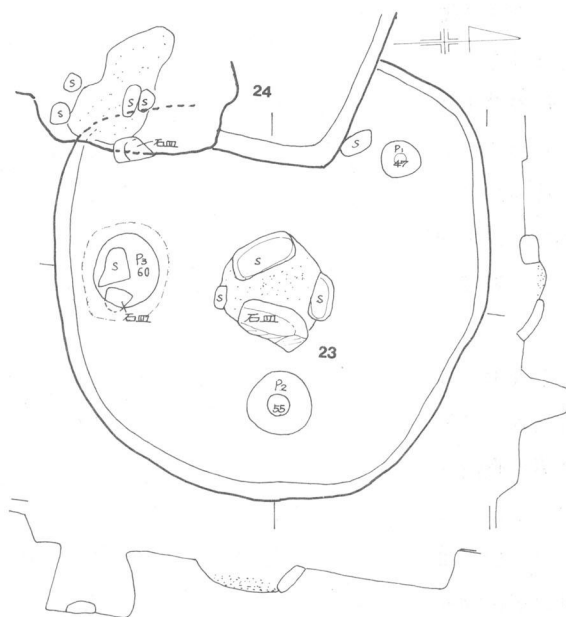
### 9 第23号住居址（第32～35図、図版5）

#### 遺構（第32図）

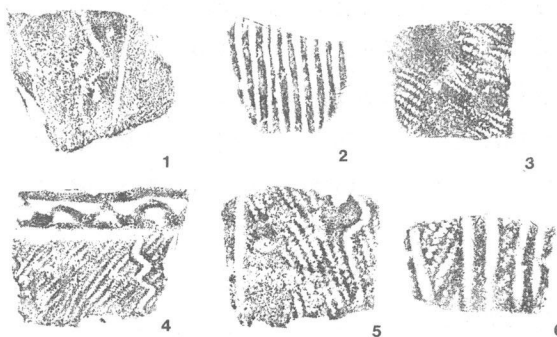
本住居址は第22号住居址の南東にあり西側は第24号住居址によって切られている。

ローム層を掘り込んであるがハードロームまでは達していない。深耕による攪乱のため、壁の現高は一定していない。北側では30cm、東側では15cm、南側では20cm前後である。

プランはほぼ円形を呈し、3.6×3.5mの小形のものである。床面はほとんどタタキが認めら



第32図 第23号住居址実測図 ( $S = \frac{1}{80}$ )



第33図 第23号住居址床面出土土器 ( $\frac{1}{8}$ )

れず、平坦ではあるが軟弱である。住居址の主軸方向は、 $S-90^{\circ}-W$ である。

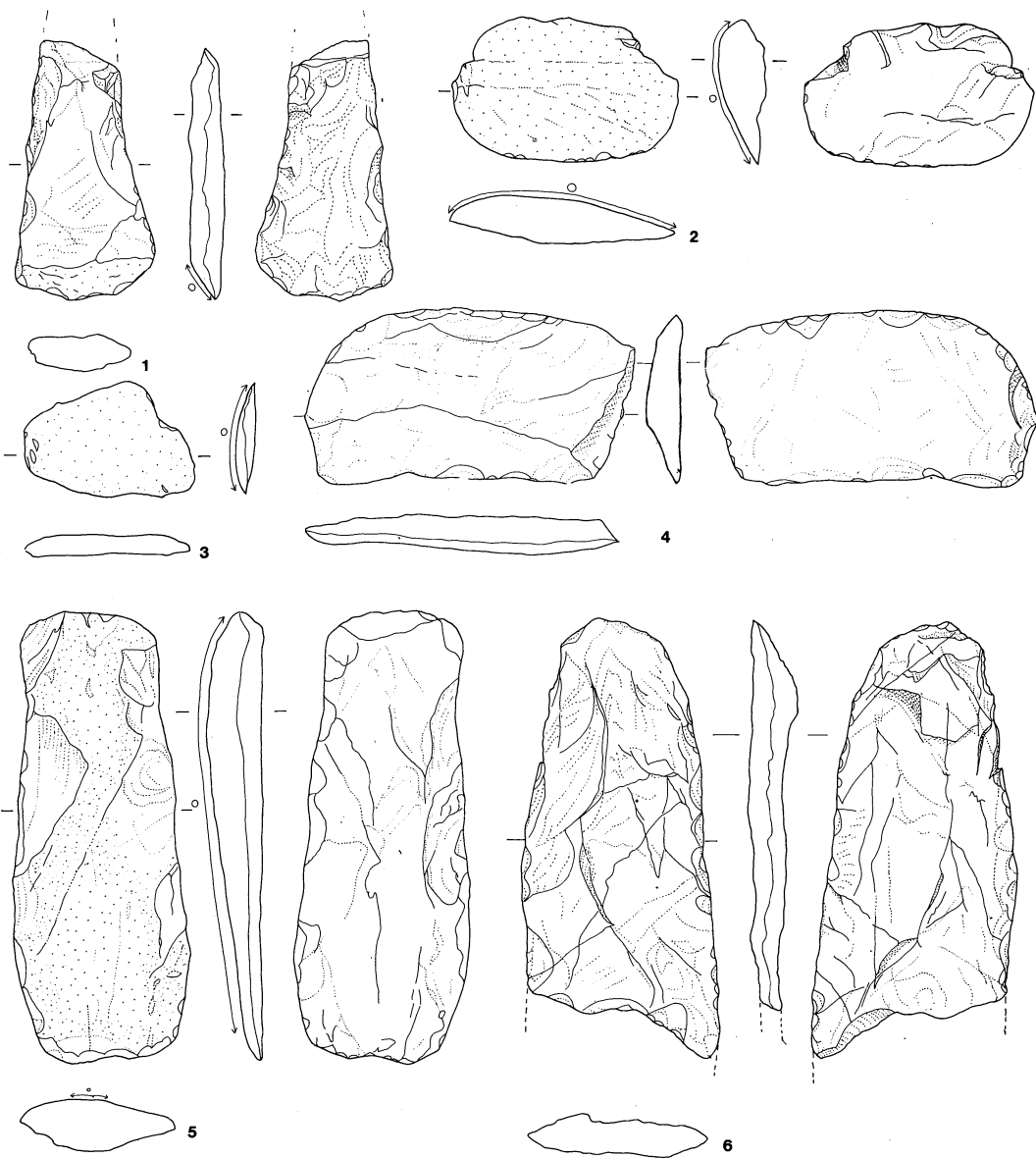
支柱穴と思われるもの  $P_1$ 、 $P_2$  の2本である。 $P_3$ は袋状ピットで底に石皿（第35図-9）と花崗岩の平石がおかれており。柱穴とは考えにくく、問題を残す。

炉は住居址中央やや東寄りにあり、石組み炉である。形は三角形とも五角形とも判然としない。南側と北側は炉石が抜かれたものであるかは不明である。東側の炉石には石皿（第35図-10）が上を向

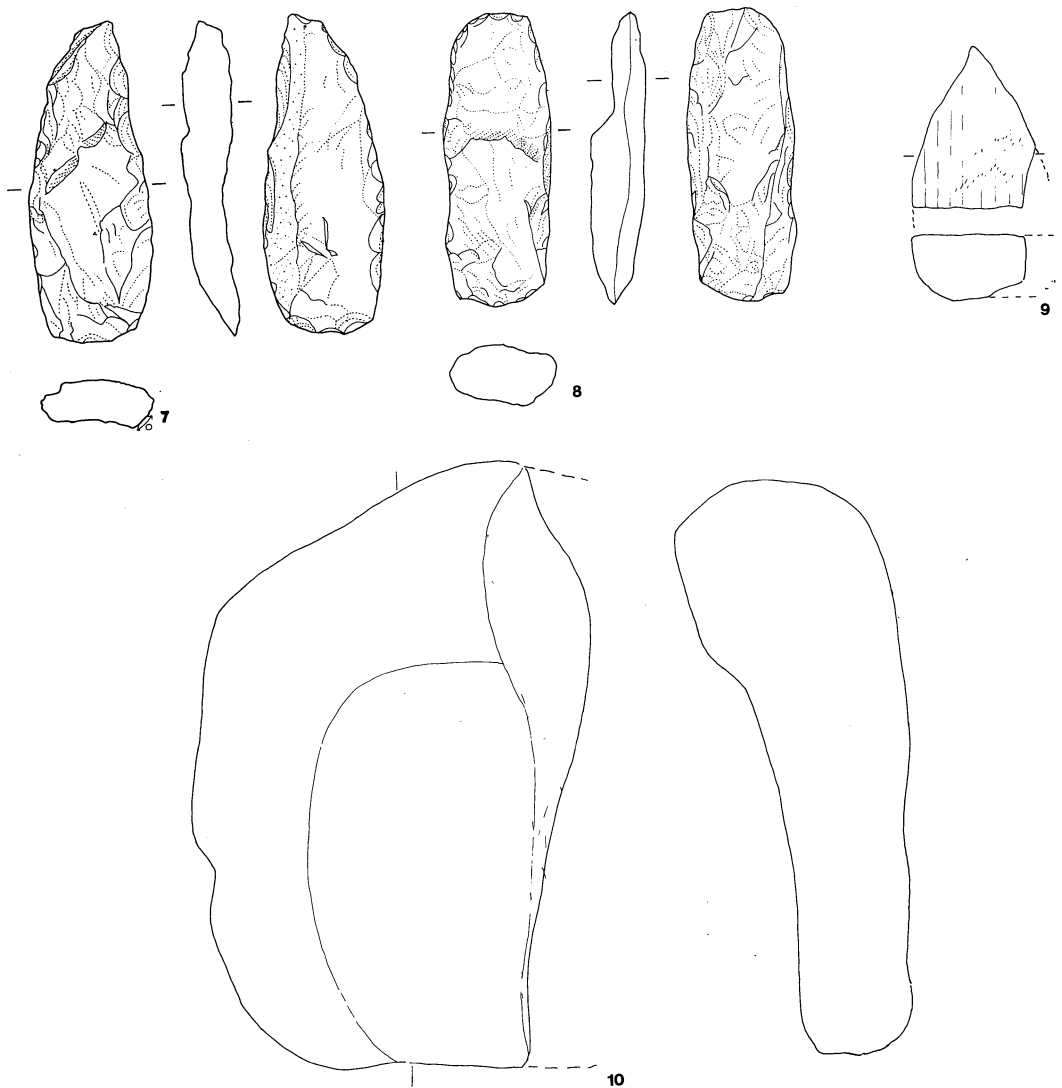
けて使われている。割ったものか、再利用かは不明である。炉石に石皿を利用した例としては、丸山南遺跡第14号住居跡例がもっとも典型的で、石皿を二つに割って伏せて使用している。

丸底にほられ炉石からの深さは20cmを測る。

本住居址は他に比べて小さく柱穴のあり方も違っており、他の住居址と性格を異にすると考えたい。



第34図 第23号住居址出土石器 (1・3・4は覆土・5・6は床面出土)



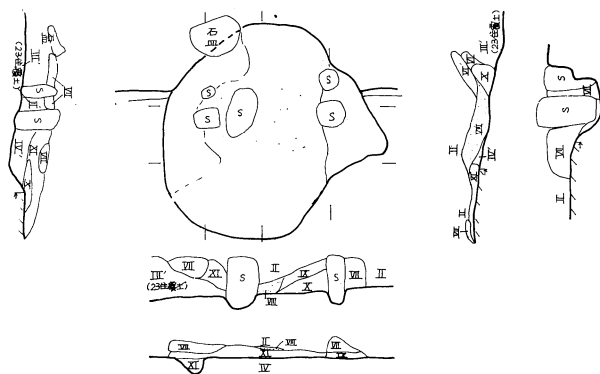
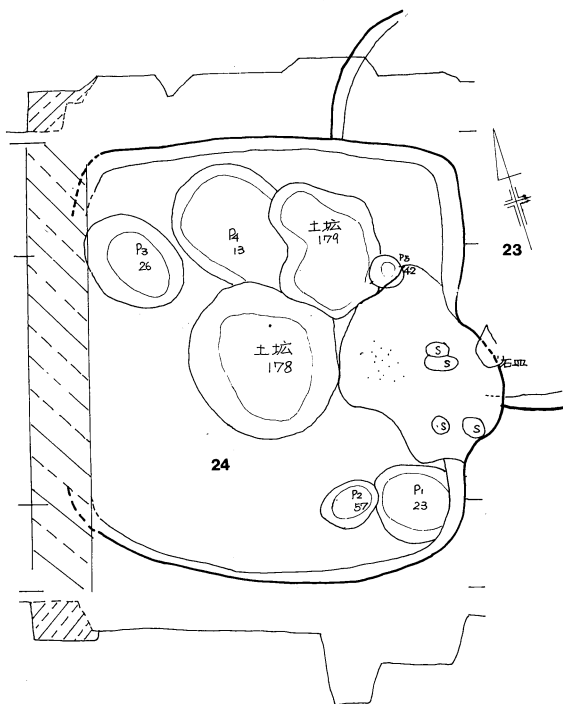
第35図 第23号住居址床面出土石器(7・8は $\frac{1}{4}$ 、9・10は $\frac{1}{2}$ )

#### 遺物 (第33～35図)

土器の出土量は非常に少ない。もちろん器形を知り得るものではなく深鉢形土器の小破片である。曾利Ⅱ式に比定できる。

石器は全部で15点の出土である。その他硬砂岩のa類破片が3点ある。覆土より打製石斧6点、横刃形石器3点が出土し、打製石斧6点のうち完形品は1点のみである。

第34図－1・5・6、第35図－7・8はすべて硬砂岩製の打製石斧で1の撓形を除けばすべて短冊形である。2～4は横刃形石器で2・4は硬砂岩製で、3は緑泥岩製である。9はP<sub>3</sub>より出土したもので平坦面が磨かれる。石皿より磨き石のc種に類似する平盤石皿と思われる。0は炉石に使用されたもので花崗岩である。



がすえられ、後側はロームで固められている。焼道部は破壊されたものかほとんどみられない。天井部は完全に崩落し、支石も見当たらない。焼土は燃焼部に10cm前後堆積している。第38図に示した土器はすべて燃焼部焼土中より出土したものである。

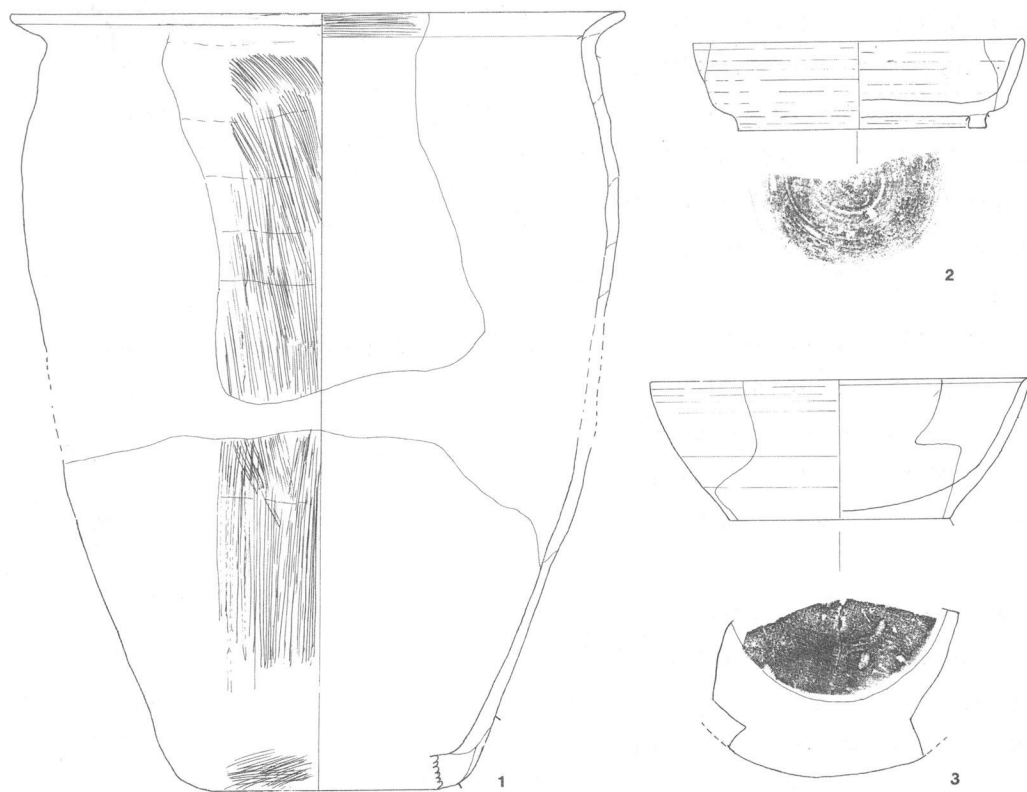
なお竈ローム封土上より石皿（第39図）が出土している。

#### 遺物（第38・39図）

出土土器は出土土器数量表にみるとおり少ない。第38図以外では須恵器の坏の口縁部破片2個体と土師器の甕の体部1個体分、須恵器の叩目を持つ甕1個体の破片のみである。灰釉陶器はみられない。

1は烏帽子形の甕で、胎土には砂粒を含み赤褐色に焼かれている。紐積みによるもので器面内外面とも指頭の痕が明瞭に残る。最大径は口縁部にあり24.5cmを測る。器高は31cm、底径11cmである。口頸部はく字に外反し、肩のりははっきりせず上半部に最大径がくる。口唇は丸い。

口唇内面はハケ目が施され、外面は横ナデがされる。体部は櫛葉状工具による細かいハケ目



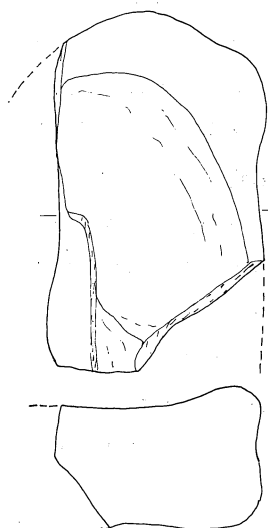
第38図 第24号住居址床面出土土器（ $\frac{1}{3}$ ）

がみられる。頸部から上半部に  
かけては上から下の、底部付近  
では横あるいは斜走している。  
底部は手持ちのヘラで削ってい  
る。

2は須恵器の高台付坏で半分  
ほどしかない。胎土は砂粒を多  
量に含み悪く、暗青色を呈して  
いる。体部は直に近い立ち上が  
りをみせ、器厚はほぼ一定して  
いる。底部内面は厚く盛りあが  
っている。口唇は丸い。ロクロ  
は左回転のものを使用するが、  
切り離し後に回転ヘラ削り調整  
が行われているため、回転ヘラ  
切り技法による切り離しと思わ  
れるがはっきりしない。

器 形 部 分	土師	須恵	小計
坏	実 測	1	1
	口縁部	2	2
高台付坏	実 測	1	1
甕	実 測	1	1
	体 部	1	2
小 計		3	4

第24号住居址出土土器数量表



第39図 第24号住居址  
出土石皿(㊦)

底部調整後、高台をつけロクロ利用の高台両わきの横ナデが行われる。法量は口径13.2、底  
径 9.7、器 3.6 cmで高台の高さは0.6 mmで台形を呈している。

3は土師器の坏で、深く堦に近いものである。内面は一部色を呈し、非常に丹念なヘラ磨き  
による研磨が行われている。胎土中にわずかに砂粒を含み、外面は赤褐色に焼かれている。右  
回転のロクロを用い、底部を手持ちのヘラで削っている。削りが浅いため一部に糸切痕が残る。  
体部下半に強いシメがみられる。

口唇は内側をそいで尖っている。法量は口径15、底径 8.7、器高 5.5 cmである。

時期は奈良時代末～平安時代初頭にかけたのものと思われる。

竈ローム封土の東上から花崗製の石皿（第39図）が出土している。本住居址に共伴するもの  
とは考えにくい。

## 11 第26号住居址（第29図、第40～42図）

### 遺構（第29図）

本住居址は東側の一部を第22号住居址によって切られている。また西側半分は井のために未  
発掘部分となっており、南側は池を作ったときの攪乱のため、全体の5分の2ほどの調査とな  
っている。

プランは楕円形を呈すと思われるが定かではない。北側での壁高は30cmを測る。床面はタタ  
キがみられ良好である。第22号住居址との床面差は8 cm前後である。

ピットはP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>が確認され、ともに深く位置的にも支柱穴と考えられる。炉は西側未発掘部分にかけてあり半分ほど検出された。床面を平底に20cm掘り込み焼土が充満している。炉石はみあたらない。石拔炉と考えられる。

土器は発掘面積のわりには多く、覆土上層に一括廃棄がみられ、わずかな間層をおいて、床面に完成に近い土器が出土している。

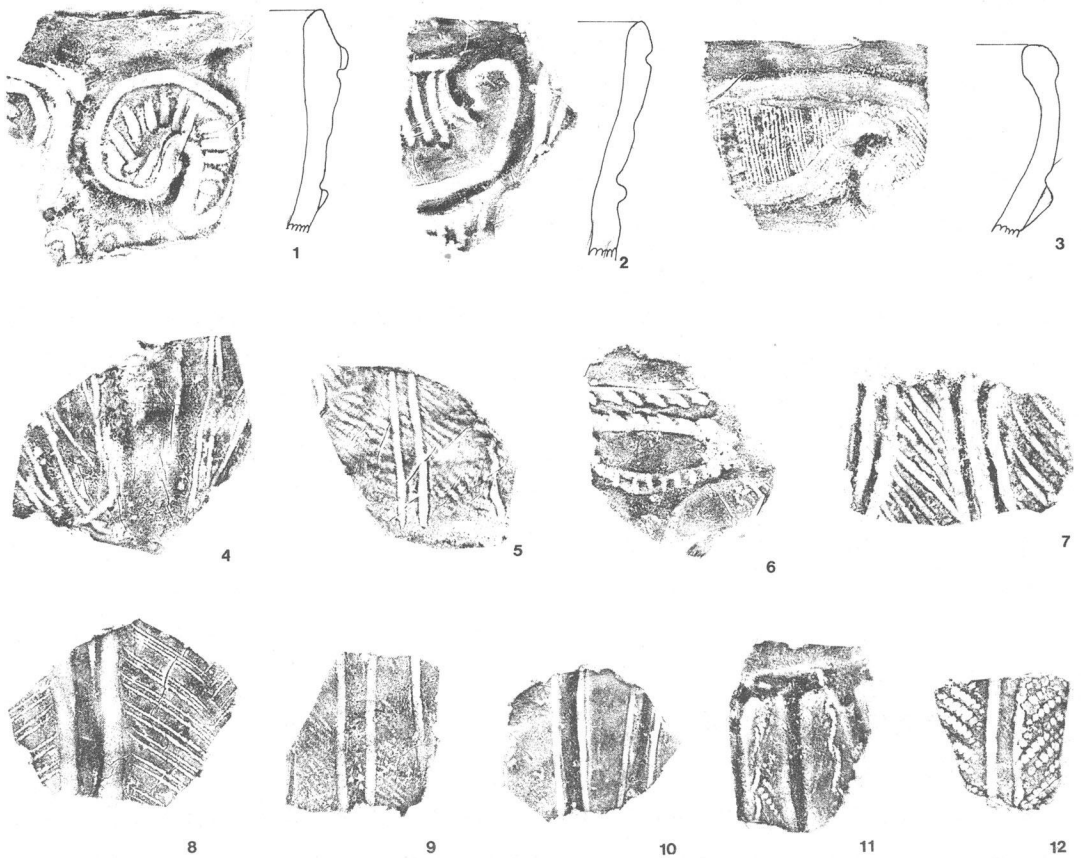
#### 遺物（第40～42図）

土器の出土状態についてはすでにふれたので省くこととする。

覆土出土（第40図）のものと床面出土（第41図）のものとは若干時期差のみられるものもある。

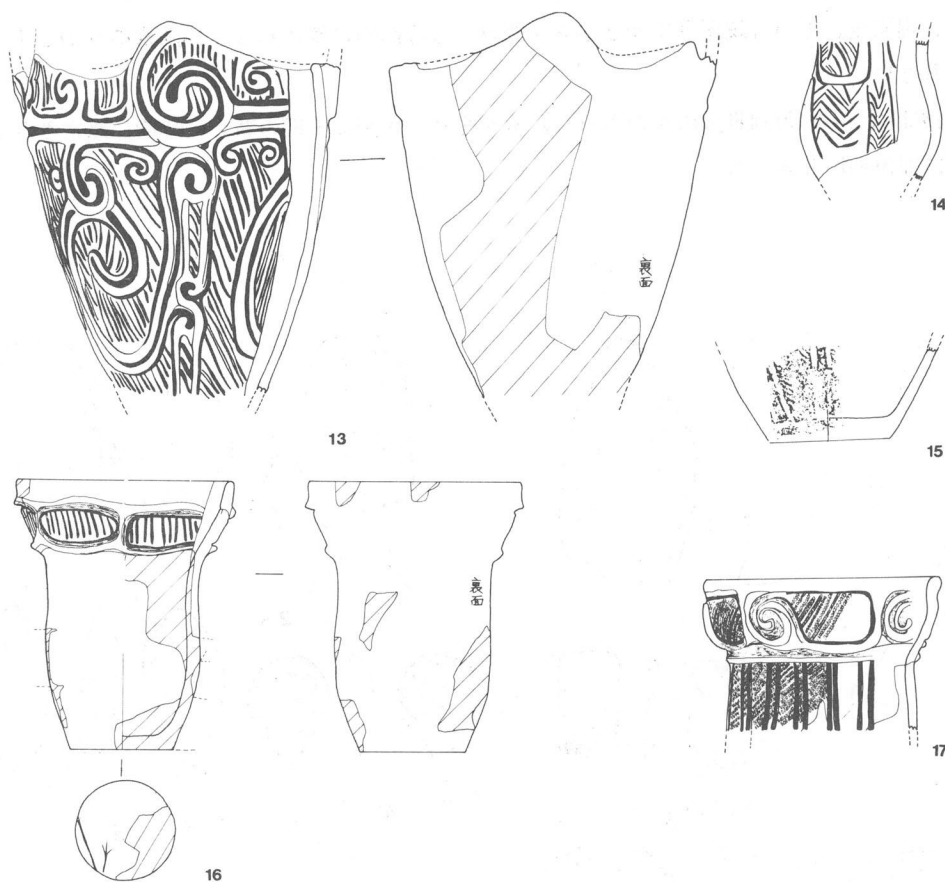
覆土出土のものはすべて深鉢形土器の破片で器形を知り得るものはない。1～3は大形の深鉢形土器の口縁部である。4・5、10・12は縄文ないし結節縄文を持つものである。

13は小形の深鉢形土器で図示した如く5分の1ほどを欠く。隆帯による唐草文様を器面一杯



第40図 第26号住居址覆土出土土器（ $\frac{1}{3}$ ）





第41図 第26号住居址床面出土土器（ $\frac{1}{8}$ ）

に配し、間は斜走する太目の沈線が埋めている。

14は小形の深鉢形土器の胴部で半分しかない。胴下半部にふくらみを持ち底部は小さいと思われる。細い沈線でV字文や懸垂文を施し、内部はやはり沈線の綾杉文で埋めている。

15は深鉢形土器の底部で縄文を地文とし、沈線の懸垂文がみられる。磨り消し手法はみられない。

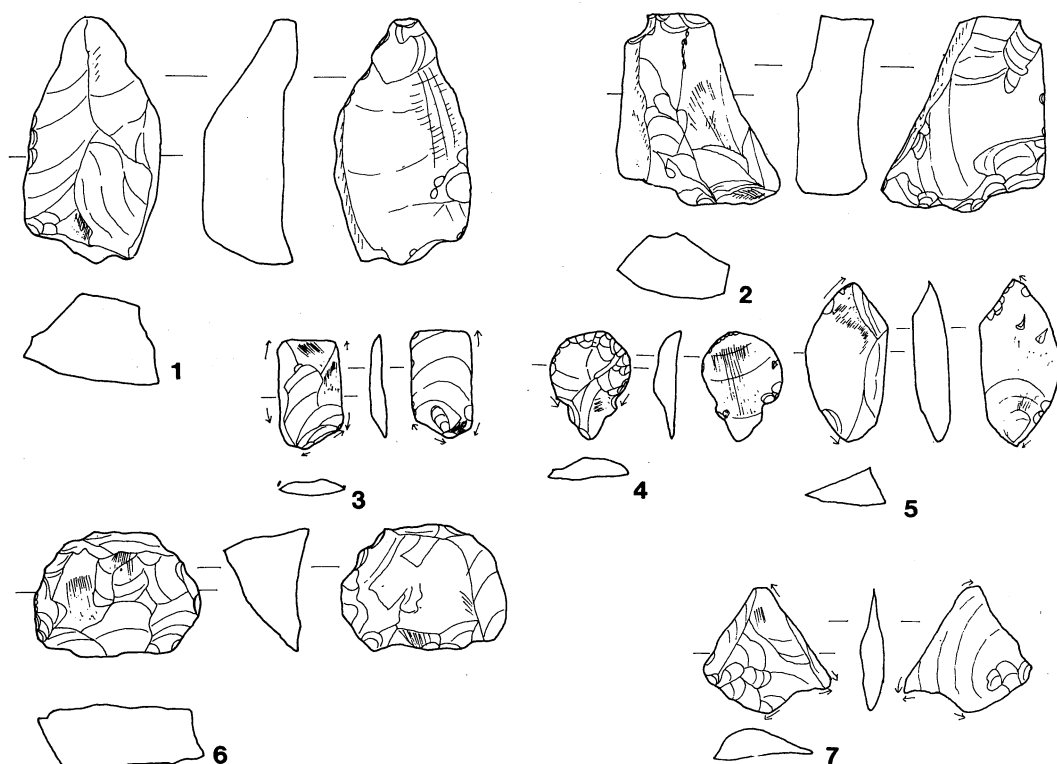
16は小形の深鉢形土器で図示するが如く一部を欠くがほぼ完形である。文様は口縁部のみにみられ、小判形の隆帯区角文によって5分画される。内部は太目の沈線が埋めている。胴部はまったくの無文である。底部に一部木ノ葉痕がみられる。

17はやはり小形の深鉢形土器で、図示する胴上半部は4分の1ほどしかない。口縁部は完全にまわっている。文様は口縁部文様帯と胴部文様帯とに分かれる。口縁部は隆帯による渦巻文を持つ方形区角で5分画し、内部を縄文で埋め沈線がふちどりする。頸部を横走する隆帯の下

には、縄文地に太い沈線懸垂文が2本を1組とし等間隔に施される。15同様磨り消し手法はみられない。

遺物は覆土中に曾利Ⅲ式のものもみられるが総じて曾利Ⅱ式期の新しい時期に比定される。

17は加曾利EⅡ式である。



第42図 第26号住居址覆土出土石器 (1/2)

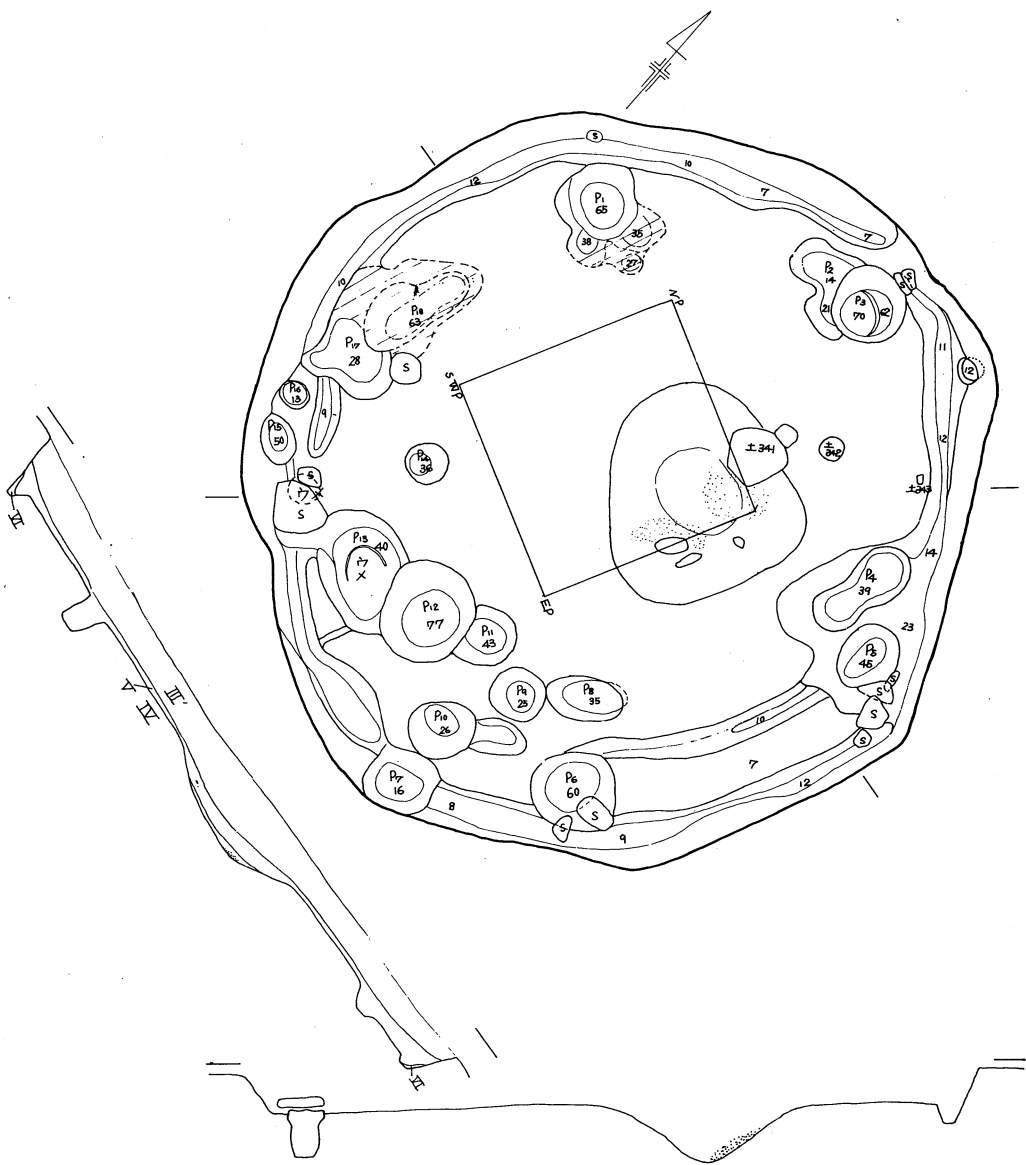
石器は覆土より出土した黒耀石製の搔器・削器（第42図）のみである。

## 12 第25号住居址（第43～78図）

### 遺構（第43図）

本住居址は今回検出された遺構群の最も東側に位置している。プランは東部分ではある程度はっきりした陵がみられ、六角形に近いものと思われる。

主軸はS-51°-Wと考えられる。大きさは6×6m、で一辺の長さは2.5～3mほどである。住居址の掘り込みは層位断面の観察を試みたが、漸移層中では確認できなかった。層位につ



第43図 第25号住居址実測図 (  $S = \frac{1}{80}$  )

いてふれると炭化物粒を含む暗褐色土層（Ⅲ'層）が厚く堆積し、その下層には炭化物粒を含む黒褐色土層（Ⅴ層）がみられ、周溝の一部壁ぎわにローム腐乱土がみられる自然堆積である。

壁は直に近く、壁高は40cm前後である。床面はロームのタタキで固く良好である。

この住居址は、南東部に周溝が2重にみられるところから建て直しが行われたものと思われる柱穴も同様の動きをみせている。旧住居址は南東壁より80cmほど内側で他は現在と同じである大きさは、6×5.2 mの楕円形を呈すものと思われる。P<sub>4</sub>、P<sub>8</sub>、P<sub>12</sub>は明らかに旧住居址の支柱穴と考えられる。P<sub>1</sub>の南側とP<sub>18</sub>には貼り床がされていることからやはり旧住居址の柱穴と考えられる。内側の周溝部分には貼り床はみられなかった。新住居址の支柱穴はP<sub>1</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>5</sub>、P<sub>6</sub>、P<sub>15</sub>が考えられる。

炉は住居址中央やや北東寄りにあり、他にはみられないため旧炉を再利用したか、若干手を入れて使用したものと思われる。プランは台形状で1.7×1.5mを測り、すり鉢状の炉穴である炉石はなかったものと考えたい。床面からの深さは50cmである。焼土は底にうすく堆積が認められたのみで、内部は炭化物を含む黒褐色土層が充満している。

壁ぎわには北東部と北西部でわずかとぎれるが周溝が一周する。深さは10cm前後でほぼ一定している。

P<sub>13</sub>とP<sub>15</sub>の中間、壁より40cmほど内側に正位の埋甕（第44図－1）が発見されている。上部には、平盤な二つの石がのっている。内部は黒褐色土層が充満しており、遺物は全く検出されていない。

さらにP<sub>13</sub>内部より深鉢形土器の胴下半部（第44図－2）が発見されている。埋甕と考えたい。これは旧住居址のもの、前者は新住居址のもので、ともに出入口部における埋甕である。

つぎに遺物の出土状態にふれてみたい。遺物とりわけ土器の出土量は多く、60×45×10cmの平箱に14箱、他に後述する完形品に近いもの半完形形品が30個出土している。これらはすべてⅢ'層の暗褐色土層中にみられるもので、いわゆる吹上パターンの土器廃棄を示すものである。石器も土器と同様で、すべてⅢ'層に含まれるものである。

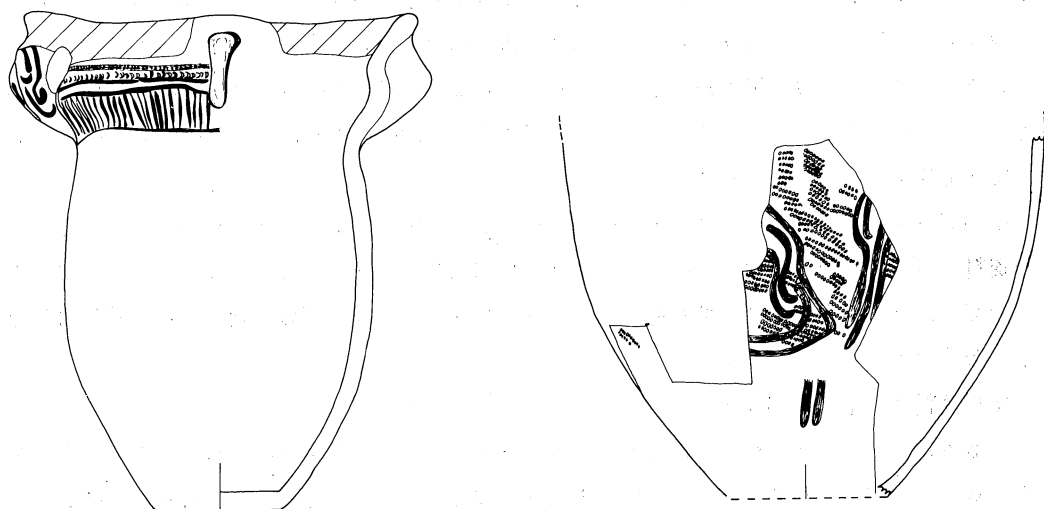
このような吹上パターンを持つ住居址は当遺跡においては、唯一のものである。調査期間も迫っているため、全点出土位置を落とすことはやめ、住居址中央部に詳細な出土状態観察区域を設定して調査を行うこととした。

調査方法は住居址中央部に1.8×1.8mの正方形の区角を設定し、さらに10cm方眼のます目を組んで土器を一片ずつ取りあげることとし、区角外のは、横つぶれ状態、ほぼ完形のもののみの位置を示すこととした。区角内における土器の取扱いは、細かく割れていても一箇所にあり同一個体のものは一片また完形に近いものも一点としてある。土器を点でなく面・線でとらえたため、区角内より出土した土器を点にかえて平面化することができなかった点はおわびしたい。土器を面でとらえるため、点にかえる基準点、さらに層位的にレベル差のあるものをどこでとらえるかが難しく、また矛盾が伴うからである。

接合図及び接合資料に伴う説明は後述することとする。

## 遺物（第44～ 図、図版 ）

出土土器・石器とも多い。土器の出土状態についてはすでにふれたところである。以下埋甕・接合資料、その他、石器にわけて述べていくこととする。



第44図 第25号住居址埋甕実測図（ $\frac{1}{6}$ ）

### 1) 埋甕（第44図）

すでに遺構のところで述べたように二つの埋甕が発見されている。



第44図－1は新しい住居址に伴うもので、P<sub>13</sub>とP<sub>15</sub>の間より石蓋がのった正位のものである。口縁部は一部を残すのみで把手も大半が壊れている。口唇は外反し、口頸部は外湾して胴部に至る。文様は胴部には全くみられない。耳たぶ状の内部に空洞を持つ把手と持たない把手を一個ずつ交互に4個配し、その間は竹管による沈線と連続押し引き文で連絡し、空間部は縦走する沈線で埋めている。内面は丹念な器面調整がみられ、褐色に全体が焼かれている。

2はP<sub>13</sub>より出土したもので、古い住居址に伴うものと思われる。胴下半部のみで底部を欠く。大形の深鉢形土器である。縄文を地文とし、太く浅い沈線が懸垂文あるいはワラビ手文を描く。

1・2の時期であるが、曾利Ⅰ～Ⅱ式に比定される。住居址も同様と思われる。

### 2) 接合資料（第45～67図）

土器の出土状態と調査方法についてはすでに述べてあるので、ここでは接合資料の図示に伴う説明を行いたい。住居址実測図の南西ポイントを基準とし、横軸にSWP－EPラインを、縦軸にSWP－NPラインを置き、その間を10cm間隔で表している。平面図中破線は、下部にあることを示している。断面図は土器の中央部を基準としたものである。平面図中㊟例のよう

○数字は出土状態が裏側であることを示している。断面図中「」は表側「」は裏側を示している。

接合資料は平面図において実線で結び、土器実測図番号を記してある。先にも述べた理由からして全点を一括載せることができないため、接合資料外のものも極力載せることに努めた。

土器実測図は欠損部分を明らかにするため、出来得る限り実測図とは別に展開図ないし、表面、裏面を略図で載せてある。番号は接合資料番号を表し、接合図中番号と同一のものである。斜線部分は欠損部、番号のないものは、調査区角外出土のものを表している。各々の接合部は実線で記してある。接合境界線わきにみられる短斜線（5例—第46図）は、断面部に炭化物の付着が認められることを表している。土器の表面は実測図面、裏面はその180度反対面である。

#### 接合資料 1（第45・46図—3）

第46図—3がこれである。図示する如く一部（1）の破片と多くは区角外出土のものとの接合資料である。小形の深鉢形土器で、口頸部と胴部底部を半分ほど欠く。隆帯による渦巻文を8個配し、その間をやはり隆帯が連絡している。胴部は浅く細い沈線が縦走する。曾利Ⅱ～Ⅲ式に比定される。

#### 接合資料 2（第45・46図—4）

土器番号52とその他より出土のものとの接合資料である。小形深鉢形土器で、胴部のみである。胴上部に幅広な隆帯を施し、胴部は縄文地に沈線のU字文が施される。磨り消し技法はまだみられない。曾利Ⅱ～Ⅲ式に比定される。

#### 接合資料 3（第45・46図—5、）

土器番号12と181と区角外出土の接合資料である。小形深鉢形土器で底部を欠き、胴部は半分、口縁部は一部を欠いている。口唇下に一条の沈線を横走させ、器面は沈線による区角文、蛇行文、U字文が規則的に配され、一部に刺突文がみられる。土器番号181と区角外出土土器の接合部分断面にわずかな炭化物の付着がみられる。これからするに煮沸時においてひび割れをおこし、廃棄されたことが考えられ、曾利期末期に比定されると思われるが定かでない。

#### 接合資料 4（第45・46図—6）

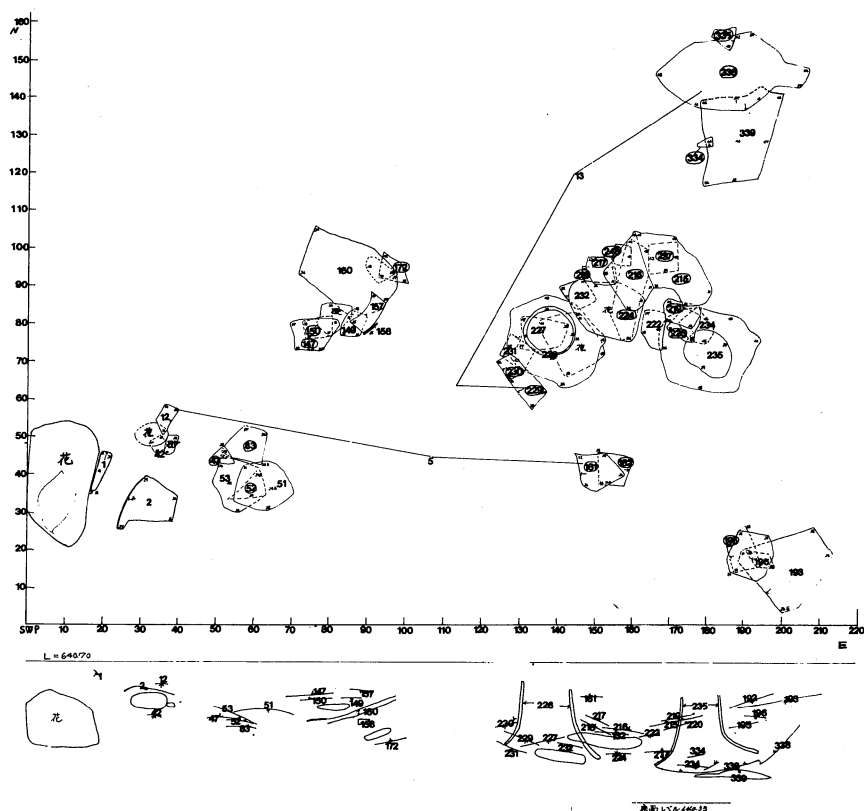
土器番号2と区角外出土土器との接合資料である。小形の深鉢形土器の口縁から胴上半部にかけてのもので、半分しかない。外反する口縁は内湾し、口唇直下に連続押し引き文が一条走り、その下部に沈線の渦巻文と楕円文が4個ずつ規則的に配される。その下には二条の連弧文が施され、頸部から胴部にかけては4～6本の集合沈線文が等間隔に縦走する。東海系吹畑式の影響の強い土器で、駒ヶ根市赤穂地区では往々にしてみられるものである。

#### 接合資料 5（第45・46図—7）

土器番号136のみで他との接合はない。小形深鉢形土器の胴部破片で、半分しかない。非常に安定感のある感じを持たせる土器である。口頸部に隆帯による装飾がみられるが詳しくはわからない。胴部には細いハケ目状の沈線が縦走する。

#### 接合資料 6（第45・46図—8）

土器番号195と区角外出土土器との接合資料である。小形の深鉢形土器の胴部で約5分の2



第45図 第25号住居址土器接合図1～11 ( $S = \frac{1}{20}$ )

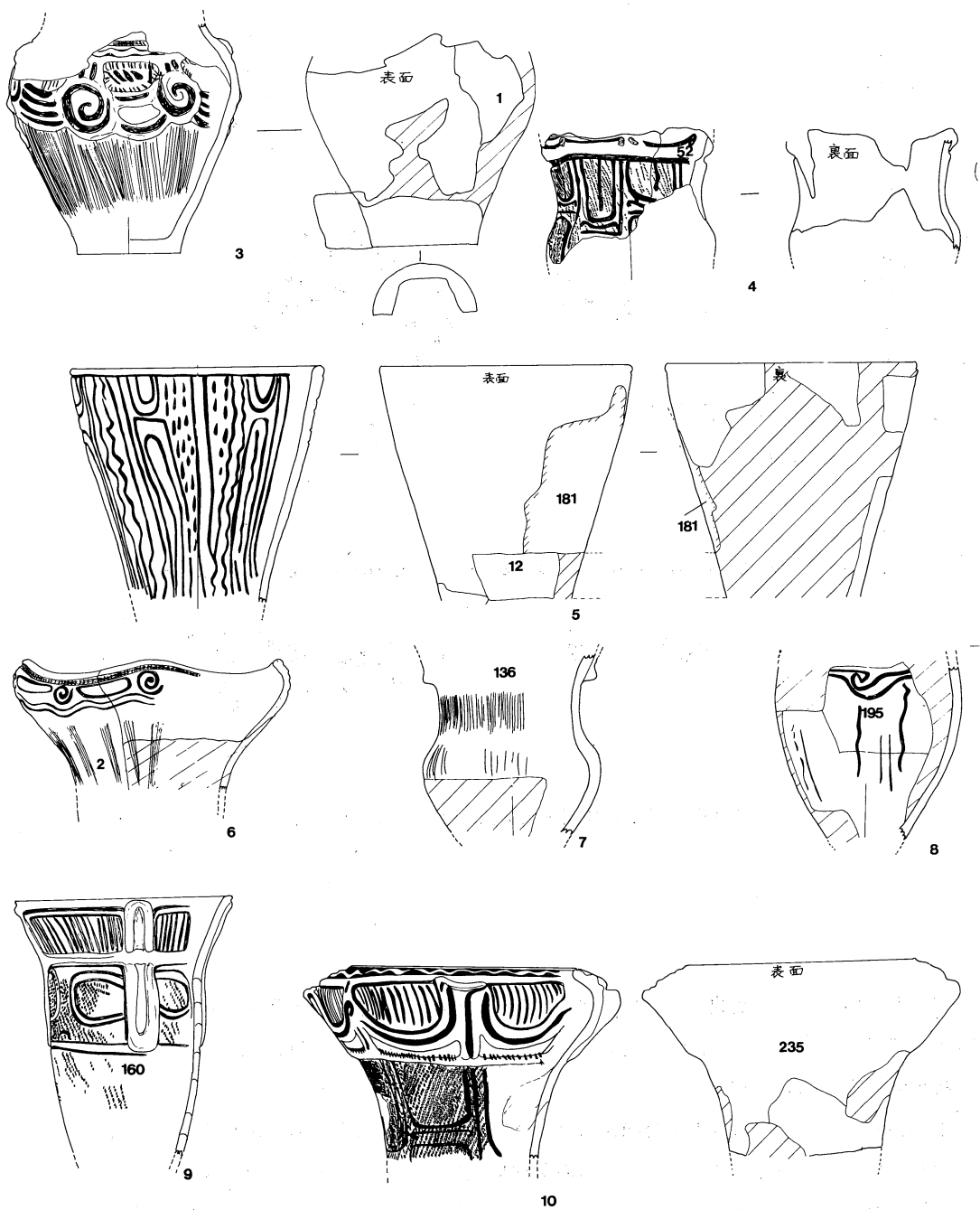
ほどしかない。頸部に沈線のワラビ手文を施し、胴部には蛇行沈線懸垂文がみられる。接合資料4（第45・46図－6）同様吹煙式的様相を持つ土器と思われる。曽利期の前半に位置する。

#### 接合資料7（第45・46図－9）

土器番号160のみで他との接合関係はない。第45図にみるように横つぶれ状態に口縁がやや下向きに出土している。スマートな小形の深鉢形土器で、口縁部を約半分と底部を欠く。頸部には幅広い粘土紐が施され、それと直交するように粘土紐のU字文によって文様は区角されている。口縁部文様帯は、U字文の間を沈線の方形区角と内部の縦の太い浅い沈線で埋めている。胴上半部はU字文を2本の沈線で結び、内部はやはり2条の沈線のU字文が施される。地文は縄文で、磨り消し技法はみられない。曽利期前半に位置すると思われる。

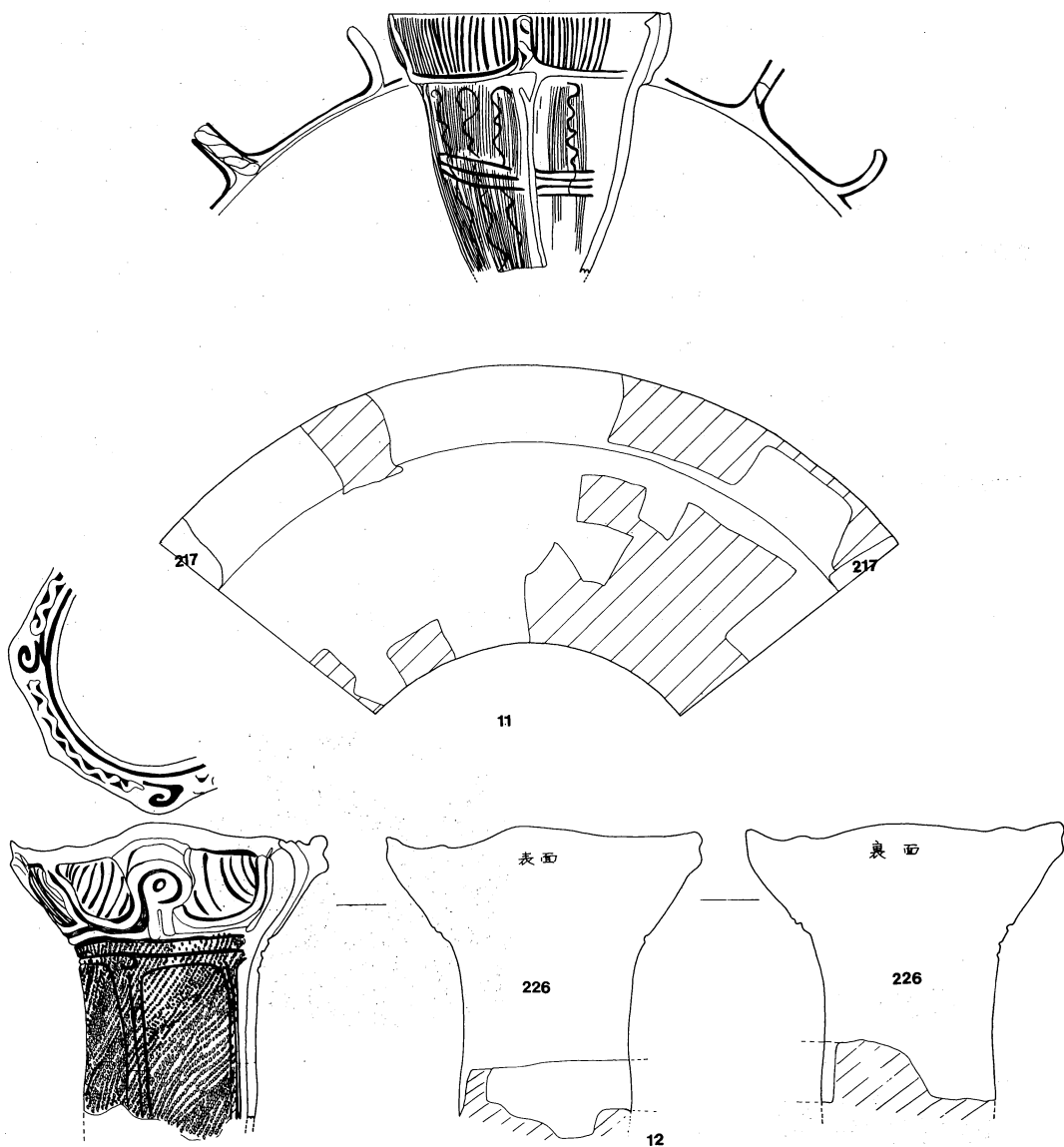
#### 接合資料8（第45・46図－10）

土器番号235と区角外出土土器の接合資料である。口縁部を下にし出土した235と胴部破片が一片接合している。口縁部は割れ胴部が若干落ちぎみで出土している。胴下半部を欠く小形



第46図 第25号住居址出土土器接合資料1～8 (1/6)





第47図 第25号住居址出土土器接合資料 9・10 (1/6)

深鉢形土器で口縁部は内湾する。口唇下に粘土紐による波状文を施し、その下部には渦巻文を伴う隆帯の連弧文を8分画角に配し、太い沈線が埋めている。胴部は縄文を地文とし、沈線によるワラビ手文・懸垂文・U字文が施される。磨り消し技法はみられない。加曽利E的様相を持つ土器で、加曽利EⅠ式の新しい方に属するであろう。

**接合資料9**（第45・47図―11）

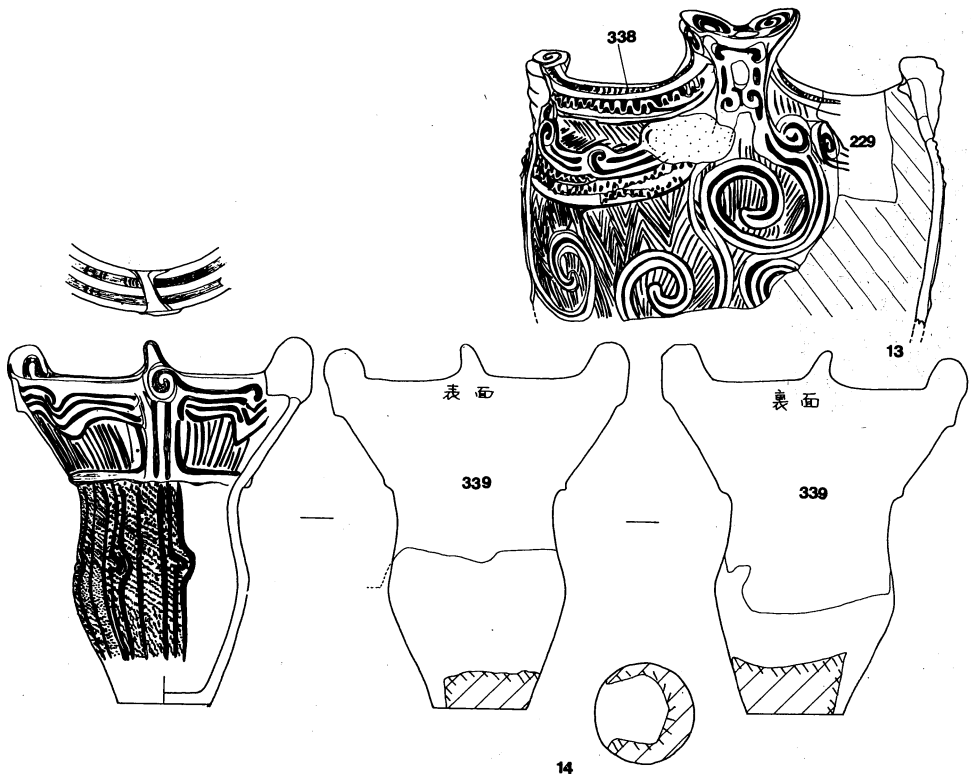
小破片の土器番号 217 と区角外出土土器との接合資料である。小形の深鉢形土器で、底部を欠く。口縁部・胴部も図示する如く、半分ほどしかない。口縁部はねじり紐状の隆帯とそれを結ぶ粘土紐とによって4区角され、内部は沈線に縦に施される。胴部は口縁部と対応する隆帯懸垂文を施し、その間の中間部に3条の沈線を横走させ、さらに蛇行沈線懸垂文を3条ずつ等間隔に配し、浅い細いハケ目状文が内部を充填する。曾利Ⅲ式に比定されるであろう。

**接合資料10**（第45・47図―12）

口縁を下にして発見された土器番号 226 と区角外出土の胴部破片の接合資料である。小形の深鉢形土器で胴下半部を欠く。口縁部は粘土紐によって8分画され、内部は太い深い沈線が埋めている。胴部は縄文を地文とし、沈線による懸垂文・方形区角文が施される。磨り消し技法はみられない。接合資料8（第46図―10）同様加曾利EⅠ式の新しい時期に属すると思われる。

**接合資料11**（第45・48図―13）

土器番号 229 と 338 の接合資料で、深鉢形土器である。胴下半部はなく半分である。渦巻文を持つふくろう状把手とねじり紐隆帯を交互に配し、頸部は隆帯によるワラビ手文それから胴部にかけてワラビ手状渦巻文が規則的に配され、間は沈線の綾杉文が埋める。曾利Ⅱ式に比定



第48図 第25号住居址出土土器接合資料11・12（ $\frac{1}{4}$ ）

される。

### 接合資料12 (第45・48図-14)

横つぶれで出土した 339 と区角角出土の胴部の接合資料である。図示する如く底部を半分ほど欠いている。その欠損部断面に炭化物の付着がみとめられ、ところからやはり、ひび割れをおこし使用できなくなって廃棄したものである。安定感のある小形深鉢形土器で、口縁は強く外反し、口唇フ字を呈している。山形状突起を 4 個配し、フ字の口唇部は 2 条の連続押し引き文を持つ沈線が連絡する。突起の下には渦巻文を持つ粘土紐懸垂文が施され、頸部にはそれを結ぶ紐帯が一条みられる。内部は 4 条のワラビ手沈線文と沈線が縦方向に埋めている。胴部地文は縄文である。3 条を 1 組とする沈線の懸垂文が、器面を 8 等分し、さらに沈線懸垂文がその間に走っている。磨り消し技法はみられない。加曽利 E 的要素と吹畑的要素をミックスした感じの土器である。

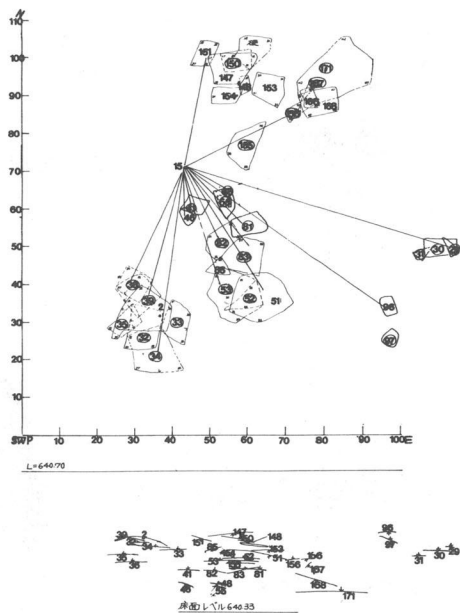
加曽利 E I 式の新しい方に属すると思われる。

### 接合資料13 (第49・50図)

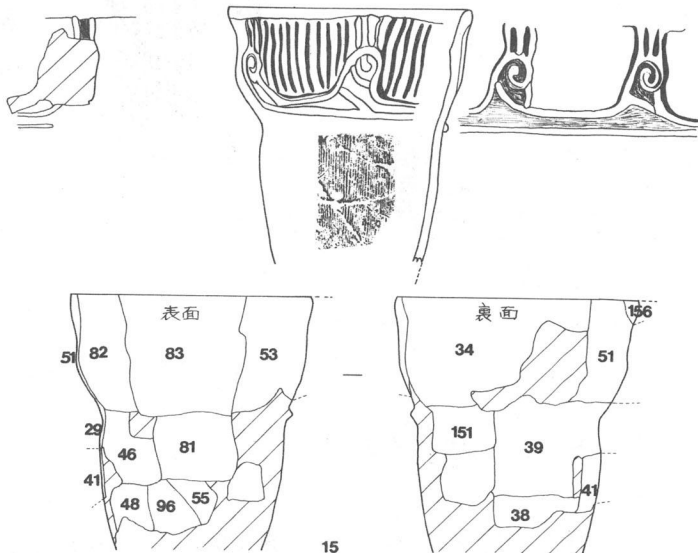
土器番号 29・34・38・39・41・46・51・53・55・81・82・83・96・156 と区角外出土土器との接合資料である。小形の深鉢形土器で胴下半部を欠き、胴上半部も半分ほどしかない。口縁部は渦巻文の粘土紐によって 5 分画され、内部は太い沈線が縦に施される。胴部は細いハケ目状文が縦走する。曾利 III 式に比定される。

### 接合資料14 (第51・52図)

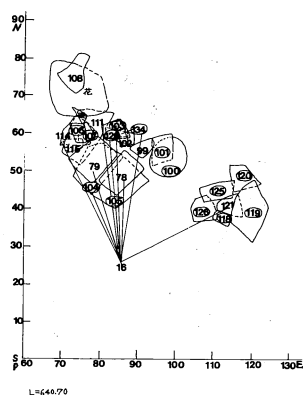
本資料は土器番号 78・79・103・104・105・111・114・128・134 と区角外出土土器の



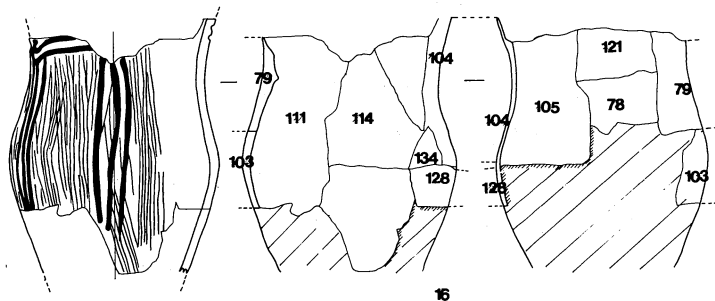
第49図 第25号住居址土器接合図13 (S = 26)



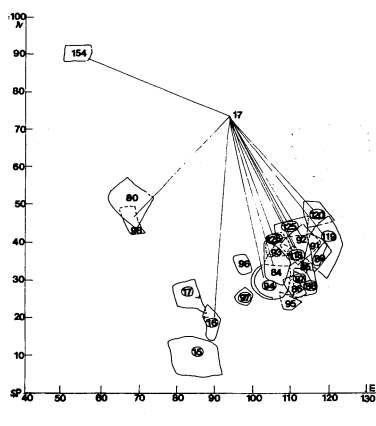
第50図 第25号住居址出土土器接合資料13 (1/6)



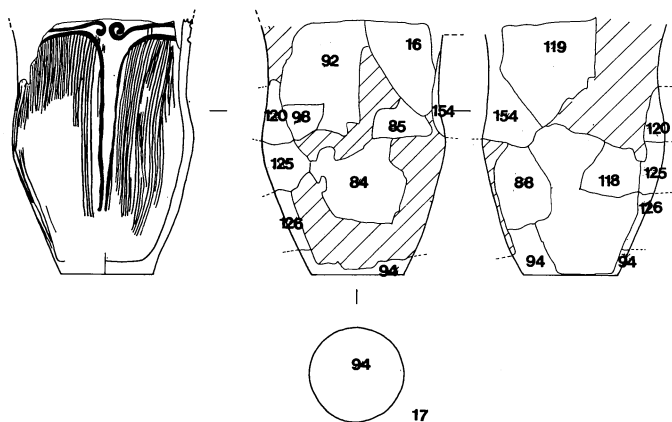
第51図 第25号住居址土器接合図14( $S=\frac{1}{20}$ )



第52図 第25号住居址出土土器接合資料14 ( $\frac{1}{6}$ )



第53図 第25号住居址土器接合図15 ( $S=\frac{1}{20}$ )



第54図 第25号住居址出土土器接合資料15 ( $\frac{1}{6}$ )

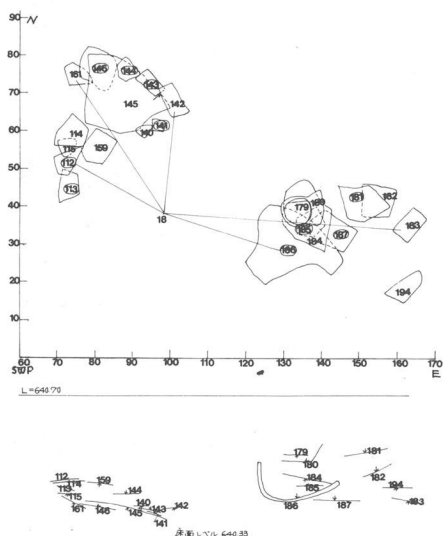
#### 接合資料15 (第53・54図)

土器番号16・84・85・88・92・94・98・118・119・120・125・126・154と区角外出土土器の接合資料で、98・154を除いてはまとめて出土している。口縁部を欠く小形深鉢形土器で、図示する如く胴部も半分ほどしかない。文様は接合資料14 (第52図) と似るもので、地文にはハケ目状文を用い、ワラビ手文とそれから懸垂する沈線文で構成されている。曾

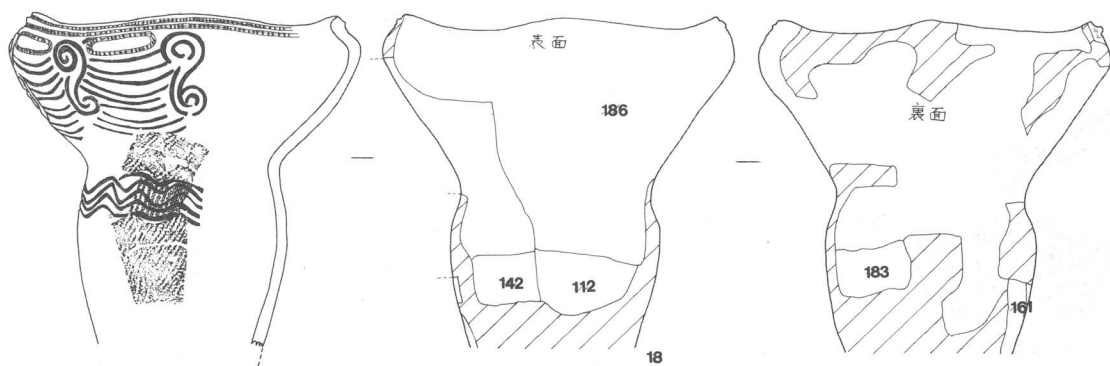
利Ⅱ～Ⅲ式に比定されるであろう。

#### 接合資料16 (第55・56図)

土器番号112・142・161・183・186 と区角外出土土器の接合資料である。まとまった出土状態ではない。底部を欠く小形深鉢形土器で、口縁部の一部を欠き、胴部の下半部はほとんどない。口縁はゆるやかな波状を描き口唇下に2条の連続押し引き文を持つ沈線を口縁に沿って波状させ、その下部には、渦巻沈線文を規則的に8個配し、その間は楕円文と円弧文でつないでいる。胴部は縄文を地文とし、胴上部に連弧文を4～5条横走させている。吹炆的要素を持つ土器である。曽利期の前半に比定されると思われる。



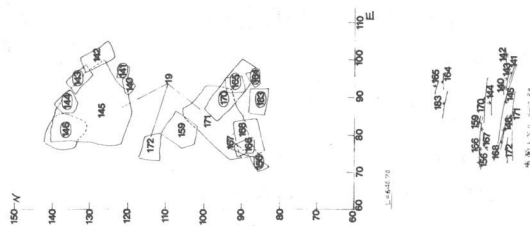
第55図 第25号住居址土器接合図16  
( $S = \frac{1}{20}$ )



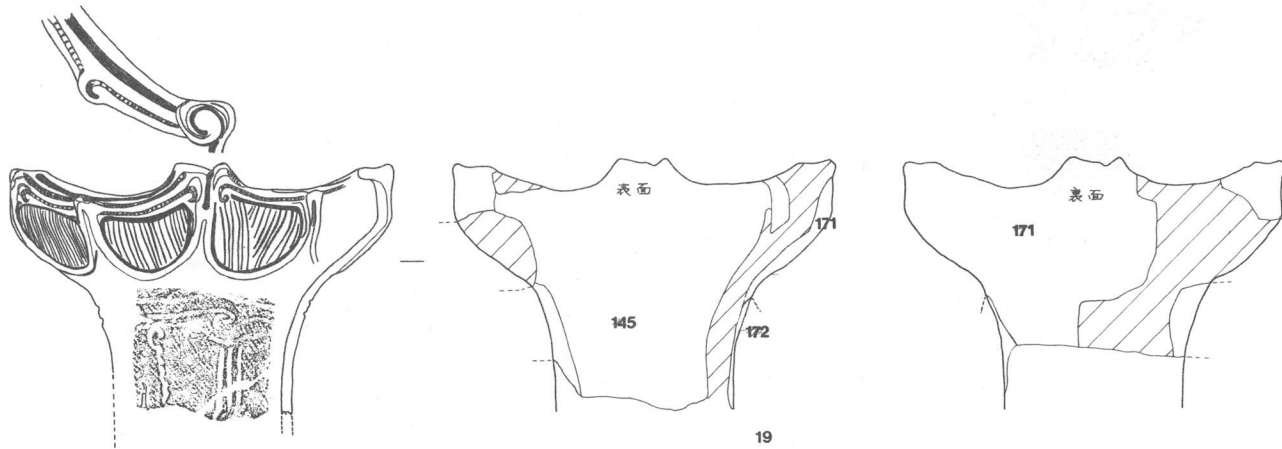
第56図 第25号住居址出土土器接合資料16 ( $\frac{1}{6}$ )

#### 接合資料17 (第57・58図)

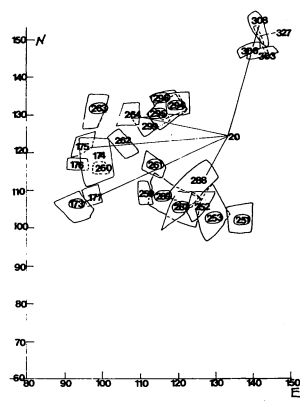
土器番号145・171・172 と区域外出土土器の接合資料である。胴下半部を欠く小形の深鉢形土器で波状口縁である。口縁部は紐帯による小判形文によつて8分画され、内部は沈線で埋められている。直角に内屈する口唇部には沈線と連続押し引き文を持つ沈線が1条ずつ施され、突起部には渦巻文がみられる。胴部は縄文を地文として、沈線のワラビ手文・ワラビ手状懸垂文が施される。磨き消し技法はみられない。加曽利EⅠ式の新しい方に属すると思われる。



第57図 第25号住居址土器接合図17 ( $S = \frac{1}{20}$ )



第58図 第25号住居址出土土器接合資料17 ( $\frac{1}{6}$ )



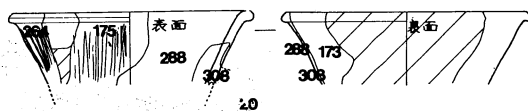
第59図 第25号住居址土器  
接合図18( $S = \frac{1}{20}$ )

#### 接合資料18 (第59・60図)

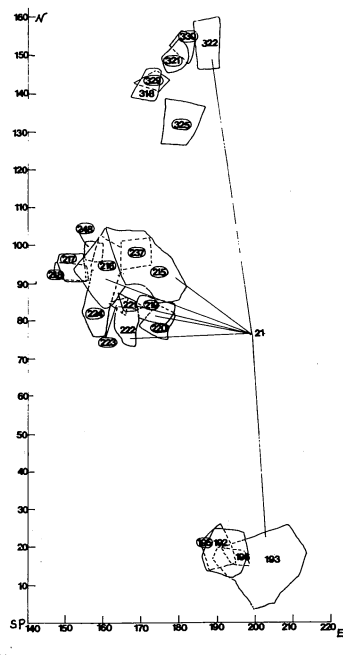
土器番号173・175・264・288・308 と区域外出土土器との接合資料である。小形の深鉢形土器の口縁部で5分の2ほどを欠いている。折り返し口縁で断面三角形を呈す。文様は細いハケ目状文が縦走するのみである。曾利Ⅳ式に比定されるであろうか。

#### 接合資料19 (第61・62図)

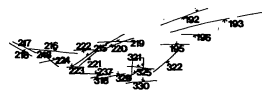
土器番号193・215・216・219・221・222・322 と区域外出土土器との接合資料である。深鉢形土器で図示する如く胴部は半分ほどしかなく、口縁部も一部欠いている。キャリパー状を呈し、口唇下には4個渦巻文が施されるのみである。口縁部はねじり紐状隆帯と粘土紐によって8分画し、内部は沈線で波状文・一筆方形文を描いている。胴部はハケ目状文を施し、その上に、粘土紐による変形人体文を懸垂させ、4分画し、内部は3本を1組とした沈線によって唐草文様を表出している。曾利Ⅱ式でも新しい方に属するであろう。

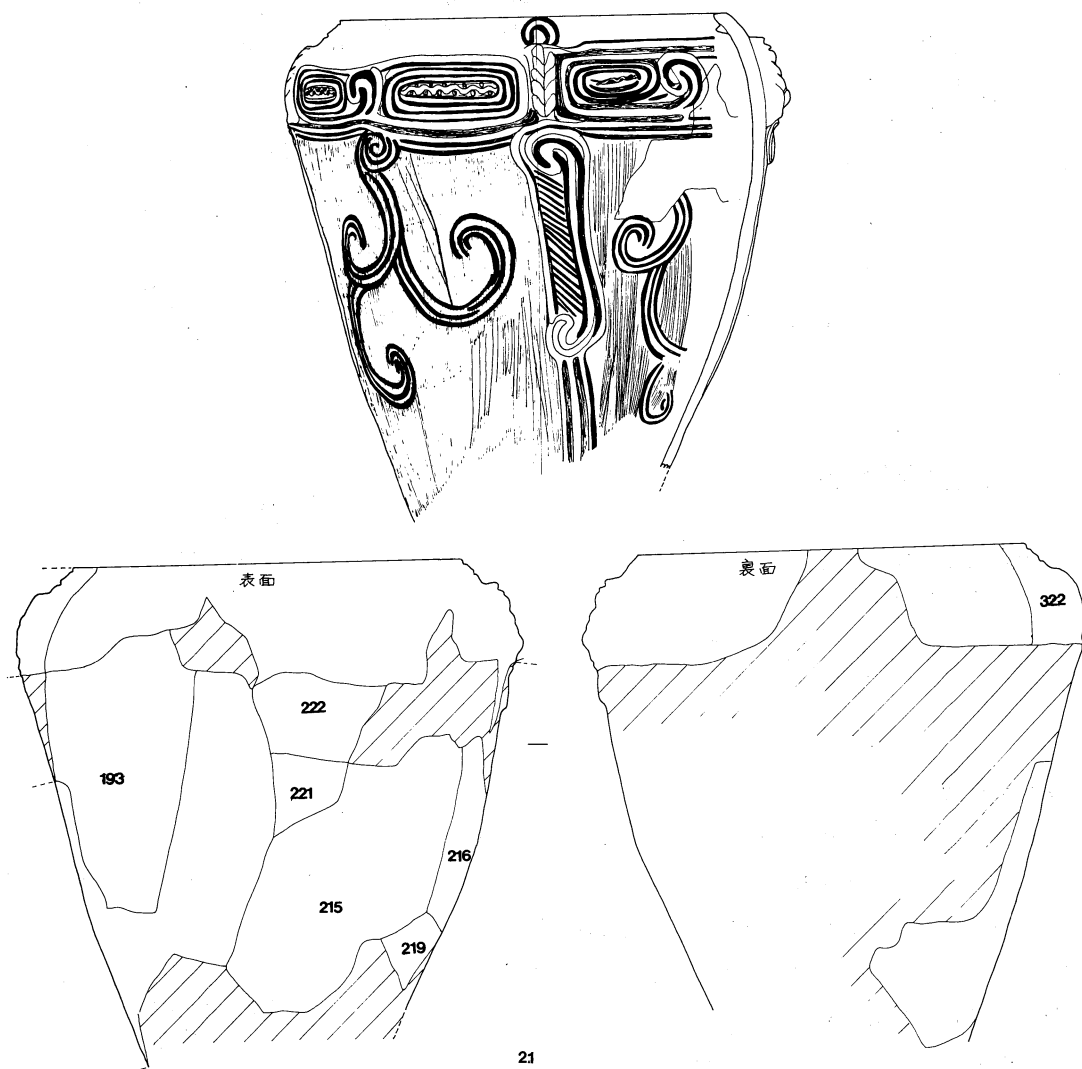


第60図 第25号住居址出土土器接合資料18 ( $\frac{1}{16}$ )



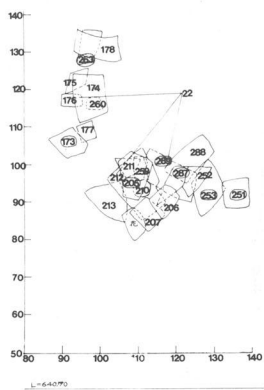
第61図 第25号住居址土器  
接合図19( $S = \frac{1}{20}$ )



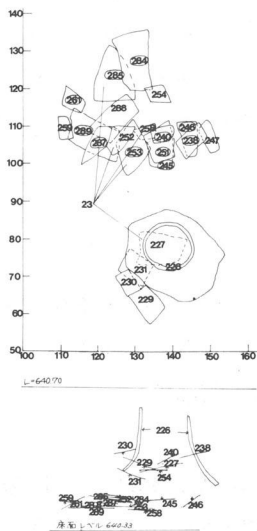


第62図 第25号住居址出土土器接合資料19 (1/6)

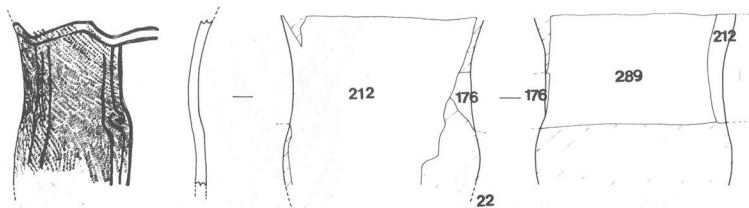




第63図 第25号住居址  
の土器接合図20  
( $S = \frac{1}{20}$ )



第65図 第25号住居  
址土器接合図21  
( $S = \frac{1}{20}$ )



第64図 第25号住居址出土土器接合資料20 ( $\frac{1}{6}$ )

### 接合資料20 (第63・64図)

土器番号176・212・289の接合資料である。小形の深鉢形土器の胴部である。縄文を地文とし、沈線による波状文・懸垂文が施される。磨り消し技法はみられない。曽利期の前半に位置するであろう。

### 接合資料21 (第65・66図)

土器番号227・246・252・253・

258・285の接合資料である。小形の深鉢形土器で口縁部を欠き、胴部も図示するが如く半分ほどしかない。

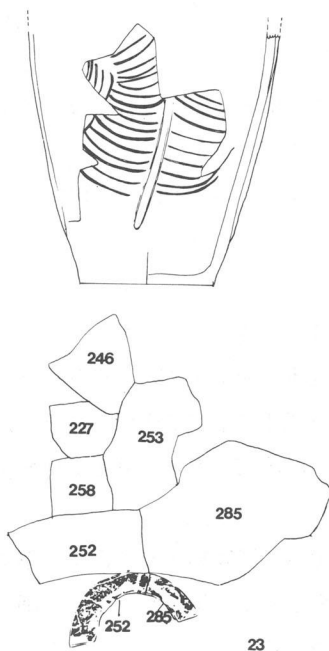
文様は定かでないが、紐帯懸垂文を配し、その間を沈線がうろこ状に施される。曽利Ⅱ式期に比定されるであろうか。

### 接合資料22 (第43・67図—24)

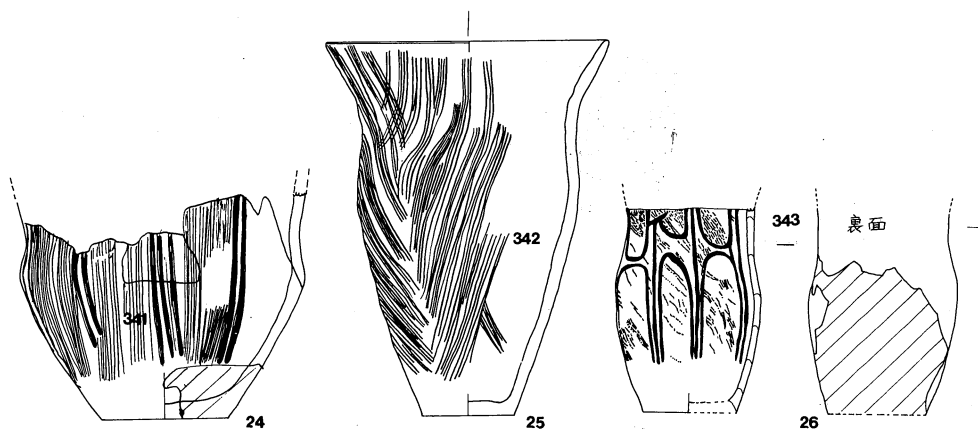
第43図中に示す土器番号341の資料で、横つぶれに床面より35cm浮いて出土している。深鉢形土器の底部で半分しかない。ハケ目状文を地文とし、2条と3条の懸垂沈線を交互に4個ずつ配している。曽利Ⅱ～Ⅲ式に比定される。

### 接合資料23 (第43・67図—25図版)

第43図中に示す土器番号342の資料である。本資料は他と違い、完形品で、しかも覆土中に正位に埋め込まれていたもので、廃棄によるものでなく後世の埋設と考えられる。



第66図 第25号住居址出土  
土器接合資料21  
( $\frac{1}{6}$ )



第67図 第25号住居址出土土器接合資料22～24

小形の深鉢形土器で胴部はゆるやかなふくらみを持ち頸部にてくびれ、口縁部は外反する。文様は2～4条の櫛歯状工具による綾杉状の集合沈線文である。さてこの資料の所属時期であるが、類例を得られず、定かでない。器形的には縄文時代の後期の様相をみせている。縄文時代中期終末期としておく。

#### 接合資料24 (第43・67図-26)

第43図中に示す土器番号 343 の資料で、壁ぎわ床より10cm浮いて横倒しで発見されている。小形の深鉢形土器で、口縁部と底部を欠き、胴下半部は半分ほどしかない。非常に撚りの細かい縄文を地文とし、沈線の懸垂文を8本施し、その間はU字文を上下対称に配している。大木式の要素を持つ土器である。

#### 3) その他の土器 (第68～71図)

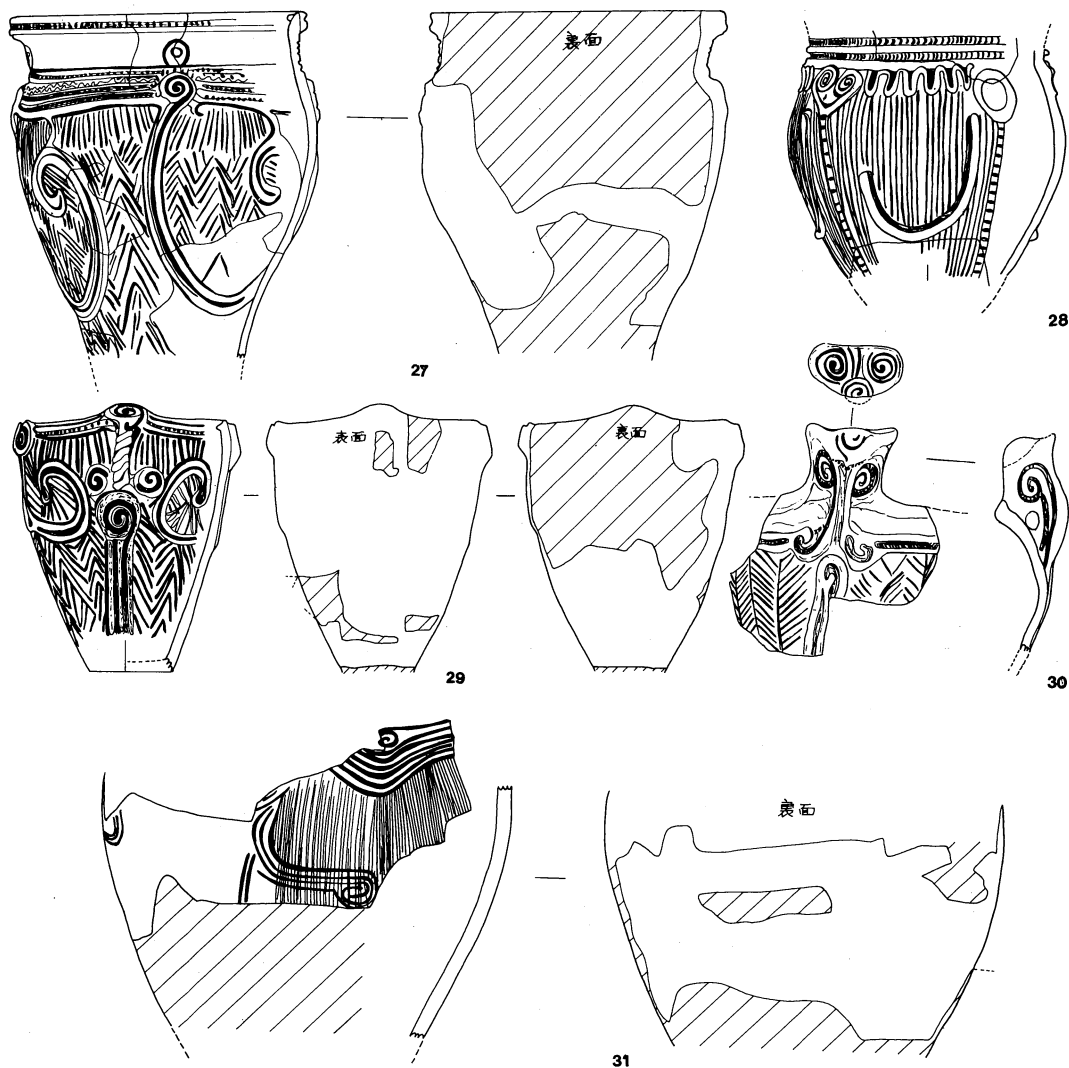
ここでは区域外出土の復元土器及び破片を扱うこととする。

27は小形深鉢形土器で底部を欠く。全体に図示する如く半分ほどしかない。28は深鉢形土器で底部を欠き半分しかない。29は小形の深鉢形土器で底部を欠き、口縁から胴上半部にかけて半分ほど欠けている。30は深鉢形土器の口縁部である。31は深鉢形土器の胴部である。

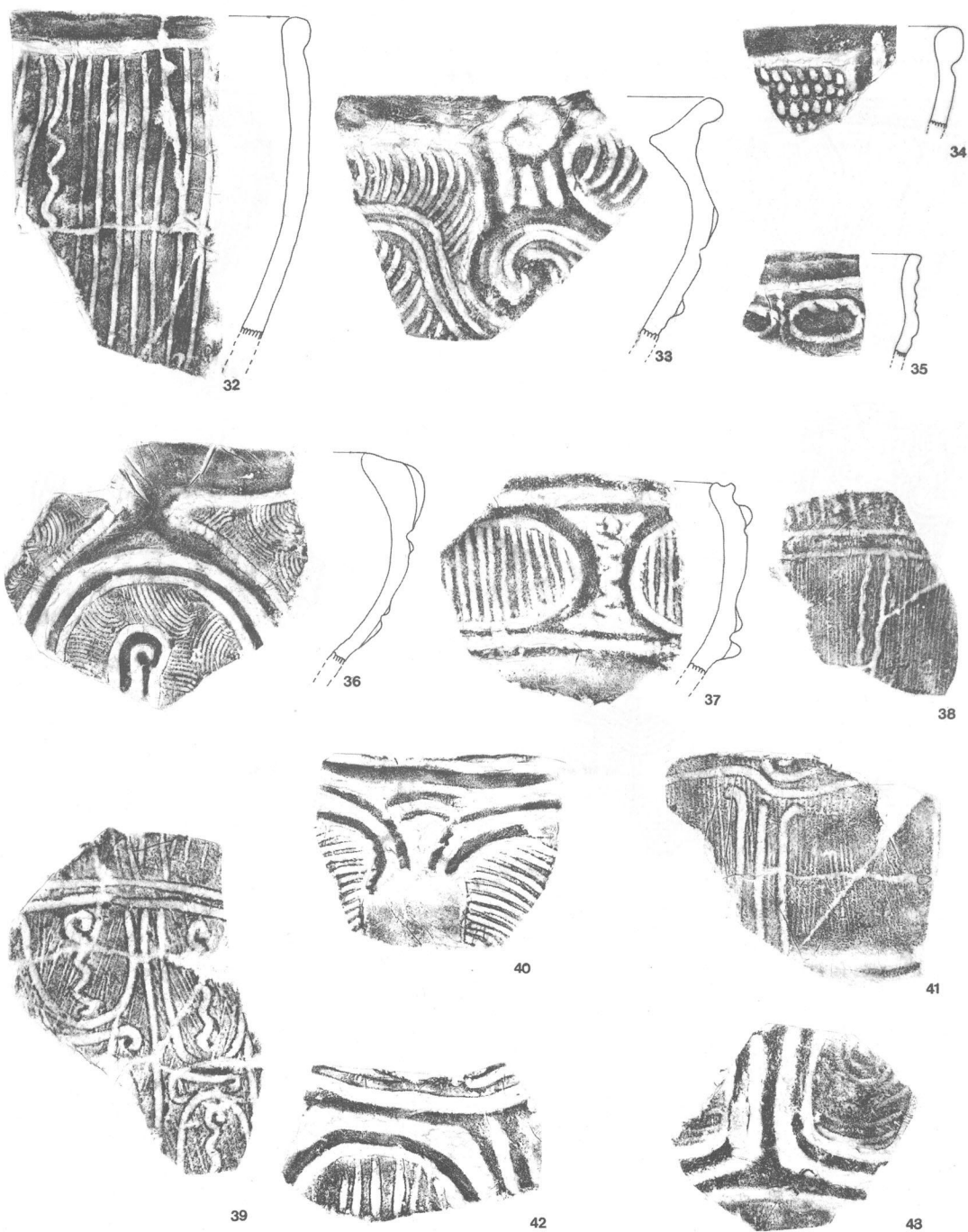
曾利Ⅱ式に比定される。

第69～71図は土器の拓影図である。すべて深鉢形土器である。第69図は口縁部ないし、口縁部に近いものである。第70図は胴部破片である。第71図は地文に縄文を持つものである。磨り消し技法のみられないのが大きな特徴である。

2)・3)と接合資料及びその他の土器をみてきたわけである。接合資料23 (第67図-25)を除き、完形品はみあたらない。土器廃棄の性格からしても当然の事と思われる。出土土器を時期的にみると、一部を除いて曾利Ⅱ期のものである。結節縄文を持ったものがまったくみられないことは今後の問題点となろう。



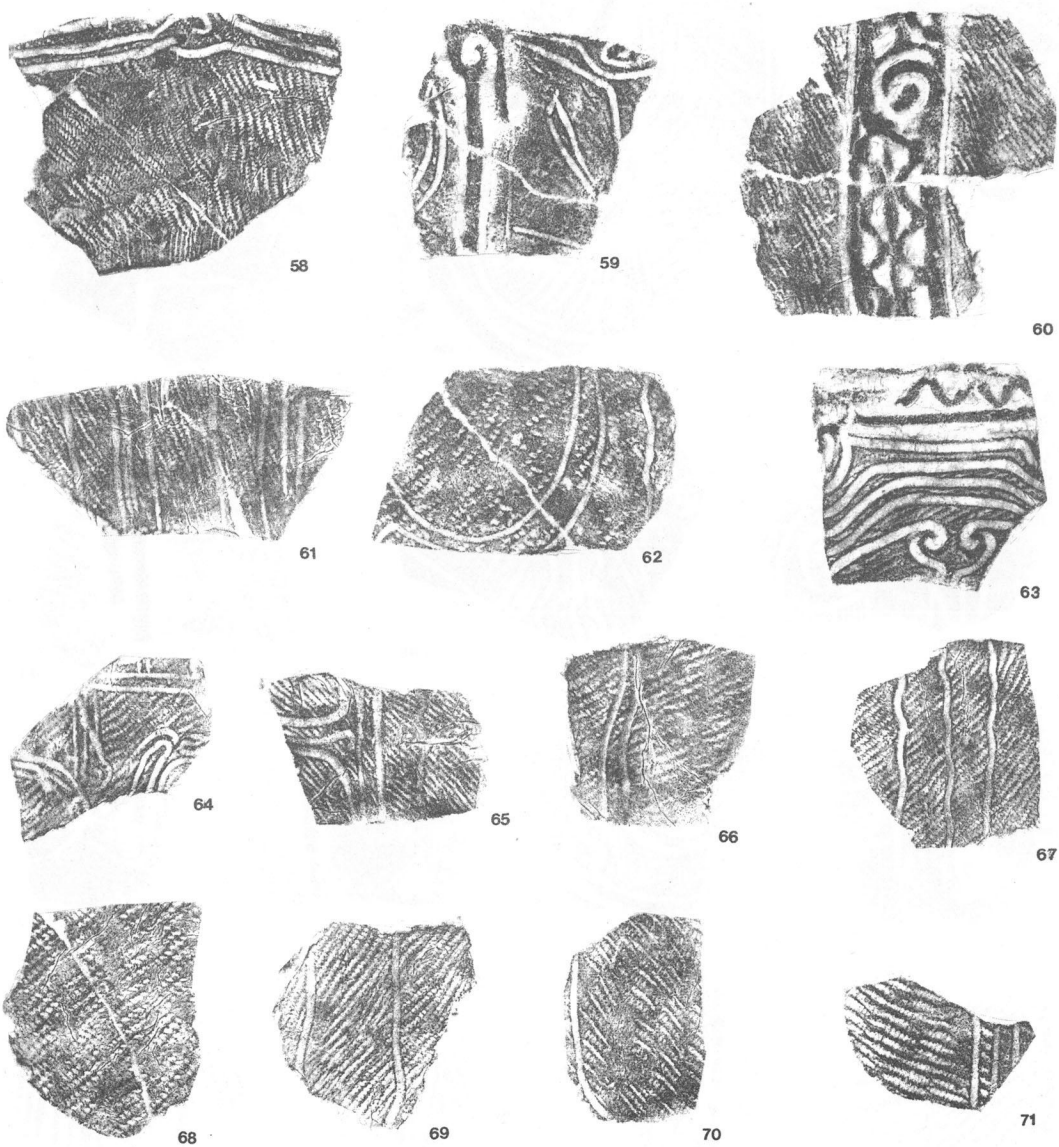
第68图 第25号住居址覆土出土土器 (1/6)



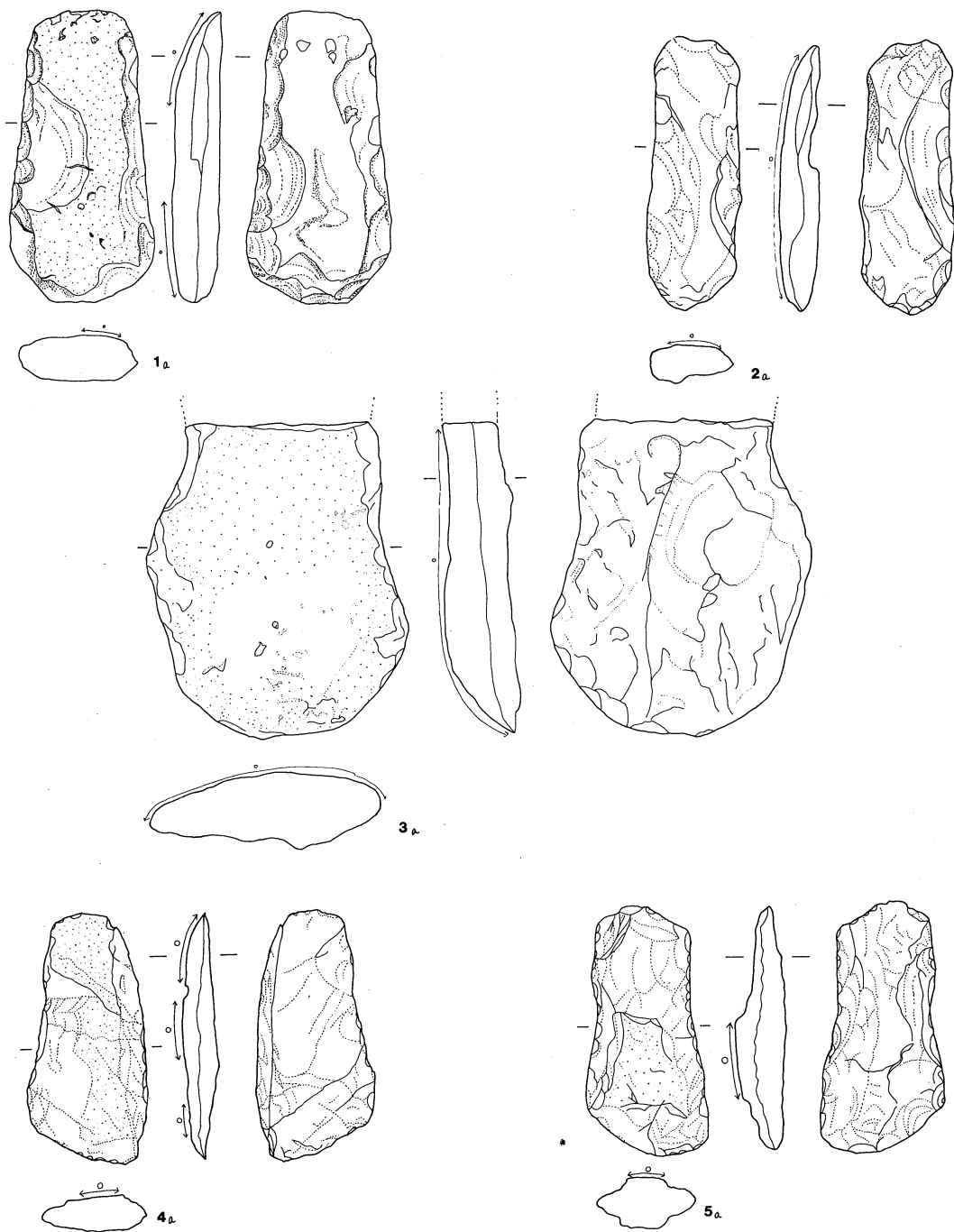
第69图 第25号住居址覆土出土土器 (1/8)



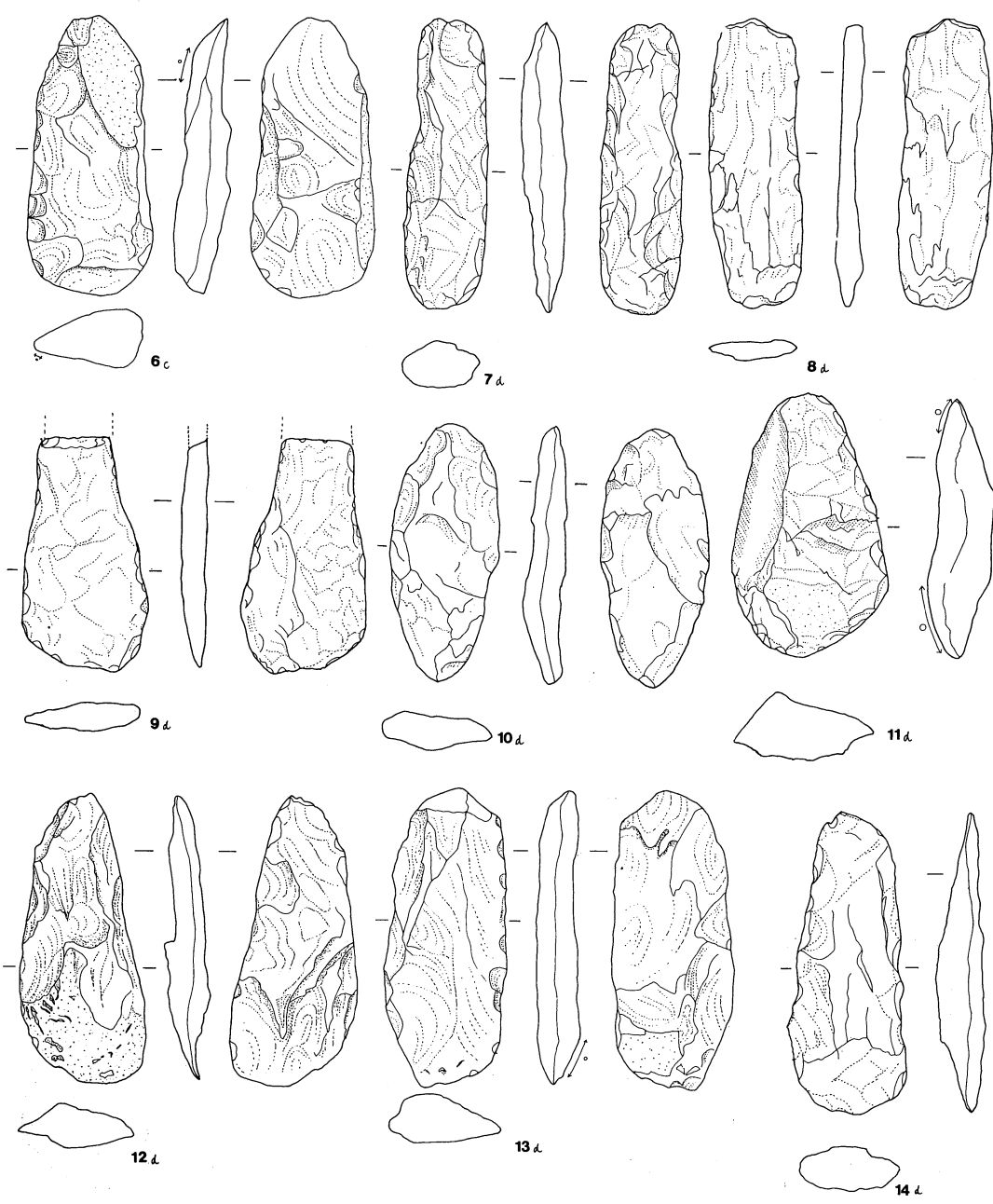
第70図 第25号住居址覆土出土土器 (1/3)



第71図 第25号住居址覆土出土土器 (1/3)

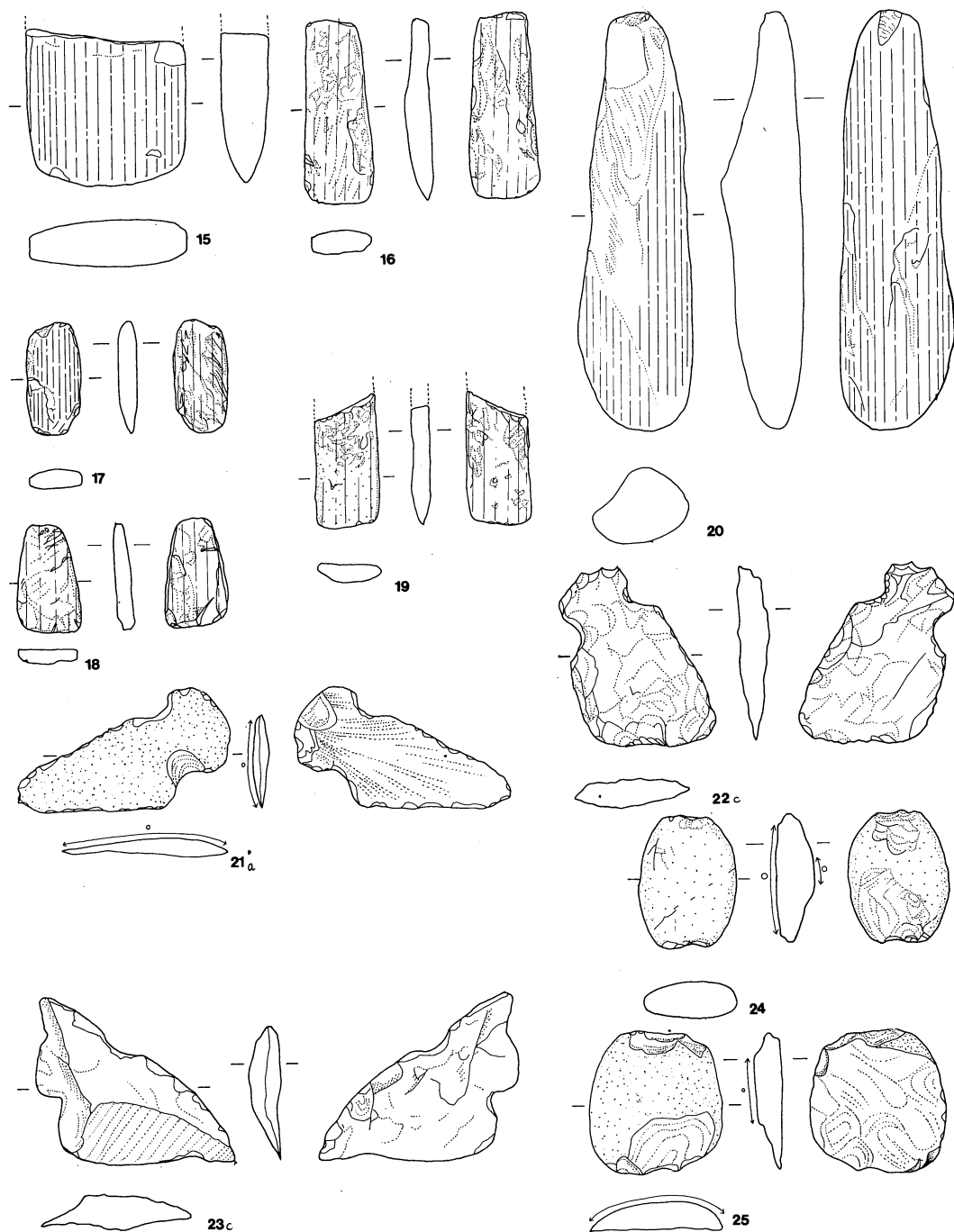


第72图 第25号住居址覆土出土石器 (1/3)

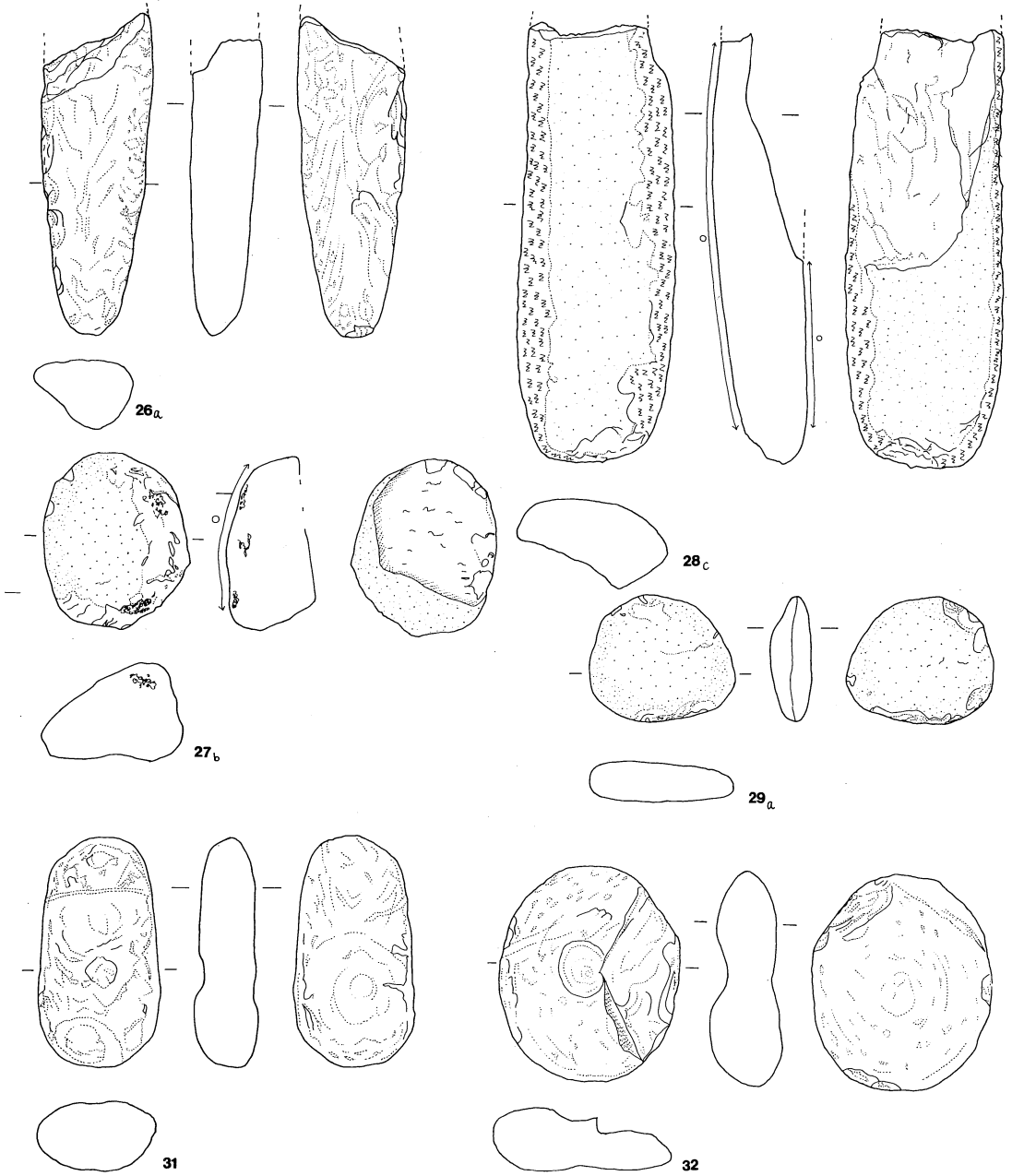


第73図 第25号住居址覆土出土石器 (1/3)

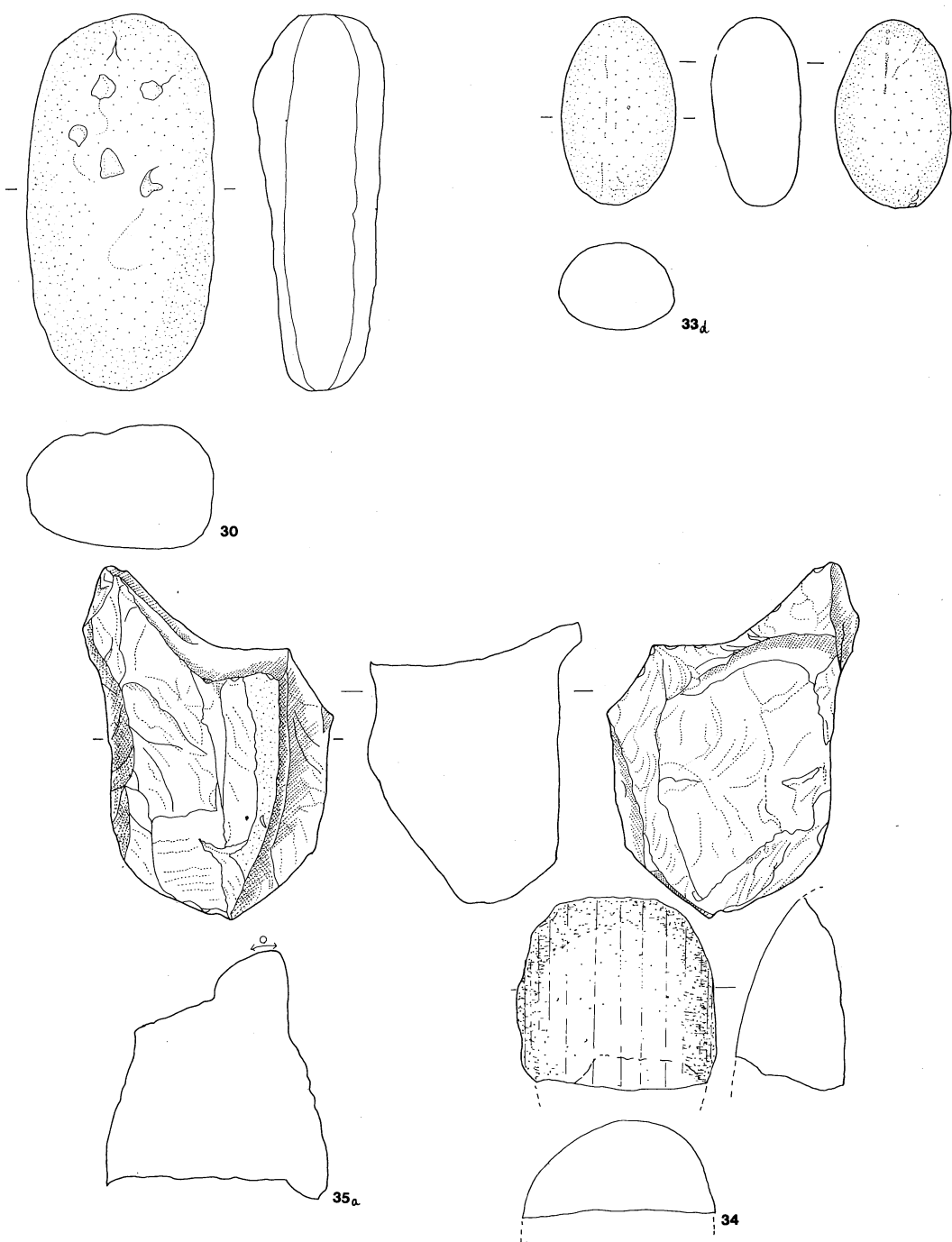




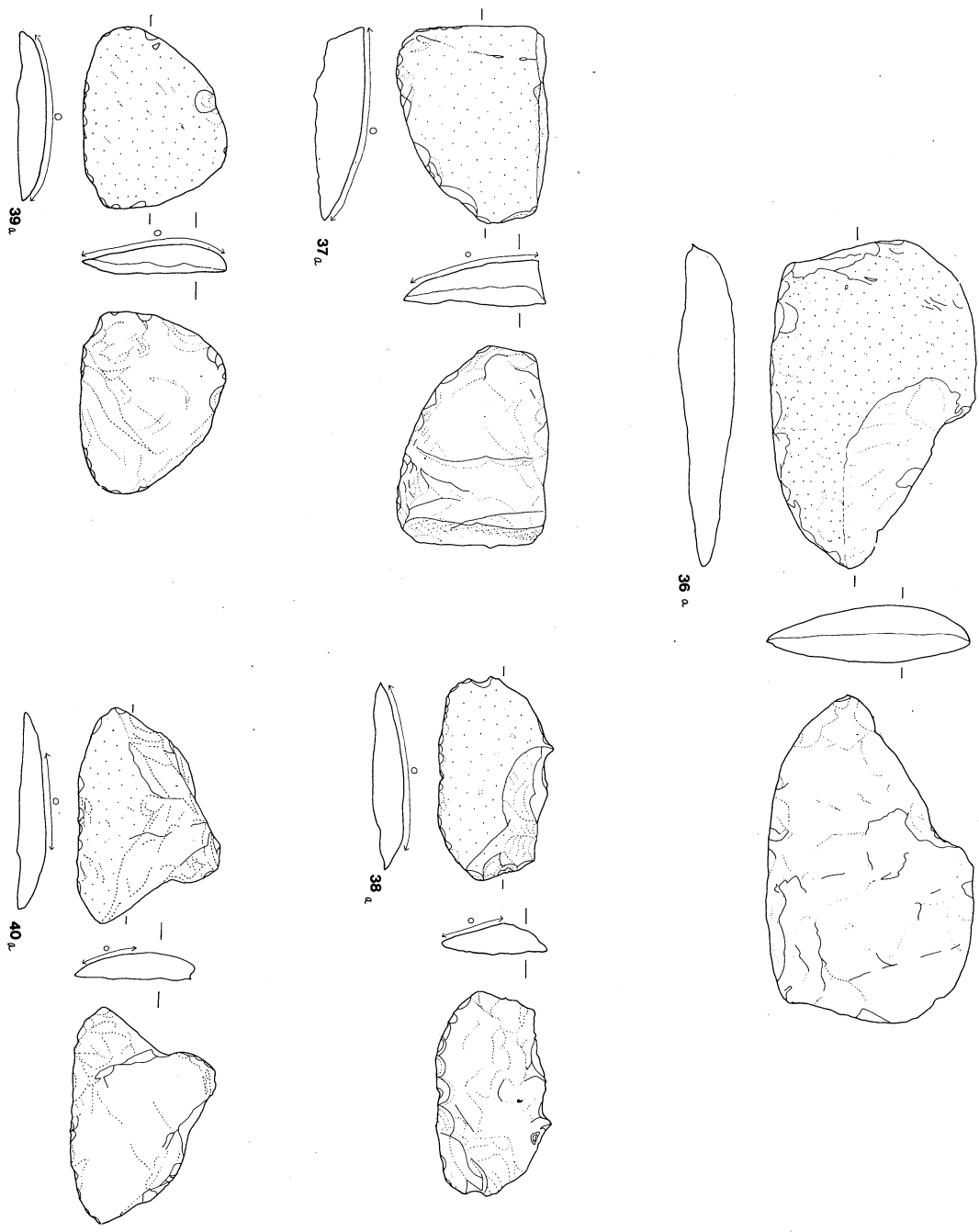
第74図 第25号住居址覆土出土石器 (1/3)



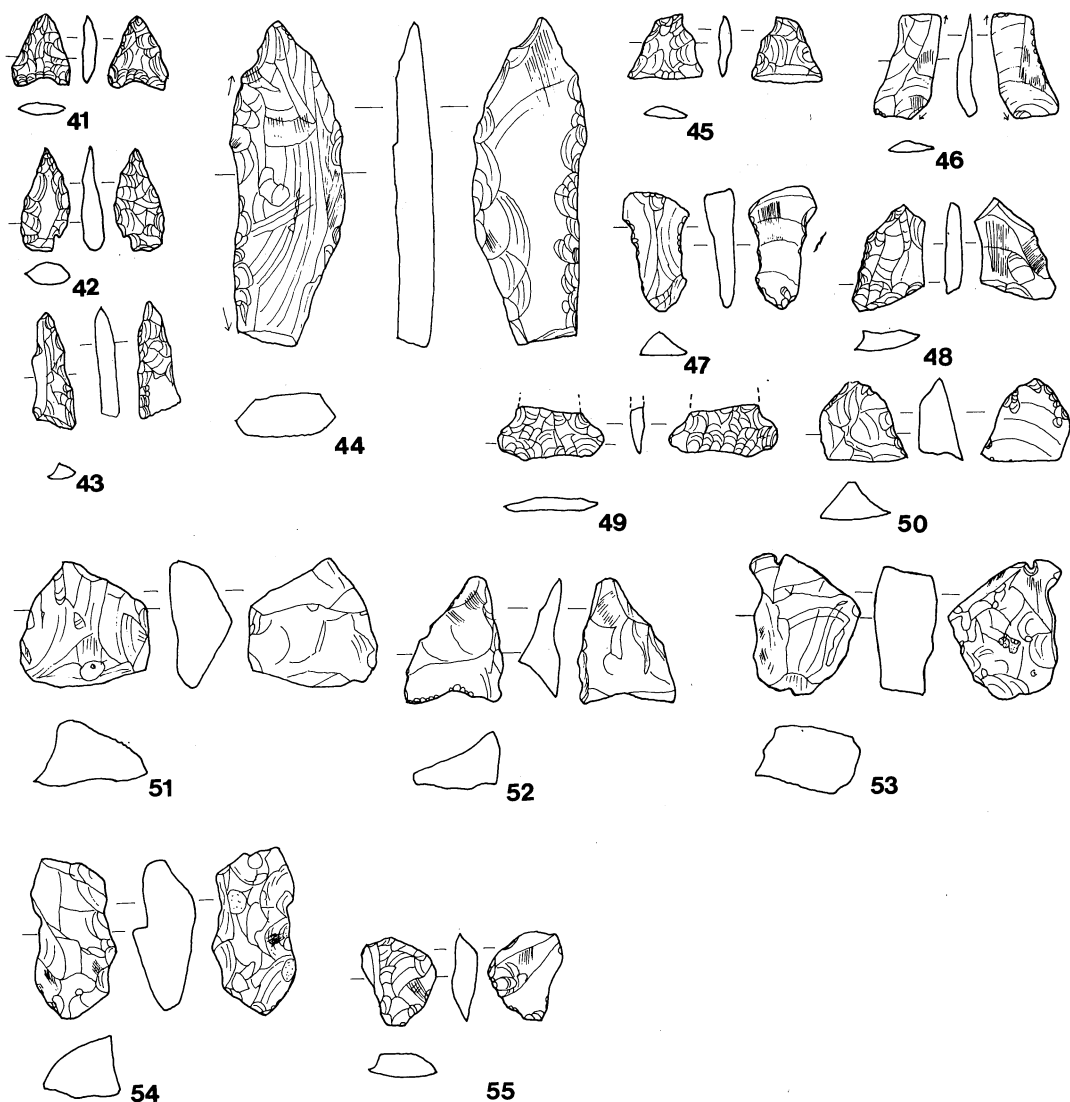
第75図 第25号住居址覆土出土石器 (1/3)



第76図 第25号住居址覆土出土石器 (1/3)



第77図 第25号住居址覆土出土石器 (1/3)



第78図 第25号住居址覆土出土石器 (1/2)

#### 4) 石器 (第72~78図)

石器はすべて覆土出土のものである。出土点数は比較的多く、73点を数えている。内訳は打製石斧30点、磨製石斧6点、大形粗製石匙3点、石錘3点、敲打器3点、特殊敲打器1点、磨石1点、凹石2点、磨き石1点、石棒1点、石核1点、横刃形石器5点、石鏃2点、搔器13点、打製石斧の卓越が知られる。

第72・73図は打製石斧で、3・9・11は欠損品である。他に16点の欠損品がある。3は分銅

形、10はは全体に丸味を持ったもので両端は尖っている。11・12は撓形他はすべて短冊形である。図示できなかった欠損品16点は短冊形と撓形で8点ずつである。石質は8・12の緑泥片岩製を除き他は硬砂岩製である。

第74図-15～20は磨製石斧である。15～19は定角形の20は乳棒状のものである。定角形のもの15を除きいずれも刃部の刃こぼれが目立つ。15は松脂岩製、他はすべて緑泥片岩製である。

第74図-21～23は大形の粗製石匙で、22は縦形他は横形で共に硬砂岩製である。

第74図-24・25は石錘で外に半折れのもの一点ある。共に礫石錘で硬砂岩製である。

第75図-26～28は敲打器で、26は従来敲石と呼ばれていた a 類、27は不定形の礫の一部あるいは何箇所に敲打痕を持ち石器加工具と思われる b 類、28は細長い自然礫の測面に敲打痕を残すもので c 類である。28は乳棒状磨製石斧の加工中とも考えられる。石質は26は凝灰岩、27・28は緑泥片岩である。

第75図-29は緑泥片岩製の特殊敲打器で a 類である。

第76図-30は花崗岩製の磨石で、形はしゃぼん状である。

第75図-31・32は花崗岩製の凹石で両面にともに凹みを持っている。

第76図-33は小さな花崗岩の全体を磨き上げたもので磨き石 d 類に属する。

第76図-34は石棒の残片で花崗岩製である。

第76図-35は大割剥片を作出した石核 a 類で硬砂岩である。

第77図は横刃形石器である。すべて片面に礫表皮を残す a 類で、石質は硬砂岩である。

第78図-41・42は黒耀石製の石鏃である。

第78図-43～55まで黒耀石製の搔器である。43・44と他のものとは若干異なるが一括してある。

### 13 第1・3号住居址（第79～91図）

#### 遺構（第79図）

本住居址の西側には第4号・第6号住居址が近接している。重複関係は定かでない。調査時に大きな落ち込みを確認し、重複住居址と考え南部分を第1号、北部分を第3号住居址として調査を進めたが、プランに若干変化は認められるも床面については、変化はみられず、住居址の重複等はまったく不明のため、調査時の住居址の住居址番号のまま報告することとする。なお後述するが、焼土は3箇所において確認されている。遺物についても南部分・北部分からと出土の区別の意味で、1・3号住居址別にしてあることを承知いただきたい。

1・3住居址の大きさは、南北8.3 m、東西6 mほどの楕円形を呈し、南部分は壁がさだかでない。

壁高は北側で高く30cm前後南へ行くほど低くなっている。壁の立ち上がりはゆるやかである。東側中央部にて若干外側に屈曲を示しており、住居址の重複に伴うものとも考えられる。

床面は全体にタタキが認められ固く良好である。全体に平坦であるが、S<sub>2</sub>付近にて若干凹ん



でいる。

柱穴は住居址の状態からして数多くみられる。 $P_1 \cdot P_7 \cdot P_{17} \cdot P_{18} \cdot P_{20} \cdot P_{24} \cdot P_{25} \cdot P_{28} \cdot P_{30} \cdot P_{16} \cdot P_{15} \cdot P_{12}$ などであろう。中央部に位置するものは住居址の重複を物語っている。

$P_1$ の東と $P_{12}$ の東さらに $P_{19}$ と $P_{31}$ の中間の3箇所に焼土の堆積がみられる。 $S_1 \cdot S_2$ はピット内より、 $S_3$ は床面上にあるものである。 $S_1$ は80×60cm、深さ15cmのピットに堆積するもので、炉石はみられず、また抜かれた形跡もない。

$S_2$ は、径90cm、深さ20cmのピットに充満している。焼土に小さな自然礫がみられる。

$S_3$ は、床面上に30cmほど円形に5cmほどの堆積をみせるもので、底は若干凹んでいる程度である。炉石等はみられず抜かれた形跡もない。すぐ東より石皿（第85図-27）が出土している。

焼土からすると3軒の住居址の存在が考えられるが、柱穴からすると2軒と考えるのが無理なものと思われる。

東壁南部分に周溝がみられる。幅はほぼ一定しているが、深さは一定していない。

$P_{19} \cdot P_{31}$ の南側に近接して1.75×1.65mのほぼ円形のピットがある。深さは74cmを測り、平底を呈している。内部より多量の炭化物が確認されている。住居址に伴うものとは考えにくいが土壌としての番号はつけてない。

#### 遺物（第80～91図）

先にも述べたとおり、遺物は一応調査時における住居址区分によって説明することとする。当然明確な区別ができたわけではない。

##### 1) 第1号住居址（第80～85図）

土器は覆土中・床面出土ともに多く出土しているが、復元できたものはない。両者間には時期差はない。

第80図-1～7は覆土出土のもので、すべて深鉢形土器である。1は口縁部破片、他は胴部破片である。

2は結節縄文を3～7は縄文を地文とするものである。

床面出土のものは、第80図8～14、第81図で、すべて深鉢形土器である。8～13は口縁部破片、20・25は底部に近いものである。床面出土土器も結節縄文を持つもの（16～18、25・26）がみられる。

時期は曽利Ⅱ式からⅢ式にかけてのものと考えられる。

石器も数多く出土している。

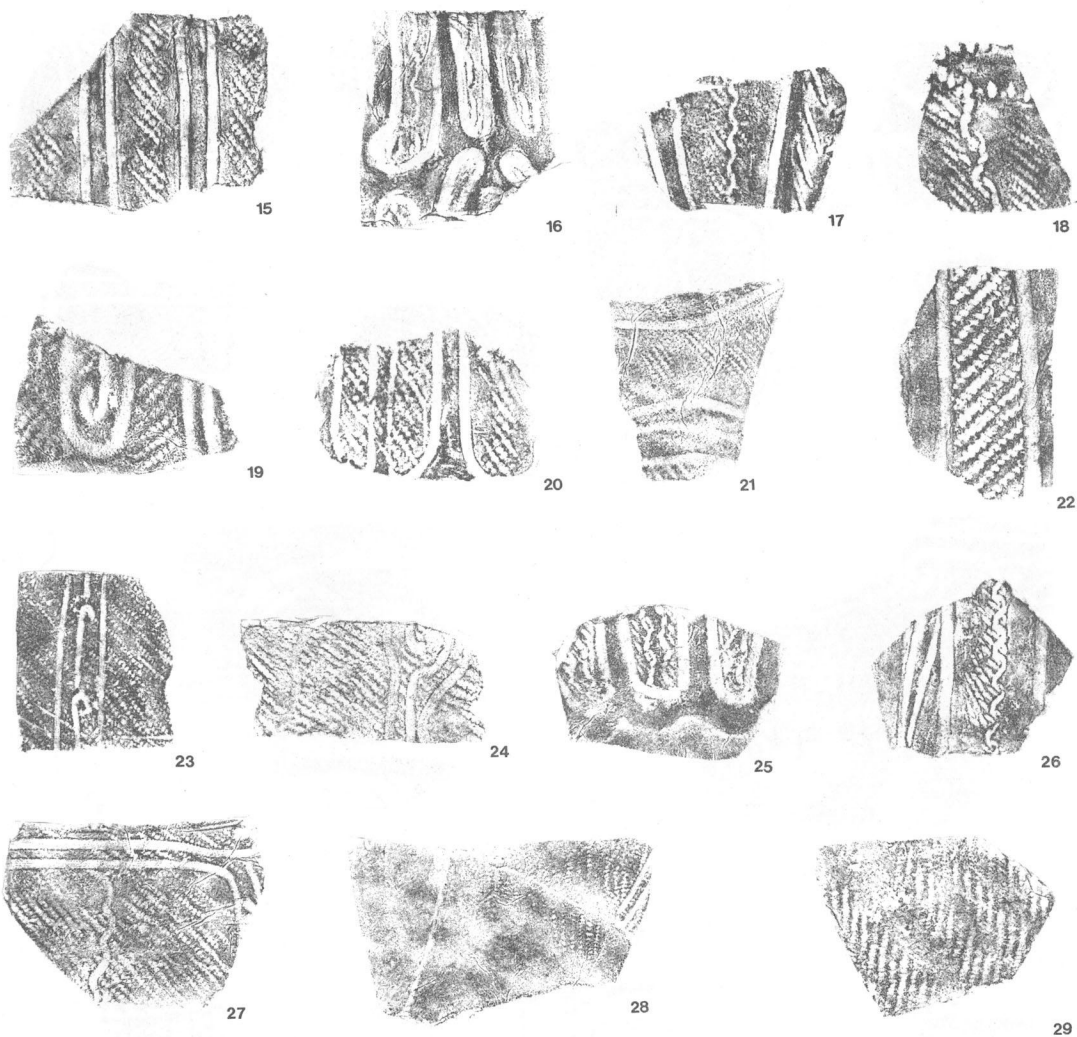
覆土より出土したものは全部で32点である。内訳は打製石斧が21点、磨製石斧3点、大形粗製石匙1点、石錘1点、敲打器2点、横刃形石器4点である。打製石斧のうち完形品は6点のみである。また短冊形が圧倒的に多く18点を占め、撓形が2点、卵形が1点である。他は図示してある。石器の外に剝片8点がある。

床面より出土した石器は、全部で15点で、覆土出土のものの半分以下である。内訳は打製石斧がやはり多く7点を数える。他には、磨製石斧・大形粗製石匙・敲打器・石棒・凹石・石皿が各1点ずつと横刃形石器が2点出土している。剝片は27片出土している。





第80図 第1号住居址出土土器 (1/3、1～7は覆土、8～14は床面出土)

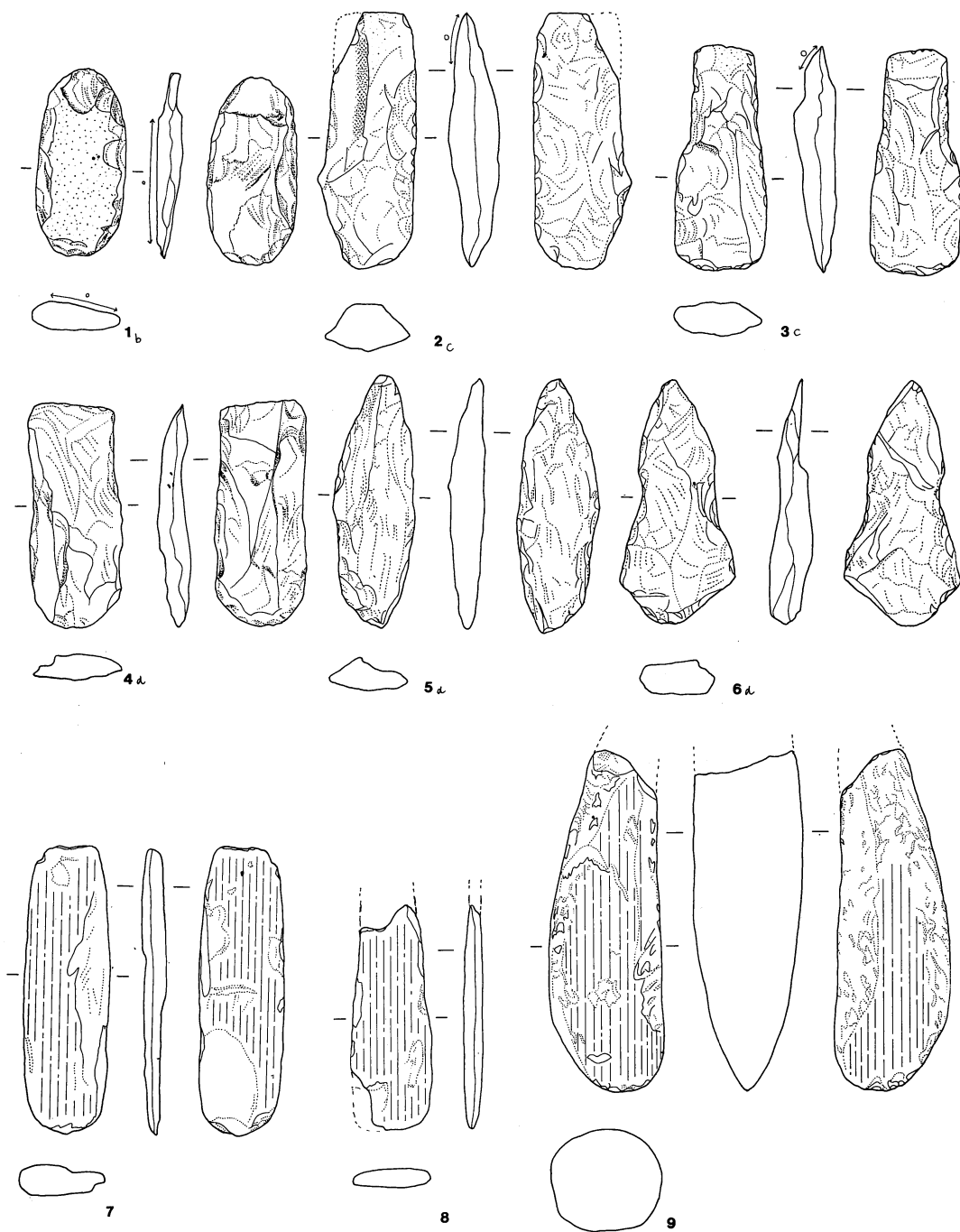


第81図 第1号住居址床面出土土器 (1/3)

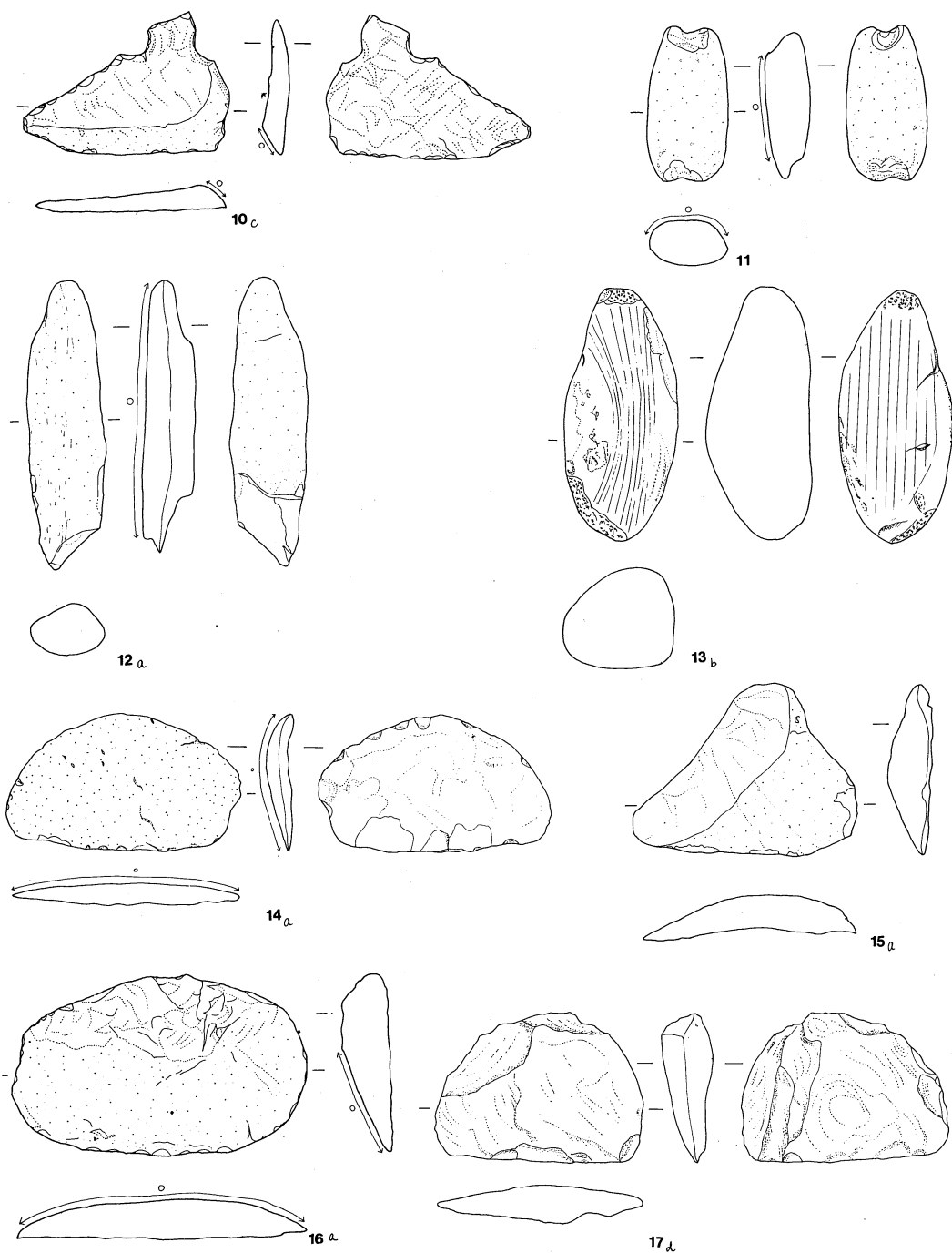
1～6、18・19は打製石斧である。5は両端が尖る卵形、6は撓形で他はすべて短冊形である。3は大形粗製石匙に似ているものである。18はa類、1はb類、2・3・19はc類、4～6はd類である。石質は1は凝灰岩、18は緑泥岩で他はすべて硬砂岩である。

磨製石斧は4点出土しており、7・8・20は定角形である。7は刃部の刃こぼれが著しい。8は頭部を欠損している。9は頭部を欠く乳棒状石斧で、一部に敲打痕を残している。刃部にはいくらか刃こぼれがみられる。石質はすべて緑泥岩である。

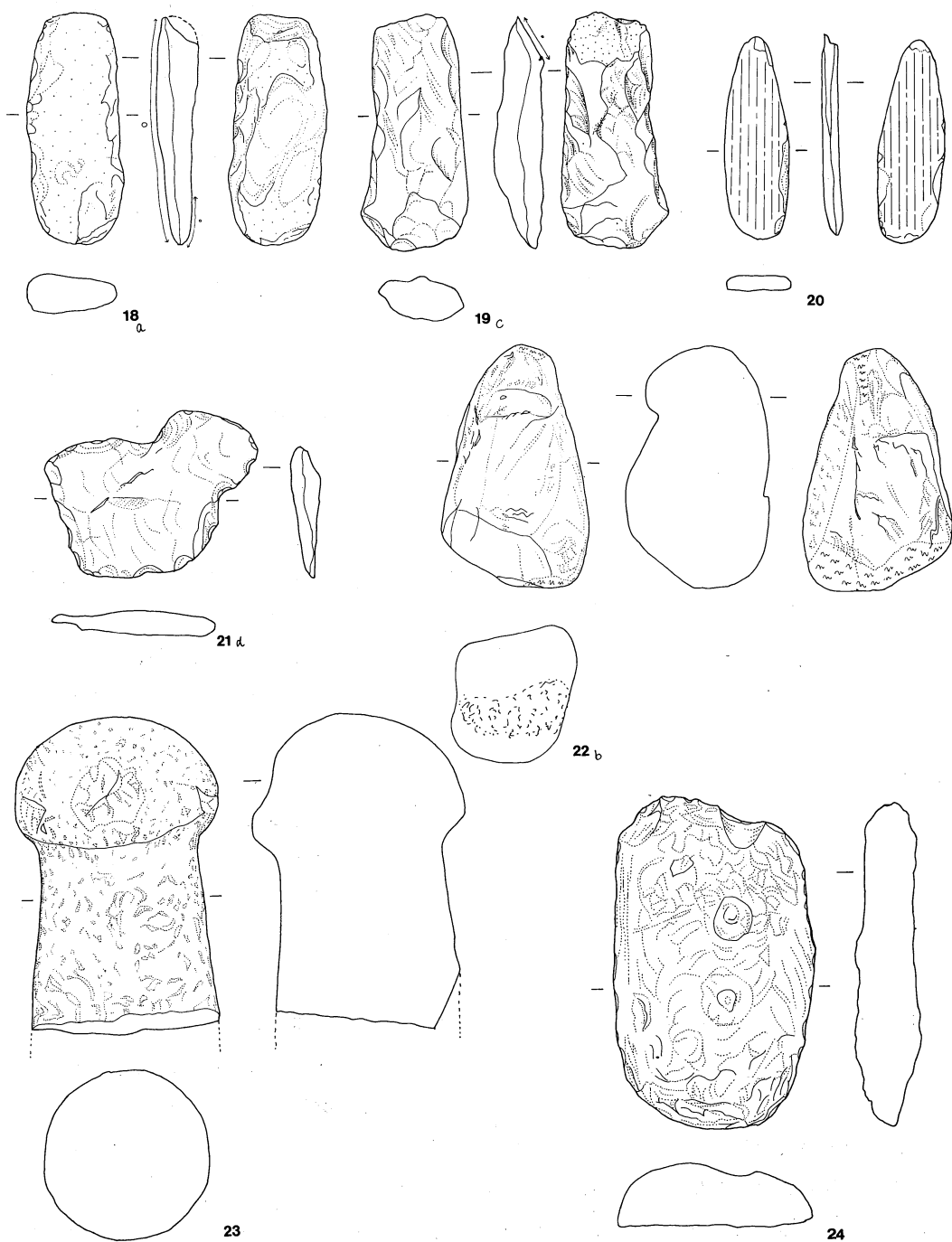
10・21はともに硬砂岩製の横形の大形粗製石匙である。10はc類、21はd類である。



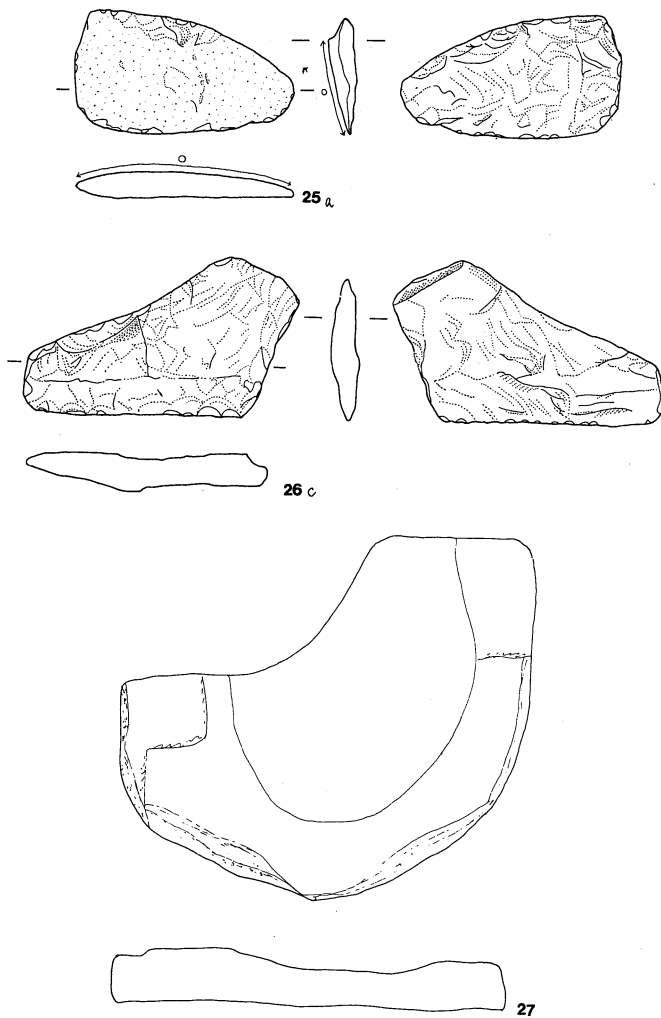
第82図 第1号住居址覆土出土石器 ( $\frac{1}{3}$ )



第83図 第1号住居址覆土出土石器 (1/3)



第84図 第1号住居址床面出土石器 (1/3)



第85図 第1号住居址床面出土石器 (27は $\frac{1}{6}$ 、他は $\frac{1}{3}$ )

石1点、横刃形石器2点である。打製石斧は11点のうち6点が完形品である。形態的には、短冊形9点、撓形2点である。剥片は硬砂岩を主として28片みられる。

床面出土の石器は21点である。内訳は打製石斧11点、磨製石斧1点、敲打器3点、石核3点、石鏃1点、搔器2点である。打製石斧がやはり多い。打製石斧のうち、完形品は3点のみである。形態的には、短冊形9点、撓形が2点である。硬砂岩を主とした剥片は12片出土している。

1～6・13～17は打製石斧である。撓形のもの、3・4・14・17である。他はすべて短冊形である。1～3・13～15はb類、4・5はc類、6・16・17はd類である。石質は15が緑泥岩、17が粘板岩で他は硬砂岩である。

11は硬砂岩製の礫石錘である。

12・13・22は敲打器でともに石質は緑泥岩である。12はa類、13・22はb類である。

24は花崗製の凹石で片面にのみ敲打がみられ2箇所に孔を持つ。

27は花崗岩製の石皿で半分ほどしかない。表面はぼろぼろしている。

23は花崗岩製の有頭の石棒で基部を欠いている。かなり大きなものである。

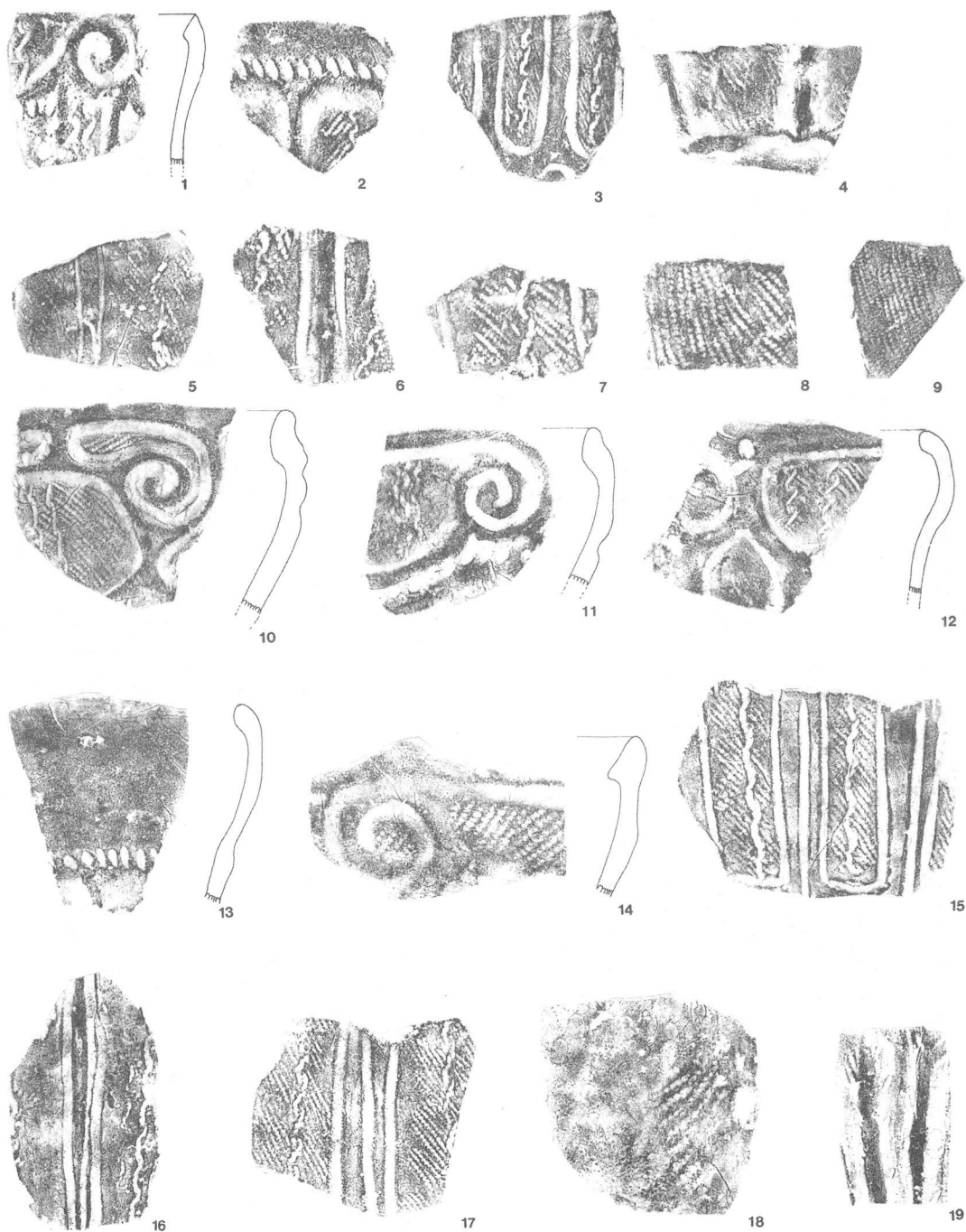
14～17・25・26はすべて硬砂岩製の横刃形石器である。26のc類を除きすべてa類である。

## 2) 第3号住居址(第86～91図)

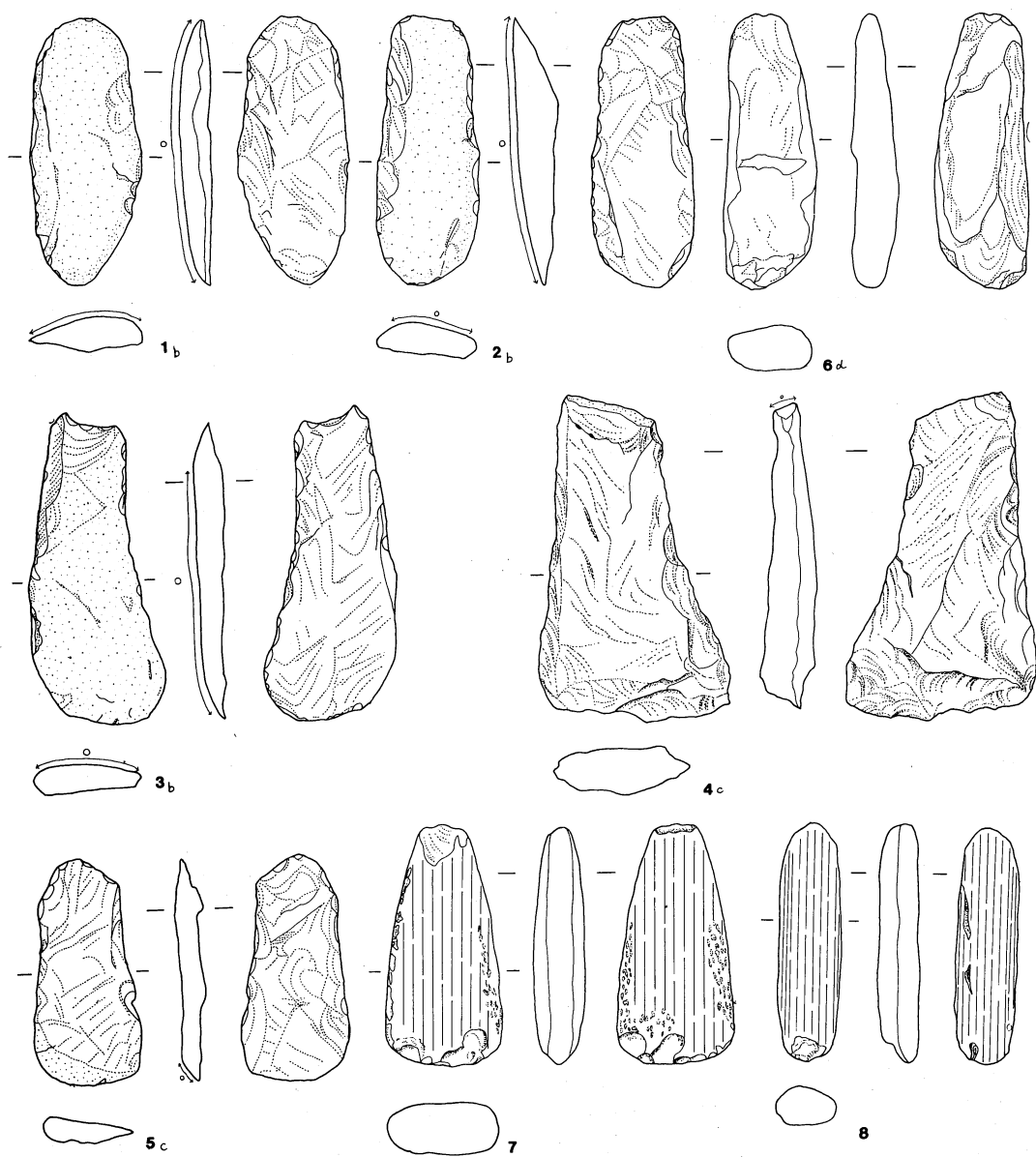
土器は第1号住居址同様多く出土している。復元されたものではなくすべて破片である。土器の文様は第1号住居址に類似するものが多いが結節縄文が卓越している。

石器は全部で38点出土している。

覆土よりは17点出土している内訳は打製石斧が11点と多く、磨製石斧2点、磨石1点、磨き

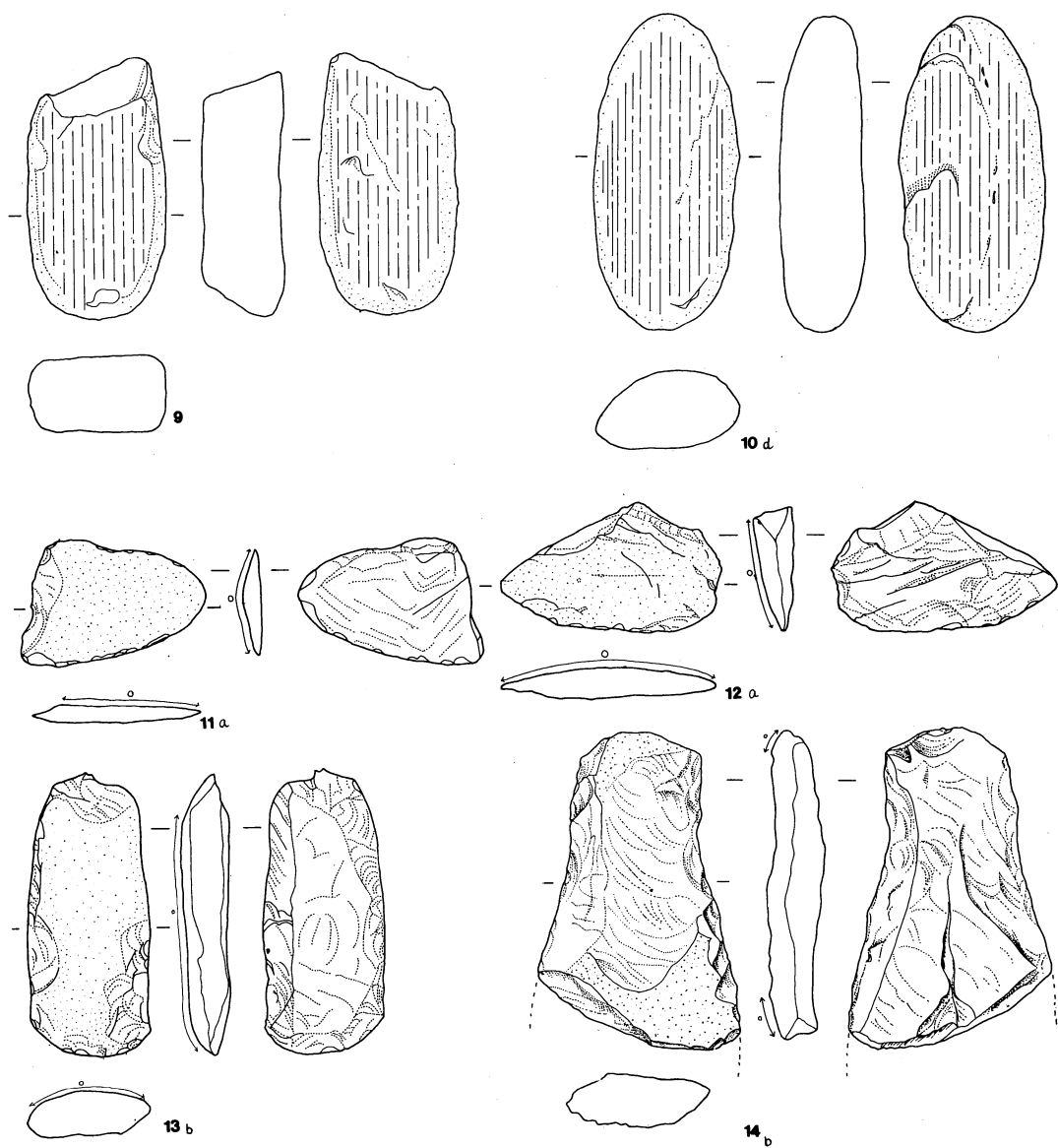


第86図 第3号住居址出土土器（ $\frac{1}{2}$ 、1～9は覆土、10～19は床面出土）

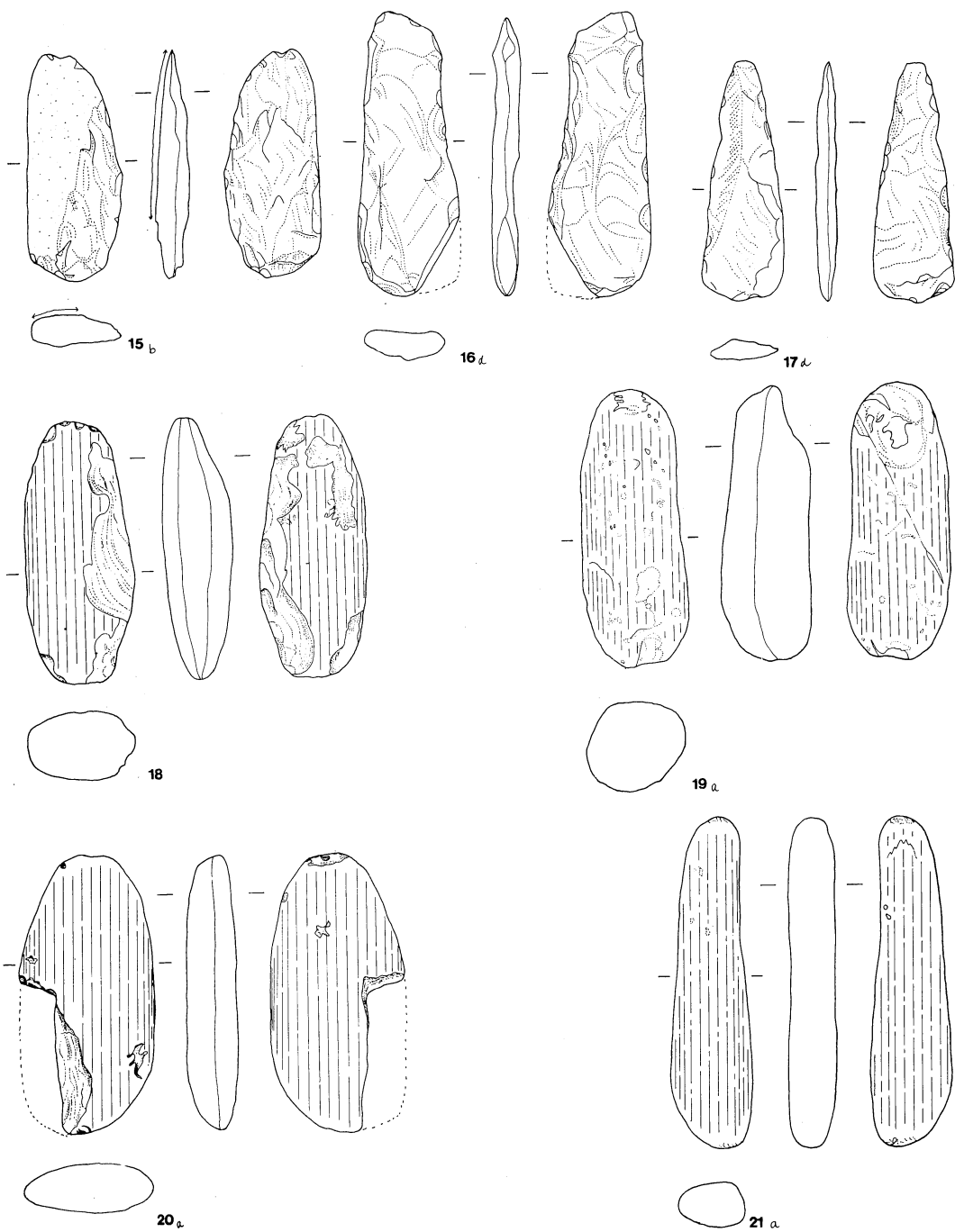


第87图 第3号住居址覆土出土石器 (1/3)

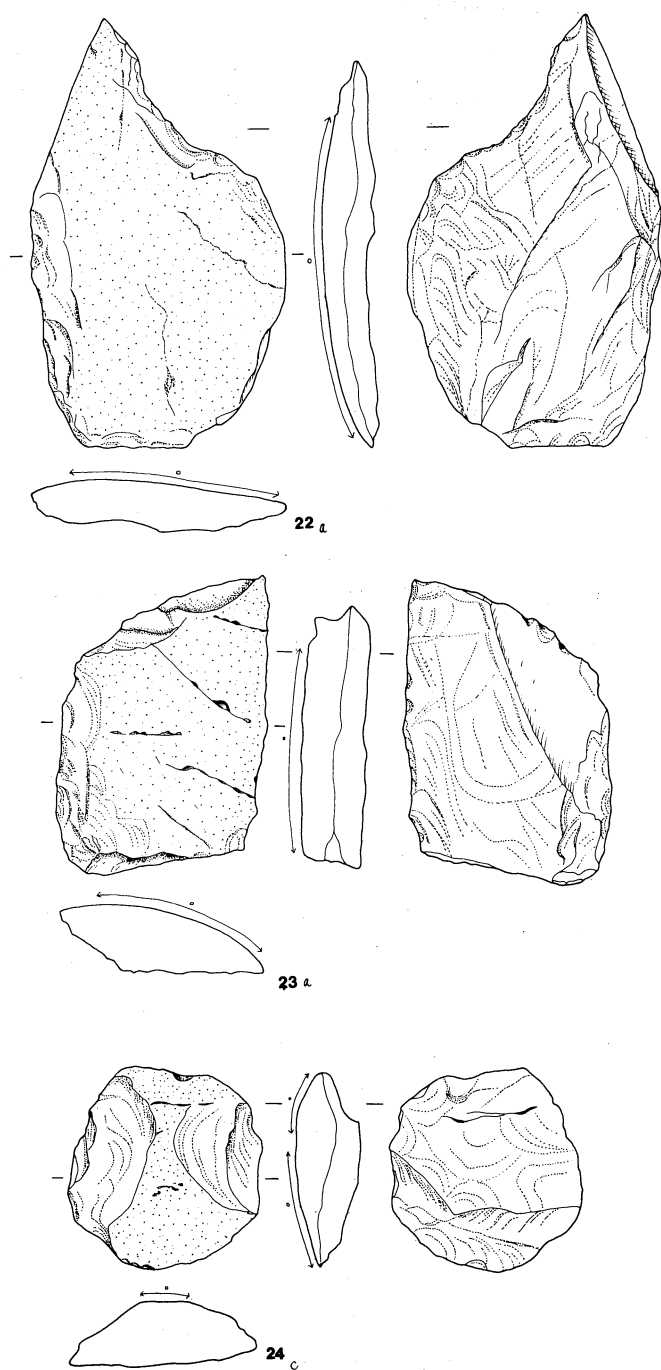




第88図 第3号住居址出土石器 (1/3、9~12は覆土、13・14は床面出土)



第89图 第3号住居址床面出土石器 (1/3)



第90図 第3号住居址床面出土石器 (1/3)

磨製石斧は7・8・18の3点である。7は定角形、8は乳棒状、18は蛤刃形石斧である。7・18ともに刃部に刃こぼれが目立つ、また頭部にも敲打痕がみられる。石質は7・18は緑泥岩、8は凝灰岩である。

19～21は敲打器である。ともにa類で、全体にわずかであるが磨きがみられる。石質は19・20は緑泥岩、21は蛇紋岩である。

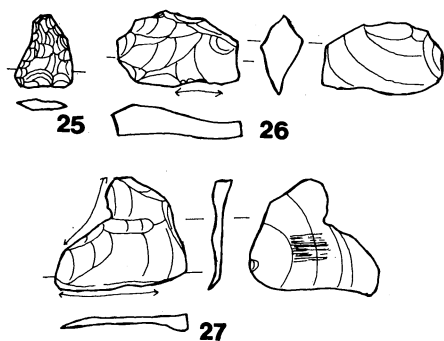
9は花崗岩製の磨石で3分の1ほど欠けている。

10は硬砂岩製の磨き石で、平坦面を磨いたものでd類である。

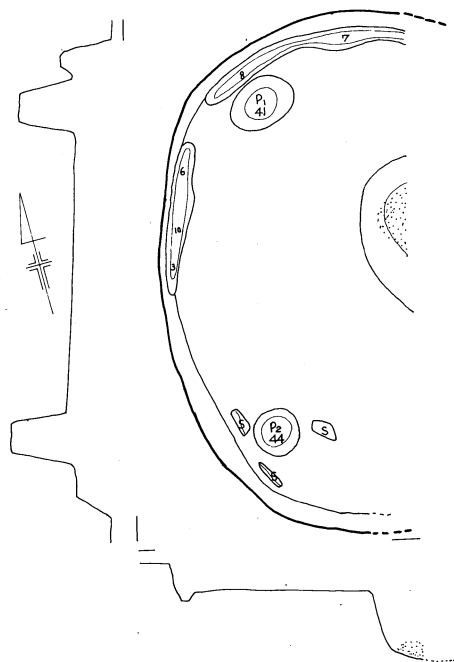
22～24は石核である。22・23は大割り用のa類、24は剥片に近いc類である。ともに硬砂岩である。

11・12は横刃形石器で、片面に大きく自然面を残すa類である。石質は硬砂岩である。

25は石鏃、26・27は搔器で、ともに黒耀石製である。



第91図 第3号住居址床面出土石器(1/2)



第92図 第2号住居址実測図(S = 1/60)

#### 14 第2号住居址 (第92～94図)

##### 遺構 (第92図)

本住居址は第1・3号住居址の東に位置し、北には第5号、南には第9号住居址があり、その両住居址のほぼ中間にあり、東側半分は調査区域外のため発掘できなかった。

プランは楕円形を呈すと思われ、大きさは、南北4.1m、東西は推定3.7mほどと考えられる。主軸はS-14°-Wである。

壁はややゆるやかな立ち上がりを見せ、壁高は30cm前後である。床面は平坦でロームのタタキで良好である。

P1・P2は支柱穴で多分4本であろう。

炉は石組み炉で右は抜かれている。東側部分も同様と思われる。深さは50cmと深く、焼土は底にわずかにみられたのみである。

北壁下と西壁下に周溝がある。北壁下のものは東側未発掘部分まで通じていると思われる。幅は15cm前後で一定している。

##### 遺物 (第93・94図)

土器は半分の未発掘部分がある割には多くみられる。

土器はすべて破片で復元でき得たものはない。深鉢形土器のみである。床面出土のものである。

1・2・4は口縁部破片、3・5はそれに近いものである。

時期は曾利Ⅱ式に比定される。

石器は全部で9点出土している。未発掘部分があるにせよ少ない気がする。

覆土よりの出土は4点で、内訳は打製石釜2点、磨き石1点、横刃形石器1点である。打製石斧は硬砂岩製の短冊形のもので、ともに刃部を欠損している。

床面より出土した石器は5点で、内訳は打製石斧3点、敲打器・磨製石斧各1点となっている。打製石斧は3が完形品で他は欠損品である。他は硬砂岩を主体とした剥片が11片出土している。

3・4は打製石斧で、ともに硬砂岩製の短冊形である。3はa類、4はc類である。



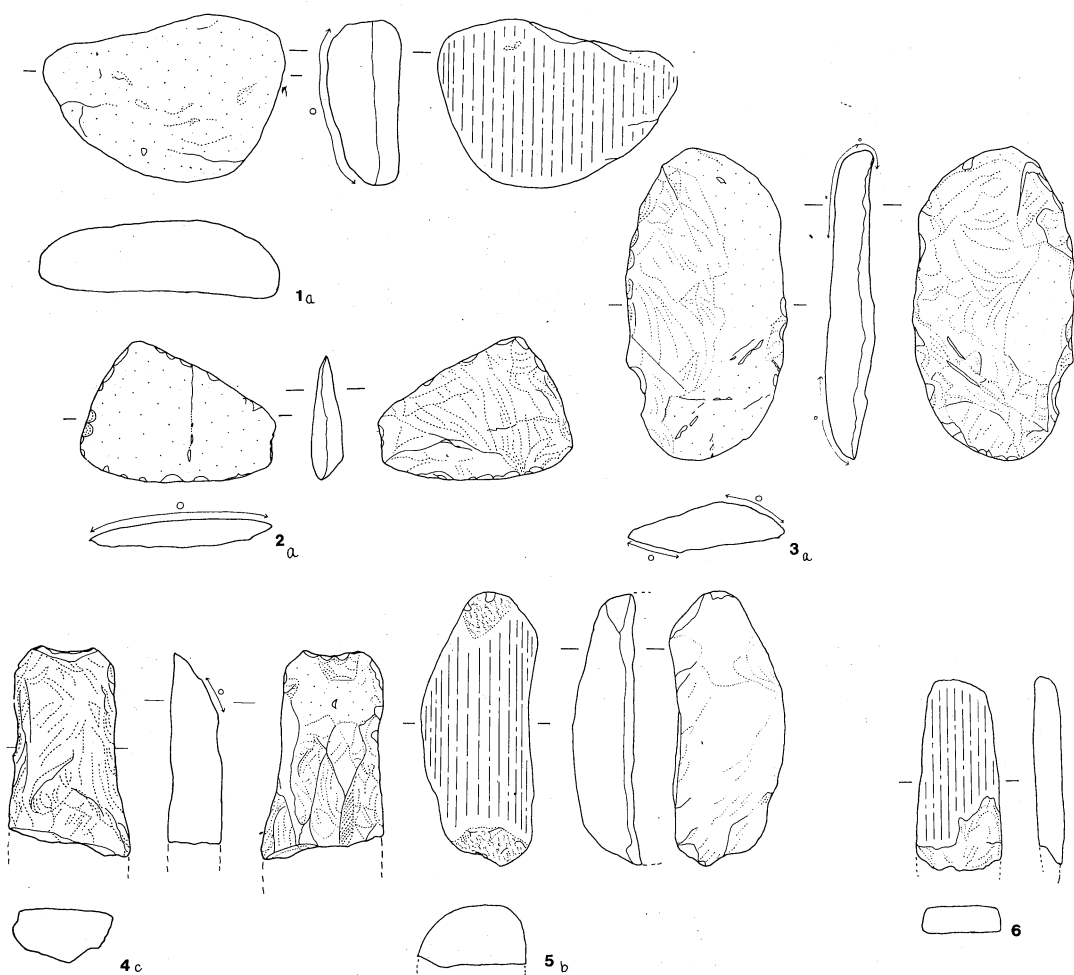
第93図 第2号住居址床面出土土器（ $\frac{1}{3}$ ）

6は定角形の磨製石斧で刃部が欠損している。石質は緑泥岩である。

5は緑泥岩製の敲打器でb類に属する。片面は割れている。表面はわずかであるが磨きが見られる。

1は花崗岩製の磨き石で、平坦面に磨きが見られるa類である。

2は硬砂岩製の横刃形石器でa類である。



第94図 第2号住居址出土石器（ $\frac{1}{3}$ 、1・2は覆土、3～6は床面出土）

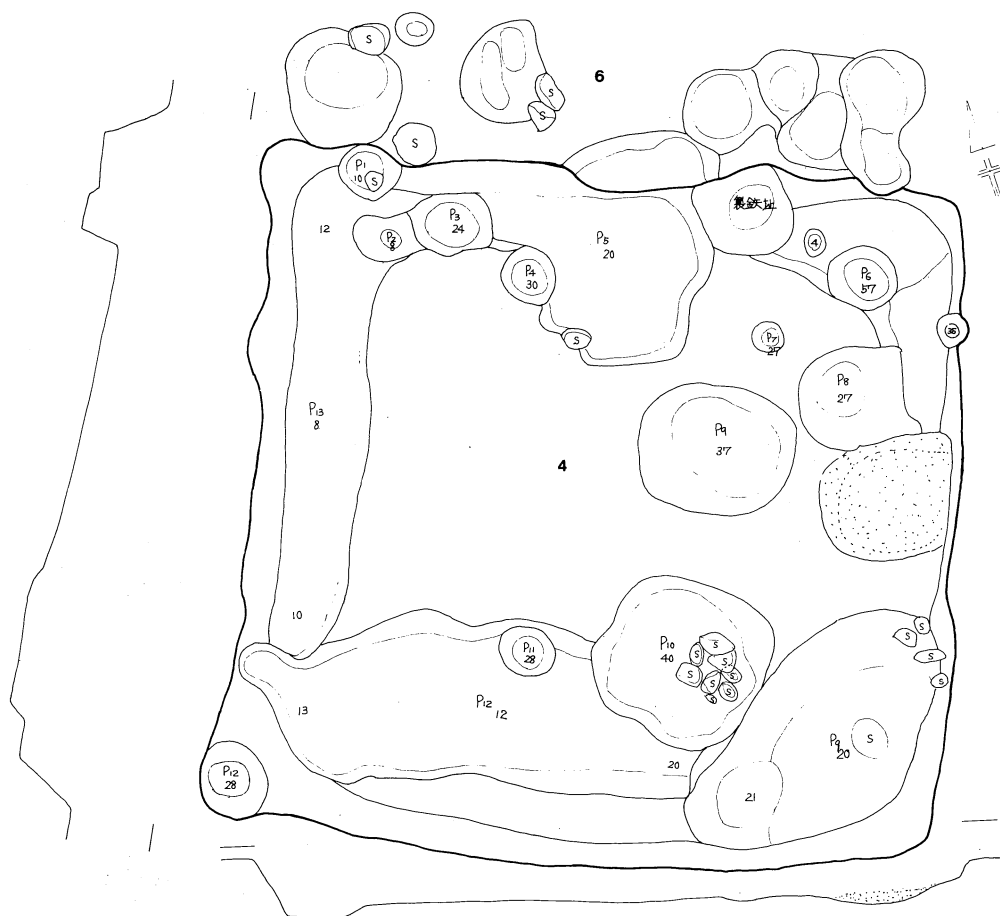
## 15 第4号住居址（第95～100図）

### 遺構（第95図）

本住居址は第1号住居址の西に近接するもので、北側では第6号住居址をわずかに切っている。

プランはほぼ方形に近く 5.6m 前後を測る。東壁と南壁はややふくらみ、西壁は内側にそっている。住居址の主軸方向は、S-111°-Wである。

壁は全体にゆるやかな立ち上がりを見せている。壁高は一定しておらず、南で45cm、西で35



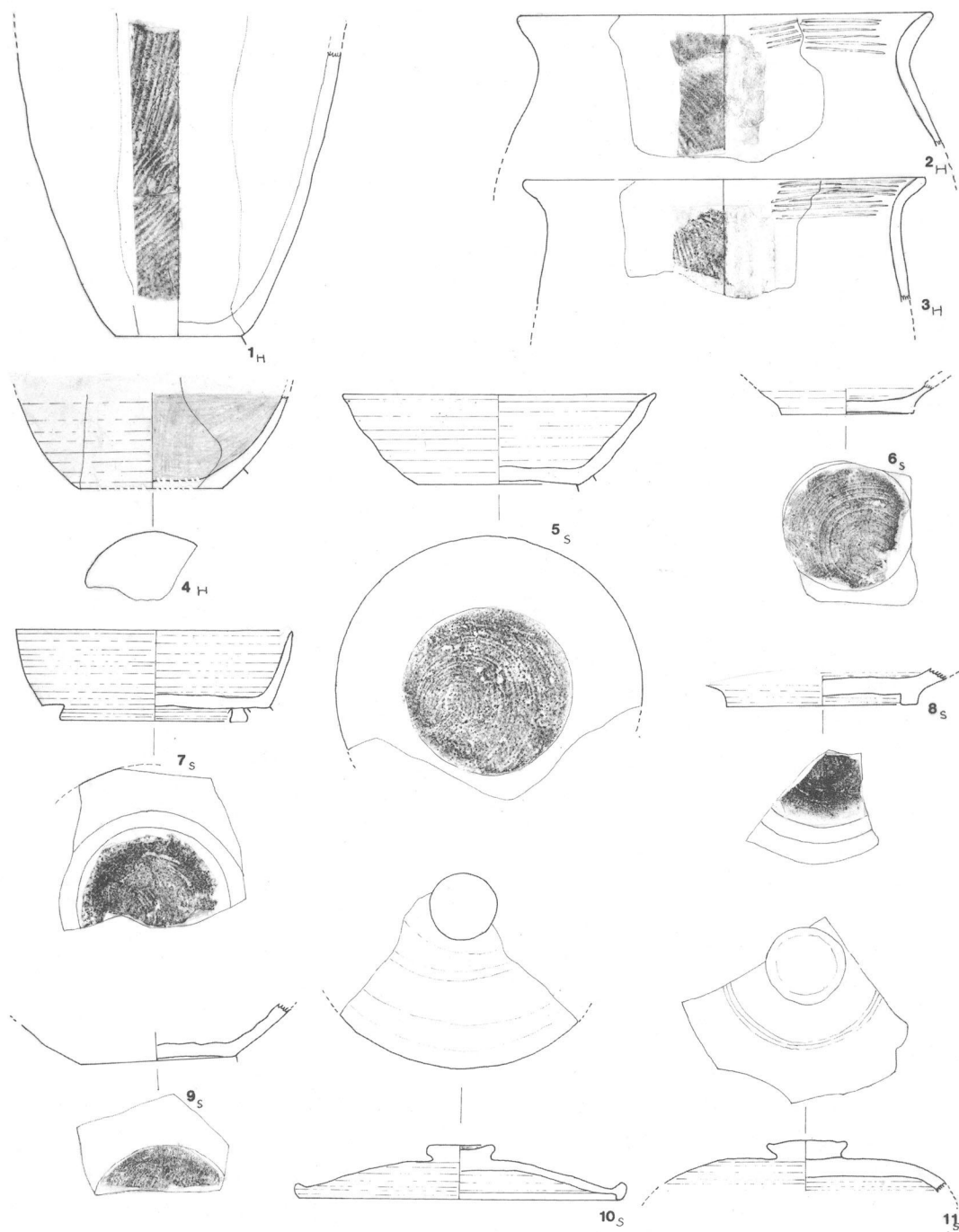
第95図 第4号住居址実測図 ( $S = \frac{1}{60}$ )

cm、北では27cmで第6号住居址との床面差となっている。東側は最も低く15cmである。東に近接する第1号住居址とは、重複関係はないと思われる。

床面はハードロームまでは達していない。住居址中央部は非常に良好なタタキがみられるが壁に近い部分は後からの掘り返しで床面がなくなっている。P<sub>6</sub>を除き他はすべて住居址に伴うものとは考えられない。それらは焼土と灰・ロームブロックの混合土で上面には貼り床はまったくみられなかった。昭和50年に発掘調査を行った御射山遺跡の第3号住居址においても同様なことが確認されている。竈からの焼土・灰などの捨て場と考えているがどうであろうか。

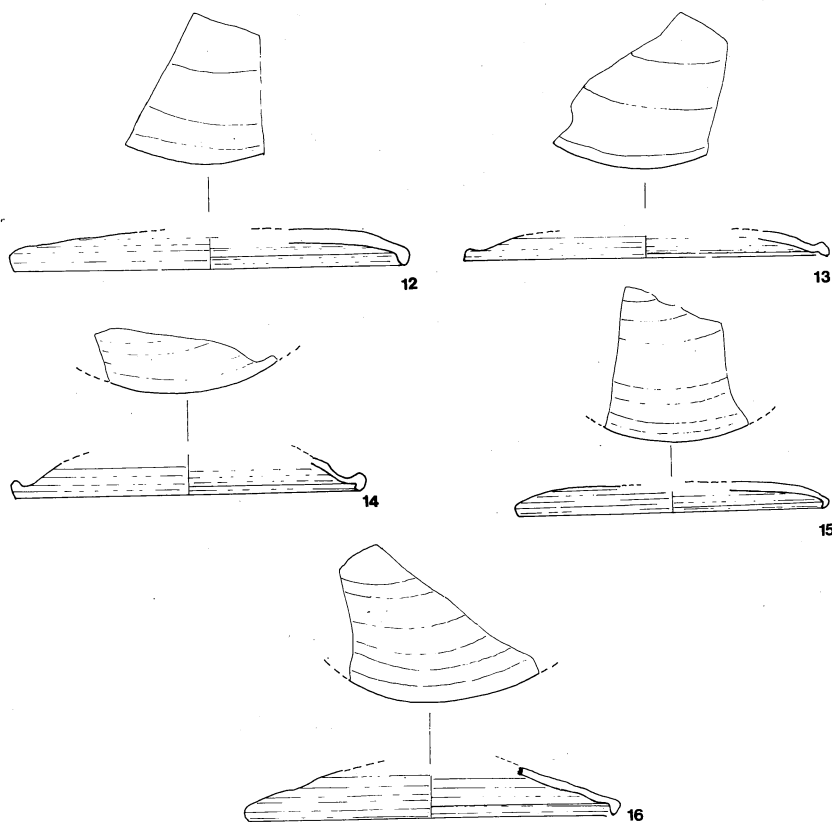
P<sub>6</sub> 以外は柱穴は壊され残っていない。多分4本と思われる。

竈は東壁がやや北寄りに位置しており、焼土のみ残っているだけで構造等はまったく不明である。後世の破壊と思われるが定かではない。焼燃部は100×90cmの楕円形を呈し、底は丸底で



第96図 第4号住居址出土土器 (1/3)





第97図 第4号住居址出土土器（ $\frac{1}{3}$ ）

#### 遺物（第96～99図）

土器数量表にみるとおり出土土器は多い。土師器は甕形土器がほとんどで、他に坏形土器が1点あるのみである。須恵器は坏形土器、高台付坏形土器、甕形土器、坏蓋、壺形土器があり坏蓋が多く、ついで坏形土器である。二片自然釉のかかったものがあるが、灰釉陶器は共伴していない。すべて床面出土のものである。

1は土師器の甕形土器で、体部はわずかしかない。紐積手法によるもので、外面は粗いハケ目が施される。上部から胴中部にかけては右上から左下にかけて、底部付近では横走に近くなってくる。底部は手持ちのヘラ削りである。

2・3はともに甕形土器の口縁部で土師器である。ともに胎土には砂粒を含み、2は黄褐色に、3は赤褐色に焼かれている。外面にはともにあまり粗くないハケ目が施され、口縁内面には、粗い横方向のハケ目が施される。

4は土師器の坏で内面は黒色研磨されている。口縁を欠く。胎土はやや粗く褐色を呈す。左回転のロクロを用い、切り離し後底部は回転ヘラ磨きを行っている。切り離し技法は不明である。

床面を10cmほど掘りくぼめている。

壁への掘り込みはみとめられない。

焼土中には若干ローム粒が混じり10cmほどの堆積である。

P<sub>5</sub>とP<sub>6</sub>のほぼ中間、北壁を若干快るようにピットがあり、内部より焼土や鉄屑が出土している。簡単な製鉄作業が行われたものと考えられる。後述する。

器形	部分	土師	須恵	小計
坏	実測	1	3	6
	口縁		16	16
	底部		2	3
高台	実測		2	2
付坏	底部		2	2
甕	実測	3		3
	口縁	8		8
	体部	92	20	112
	底部	3		3
坏蓋	実測		7	7
	口縁		20	20
	天井部		5	5
壺	口縁		1	1
		107	79	186

5は須恵器の坏形土器で口唇部はやや反りぎみとなる。左回転のロクロを利用して。胎土には砂粒を多く含む。底部は回転糸切りによって切り離され、中央部が凹んでいる。切り離した後回転ヘラ削りが行われるが、中央が凹むため周辺部のみにみられる。ヘラ磨きは体部下部にも行われている。全体に幅広な指頭痕を残す。色調は灰白色である。

6は須恵器の坏形土器の底部である。砂粒を含み灰白色を呈している。右回転のロクロを用い、回転糸切りによって切り離される。底部中央部は若干凹んでいる。

7・8は高台付坏である。7の体部は直に近い立ち上がりをもせている。8はゆるやかな立ち上がりで浅いものと思われる。

7は暗青色を呈し、胎土には砂粒を含む。左回転のロクロを利用し、回転ヘラ切りによる切り離し後、回転ヘラ削りを行い、高台を付けた後ロクロ利用による横なでを行っている。横ナデは一部わきにまで及んでいる。法量は口径12.1cm、底径10.0cm、器高4.2cm、器台幅0.8cmである。

8はやや暗青色を呈し、胎土はち密である。ロクロの回転方向は不明である。回転ヘラ切りによる切り離し後、回転ヘラ削りを行い、高台をつけ、ロクロ利用の横ナデを行っている。

9は須恵器の坏形土器で灰白色を呈す。左回転のロクロを用いている。回転糸切りによって底部は中央部に向かって凹んでいる。胎土にはわずかに砂粒を含む。

10～16は須恵器の坏蓋である。12～16の鈕形態は破片のため不明である。

10は砂粒を多く含み暗青色を呈している。ロクロは左回転である。鈕中央部は凹んでいる。口縁部は一担くの字に立ち上がってから折れている。同様な口縁部をもつものは13・14である。

11は黒灰色を呈し、胎土は砂粒を含み粗い。鈕は縁辺で一担凹むが、中央部はやや丸く盛りがっている。右回転のロクロを利用している。

12は暗青色を呈し、胎土には砂粒を含む。ロクロの回転方向は左である。口縁部の折り返しはあまりはっきりしない。15・16も同様に、器高も10・14に比べて低くなっている。

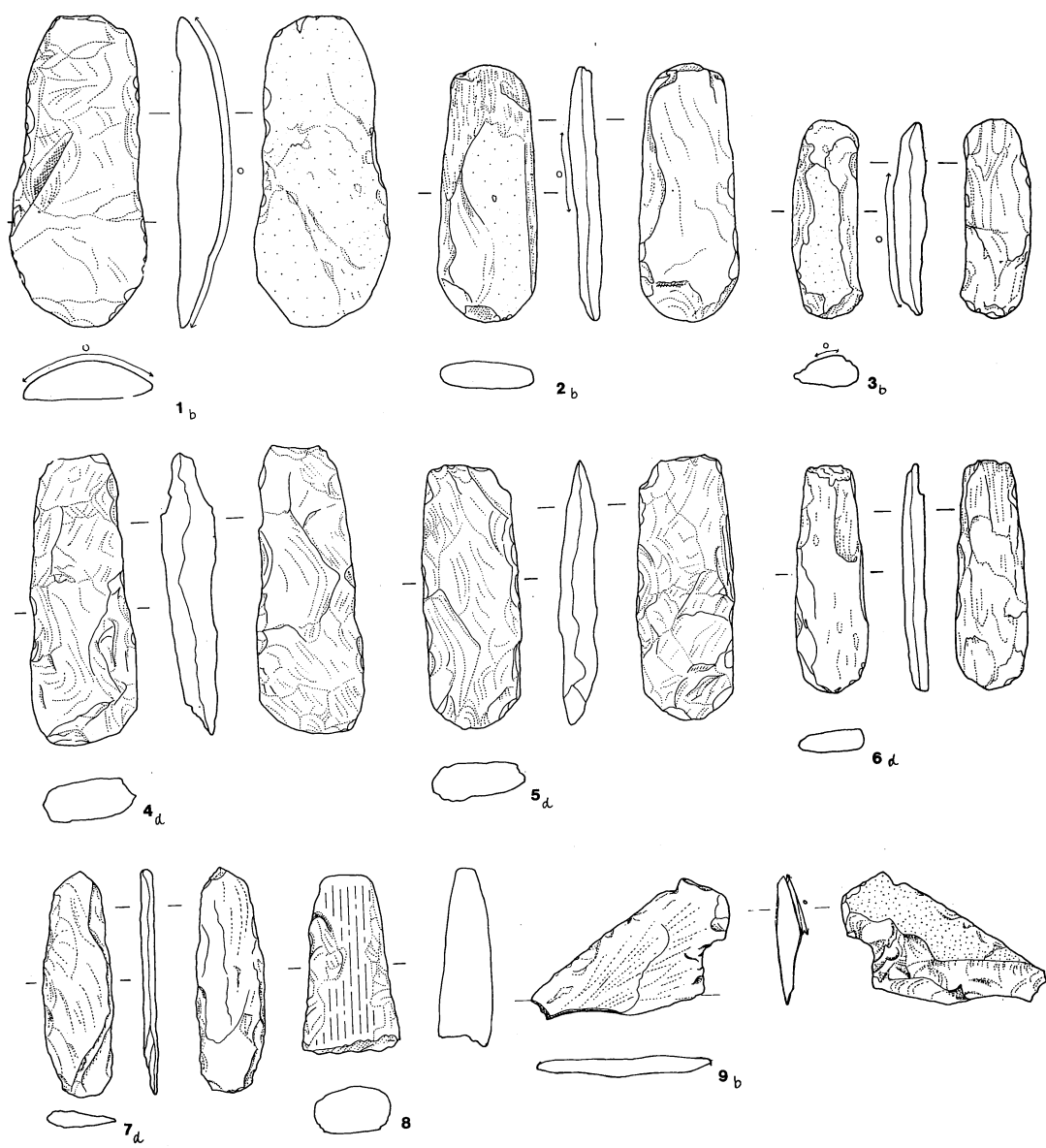
13は右回転のロクロを用い、青灰色を呈している。胎土には砂粒を含む。14は暗青色で胎し胎土はち密である。ロクロの回転方向は不明である。15は暗青色で胎土には砂粒を含む。左回転のロクロを利用している。時期は奈良時代末—平安初頭と思われる。

16は暗青色で胎土はち密である。ロクロの回転方向は不明である。

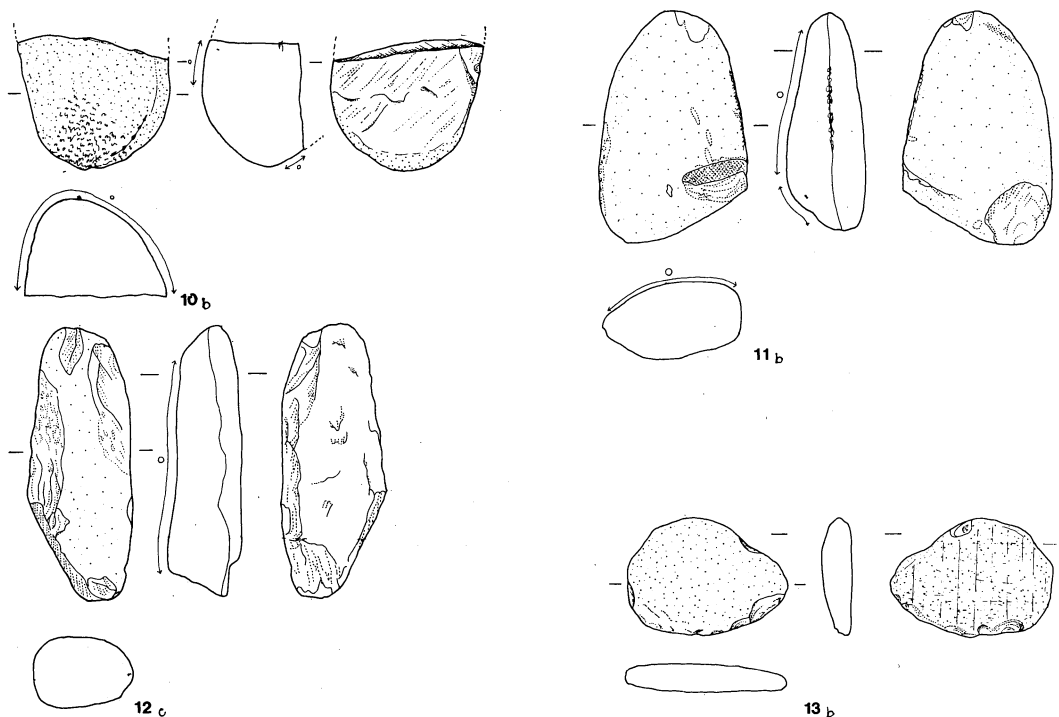
覆土中より石器が出土している。住居址に供伴するものかどうかは不明である。

出土石器は全部で21点、外に剥片が19片出土している。剥片の石質は硬砂岩14片緑泥岩5片である。出土石器の内訳は打製石斧15点、磨製定角石斧1点、大形粗製石匙1点、敲打器3点、特殊敲打器1点である。打製石斧は撓形一点を除きすべて短冊形である。15点のうち完形品は7点のみで、他は破損品である。種別ではb類5点、c類1点、d類9点とd類が多い。

1～7は打製石斧である。すべて短冊形である。1～3はb類、他はd類である。石質は1



第98图 第4号住居址覆土出土石器 (1/3)



第99図 第4号住居址覆土出土石器（ $\frac{1}{3}$ ）

4・5は硬砂岩、2・6は緑泥片岩、3・7は緑泥岩である。

8は緑泥岩製の磨製の定角形石斧で刃部を欠損している。他に比べてぶ厚いものである。

9は緑泥岩製の大型粗製石匙、片面に自然面を残したb類である。刃部の調整がはっきりしていない。

10・11は敲打器b類で、10は硬砂岩、11は緑泥岩製である。

12は緑泥岩製の敲打器c類で半折れである。

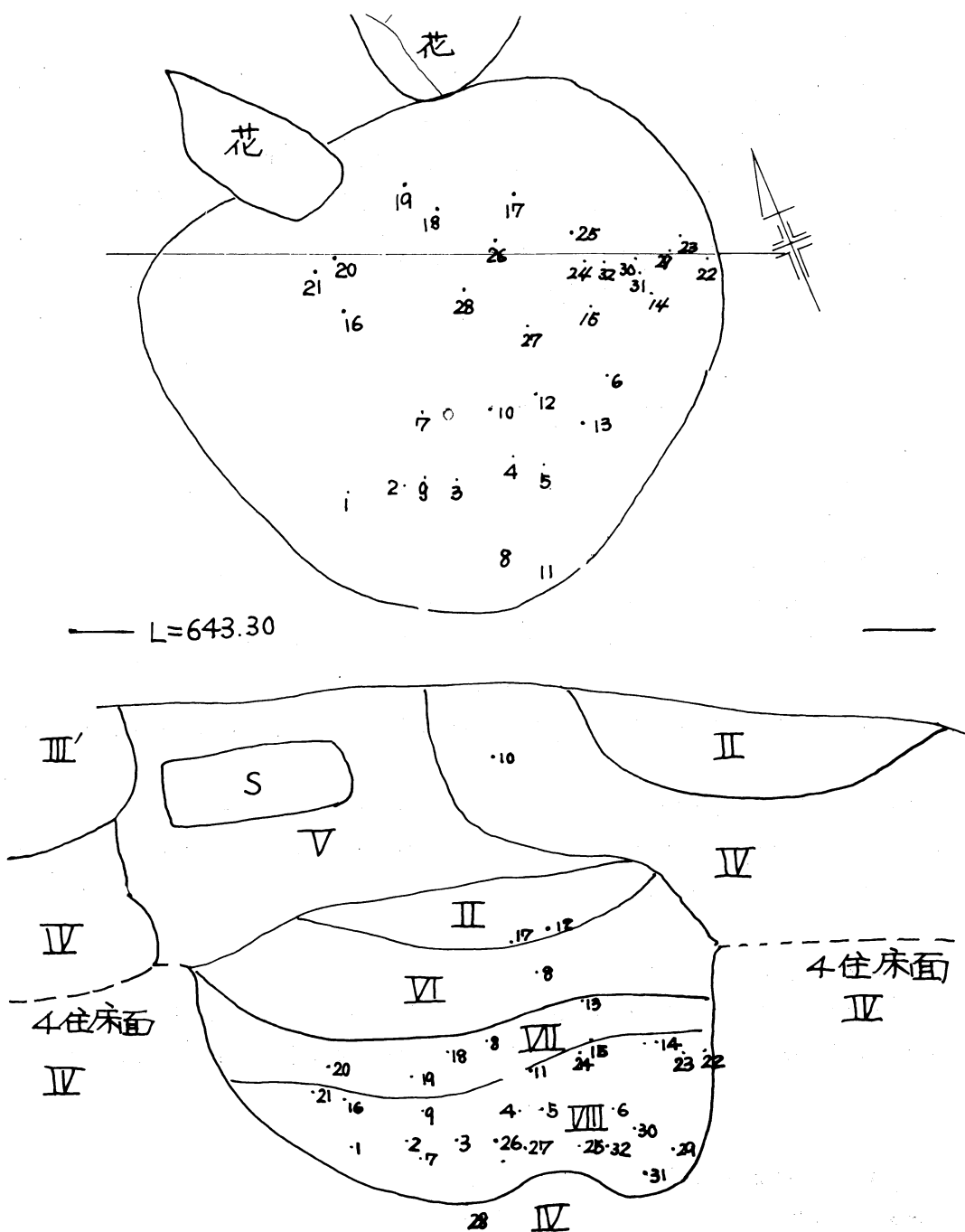
13は硬砂岩の片面平坦面を磨き端部に敲打痕を残す特殊敲打器のb類である。

#### 製鉄址（第100図）

先きに述べたように第4号住居址の北壁東寄りえをえぐるようにピットがうがたれ、内部より鉄屑が出土している。簡単な製鉄址ではないかと考えられるので別に記したものである。

住居内側部分の上部構造は判別しないが、北側部分は壁を若干えぐり込んでおり、いわゆる一部袋状となっている。第100図断面部にみる通り、上部にロームブロックが覆っている所からも明らかと思われる。東側部分はピット内覆土でおおわれている。

袋状構造を示すと思われるが、定かでないことは述べてある。確認されるピットの形状は不整円形を呈し、壁の立ち上がりは東側を除きはっきりとしていない。東壁は直に近く、底部は



第100図 第4号住居址製鉄実測図 (S =  $\frac{1}{10}$ )

番号	種 別	層位	番号	種 別	層位	番号	種 別	層位	番号	種 別	層位
1	縄文中期土器	Ⅵ	9	土師甕	Ⅶ	17	須恵甕	Ⅵ	25	鉄屑55g	Ⅶ
2	鉄屑55g	Ⅶ	10	土師甕	Ⅲ'	18	土師甕	Ⅶ	26	鉄屑30g	〃
3	土師甕	〃	11	縄文中期土器	Ⅵ	19	土師坏	〃	27	鉄屑25g	〃
4	鉄屑15g	〃	12	土師甕	Ⅱ	20	土師甕	〃	28	鉄屑45g	Ⅶ
5	鉄屑35g	〃	13	土師甕	Ⅶ	21	焼 石	〃	29	鉄屑45g	Ⅶ
6	鉄屑10g	〃	14	須恵甕	〃	22	土師甕	〃	30	縄文中期土器	〃
7	土師甕	〃	15	土師甕	〃	23	鉄屑80g	〃	31	鉄屑50g	〃
8	鉄屑45g	〃	16	鉄屑315g	〃	24	土師甕	〃	32	鉄屑35g	〃

第4号住居址製鉄址出土遺物一覧表

Ⅷ……暗褐色（多量のロームブロック含む）

各層位の厚さは一定しておらず、Ⅶ層は中央部分に逆三角形に厚くみられる。Ⅱ層の黒色土は北側に部分的にあるのみである。

出土遺物は一覧表に示すとおりである。鉄屑が14点、土師器12点、須恵器2点、縄文中期土器片3点、焼石1点である。縄文中期土器片は混入と考えたい。土器片は全て細片で図示すべきものはない。土師器・須恵器とも甕形土器がほとんどである。

上部にロームブロックが覆っておるほかは、特別な施設もなく、また内部状態からもどのような施設があったかもまったく不明である。

時期は出土遺物から歴史時代のものであることは明確であるが、第4号住居址との共伴及び先後関係は不明である。最近南信地方においても住居址内より同種の施設が発見される例が目立ってきており、今後の研究に待ちたい。

## 16 第5号住居址

本住居址は第2号住居址の北に発見されたもので、南西部の一部のみを確認しただけで、約9割は調査区域外となっており、詳細は不明である。遺場は縄文中期土器片がわずかに出土したのみである。

## 17 第6号住居址（第101～104図）

### 遺構（第101図）

本住居址は第1・3号、第8号住居址の間にあり、西側では第8号住居址を切っている。東側の第1・3号住居址の重複関係及び可能性は不明である。南側は第4号住居址によって切られている。

プランは楕円形を呈すと思われ、大きさは南北推定4m前後、東西は5mである。壁の立ち上がりは北側は直に近いが東側ははっきりしないので第3号住居とつながっている。北側での壁

東壁近くで一部盛り上がっている。

層位の説明は次のとおりである。

Ⅱ……黒色土

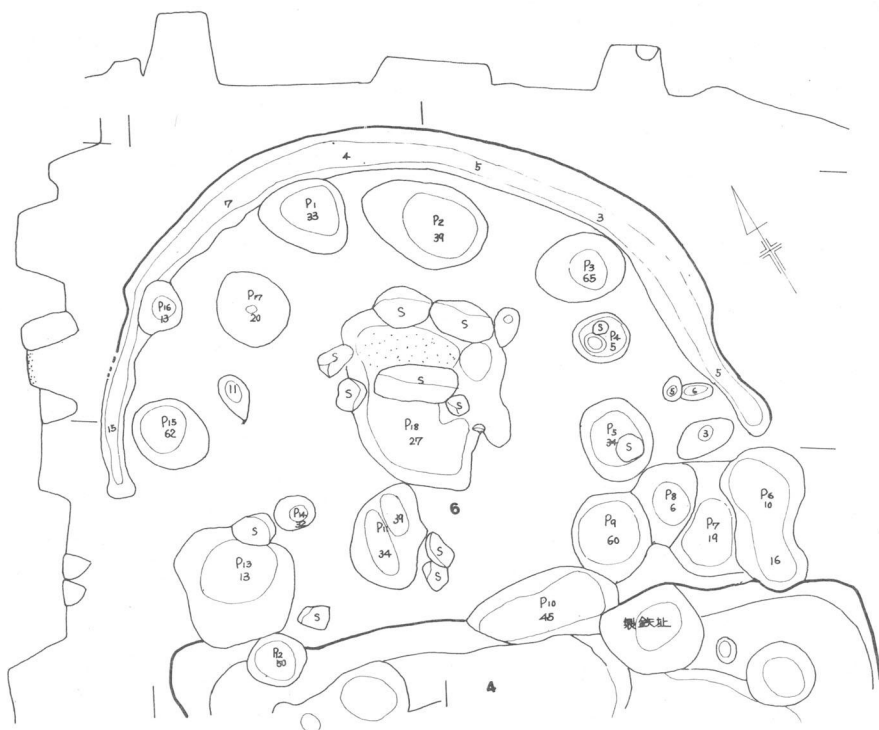
Ⅲ……暗褐色土（漸移層）

Ⅳ……ローム層

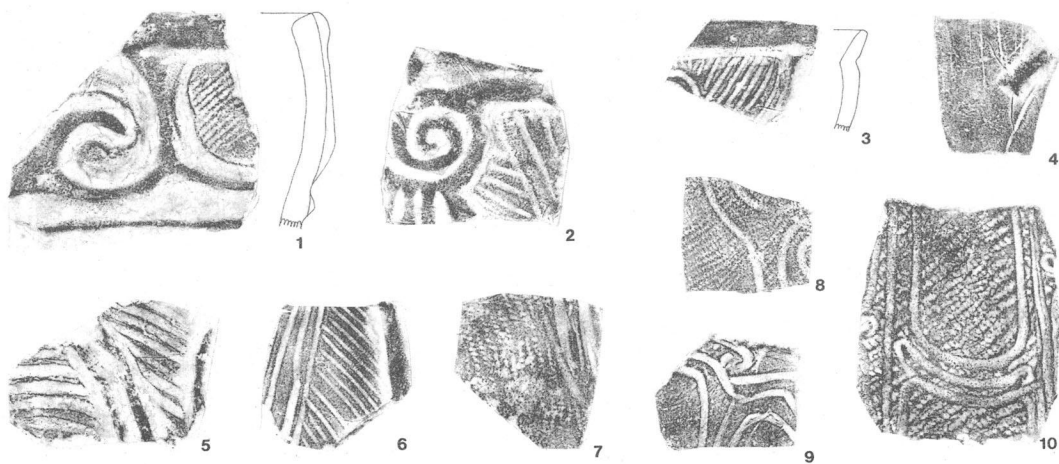
Ⅴ……ロームブロック

Ⅵ……黒褐色土（ローム粒と炭化粒含む）

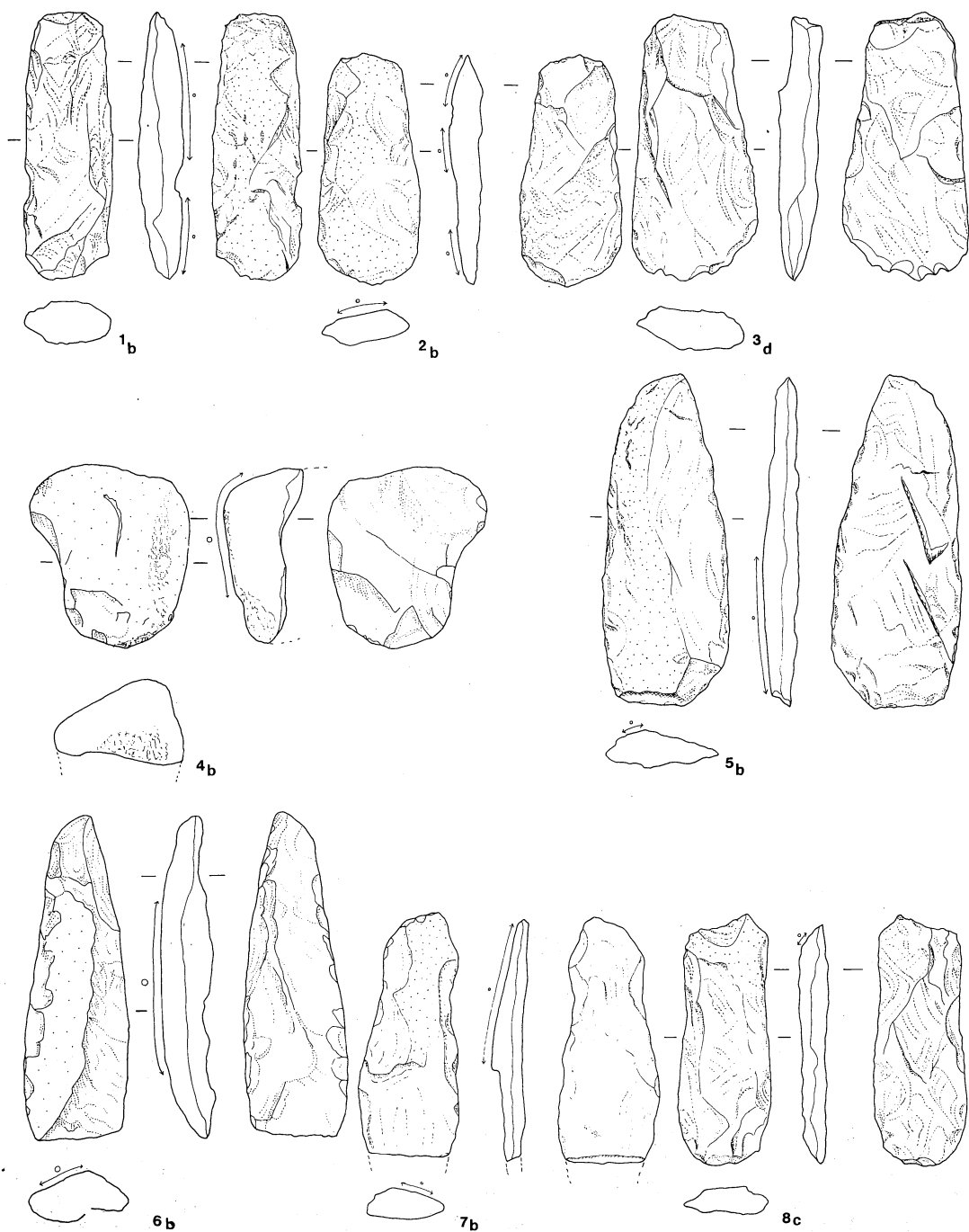
Ⅶ……焼土と炭化粒とローム粒含む



第101图 第6号住居址实测图 ( $S = \frac{1}{60}$ )

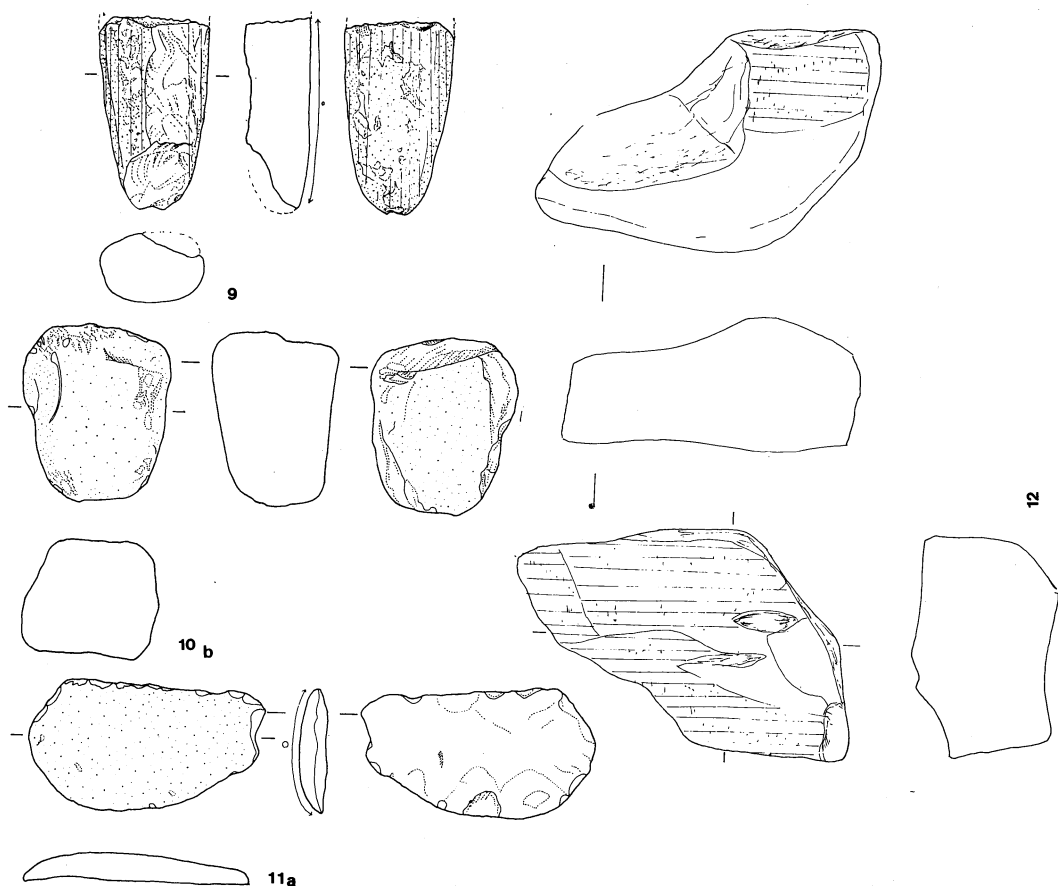


第102图 第6号住居址床面出土土器 ( $\frac{1}{3}$ )



第103図 第6号住居址出土石器（ $\frac{1}{3}$ 、1～4は覆土、5～8は床面出土）





第104図 第6号住居址床面出土石器（12は $\frac{1}{8}$ 、他は $\frac{1}{3}$ ）

高は30cm前後、第8号住居址とはほとんど床面差はみられない。

床面はロームを固く敲きしめ、良好である。

ピットは数多くみられる。主柱穴はP3・P9・P15など明らかにそれを思われるが、後述する炉の動きなどから柱の移動が考えられる。

炉は住居址中央やや北寄りに位置すると思われ、方形の石組み炉で一部石が抜かれている。大きさは外形推定85×110cm、内形40×70cm、深さは30cmで平底である。焼土は底にわずかにみられるのみである。炉の南側にほぼ方形の深25cmほどのピットがある。焼土がないが旧炉の可能性が強い。

住居址北壁下にはほぼ一定の幅の周溝がある。南側部分はなかったものと考えたい。

#### 遺物（第102～104図）

出土土器は非常に少ない。すべて床面出土のもので、器形を知り得るものはまったくない。

すべて深鉢形土器である。大別して縄文を持つものと（1・7～8）とそうでないもの（2～4、5・6）とに分けられる。時期は曾利Ⅱ式に比定される。

石器は全部で13点と少ない。覆土中よりは、打製石斧3点と敲打器6類1点の出土である。床面出土のものは、打製石斧5点、磨製乳棒状石斧・敲打器b類・砥石・横刃形石器各1点ずつである。他に硬砂岩の剥片12片、緑泥岩の剥片3片が出土している。打製石斧8点のうち1点は胴部のみの破損品である。打製石斧を形態別にみると、撓形1点を除き他はすべて短冊形である。

1～3、5～8は打製石斧で6を除き短冊形である。

1、2、5～7はb類、8はc類、3はd類である。石質は1～3、5、6、8は硬砂岩、7は緑泥岩である。

9は磨製の乳棒状石斧で頭部と片面が割れている。蛇紋岩製である。

4・10は敲打器b類でともに緑泥岩製である。

12は砂岩の砥石で3面を使用している。目は粗い。

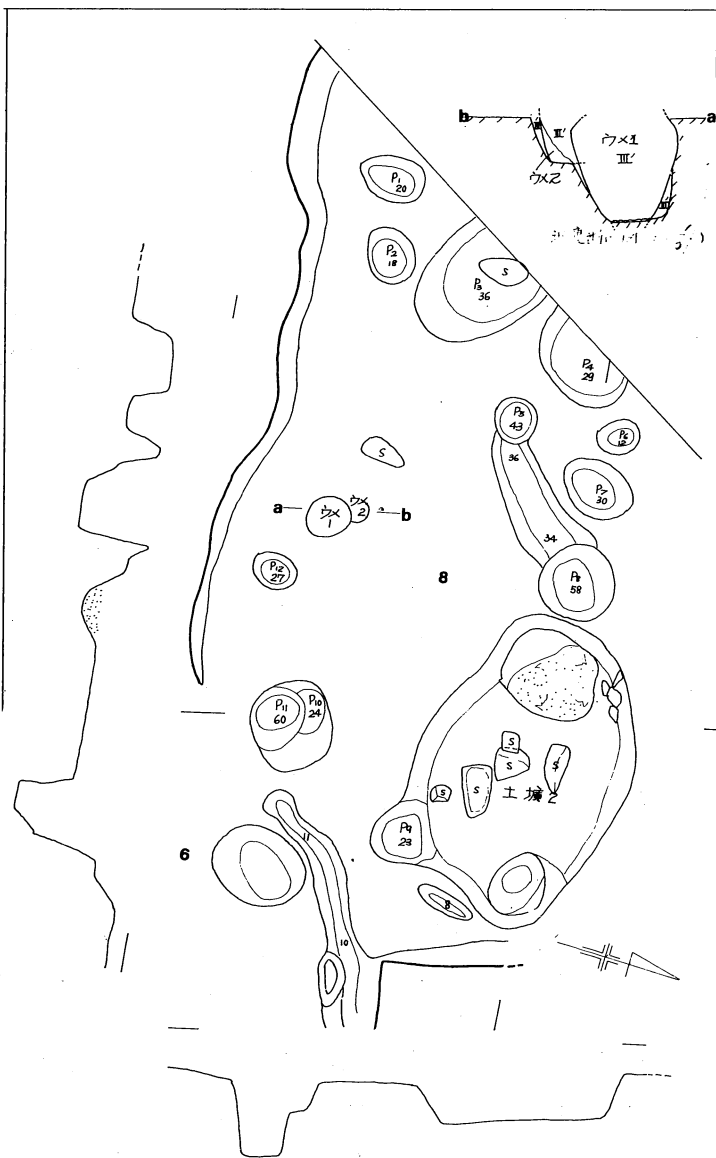
11はa類の横刃形石器で硬砂岩製である。

## 18 第8号住居址（第105図）

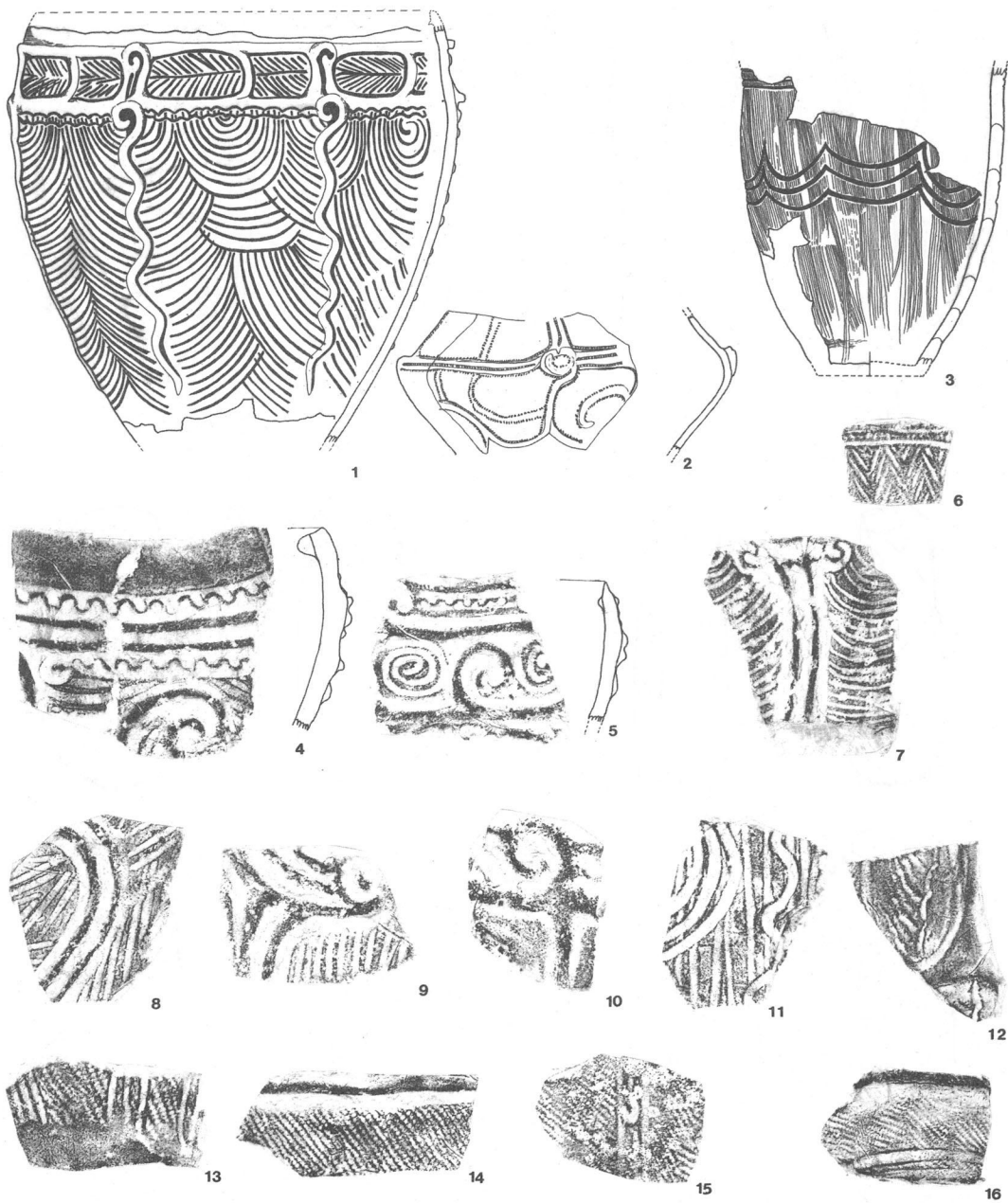
### 遺構（第105図）

本住居址は第6号住居址によって東側の一部を切られている。また西側は道路北側は調査区域外のため、全容はわからない。

南壁は屈曲しながらもほぼ直線を描き、プランは不



第105図 第8号住居址実測図（S = 60）

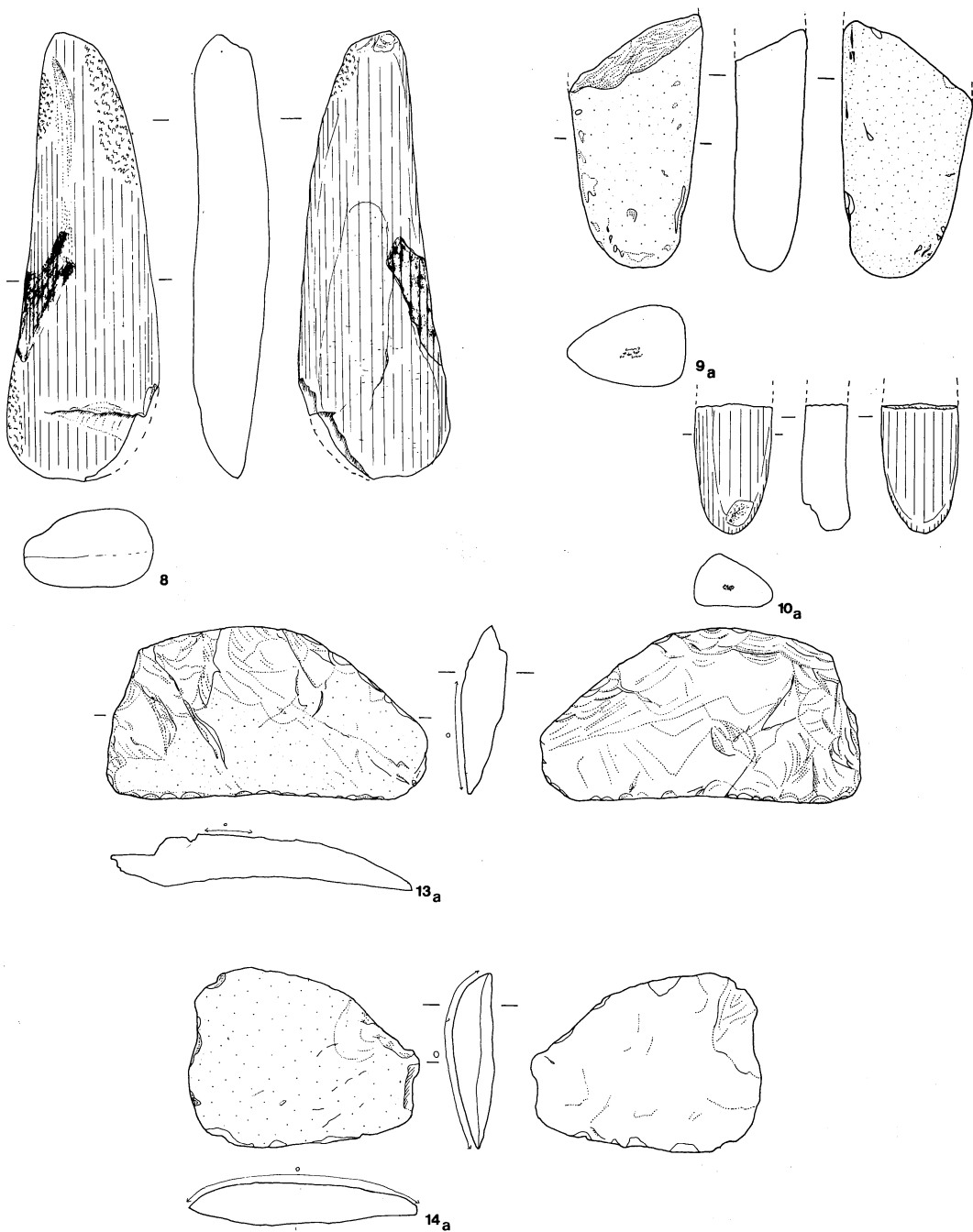


第106図 第8号住居址床面出土土器

(1～3は $\frac{1}{8}$ ・他は $\frac{1}{4}$ 、1は埋甕、2は埋甕1内出土、3は埋甕2)



第107图 第8号住居址床面出土石器 (1/3)



第108图 第8号住居址床面出土石器 (1/3)

明である。南壁はゆるやか  
かで、壁高は10cmほど、一  
部残る東壁はやはりゆるや  
かな立ち上がりを示し、壁  
高は、20cm弱を測る。

床面は全体にタタキが良  
くみられ良好である。

P<sub>10</sub>、P<sub>11</sub>は主柱穴と考えら  
れ、移動の可能性もある。

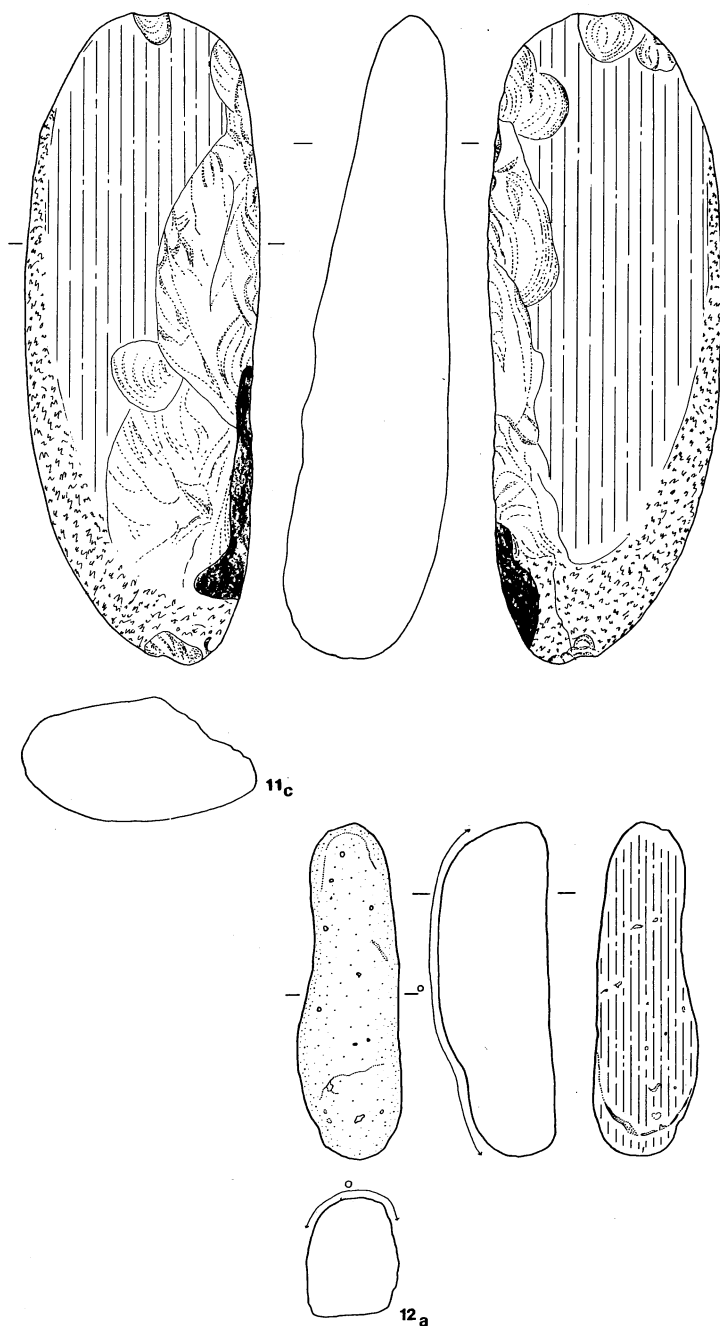
P<sub>5</sub>とP<sub>8</sub>を結んで深い溝  
がある。北側と西側が未調  
査のため定かでないが、住  
居址の重複も考えられる。

炉はP<sub>8</sub>のすぐに東にあり  
土壇2によって壊されてお  
り、底に焼土を残すのみで  
ある。掘り方からし石組み  
炉と考えられる。

P<sub>12</sub>の西側に埋甕1が発見  
されている。断面図にみる  
通り埋甕2をこわって1が  
ある。埋甕1の内部よりは  
打製石斧1点と深鉢土器の  
胴部破片(第106図-2)が  
出土している。内部は覆土  
が充満している。

#### 遺物 (第106~109図)

1は埋甕1で胴下半部を  
欠く深鉢形土器である。口  
唇部は不明である。口縁部  
に2本の隆帯を施し、6分  
画にワラビ手文隆帯を用い  
てさらに内部を2分画して  
いる。胴部は6本のワラビ  
手状蛇行懸垂文を施し、う



第109図 第8号住居址床面出土石器 (1/3)

ろこ状文によって器面は埋められる。

2は埋甕1の内部より出土したもので深鉢形土器の胴部砂片でほぼ4分の1しかない。榴状突起を持つ隆帯と連続押し引き文とから文様が描かれる。類例をみない土器である。

3は埋甕2で埋甕1によって壊され半分ほどしかない。口縁部・底部は不明である。地文はハケ目で、頸部に3条以上の横走る沈線、胴中央部には、3条の連弧文が施される。東海系色彩の濃い土器である。

1・3は時期的に相違はみられず曾利Ⅱ期に属すると思われる。

4～16は床面出土のもので、すべて深鉢形土器である。4～11と縄文を持つ12～16の一群とに大別できる。12は結節縄文がみられる。4～10は1・3より若干先行すると思われる。

石器も土器同様すべて床面出土のものである。石器の内訳は打製石斧11点、磨製合刃石斧1点、敲打器a類2点、c類1点、磨き石1点、横刃形石器2点である。

打製石斧11点のうち完形品は7点で刃部欠損のもの3点、頭部欠損のもの1点がある。形態的には撓形が1点あるのみで他は短冊形である。形式的にはb類7点、d類4点となっている。石材は硬砂岩5点、緑泥岩2点、緑泥片岩2点、蛇紋岩・砂岩各1点となっている。

石器18点のほかに、硬砂岩の剝片13片と緑泥岩の剝片3片が出土している。

第107図は打製石斧である。7を除きすべて短冊形である。2のd類の外はすべてb類である。石質は1・4・5・7は硬砂岩、1は緑泥片岩、3は緑泥岩、6は蛇紋岩である。

第108図－8は緑泥岩製の磨製乳棒状石斧で一部に敲打痕を残している。

9・10は敲打器a類でともに欠損品である。石材は共に硬砂岩で10は全体に簡単な磨きがみられる。

第109図－11は緑泥岩製の敲打器でc類である。

12は硬砂岩の磨き石でa類である。

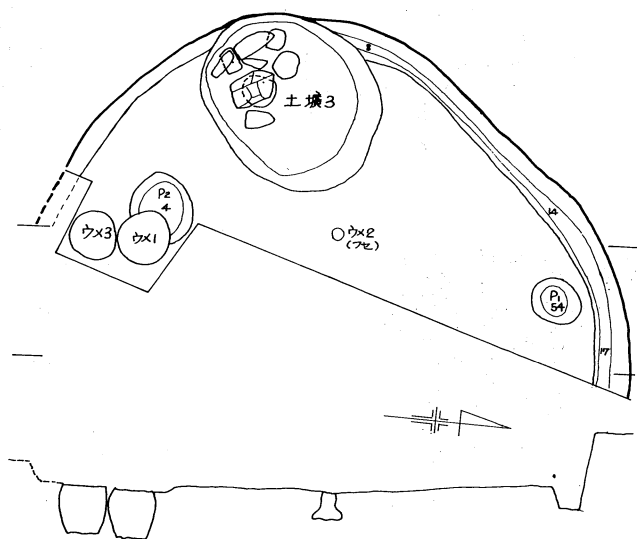
13・14はともに硬砂岩製の横刃形石器でa類である。

## 19 第9号住居址（第110～113図）

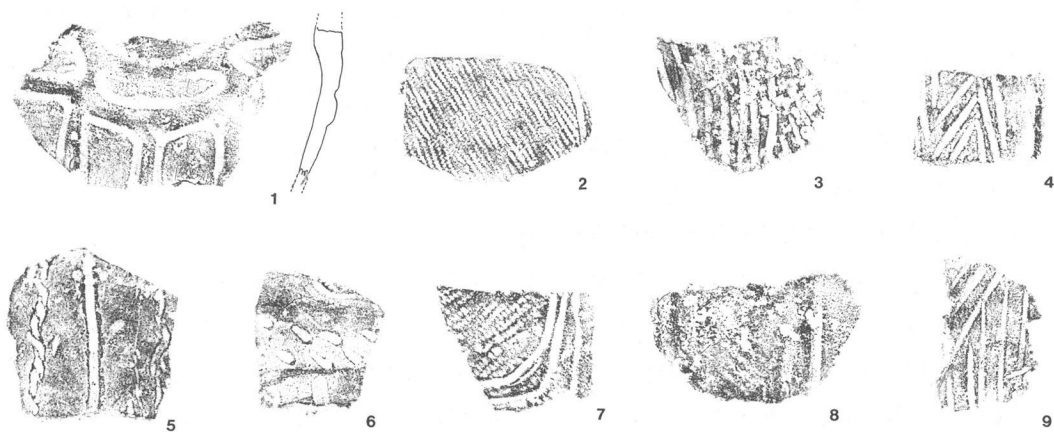
### 遺構（第110図）

本住居址は第1・3号住居址の南東に位置し、北には第2号住居址、南には第10号住居址がある。東側は調査区域外のため、住居址西半分しか調査できなかった。

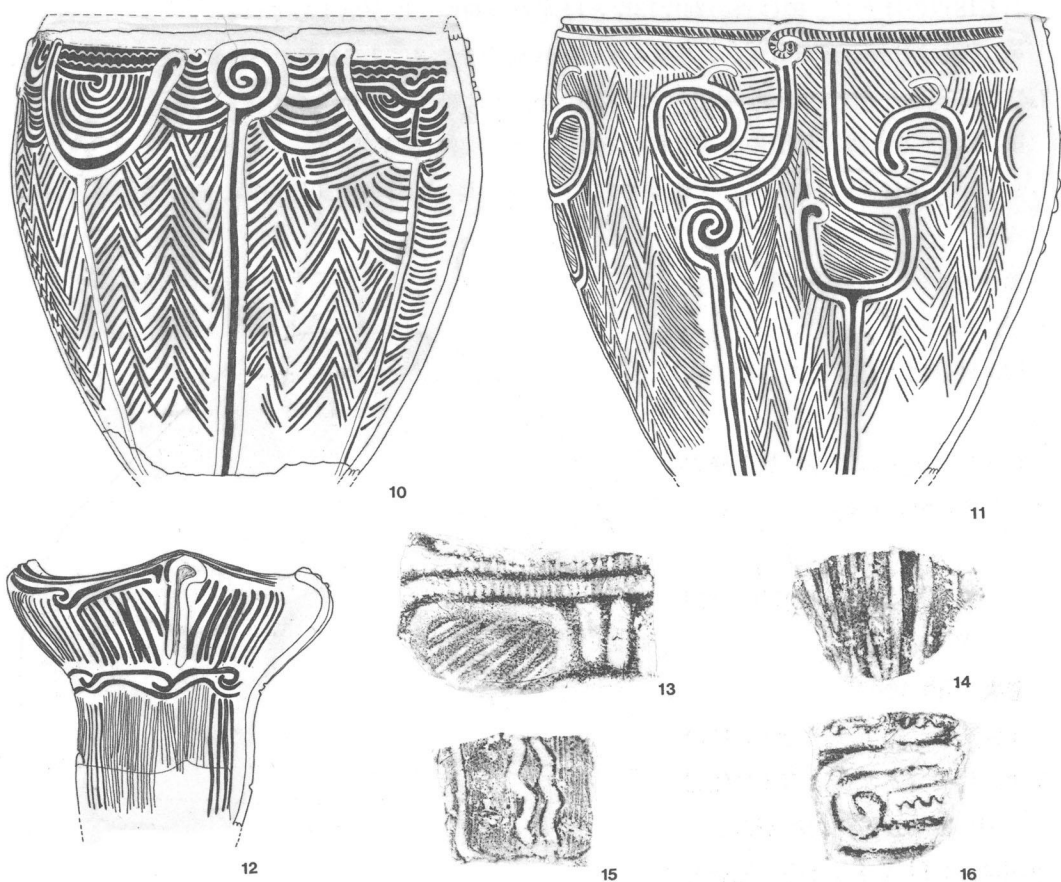
プランは円形と思われるが定か



第110図 第9号住居址実測図 (S = 1/50)



第111図 第9号住居址覆土出土土器 (  $\frac{1}{3}$  )



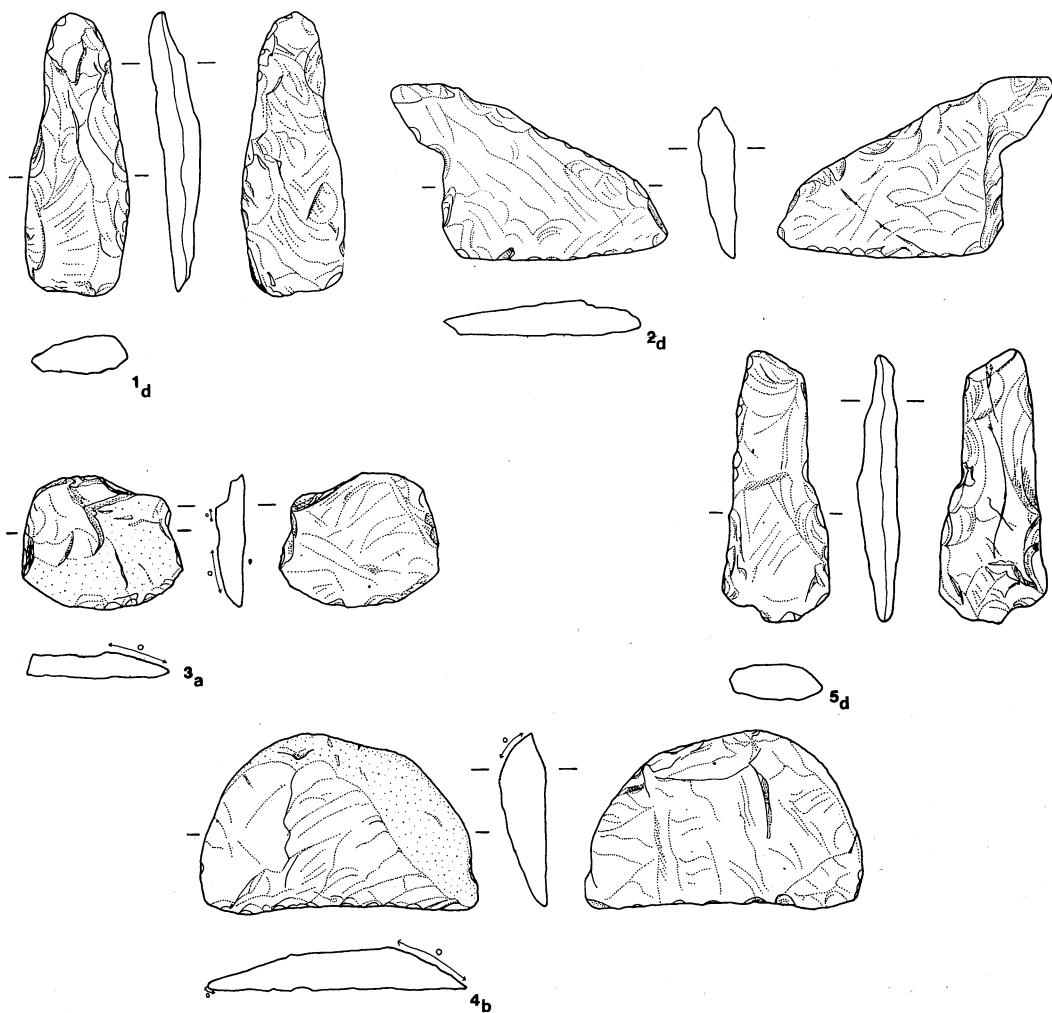
第112図 第9号住居址床面出土土器 (10~12は  $\frac{1}{6}$ 、他は  $\frac{1}{3}$ 、10は埋甕1、11は埋甕3、12は埋甕2)



ではない。

壁高は北側で40cm、南側では30cmほどである。北西部壁下には、幅10cm前後の周溝がある。南西部にはみられない。深さは北で17cmと深く西では7cmである。住居址西壁を壊って土壇3がある。

主柱穴はP<sub>1</sub>のみ確認されている。住居址中央やや西寄りの壁ぎわより埋甕1（第112図-1）と埋甕3（第112図-2）が並んで発見されている。共に正位の埋甕でほぼ接しているが切り合い関係はみられない。さらに西壁より1.6mほど内側より埋甕（第112図-3）が出土している。胴下半部を欠く伏甕である。一住居址より3個の埋甕が確認されている例は珍しい。市内では



第113図 第9号住居址出土石器（ $\frac{1}{3}$ ）5は床面、他は覆土出土

赤穂南割北方Ⅰ遺跡より出土している。復数個の埋甕は住居址の重複に伴うものが多いが、本例は重複でないことも注目したい。

炉は調査部分からは検出されていない。

#### 遺物（第111～113図）

第111図は覆土出土の土器ですべて深鉢形土器の破片である。1は口唇部を欠くものである。床面出土土器と時期差はないと思われる。

第112図は床面出土の土器で、10～12の埋甕を除いては、器形を知り得るものはない。

10は埋甕1で正位の埋甕で胴下半部と口唇部を欠いている。11は埋甕3でやはり正位の埋甕で、胴下半部を欠く。12は胴下半部を欠く埋甕2で伏甕である。東海地方咲畑式の影響の強い土器である。三つの埋甕には時期差はないと思われる。曾利Ⅱ式の新しい時期に位置するであろう。

石器は全部で8点出土している。第113図－5を除きすべて覆土出土のものである。覆土出土の内訳は、打製石斧4点、大形粗製石匙1点、横刃形石器2点である。打製石斧はすべて短冊形で石質は緑泥岩1点、硬砂岩3点である。4点のうち欠損品は3点で、頭部欠損1、刃部のみ1、刃部欠損1点となっている。

外に覆土中より硬砂岩の剥片10片、凝灰炭・緑泥片岩の剥片が1片ずつ出土している。

第113図－1～4は覆土出土のもの、5は床面出土のものである。1は緑泥岩製の打製石斧で短冊形である。d類である。

2は横形の粗製石匙でまったく礫表皮を持たないd類で、石材は硬砂岩である。調整は粗雑なものである。

3・4は硬砂岩製の横刃形石器で3はa類、4はb類である。

5は硬砂岩製の短冊形の打製石斧でd類である。

## 20 第10号住居址（第114～117図）

### 遺構（第114図）

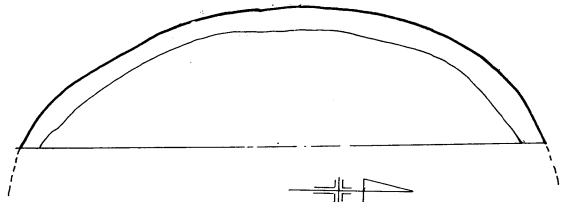
本住居址は第9号住居址の南に位置し、西側の一部床面が確認されただけで、ほとんどは調査区域外となっている。壁高は30cmを測る。柱穴は検出されていない。

### 遺物（第115～117図）

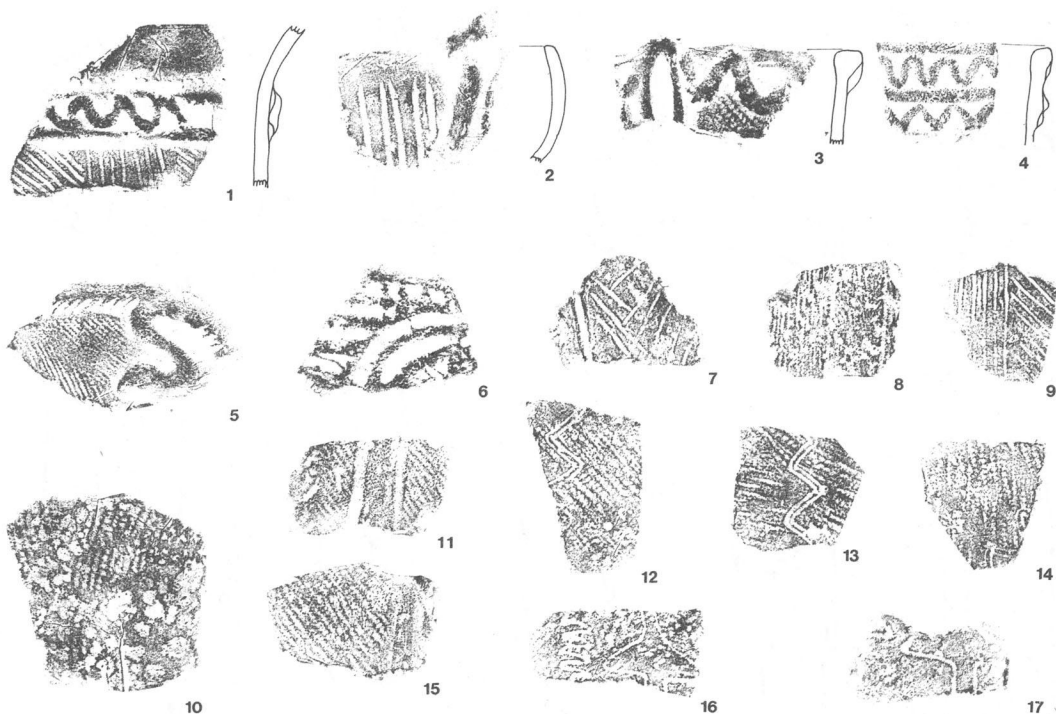
調査区域のわりには土器・石器とも出土量は多い。すべて覆土出土のものである。

第115図は土器である。すべて深鉢形土器の破片で、器形を知り得るものはない。

1～5、7は曾利Ⅰ式、他はやや後出するものもあるが縄文を持つものである。



第114図 第10号住居址実測図（S = 60）



第115図 第10号住居址覆土出土土器（ $\frac{1}{3}$ ）

石器はすべて覆土出土のもので20点と調査区域のわりには多い。打製石斧11点、磨製定角石斧1点、磨製乳棒状石斧2点、大形粗製石匙2点、敲打器a類1点、横刃形石器3点である。その外に、硬砂岩の剥片15片、緑泥片岩の剥片2片、砂岩の剥片1片がある。

打製石斧11点のうち完形品は2点で、刃部を欠損するもの6点、頭部欠損2点、側面欠損1点となっている。11点すべてが短冊形である。石質は硬砂岩が7点と多く、凝灰岩2点、緑泥岩1、砂岩1点となっている。形式的にはb類3点、c類3点、d類5点となっている。

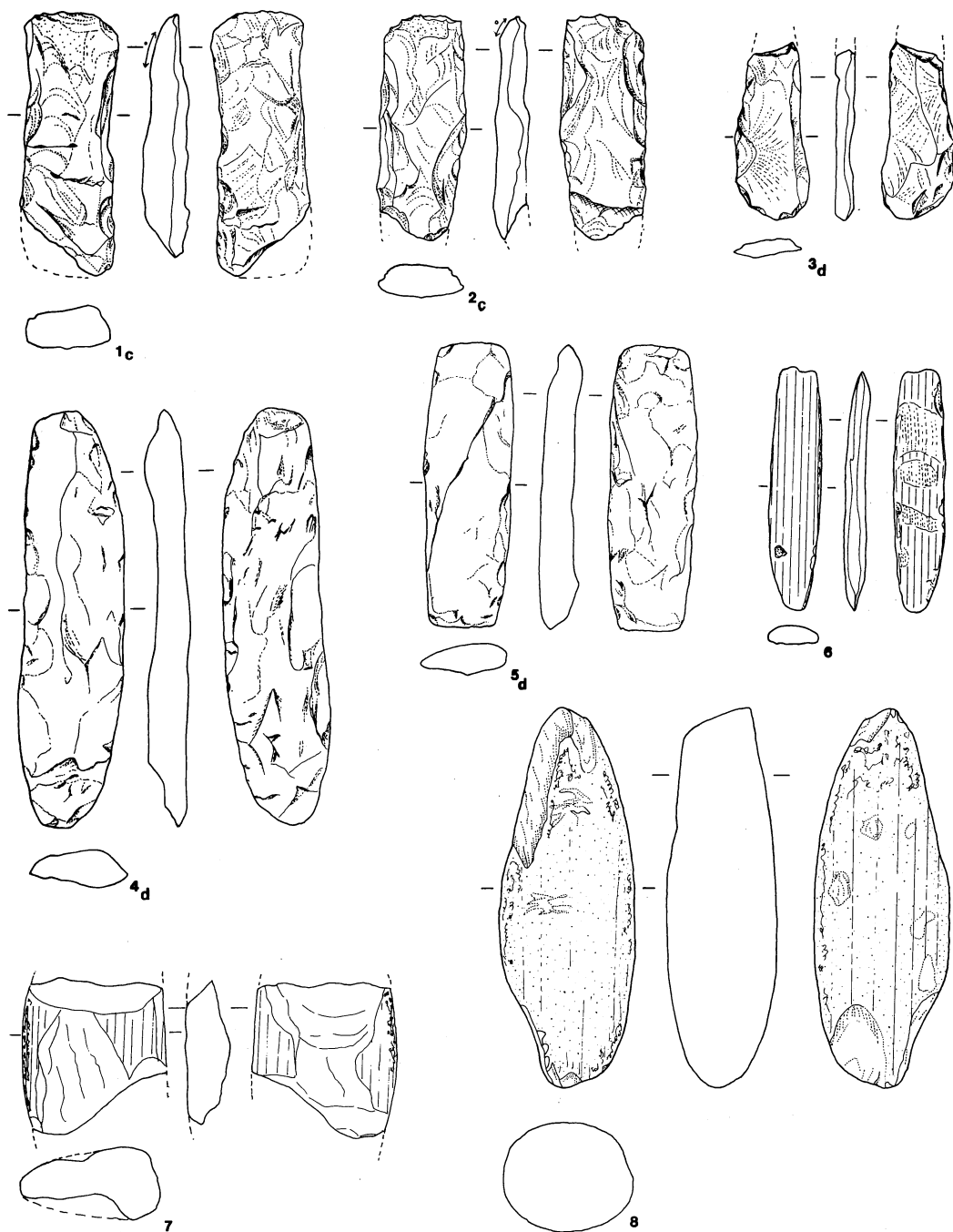
第116図—1～5は打製石斧である。すべて短冊形で1・2はc類、3～5はd類である。1・2、5は硬砂岩製、3は緑泥片岩製、4は凝灰石製である。

6は緑泥岩製の磨製定角石斧である。7・8は磨製の乳棒状石斧で、共に欠損品である。7は緑泥片岩製、8は凝灰石製である。

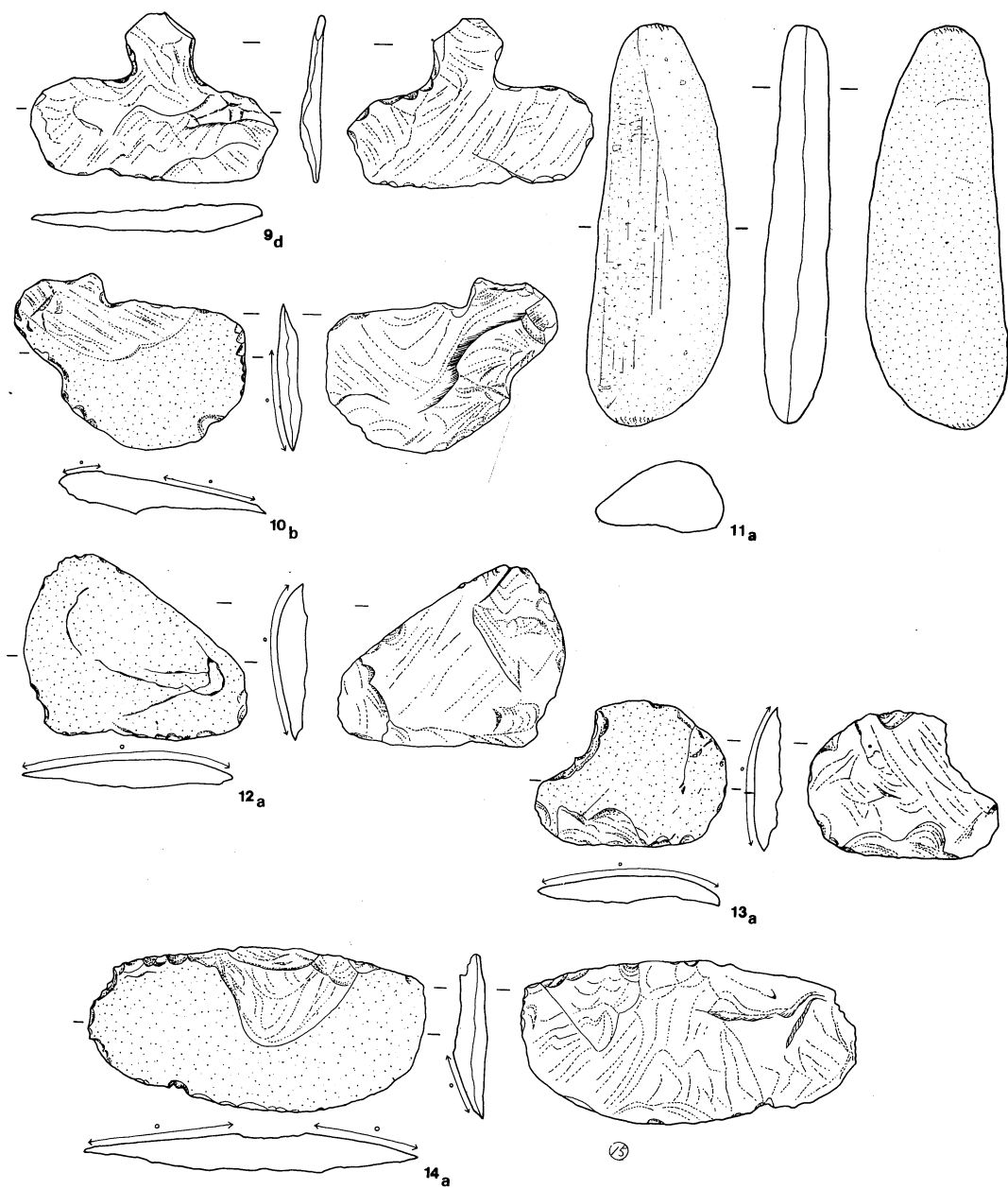
第117図—9・10は大形の粗製石匙で、ともに横形である。9は硬砂岩製、10は緑泥片岩製で10は調整が粗雑である。9は自然面をまったく持たないd類、10はb類である。

11は硬砂岩の敲打器a類で、一部自然面に磨きがみられる。

12～14は横刃形石器で石材は12は緑泥片岩、13・14は硬砂岩である。ともに自然面を片面に残すa類である。



第116图 第10号住居址覆土出土石器 (1/3)



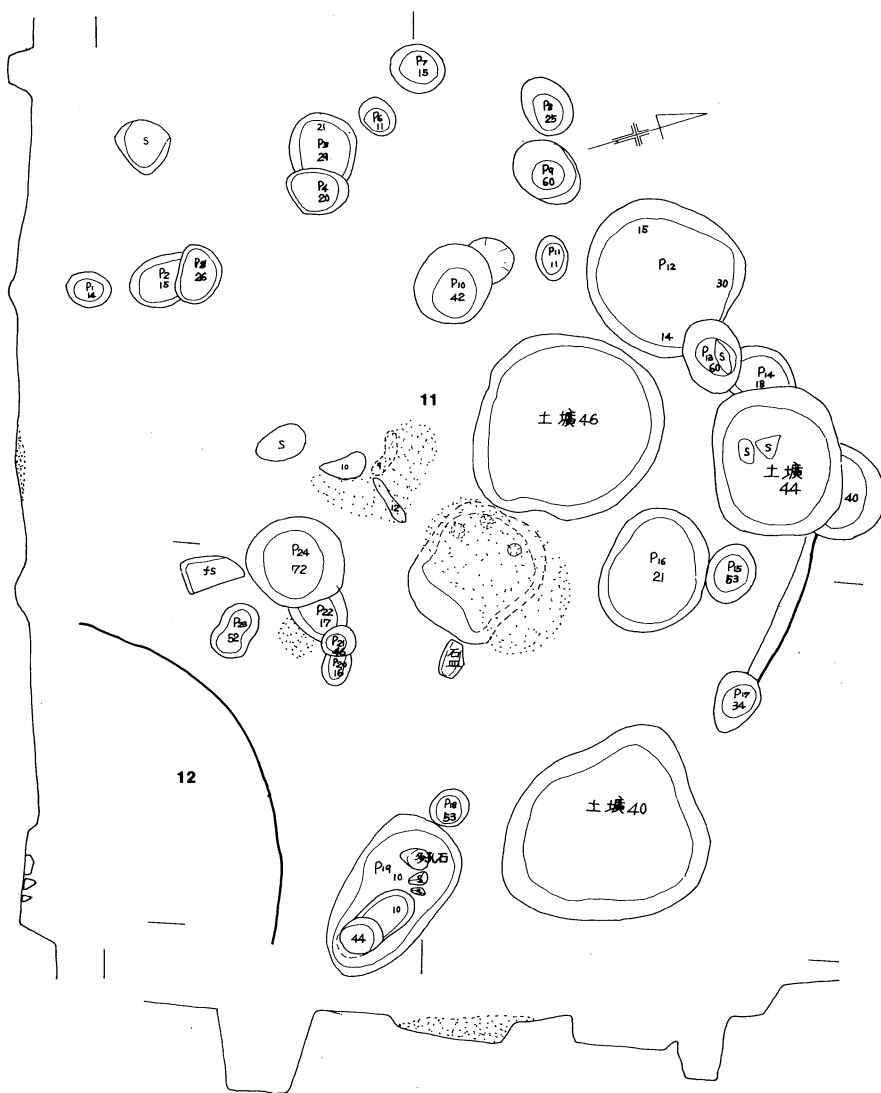
第117图 第10号住居址覆土出土石器 (1/3)

## 21 第11号住居址（第118～123図）

### 遺構（第118図）

本住居址は第12号住居址の北西にあり、壁は北の一部に残るのみで、プラン等は不明である。第12号住居址との切り合い関係は不明である。遺物からは第12号住居址に切られたとは考えにくい。

床面は南へ傾いており、ロームのたたきは固く良好である。主柱穴ははっきりしないが、柱の移動がうかがわれる。土壇46の南東に焼土が3箇所に見られる。柱穴とともに住居址の建て直しを考えたい。



第118図 第11号住居址実測図 (S =  $\frac{1}{60}$ )

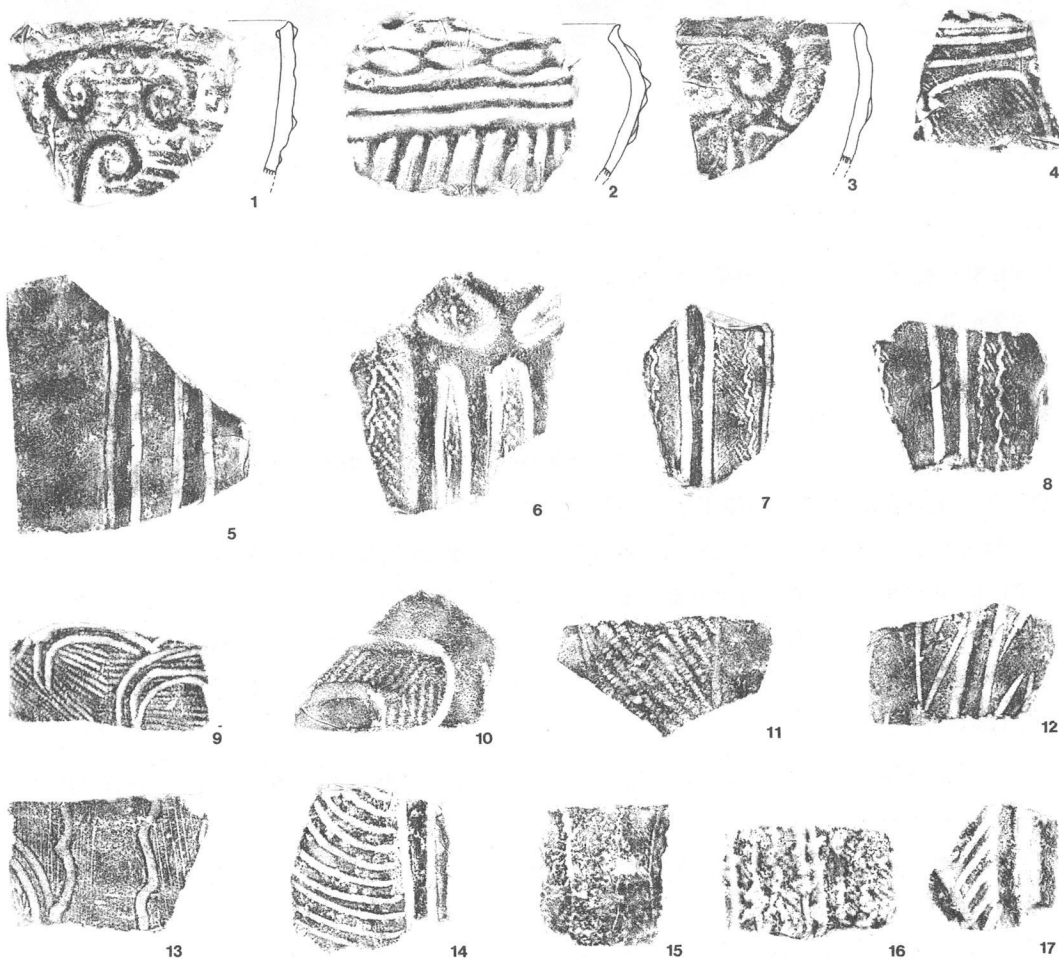
住居址あるいは壁を壊して土壇がある。はっきりしたものだけで土壇40・44・46の3基がある。他にもあると思われる。土壇46の東側焼土のわきから石皿が上を向いて、また土壇40の南東、P19の内部より多孔石が出土している。

#### 遺物（第119～123図）

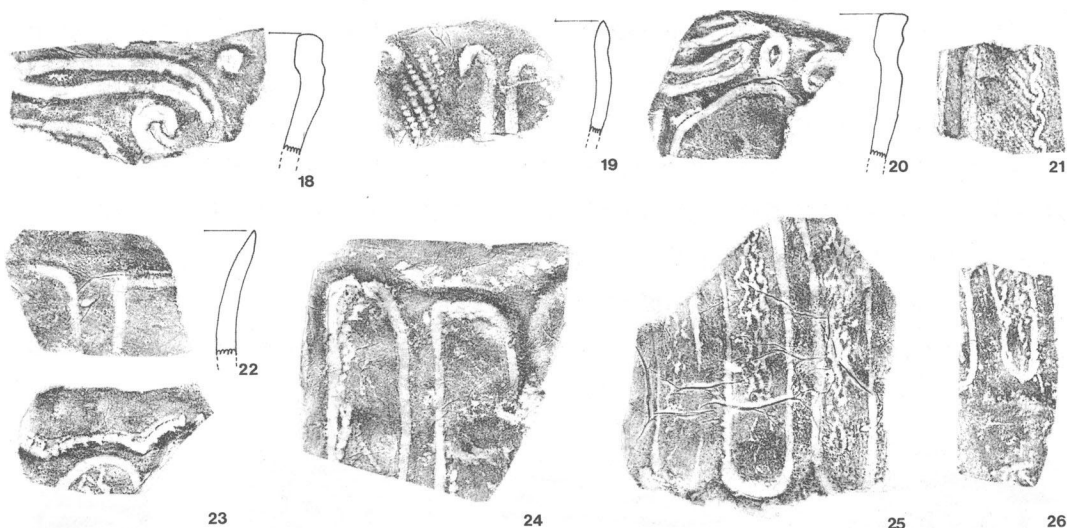
出土土器はあまり多くない。第119図は覆土出土のもの、第120図床面出土のものである。ともに深鉢形の破片のみで器形を知り得るものはない。両者の間には時期差はみとめられない。結節縄文を持つものが多く、曾利Ⅲ期に比定される。

石器は全部で33点出土している。覆土出土23点、床面出土10点である。

覆土出土23点の内訳は打製石斧16点、敲打器a類1点、c類1点、石錘、磨き石a類、特殊敲



第119図 第11号住居址覆土出土土器（㊦）



第120図 第11号住居址床面出土土器（ $\frac{1}{3}$ ）

打器a類、横刃形石器、挟入横刃形石器各1点である。

打製石斧16点のうち完形品は1点のみで頭部欠損8点、刃部欠損7点である。形態的には、短冊形14点、撓形2点と短冊形が圧倒的である。石質は硬砂岩14点、緑泥岩1点、砂岩1点である。a類なし、b類8点、c類3点、d類5点でb類の多いことがわかる。

床面出土10点の内訳は、打製石斧3点、磨製特殊石斧1点、磨製定角石斧2点、大形粗製石匙1点、敲打器a類1点、石皿1点、多孔石1点となっている。

打製石斧3点のうち2点は完形品で短冊形、1点は撓形で頭部欠損である。

第121・122図－9は覆土出土石器、他は床面出土の石器である。

1～3、10～12は打製石斧である。2・10は撓形他は短冊形である。3は縦形の大形粗製石匙に似ている。1・11はb類他はd類である。石質は1は緑泥岩、2は硬砂岩、3は砂岩、10・11は緑泥片岩、12は安山岩である。

4・17は敲打器のa類で、4はほぼ全面に、17は平坦面に軽い磨きがみられる。石質は4は緑泥岩、17は硬砂岩である。

13は特殊な磨製石斧としたが、形態的には打製石斧に属するもので、全体を磨きあげているところから分けたものである。緑泥岩製である。

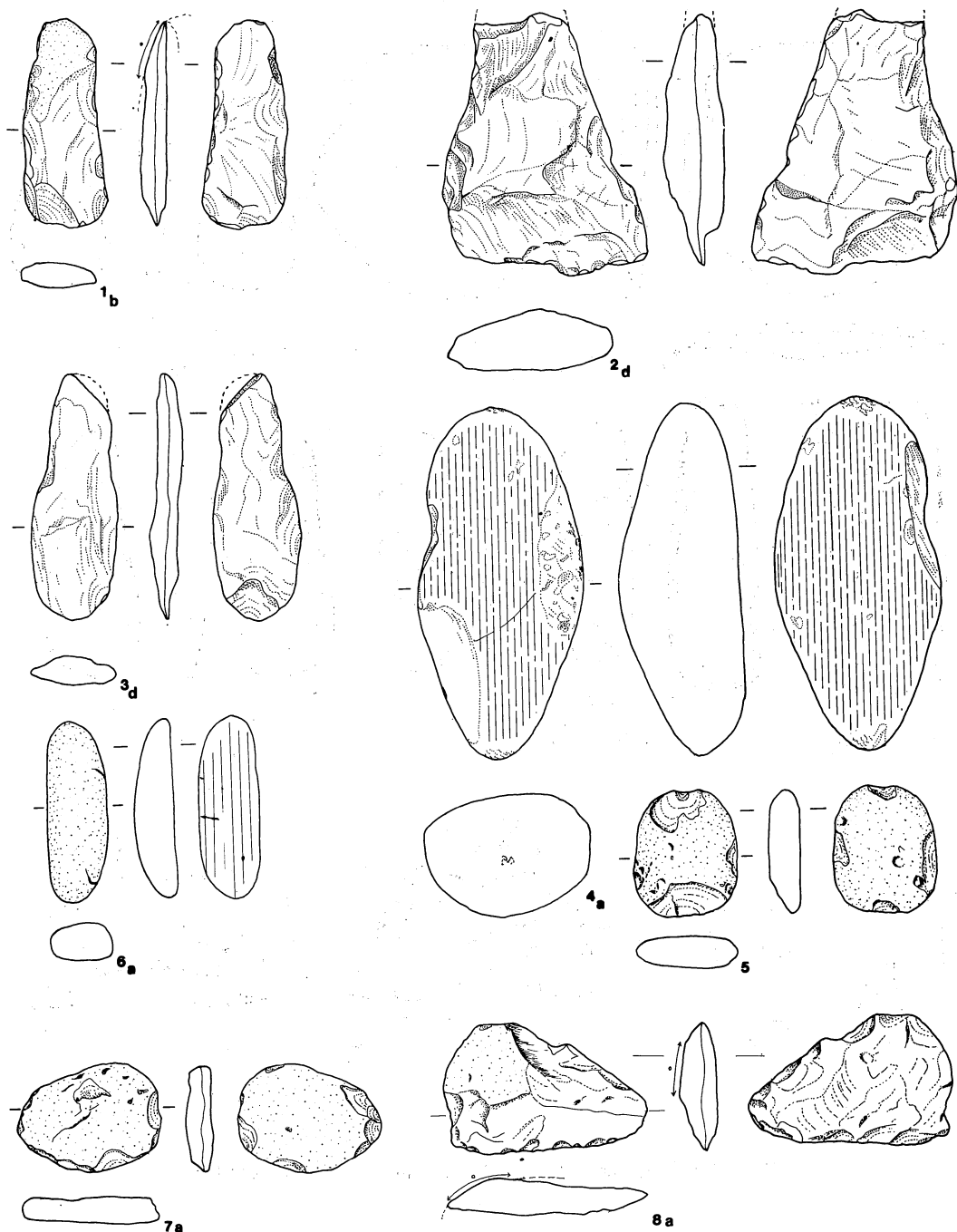
14・15は磨製の定角石斧でともに緑泥岩製である。14は頭部を欠損、15は非常に小形なものである。

16は硬砂岩製の大型粗製石匙の横形に入るもので、刃部が内湾している。

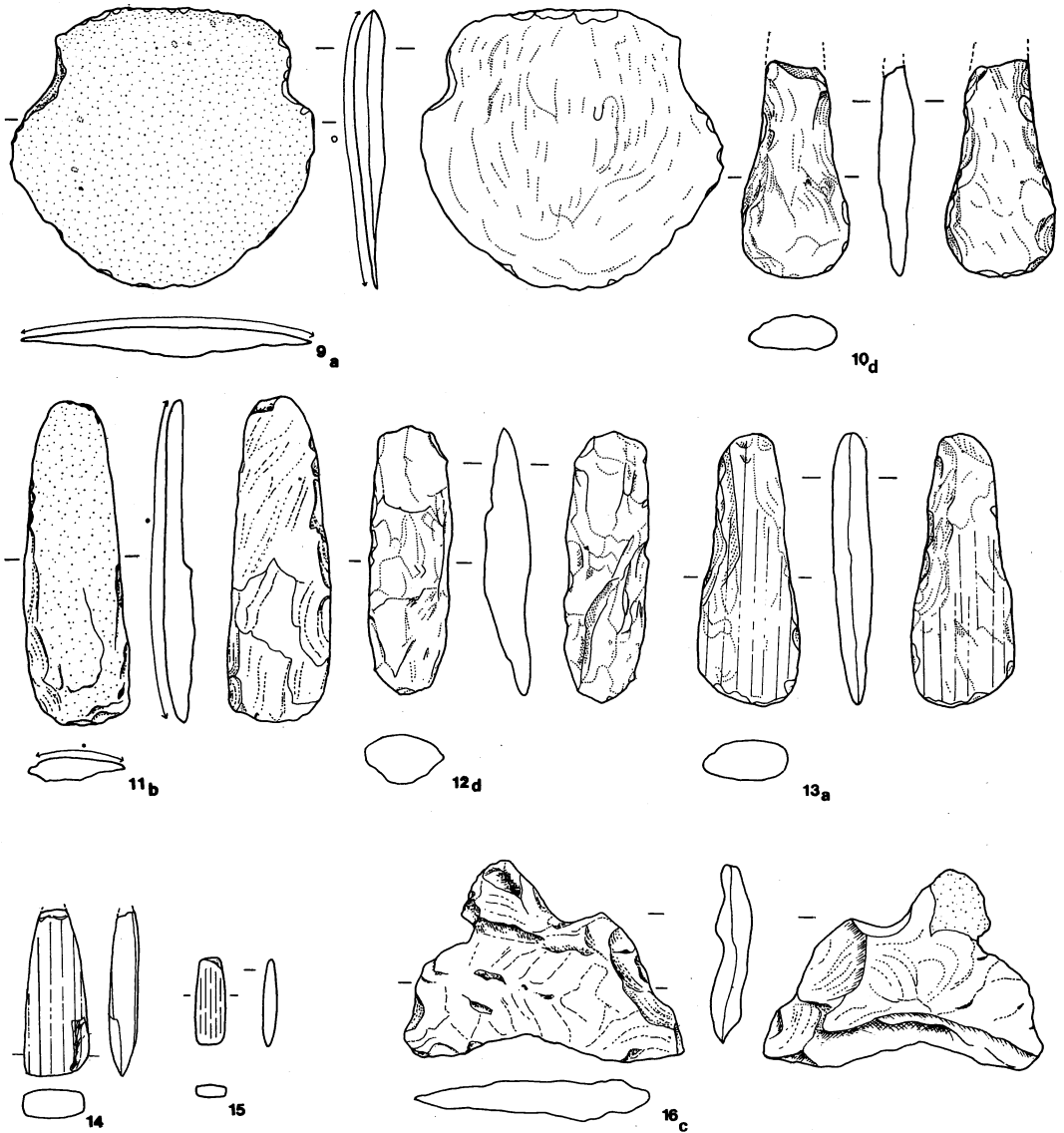
5は砂岩製の石錘で縦形である。

6は磨き石a類で砂岩製である。





第121図 第11号住居址覆土出土石器 (1/3)



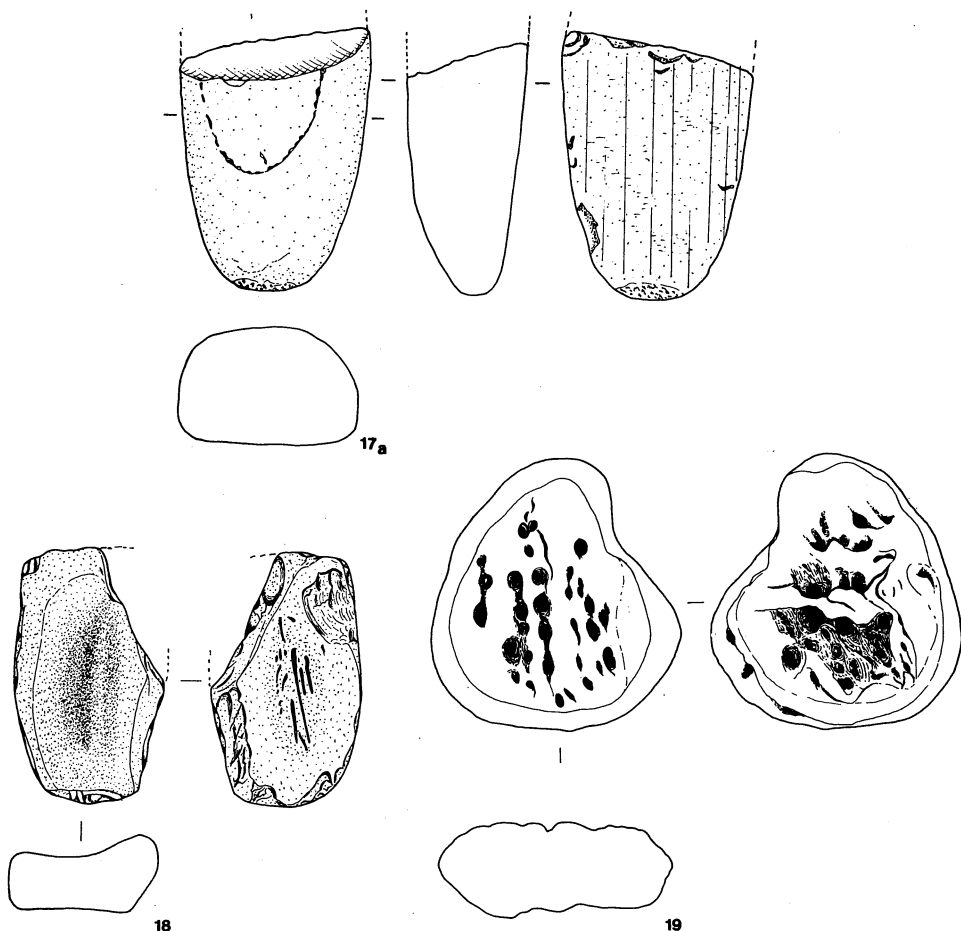
第122図 第11号住居址出土石器（ㇿ、9は覆土、10～16は床面出土）

7は砂岩製の特殊敲打器のa類である。

18は小形の石皿で一部欠損している。砂岩製である。

19は花崗岩製の多孔石で両面に孔がうがたれている。多孔石は蜂の巣石とも呼ばれるが、伊那谷での出土例は珍しいものである。

8・9は横刃形石器である。9は両側部に挟入がみられ石匙に似るが刃部が丸いため、挟入



第123図 第11号住居址床面出土石器 (17は $\frac{1}{2}$ 、18・19は $\frac{1}{4}$ )

横刃形石器として扱った。8は硬砂岩、9は緑泥岩である。

## 22 第12号住居址 (第124～127図)

### 遺構 (第124図)

本住居址は第10号住居址の南西にあり、第11号住居址と北西部にて接している。第11号住居址の重複関係ははっきりしないが、遺物からみる限り切っていない。

プランは所々に張り出しがみられるが、ほぼ円形を呈している。規模は南北4.7m、東西4.4mを測る。壁高は南と北が高く40cm、東側は30cm、西側は20cm前後と浅くなっている。床面はロームを固くたたきしめ良好である。

北側の一部を除き周溝が一周する。幅はほぼ一定しておるが深さはまちまちである。



第124図 第12号住居址実測図 (S =  $\frac{1}{60}$ )

柱穴は数多くみられ重複している可能性が強うかがわれる。炉は住居址中央やや東寄りにみられる焼土で、若干離れて2箇所から発見されている。ともにピット内に堆積するもので、石は抜かれたものと思われる。f P1の焼土の中央部より小形深鉢形土器の胴下半部（第125図-1）が埋設されていた。炉の新旧関係は不明である。

f P1を壊して土壇66がある。

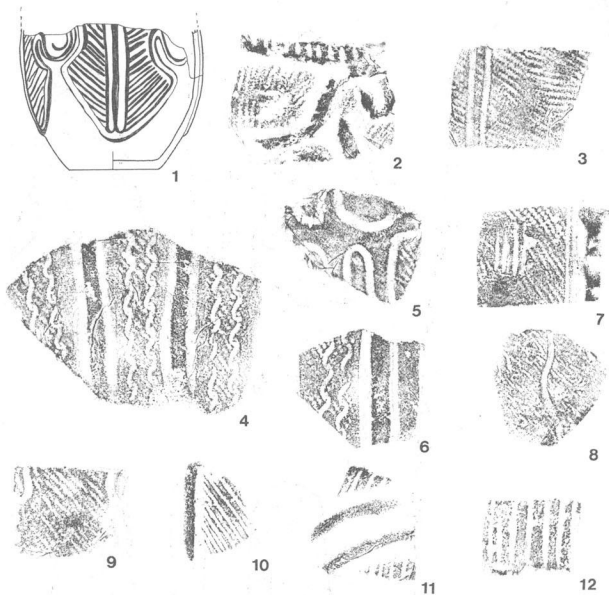
また住居址中央南東寄りの覆土上層に断面図に示す如く頭部を上にして石棒（第127図-10）が立って出土している。完全に住居址が埋設した後に立てられたものである。

#### 遺物（第125～127図）

土器・石器とも出土量は少ない。

土器はすべて床面出土のもので、第125図がそれである。1を除きすべて破片で器形を知り得るものはない。

1はすでに述べたようにf P1の焼土中央部に埋設されていたもので、胴上半部を欠く小形深鉢形土器である。粘土紐による4分画の文様構成からなり、内部は太い沈線が斜走する。時期



第125図 第12号住居址床面出土土器

(1は㊦、他は㊧、1は炉内埋設土器

は曾利Ⅱ式である。

2～12はすべて深鉢形土器の破片で2、7、10～12の一群と他のものとは時期差がみられる。前者は1と同時期、後者は曾利Ⅲ式に比定される。4～6は結節縄文を持つものである。

全部で13点出土しているだけである第127図～10の石棒を除きすべて床面出土のものである。

石棒を除く床面出土の12点の内訳は打製石斧9点、敲打器a類2点、砥石1点である。その他硬砂岩の剥片が6片出土している。

9点の打製石斧のうち7点は短冊形で特殊大形石斧、撓形石斧が一点ずつある。9点のうち3点は胴部のみの欠損品である。石質は硬砂岩が7点、緑泥片岩2点である。形成別ではb類が最も多く7点、c類・d類が各1点ずつ

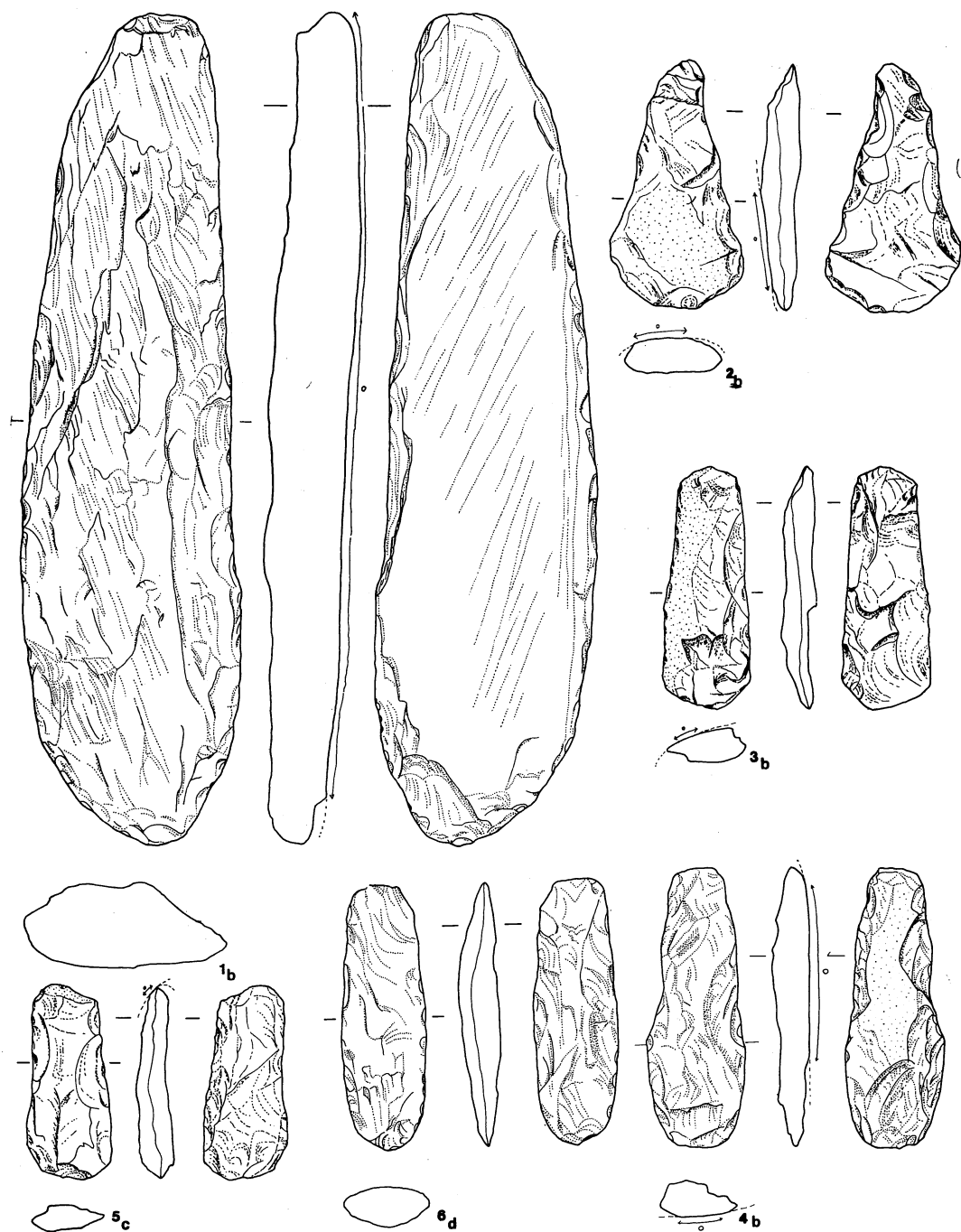
つとなっている。

第126図は全て打製石斧である。1は大形の特殊なもので、打製石斧とは区別すべきものかも知れない。片面を大割し、測面に軽い調整がみられるもので石質は緑泥片岩製である。2は撓形の打製石斧である。他はすべて短冊形である。石質は1を除きすべて硬砂岩である。5はc類、6はd類、1～4はb類に属する。

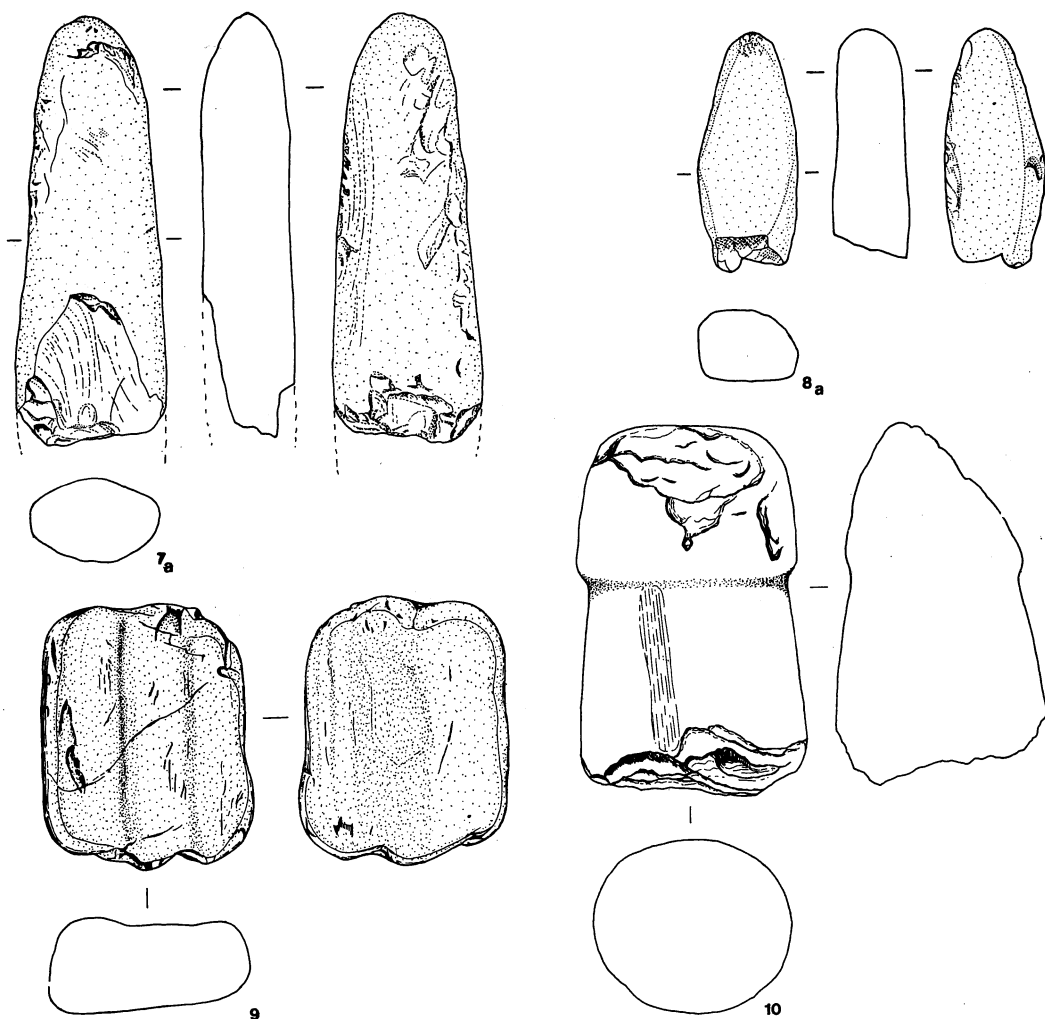
7・8は敲打器のa類でともに欠損品である。7は砂岩製、8は緑泥岩製である。

9は砂岩製の砥石である。中央部に全体的に磨滅がみられる。

10は覆土中に頭を上にして立って出土したもので、その出土状態からして、本住居址に伴うものでないことは明らかで、集落内における屋外祭祀の例と考えたい。石質は花崗岩で、頭部の片面一部に砂損がみられる。胴部のほとんどを欠くため全体の大きさは不明であるが、かなり大きなものと思われる。



第126图 第12号住居址床面出土石器



第127図 第12号住居址出土石器（7～9は床面、10は床面、7・8は $\frac{1}{2}$ 、9・10は $\frac{1}{4}$ ）

## 23 第19号住居址（第128～135図）

### 遺構（第128図）

本住居址は第13号住居址の西にあり、集落内においては最大規模を持つ住居址である。プランは隅丸方形で規模6mを測る。壁はややゆるやかで壁高は高く60～70cmを測る。主軸方向はS-73°-Eである。壁の立ち上がりはゆるやかである。

床面は中心部はほぼ平坦で固いが周辺部は凹凸がみられる。住居址東側床面は壁に沿って幅60～80cm位にわたって10～15cmほど凹んでいる。ローム攪乱上のため、荒掘り後の埋め戻しも考えられる。

周溝は南側にみられる。幅はほぼ一定し、深さは10cm前後である。周溝内には小ピット規則

的にうがたれている。北壁下にも同様に小ピットの存在がみられる。

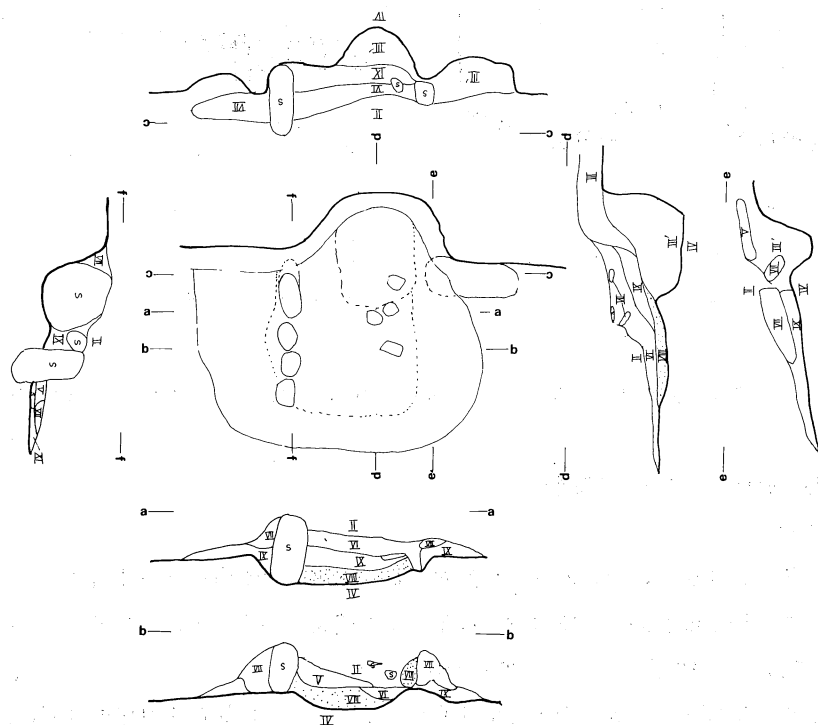
主柱穴はP<sub>2</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>13</sub>の4本と考えられる。主柱穴以外に浅いピットが多くみられるが、用途は不明である。壁外にP<sub>16</sub>～P<sub>27</sub>まで浅いやや広目のピットがみられる。土坑とも考えられるが、壁に沿ってある所から壁外施設の支柱と考えたい。壁外施設の顕著なものとしては、塩尻市平出遺跡の第3号住居址がある。

竈は西壁やや南寄りにあり、一応石心ローム造りである。壁への挟り込みは60°～70°の角度で最高40cm煙道部をU字状に掘り込んでいる。火床面は110×80cmの隅丸方形に掘り込まれ、奥へ行くほど深くなっており、奥壁には50×40cmのピットがみられる。煙道部には特別の施設はない。袖部左側はしっかりとした石組みをロームブロックしているが、右側は偏平な小さな石がロームブロック中にみられるだけである。焼土は燃焼部に10cmほど堆積するが、煙道部にはまったくみられず、暗褐色土が厚く流入している。

#### 遺物（第130～135図）

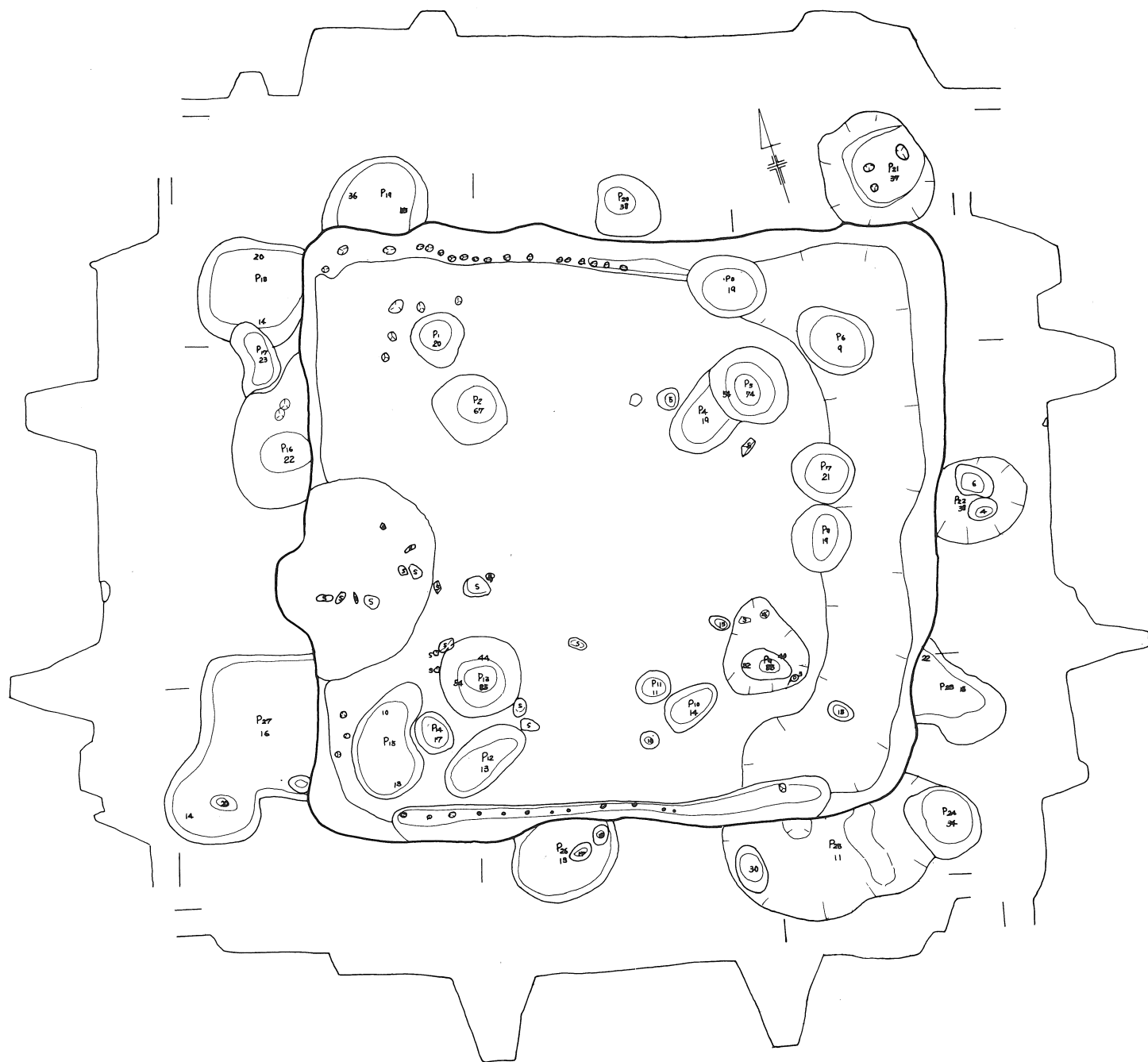
土器は出土土器数量表にみるとおり多い。土師器は甕が主体で、わずかに坏がみられる。須恵器は坏・高台付坏を主体として種類は豊富である。灰釉陶器は二片あるのみである。

1～5はともに土師器の甕で小破片からの図上復元である。1・2とも最大径が胴部にくるもので、口唇から頸部にかけて横ナデがみられる。3は木葉底である。5は1・2に比べると

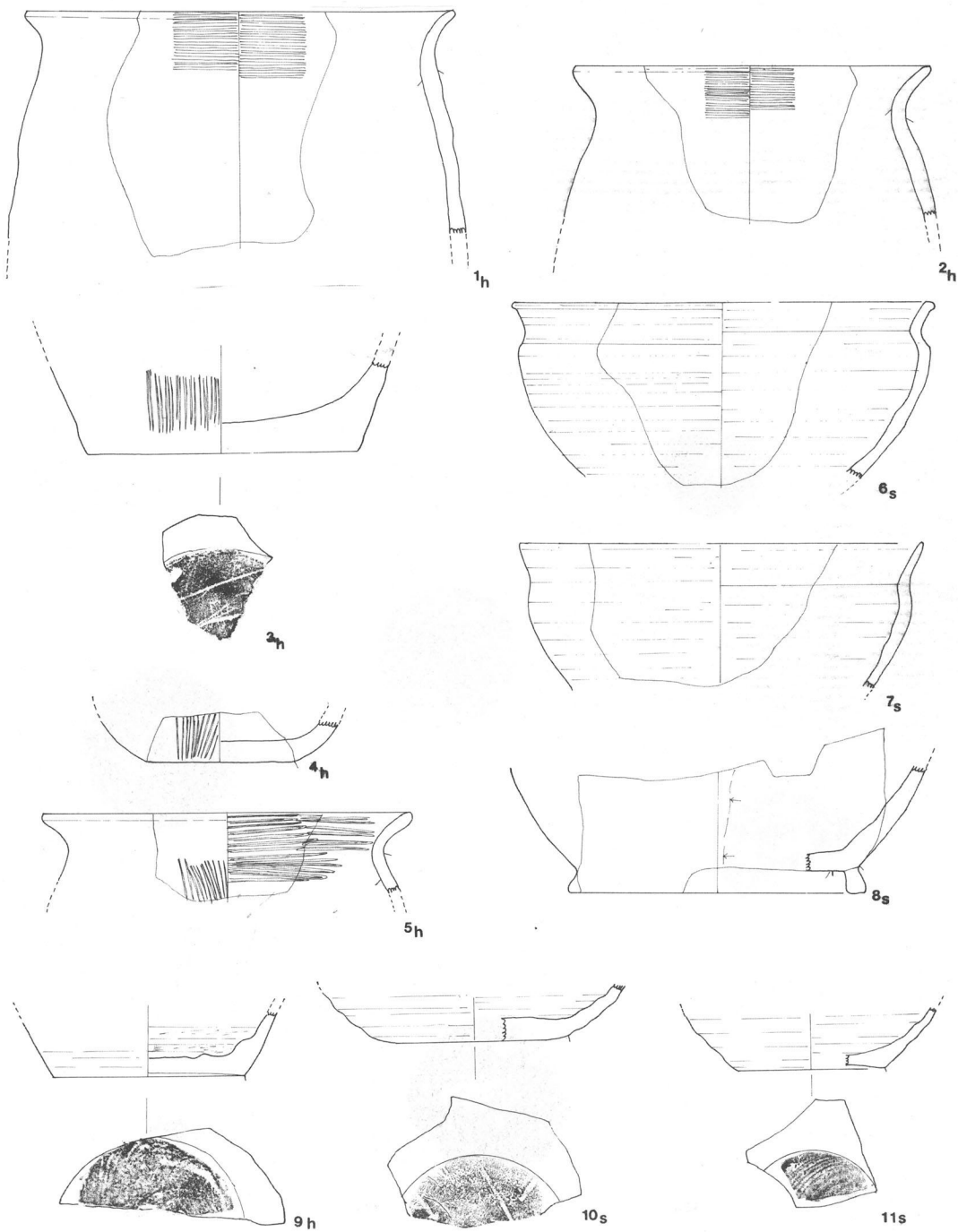


第128図 第19号住居址竈実測図（S = 40）

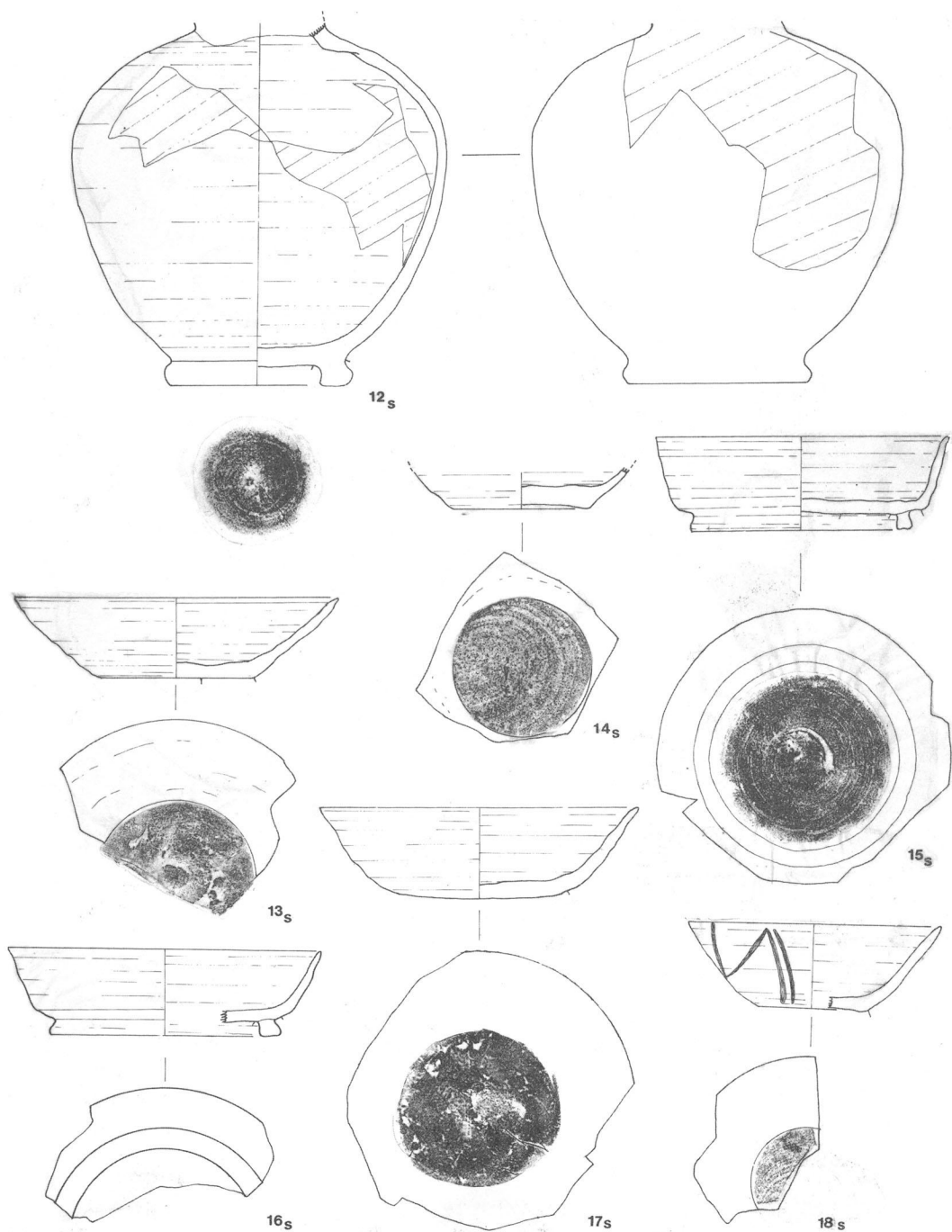




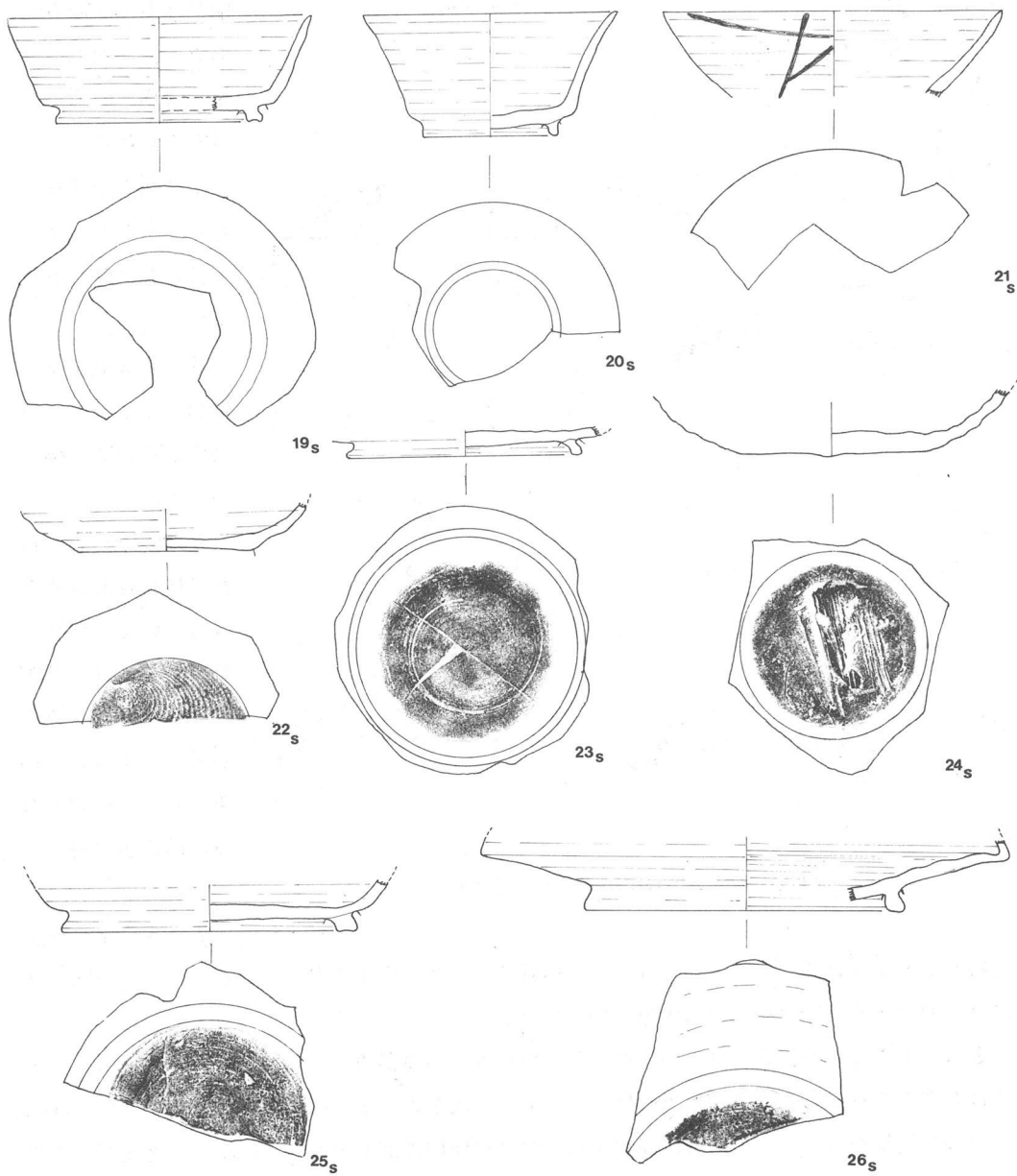
第129図 第19号住居址実測図 ( $S = \frac{1}{60}$ )



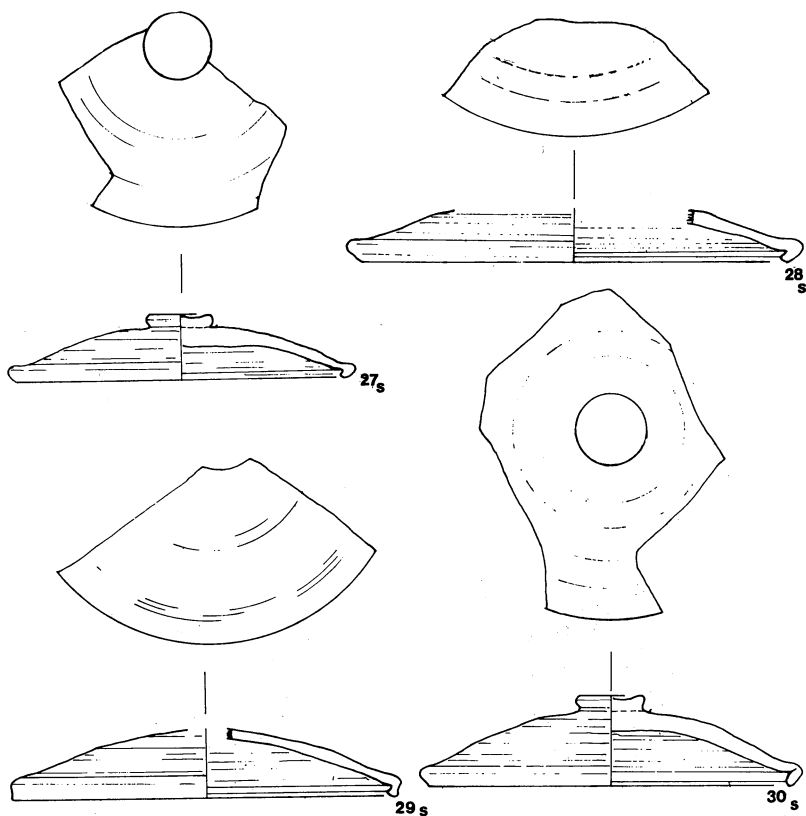
第130図 第19号住居址出土土器 (  $\frac{1}{3}$  )



第131図 第19号住居址出土土器 (1/3)



第132図 第19号住居址出土土器 (  $\frac{1}{3}$  )



第133図 第19号住居址出土土器（ $\frac{1}{3}$ ）

口縁部の屈曲が強い。胴部外面には縦方向のカキ目、内部口縁部には横方向のカキ目がみられる。

1は胎土が非常にち密であるが、2～5はともに砂粒を多く含む。

6・7は須恵器の鉢形土器でともに小破片からの図上復元である。

6は強い屈曲を頸部に持ち肩部は強くはっている。口唇は肥厚稜をみせ、体部は幅広な凹凸をみられる。ロクロは右回転である。砂粒を含み、暗青色に焼かれている。

7は6に比べ屈曲は緩やかとなり肩部の張りはみられない。口唇はやや薄く丸味を滞っている。ロクロの回転方向は不明である。砂粒を含み白灰色を呈している。

8は定かでないが、高台付きの壺形土器と思われ、須恵器である。色調は晴灰色を呈し、胎土はち密である。ロクロの回転方向は不明である。底部の一部に回転糸切り技法を残し、回転ヘラ削り調整がみられる。その後高台を付けロクロ使用の調整を行っている。一部底部にまで調整は及んでいる。

環形土器は多く出土している。9～11、13・14、17・18、21・22、24がそれである。9を除きすべて須恵器である。完形品はまったくない。

9は左回転のロクロを利用したもので、内面には幅広なロクロ痕を残す。砂粒を多く含み、赤褐色を呈している。回転糸切りによる切り離しである。

10は砂粒をわずかに含み、灰白色を呈している。体部下端内外面とも幅広なロクロ痕がみられる。底部は数回にわたる手持のヘラ削りが行われており、切り離し技法は不明である。はっきりしないが、ヘラ器号がみられる。

器形	部分	土師	須恵	灰釉	計
甕	実測	3			3
	口縁	2			2
	体部	42	7	2	51
	底部	6 (内実)			6
坏	実測	1	10		11
	口縁		36		36
	体部		16		16
	底部	3	9		12
高台付	実測		6		6
坏	底部		6		6
鉢	実測		2		2
壺	実測		2		2
	口縁		1		1
盤	実測		1		1
蓋	実測		4		4
	口縁		14		14
	天井		17		17
小計		57	131	2	190

第19号住居址出土土器数量表

11は胎土はち密で暗青色に焼かれている。ロクロの回転方向は不明、切り離し技法は回転糸切りである。体部内外ともに幅広いロクロ痕を残す。

13は3分の1ほどの破片である。右回転のロクロを用い、全体に幅広いロクロ痕を残す。口唇部は尖る。回転ヘラ切りによる切り離し後周辺を数回にわたって丹念に手持ちのヘラで削っている。暗青色を呈し、砂粒をわずかに含んでいる。

14は晴青色を呈し、胎土中には多量の砂粒を含んでいる。右回転のロクロを利用し、底部内面には幅広いロクロ痕を残している。回転糸切りによる切り離しである。

17は口縁部を3分の2ほど欠いている。胎土にはわずかに砂粒を含み、暗青色に焼かれている。体部と底部の境ははっきりしない口唇は内そぎ状で尖っている。体部内外ともに幅広いロクロ痕を残している。ロクロは左回りである。底部切り離し後手持ちのヘラによる数回にわたる整形のため、切り離し技法は不明である。整形は一部体部に及んでいる。

18は4分の1ほど破片からの図上復元である。胎土には砂粒をわずかに含み、暗青色に焼かれている。体部中ほどに強いしめがみられ、口唇は丸味を持っている。体部外面に火だすきがみられる。回転糸切り技法による切り離しがみられるが、ロクロの回転方向は不明である。

21は底部を欠くものである。胎土には砂粒をわずかに含んで暗青色に焼かれている。口唇は尖っており、口唇下に強いしめがみられる。ロクロの回転方向は不明である。18同様、火だすきがみられる。

22は半分ほどの底部破片で、暗青色を呈し、砂粒をわずかに含んでいる。体部には幅広いロクロ痕を残す。底部は回転糸切りによって上げ底を呈している。ロクロの回転は右回りである。

24もやはり底部である。体部と底部の区別は明瞭でなく体部凹凸が激しい。砂粒を含み、暗青色に焼かれている。ロクロは左回転のものを利用している。底部の切り離し技法ははっきりしないがヘラ起しによると思われる。切り離し後一方向のヘラ削りを行うも凸をすべて削りきっていない。底部縁辺には5～6回の手持ちヘラ削が行われている。

12は高台付の壺形土器で口頸部を欠くため長頸壺と思われるがはっきりしない。胴上部に最大径を持つ。胎土中には砂粒を多く含み、大粒なものを多くみられる。色調は黒青色で一部紫がかっている。高台は厚くしっかりとしている。ロクロは左回転である。底部の切り離し技法は回転ヘラ削りのため不明である。高台を付けた後回転利用の横ナデ調整を行い、底部周辺まで及んでいる。

15・16、19・20、22・23、25はともに須恵器の高台付坏形土器である。坏形土器同様完形品

はない。

15は口縁部を半分ほど欠いている。胎土には砂粒を含み黒青色に焼かれている。体部は直に近い立ち上がりを見せ、高台部はやや内湾する。幅広いロクロ痕がみられ口唇は丸味を持っている。高台はやや外反する台形で底面中央はわずかに凹んでいる。ロクロは右回転である。切り離しは回転糸切り技法で行われ、回転ヘラ削りにする調整が行われるが中央部が凹みのため達していない。高台付け後、回転利用の横ナデが行われ、底部の周辺と体部にまで調整が及んでいる。

16は全体の4分の1ほどしかない。砂粒を含んで暗青色に焼かれている。口唇は尖りぎみで口唇下に強いシメがみられる。高台は厚くしっかりとし外反している。ロクロの回転方向は不明である。回転ヘラ削りによって切り離し技法は不明である。高台付後回転利用の横ナデが行われている。

19は砂粒を含み黒青色を呈している。口唇は尖りぎみで体中央部には強いシメがみられる。高台は厚くしっかりとし外反する。ロクロの回転方向は不明である。切り離し後の回転利用のヘラ削りのため切り離し技法は明確でない。高台付けの後両側面を回転利用の横ナデを行っている。

20は約半分ほどからの図上復元である。胎土には砂粒を含み暗灰色に焼かれている。中央部が下がる底部から体部は内反りとなって口唇に致る。高台は全体にひ弱で内面は上がっている。一応坏の部類に入れたがあまり類例をみないものである。回転ヘラ削りのため切り離し技法は不明である。ロクロの回転方向も不明である。高台付後回転利用の横ナデを面側面に行っている。

23・25は底部である。23は暗青色を呈し砂粒を胎土に含む。底部中央は肥厚しやや下げ底ぎみとなっている。高台は細く強く外反する。ロクロは右回転である。切り離し技法は回転ヘラ削りのため不明である。

25は砂粒を含んで暗青色に焼かれている。高台は厚くどっしりとし外反している。底部中央は肥厚し内面は高くなる。右回転のロクロを用いている。回転ヘラ削りの後、底部周辺を回転ヘラ削りによって整形し、高台をつけている。高台両側面には回転利用の横ナデがみられる。

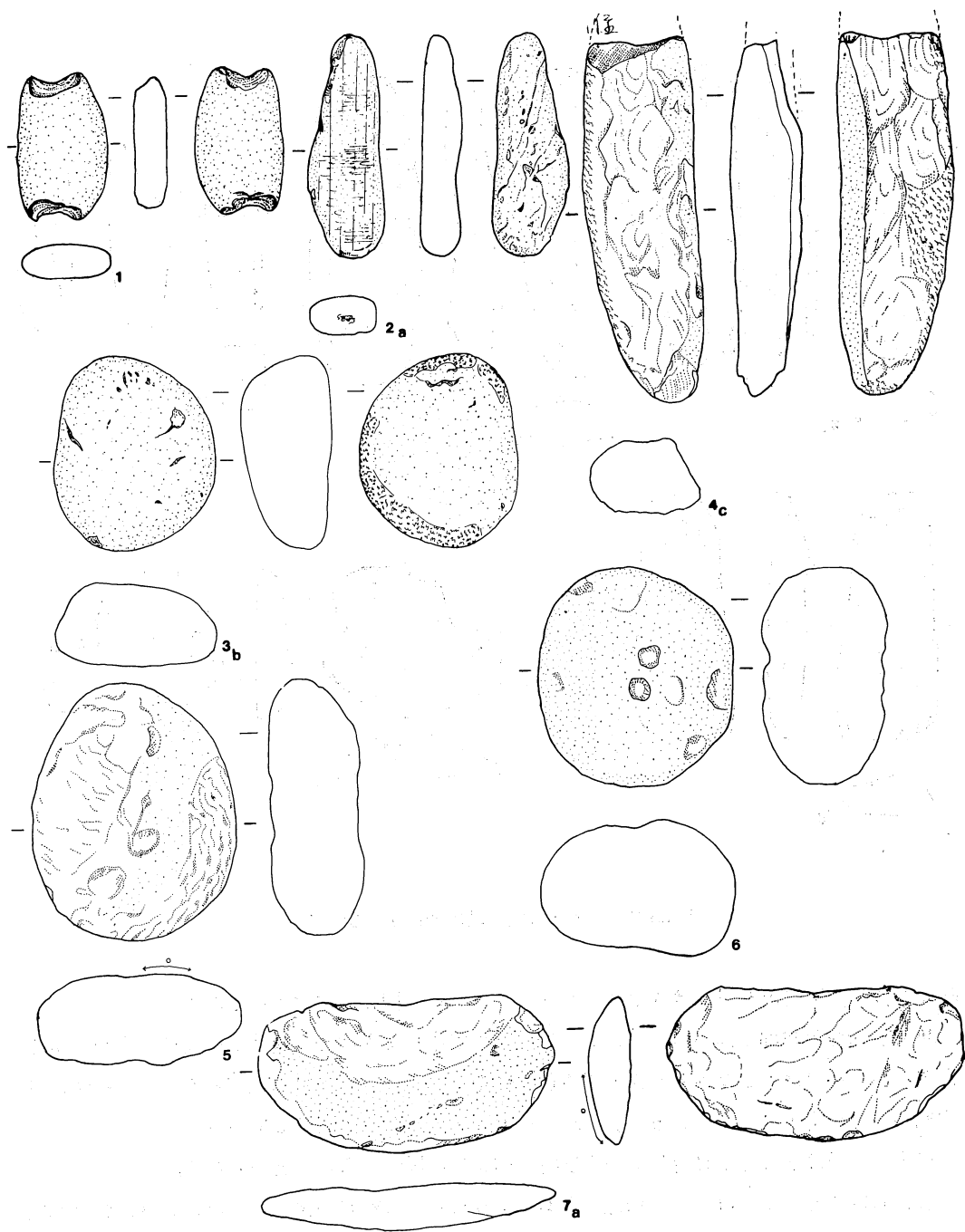
26は図上復元による盤である。高台は厚くふんばりは強い。底部は下げ底で体部中位にて直角に内湾する。内面は幅広い凹凸が激しい。胎土には砂粒を含み、暗青色に焼かれている。ロクロは左回転である。回転ヘラ削りがみられ、切り離し技法は不明である。高台付け後、両側面を回転利用の横ナデしている。

27～30はともに須恵器の蓋で破片からの図上復元のみで完形品はない。

27は暗青色を呈し胎土には砂粒を含む。鈕は薄く中央部は凹む。天井部中央は肥厚し口縁にかけて薄くなり、返しは強い。ロクロは右回転である。

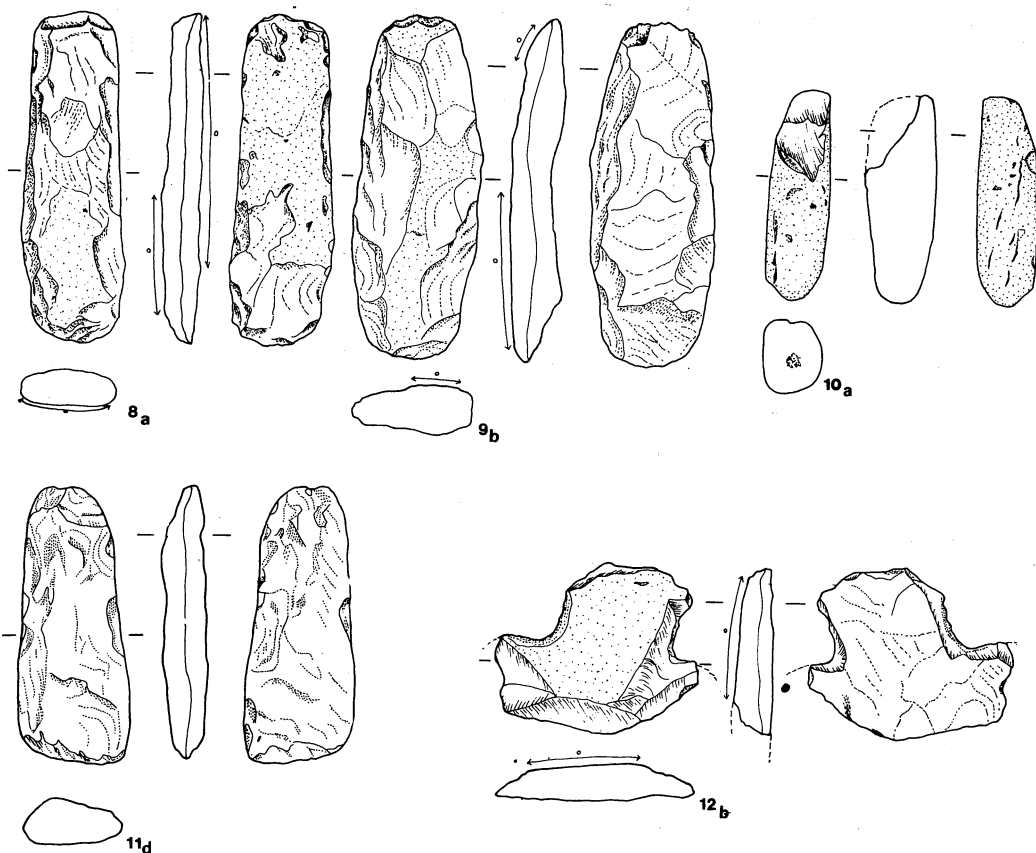
28は全体を想定でき得ないが、天井部が低いものである。返しは強いほうである。ロクロは左回転である。砂粒を含んで暗青色に焼かれている。

29は天井部が高いものである。器厚はほぼ一定し、天井部はゆるやかな内湾をみせている。



第134図 第19号住居址覆土出土石器 (1/3)





第135図 第19号住居址床面出土土器（ $\frac{1}{3}$ ）

砂粒を含み、灰白色を呈し焼きはやわらかい。ロクロの回転方向は不明である。

30も29同様天井部が高いものである。鈕は偏平で中央部が凹む。天井部中央部はやや天担である。胎土中には大きな砂粒を含み黒青色に焼かれている。ロクロは左回転である。鈕付け後回転利用の横ナデを行っている。29・30とも天井部を回転ヘラ削りしている。

以上の土器は総じて奈良時代末～平安時代初頭に位置づけられると思われる。

次に石器であるが、覆土より10点、床面上より11点の計21点が出土している。第134・135図に見る如く、縄文時代中期に所属すべき石器であり、またこの住居址の所属時代にこのような石器が伴うという例もあまり知らないので、床面出土のものも含めて当住居址に供伴するとは考えにくい。今後の問題として参考にとすることとする。

出土石器の内訳は覆土出土のものとしては、打製石斧2点、磨製乳棒状石斧1点、石錘1、敲打器a類・b類・c類各1点ずつ、凹石2点、横刃形石器1点である。打製石斧はともに短冊形の頭部のみのものである。磨製乳棒状石斧もやはり頭部のみである。

床面からは、打製石斧 9 点、敲打器 a 類 1 点、大形粗製石匙 1 点が出土している。9 点の打製石斧のうち完形品は 3 点のみである。短冊形が多く 8 点、撓形は 1 点である。石質は硬砂岩 7 点、緑泥岩・緑泥片岩 1 点ずつである。

その他、剥片として覆土より硬砂岩のもの 4 点、砂岩 2 点、床面より硬砂岩 1 点、緑泥岩 2 点が出土している。

第134図は覆土出土のもの第135図は床面出土のものである。

1 は縦形の礫石錘で硬砂岩製である。2～4 は敲打器で 2 は a 類、3 は b 類、4 は c 類である。石質は 2 は砂岩、3・4 は緑泥岩である。5・6 は凹石である。ともに橢円形に磨り上げている。5 は砂岩製、6 は硬砂岩製である。7 は硬砂岩製の横刃形石器で a 類である。

8・9・11 は硬砂岩製の打製石斧で、ともに短冊形である。8 は a 類、9 は b 類、11 は d 類である。10 は細長い自然石の一端を利用した敲打器 a 類で砂岩製である。12 は刃部を欠く横形の大形粗製石匙で硬砂岩製である。片面に自然面を残した b 類である。

## 24 第20号住居址（第136～142図）

### 遺構（第136図）

本住居址は、第13・19号住居址の南に位置し、東側には土坑が密集している。プランはほぼ橢円形を呈し、大きさは  $8 \times 7$  m を測る。壁高は 15cm 位で南では確認できなかった。床面は北東部分がやや高くなるが全体に平坦で固く良好である。住居址の主軸は  $N-34^{\circ}-W$  である。

炉は住居址中央やや北寄りに位置し、石組み炉である。炉石は北側を除いて抜かれているためプラン、大きさは不明である。現掘り方の大きさは  $125 \times 95$  cm を測り、橢円形で底は舟底形である。底部に厚さ 4～5 cm の焼土がみられる。床面上には数多くのピットがみられる。主柱穴は  $P_1 \cdot P_2$ 、 $P_5$ 、 $P_{21} \cdot P_{20}$ 、 $P_{25} \cdot P_{26}$ 、 $P_{28}$ 、 $P_{45} \cdot P_{46}$  の 6 本と考えられるが、 $P_{51}$  などとも該当するかも知れない。炉の動きはないが、柱からすると建て替えないし拡張も考えられるがはっきりしない。主柱穴と考えられる以外のピットは住居址の間仕切りとも考えられる。

炉の東側、 $P_4$  の北西床面上より第142図の片面に多孔のある石皿が出土している。

### 遺物（第137～142図）

土器・石器とも出土量が多い。住居址が浅いため覆土と床面との区別は他の住居址に比べて明確でない。

覆土出土の土器と床面出土土器との間には時間差はほとんどない。

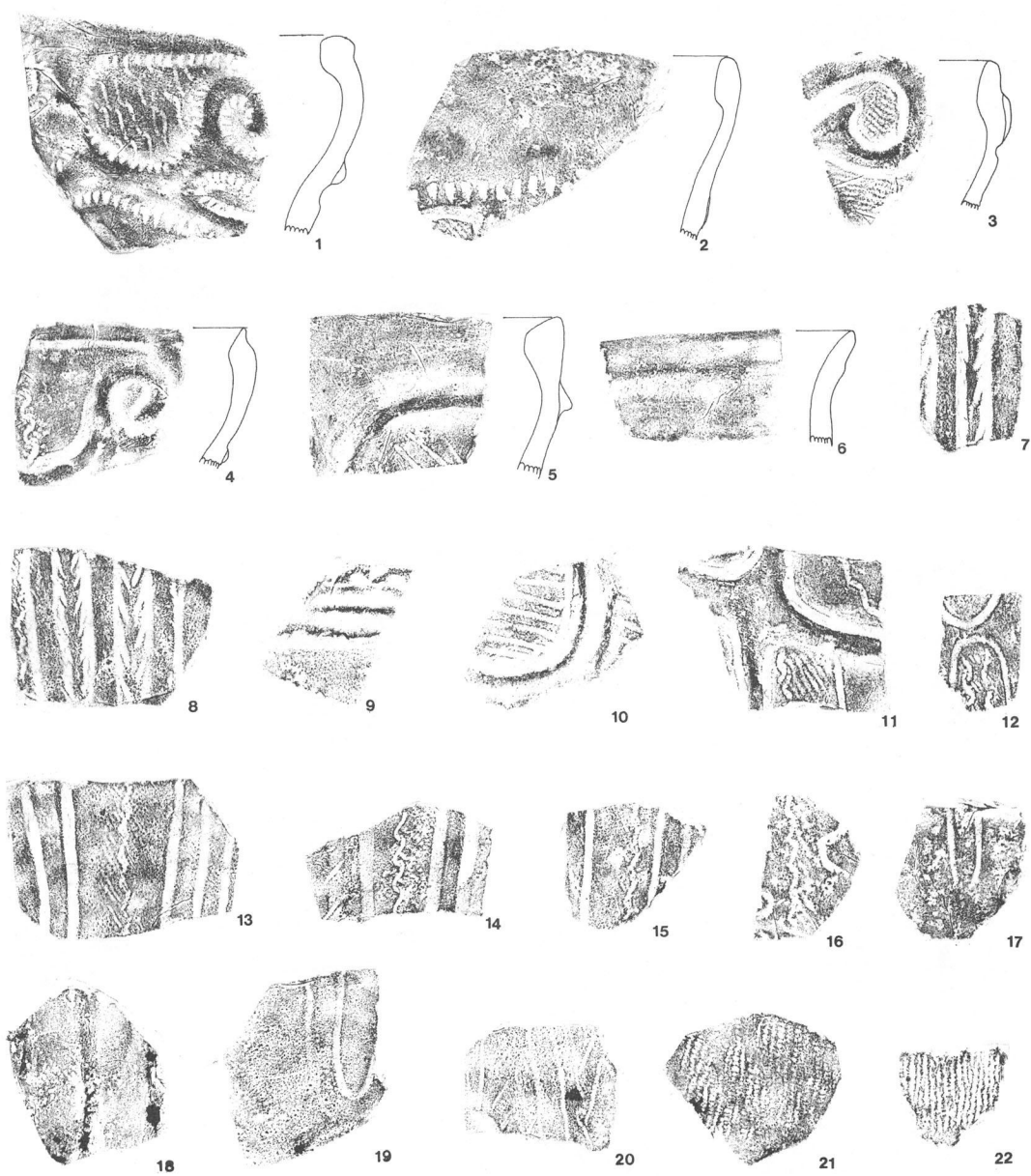
第137図は覆土出土のものである。4、11～17 は結節縄文を持つもので伊那谷南部における、この時期の特徴的な土器である。1・3、4・11 などの口縁部文様は加曽利 E の様相が強い。17・19・20 はやや後出するものであろう。

床面出土土器は第138・139図がそれである。大別して縄文を持つものとそうでないものとに分けることができる。28・37・46・48～51 は結節縄文を持つ一群である。

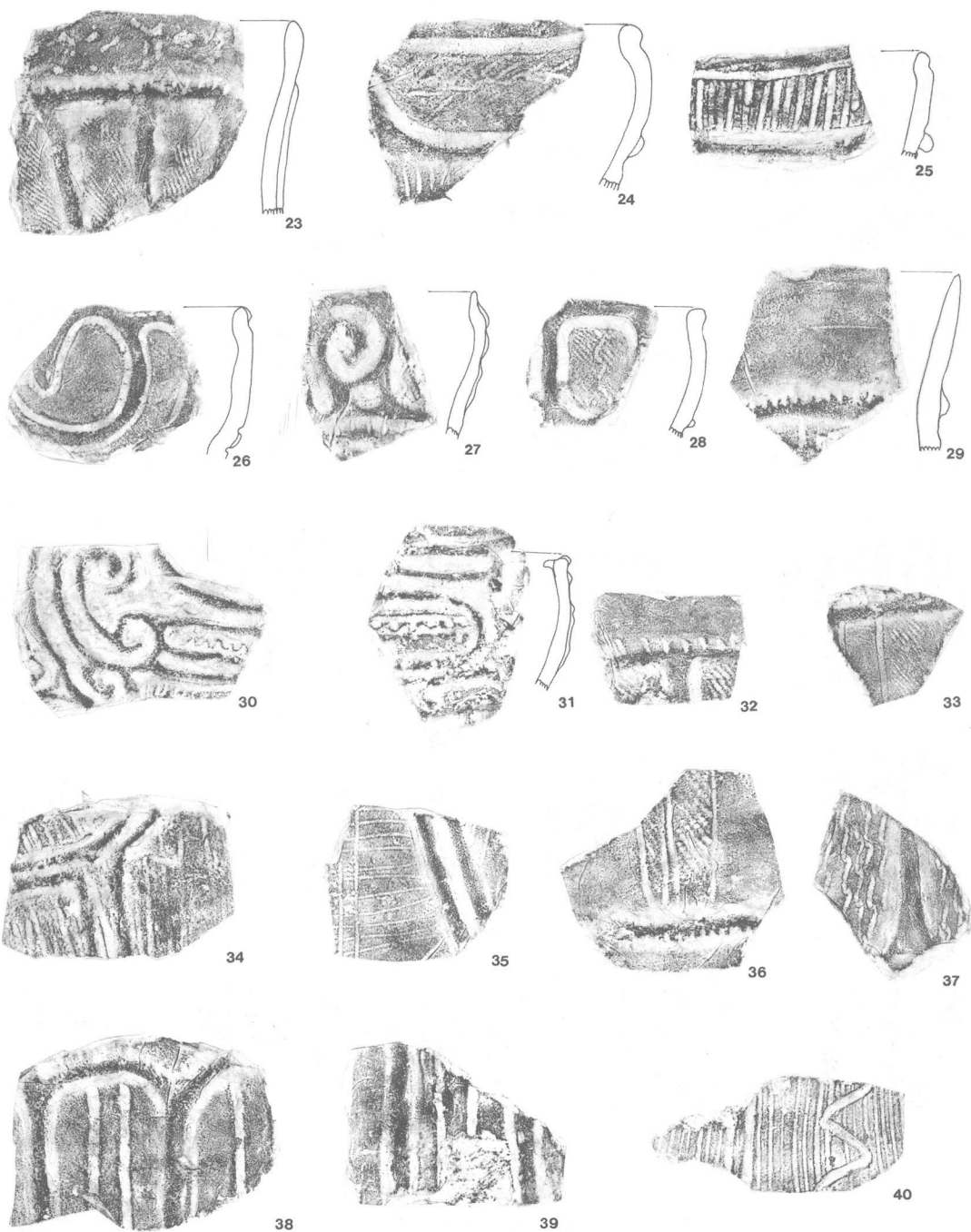
30・31・41 のように若干古い要素を持つものもあるが、曾利Ⅲ式期に比定される。



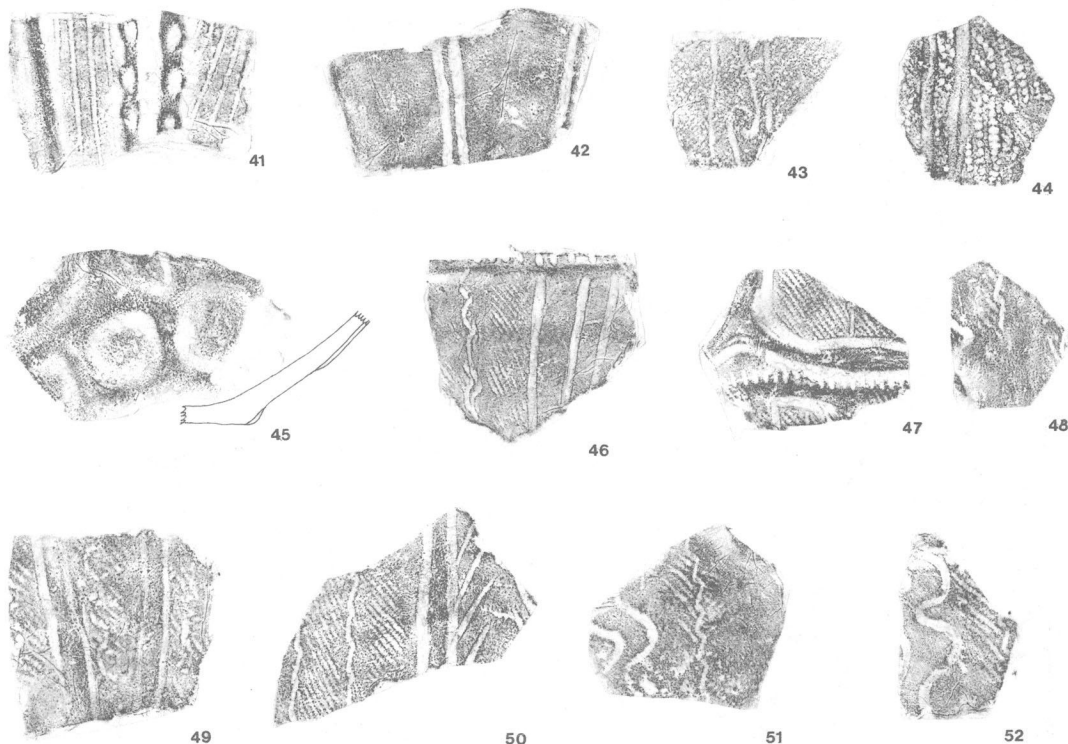
第136图 第20号住居址実测图 (S =  $\frac{1}{60}$ )



第137図 第20号住居址覆土出土土器 (  $\frac{1}{3}$  )



第138図 第20号住居址床面出土土器（ $\frac{1}{3}$ ）



第139図 第20号住居址床面出土土器（す）

石器は全部で33点出土している。覆土出土のものは6点だけである。

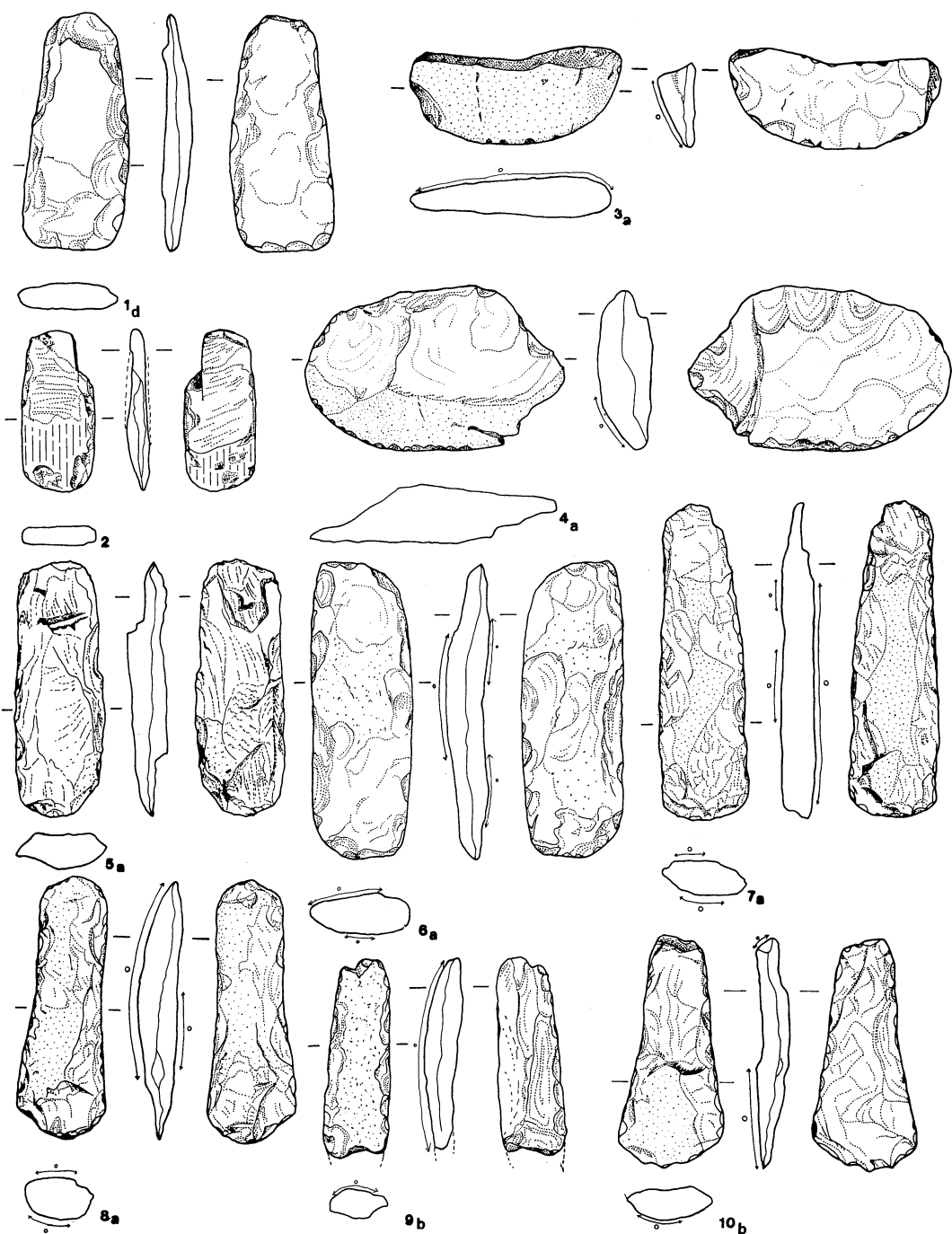
覆土出土石器の内訳は、打製石斧3点、磨製定角石斧1点、横刃形石器2点である。打製石斧はともに短冊形で、完形品は1点だけである。

床面出土石器の内訳は、打製石斧18点、磨製定角・乳棒状石斧各1点、大形粗製石匙3点、磨石・磨き石・横刃形石器各1点ずつ、それと石皿多孔石1点である。18点の打製石斧のうち完形品は8点である。形態別は撓形、分胴形各1点の外はすべて短冊形である。大形粗製石匙のうち完形品1点のみで縦形のものは2点、横形のもの1点となっている。

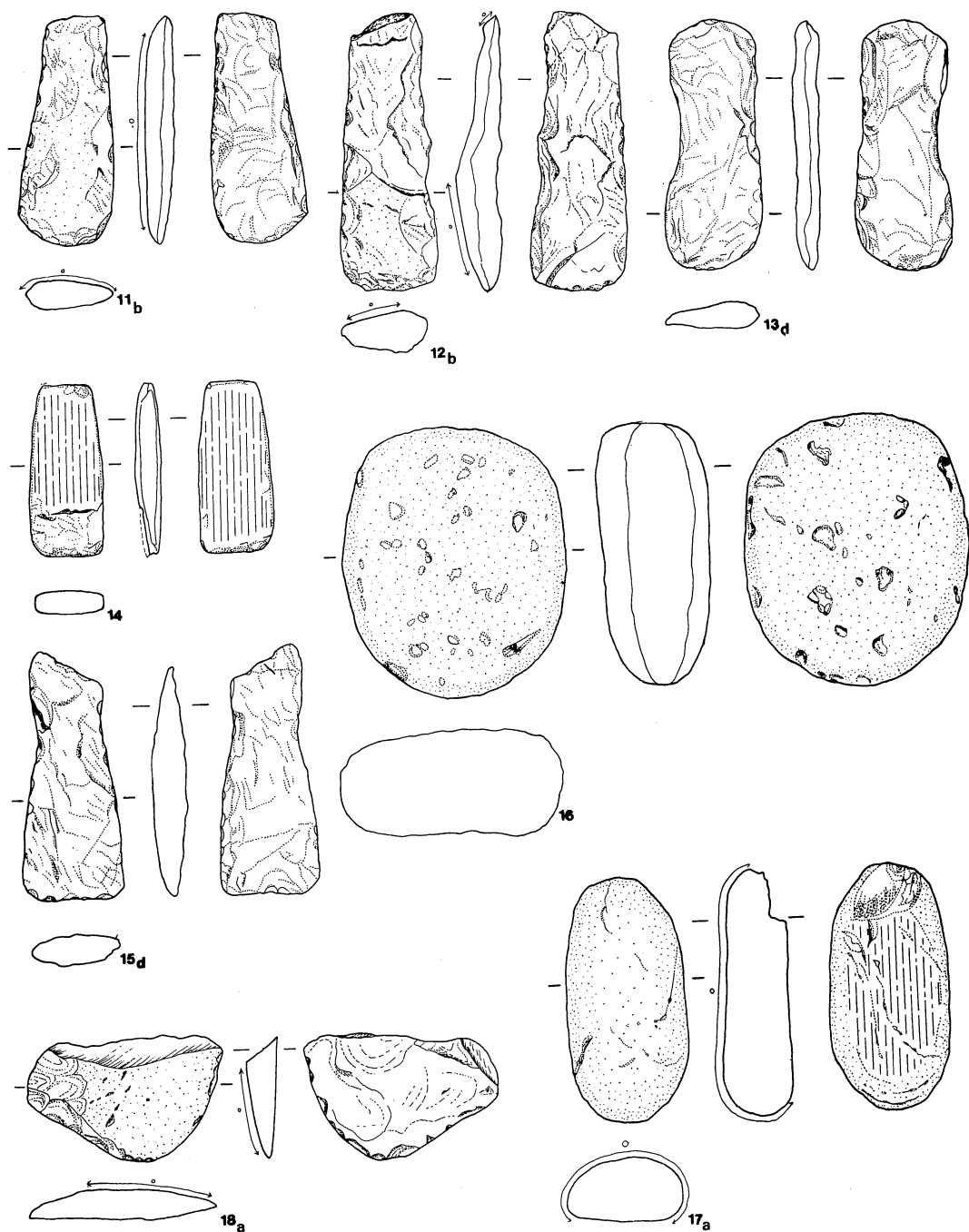
他に覆土中より硬砂岩の剥片7点、床面より硬砂岩の剥片30片、砂岩のもの1片、緑泥岩のもの3片が出土している。

第140図ー1～4は覆土出土のもの、他は床面出土のものである。

1、5～13は打製石斧である。10は撓形、13は分銅形、他は短冊形である。分銅形とした13は央部のくびれが片辺のみであり、挟入石斧とした方が良いかも知れない。5～8はa類、9～12はb類、1・13はd類である。石質は1・6、10～13が硬砂岩、5・8は緑泥片岩、7は凝灰岩、9は緑泥岩である。

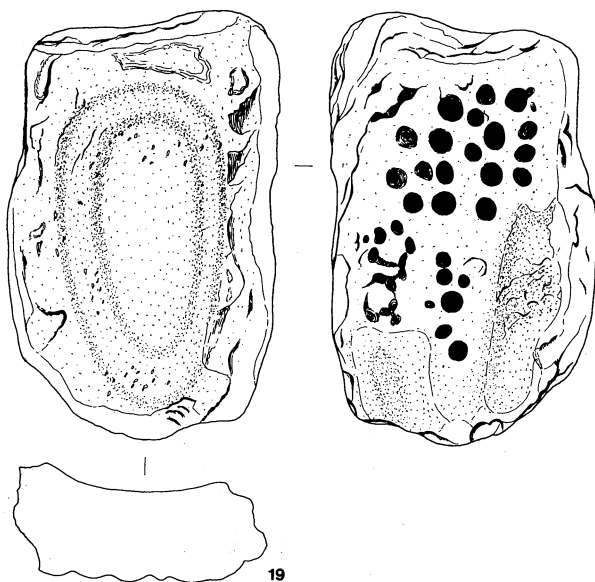


第140図 第20号住居址出土石器（ $\frac{1}{3}$ 、1～4は覆土、5～10は床面出土）



第141图 第20号住居址床面出土石器 (1/3)





第142図 第20号住居址床面出土石皿多孔石(1/4)

2・14は磨製定角石斧でともに緑泥岩製である。2は頭部片面が欠損し、片面は自然面のままで磨かれていない。14は刃部を若干欠いている。

15は縦形の粗製石匙としたが、調整はあまり良くなく抉入石斧と考えても良い。石質は硬砂岩である。

16は磨石で花崗岩製である。

17は硬砂岩の平坦面を磨いた磨き石でa類である。

3・14、18は横刃形石器でともに硬砂岩製である。すべて片面に自然面を持つa類である。

19は名称をつけ難いものである。石皿の裏面に多孔したものである。当遺跡では土坑85より1点出土しているが類例を知らないものである。方形に近い花崗岩の自然石を用いている。石皿

部分はかなり凹面を作っておりかなり使用されたことがうかがえる。裏面の孔はある程度列をなしてうがたれており穴も深いものが多い。このように異なった機能を持つ石器を一つのものにしてあることにはそこに何らかの利点があるものと考えたい。今後の類例の増加を待ちたい。

## 25 第27号住居址（第143～147図）

### 遺構（第143・144図）

本住居址は第28号住居址の北側に位置している。プランは不整であるが隅丸長方形である。大きさは5.6(5.2)×5.0mを測る。住居址の主軸方向はS-63°-Eである。

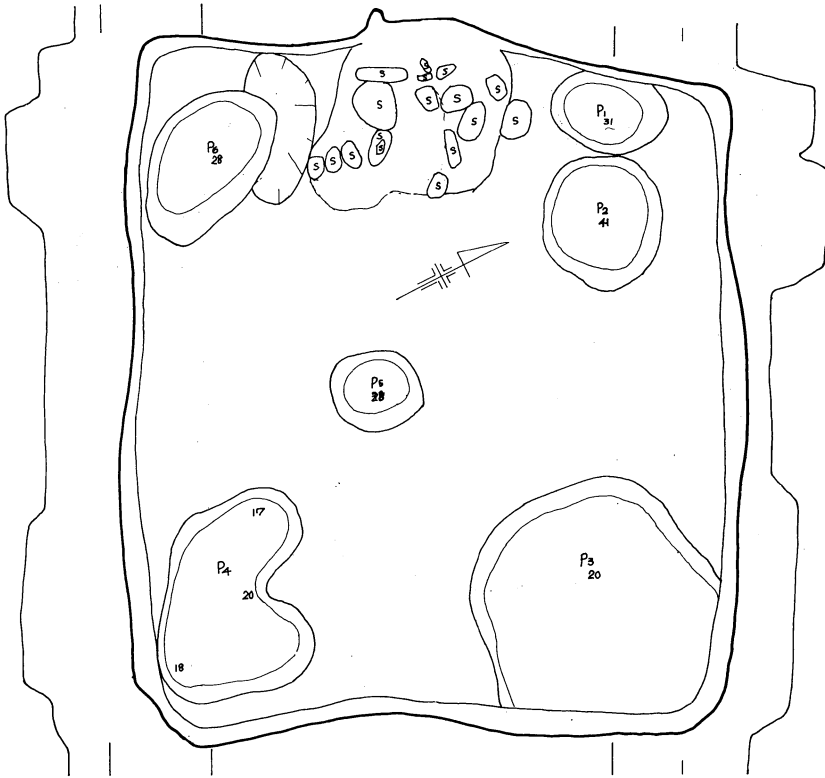
壁高は南東部が低く20cm前後で、他は30cm前後を測る。壁の立ち上がりは北壁及び西壁は直に近いが他はややゆるやかである。

床面はやや凹凸がみられ、全体に軟弱さみである。

主柱穴はP<sub>2</sub>・P<sub>6</sub>の2本が考えられる。北東部と南東部には浅い不整形の大きなピットがあるのみで主柱穴とするに考えにくい。柱が2本ということは問題が残る。

竈は東壁ほぼ中央にあり、全体的に壁をわずかに挟り、南側はU字状に切れ込んでいる。挟り部の壁の角度は直に近いものである。竈の袖部は前面に出ており煙道部も大方が住居址内に構築されている。

火床面の掘り込みは120×60cmの楕円形を呈し、舟底状で煙道部は床面を利用し30度の角度となっている。掘り込みの最も深い所で20cmを測る。



第143図 第27号住居址実測図 (S =  $\frac{1}{60}$ )

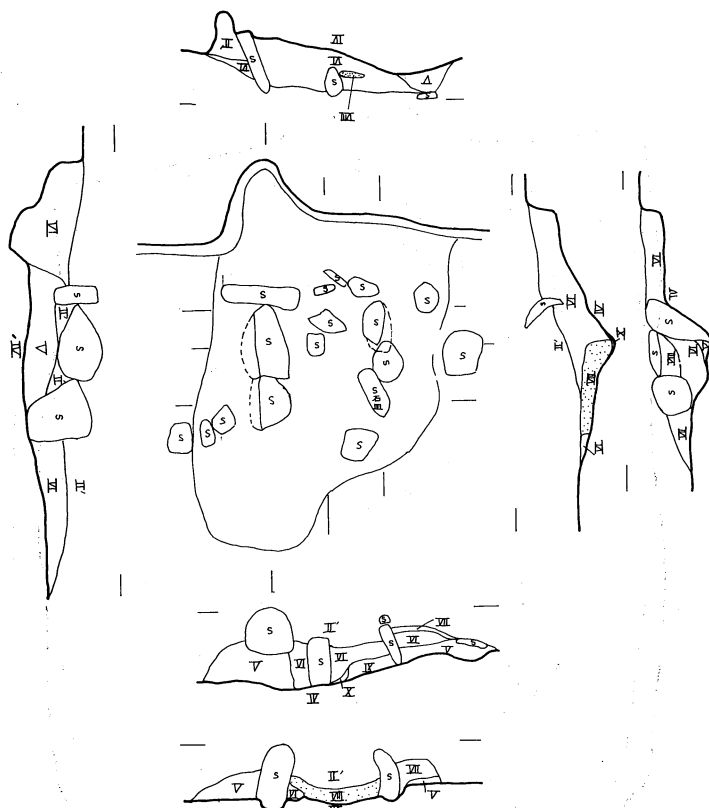
袖部は石心造りである。左袖部は3個の自然石からなっている。両わきの石を縦長にすべ、中央部の石はそれらにもたせるようにのせたものでそのまわりは黒色土とローム粒でブロック状に固めている。右袖部も左袖部と同様な石の組み方をしており、前面はローム、後方は下部をローム粒と黒色土の混合土を用い上部にロームブロックを用いている。図示した如く石皿を割って袖石に利用している。

燃焼部中央やや左側に角柱に近い自然石が支石としてすえられている。

焼土は燃焼部前面に8cm前後の堆積をみせ、煙道部は黒色土とローム粒、焼土の混合土が充填している。天井部はロームブロックでなく、袖部同様黒色土とローム粒の混合土からなっていたものと思われる。

#### 遺物 (第145～147図)

出土土器は数量表にみるとおり非常に少ない。土師器は甕形土器だけである。須恵器は土師器に比べると少なく10片5個体分だけである。



第144図 第27号住居址竈実測図 (S =  $\frac{1}{40}$ )

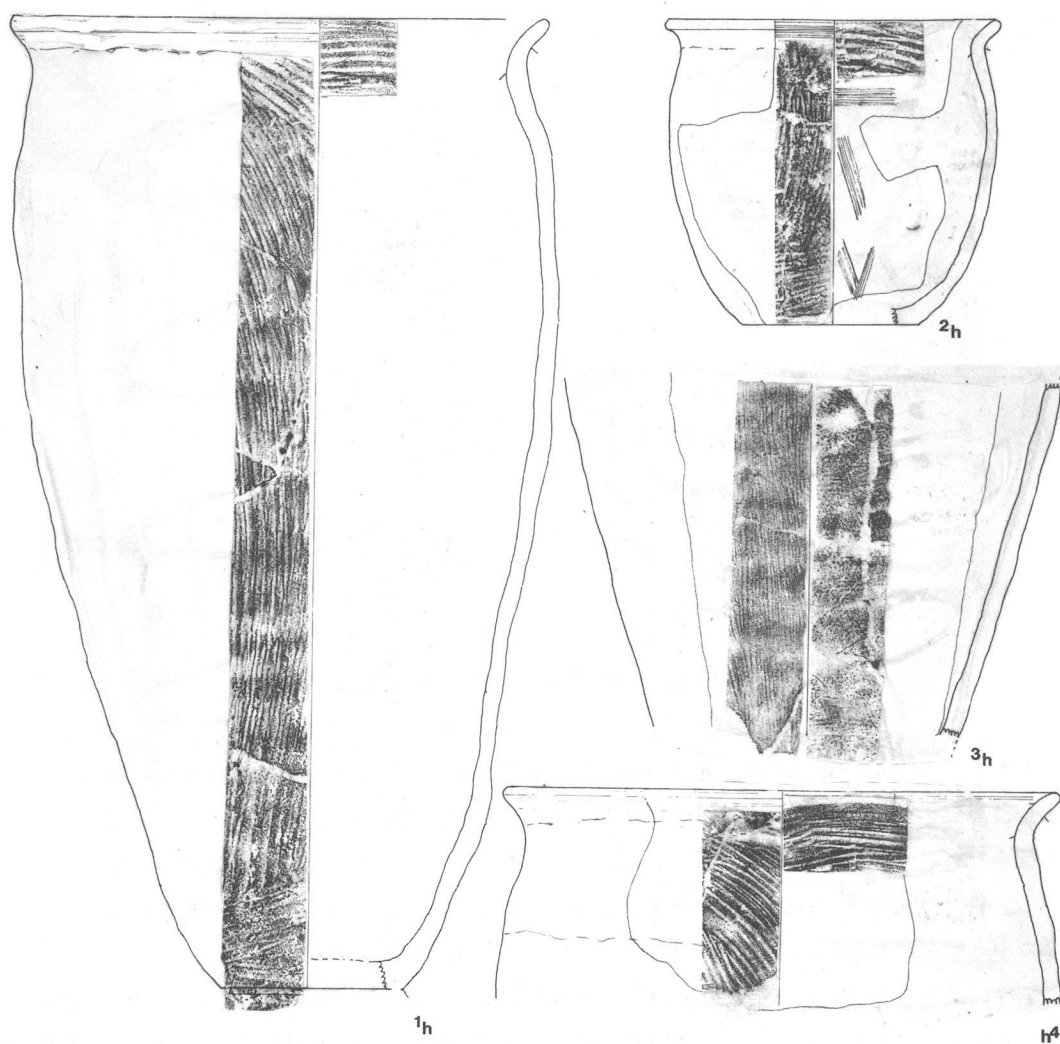
器形	部分	土師	須恵	小計
甕	実測	4		4
	口縁	1	2	3
	胴部	20		20
	底部	3		3
坏	実測		1	1
	口		1	1
高台付坏	底		1	1
蓋	実測		2	2
小計		28	7	35

第27号住居址出土土器  
数量表

1～4は土師器の甕形土器である。1はいわゆる烏帽子形のものである。胎土にはわずかに砂粒を含み、黄褐色に焼かれている。口縁の外反はあまり強くない。器厚はほぼ一定するが、凹凸が激しい。底部はほんのわずかしかない。外面口唇部には横ナデが施され、頸部から胴部にかけては縦方向のハケ目が6段にわたって行われ、底部付近は右上か左下にかけてハケ目が施される。内面は口頸部に横位のカキ目が施され、胴部には簡単な横方向の幅広いヘラなでつけがみられる。

2はずんぐりとした小形甕で、口唇部は外面に丸味をつけている。胎土はち密で黒褐色、一部赤褐色に固く焼かれている。外面口唇部には横ナデがみられ、頸部から胴部にはやや斜走するが縦方向の底部付近は右上か左下にかけて横位に近いハケ目が施される。内面口唇部には横位のハケ目が、胴部にはときおり、横位あるいは方向の一定しない斜走のハケ目が施される。

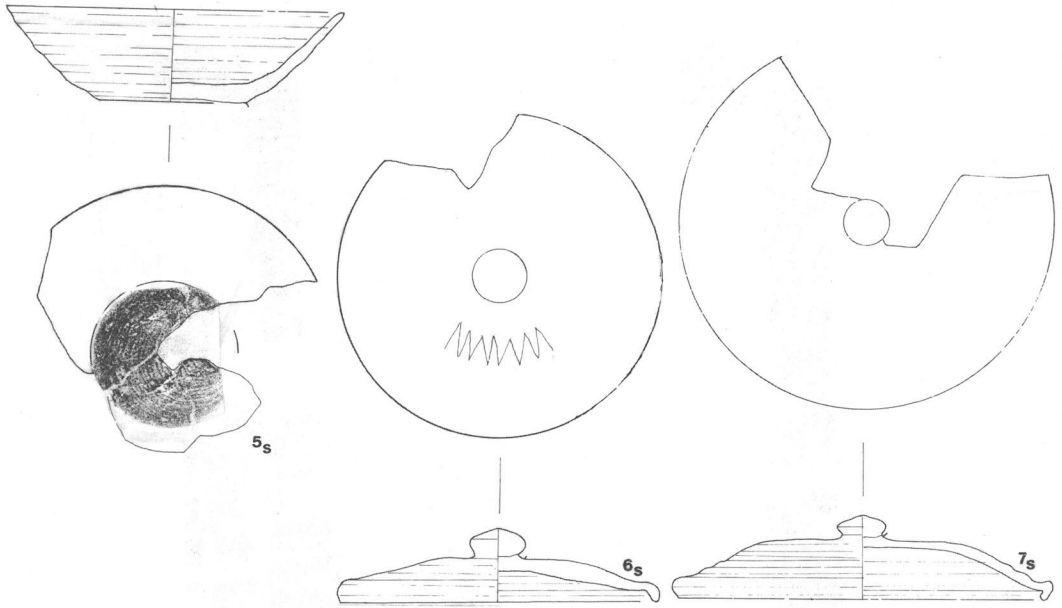
3は胴部破片である。砂粒をかなり含んで褐色に焼かれている。器厚は一定するも凹凸がみられる。外面には縦位のハケ目、内面は横位のハケ目が施される。



第145図 第27号住居址出土土器（ $\frac{1}{3}$ ）

4 は口縁部のみである。口縁の外反はあまり強くない。口唇はやや薄くなって丸味を持つ。胎土はち密で赤褐色に焼かれている。口唇内外には横ナデがみられ外面は頸部まで及んでいる。胴部外面には左上から右下にかけてハケ目が施される。内面頸部には横位の数回にわたるハケ目が施される。

5 は須恵器の坏である。砂を多量に含み灰白色に焼かれている。焼きはあまり良くなく土師器を思わせる。底は回転糸切りが深く入ったため上げ底となっている。ロクロは右回転のものを利用している。



第146図 第27号住居址出土土器（ $\frac{1}{3}$ ）

6・7は須恵器の蓋である。6は口縁部をわずかに欠くものである。胎土はち密で灰白色、上部は黒褐色に焼かれている。鈕は宝珠形で高い。器厚は天井部中央にて厚くなり下端はシメが強く行われ、下端部を簡単に曲げて口縁部としている。中央に一周する鉅齒状文が施されている。鈕付け後測面に回転利用の横ナデを行っている。ロクロの回転方向は不明である。なお中扉に載せた拓影図の如く印刻文がみられる。文様の解釈はそれぞれある。

7は口縁部を3分の1ほど欠くもので、暗青色を呈し、胎土はち密である。鈕は宝珠形である。6に比べて天井部は高くなっている。器厚はほぼ一定し、中心部はほぼ平らである。天井部下端部外面は凹凸が激しい。ロクロは右回転のものを利用している。6・7とも天井部を回転ヘラ削りしている。

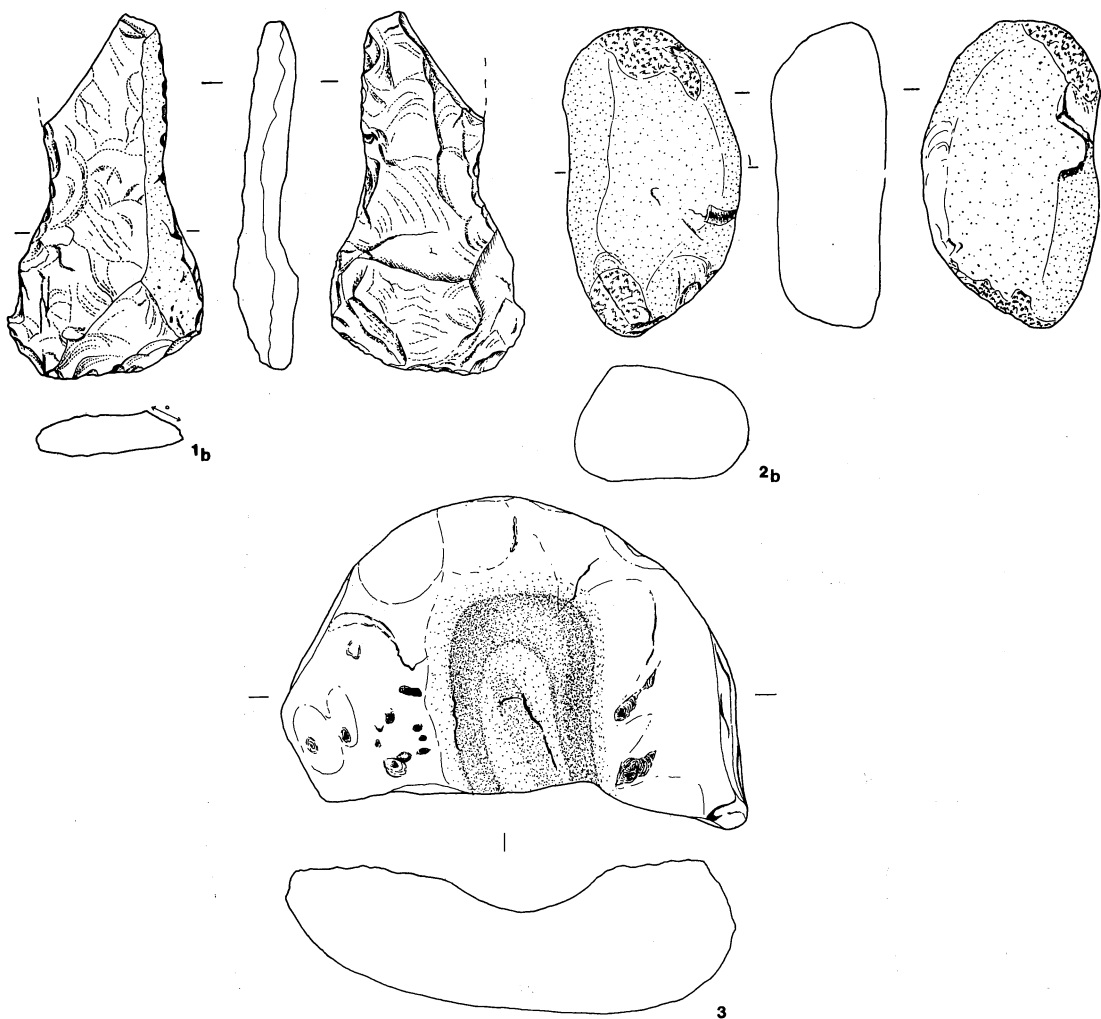
以上述べてきた土器は奈良時代後半に位置づけられるであろう。

覆土中より打製石斧と敲打器各1点ずつが出土している。多分混入したもので当住居址に伴うものではないと思われる。また竈袖石に石皿の半分が利用されていた。

1は分胴形の打製石斧で石質は硬砂岩である。頭部の一部を欠いている。測面に近い部分に自然面を残しておりb類である。

2は緑泥岩の2端を使った敲打器でb類である。

3は竈右袖部の袖石に利用されていた石皿である。ほぼ中央から割って用いている。かなり使用されたものらしく大分凹んでいる。石質は花崗岩である。



第147図 第27号住居址出土石器（1・2は $\frac{1}{3}$ 、3は $\frac{1}{6}$ 、1～2は覆土出土、3は竈袖石利用）

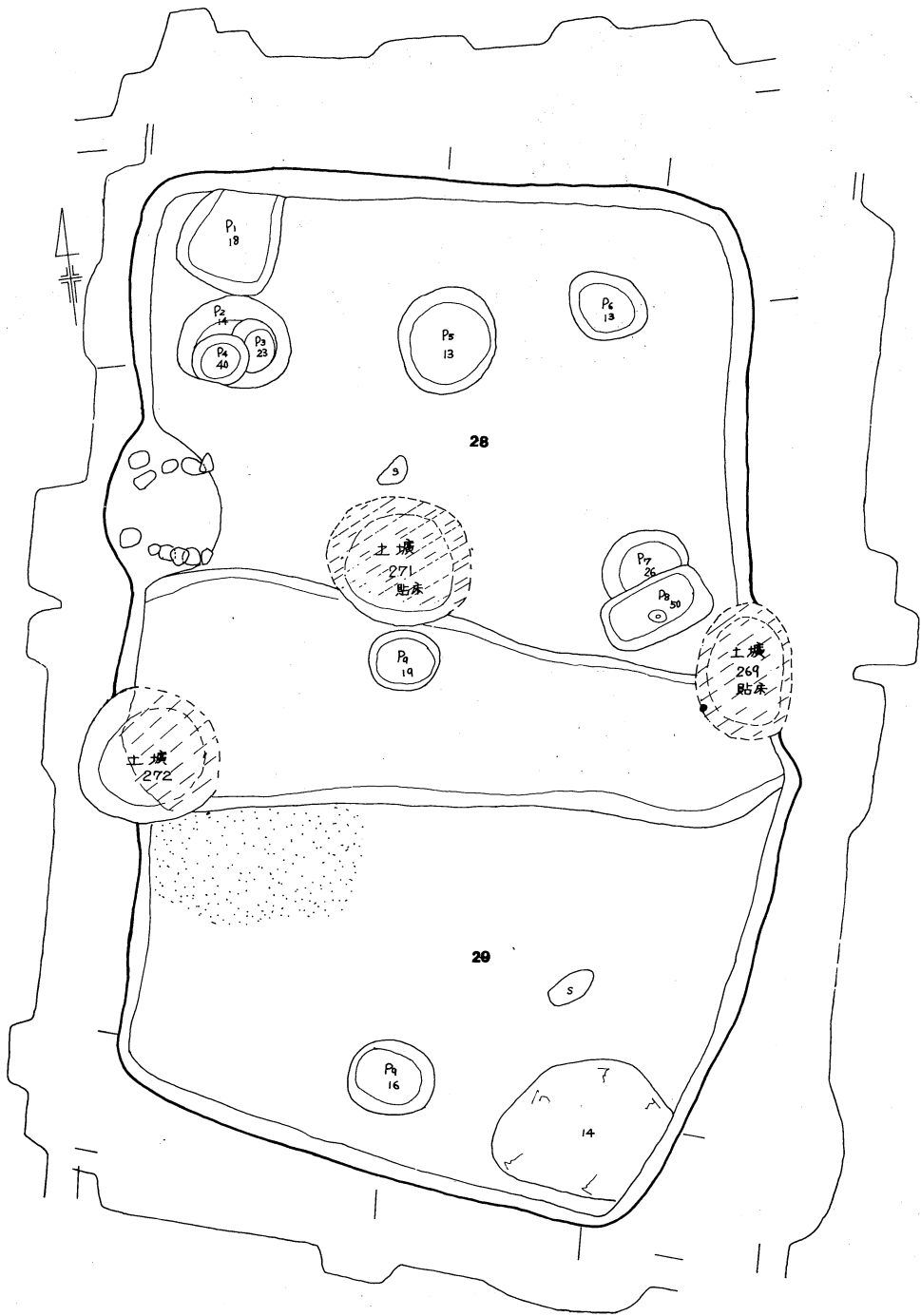
## 26 第28号住居址（第148～150図）

### 遺構（第148・149図）

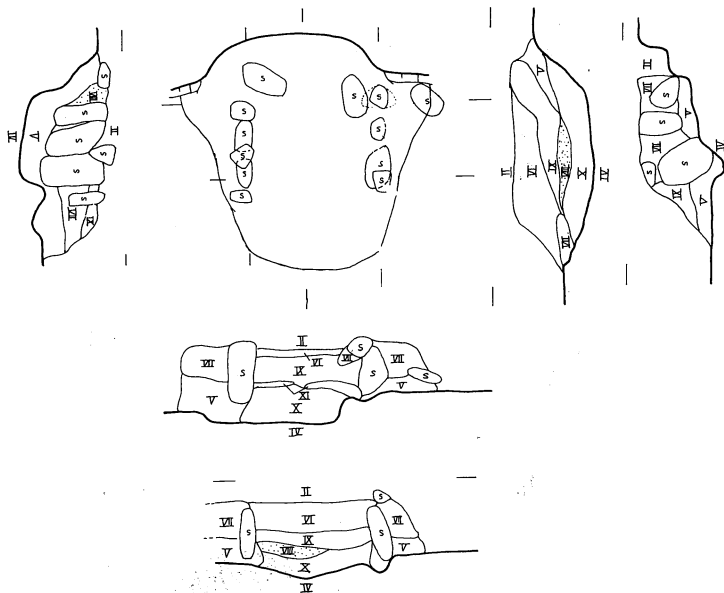
本住居址は第27号住居址の南側にあり、第29号住居址と南側で重複している。重複部分に溝が掘られており、両者の複合関係は平面プランからでは判明しない。

竈の位置から想定すると $5 \times 5$  mの大きさを持つ隅丸方形と思われる。主軸方向は $S-82^{\circ}-E$ である。

壁高は30cm前後でほぼ一定しており、壁の立ち上がりは北東部を除き直に近い。床面は中央部がやや高くなり、ローンをよくたたきしめて良好である。



第148图 第28·29号住居址实测图 ( $S = \frac{1}{80}$ )



第149図 第28号住居址竈実測図 (S = 石)

主柱穴は北東部のP<sub>6</sub>がやや浅く凝間が残るが、P<sub>2</sub>～P<sub>4</sub>、P<sub>6</sub>、P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>の3本が現存し南東部の1本を入れて4本と考えられる。P<sub>2</sub>の内部にP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>が切り合い、P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>が切り合っているため柱の移動も考えられるが定かでない。

竈の前面中央部に貼り床された土壇271がある。また東壁南側にも上部にロームブロックをわずかに持つ土壇269がある。

住居址南側には2～1mの幅の持つ浅い溝がある。住居址が壊されている。

竈は西壁ほぼ中央に位置し、石心ローム造りで残存状態は良い。西壁へはほぼ45°の角度で20cmほど抉り込ませて煙道部を造っている。

基底部の掘り込みは火床面だけでなく袖部まで一諸に掘り込でおり、100×80cmの楕円形を呈し、底は舟底形である。最も深い所で20cmを測る。袖石は細長い角ばった石を用い、やや掘り込んだ基底上に黒色土とローム粒の混合土をひいてその上に袖石をのせ上面外側をロームで固めている。内面にはロームブロックが部分的にみられただけである。

燃烧部から煙道部まで厚く灰が堆積し、その上に焼土が燃烧部のみみられた。焼土の堆積はあまり厚くない。

#### 遺物 (第150図)

出土土器は数量表にみるとおりあまり多くない。灰釉陶器はまったく出土していない。

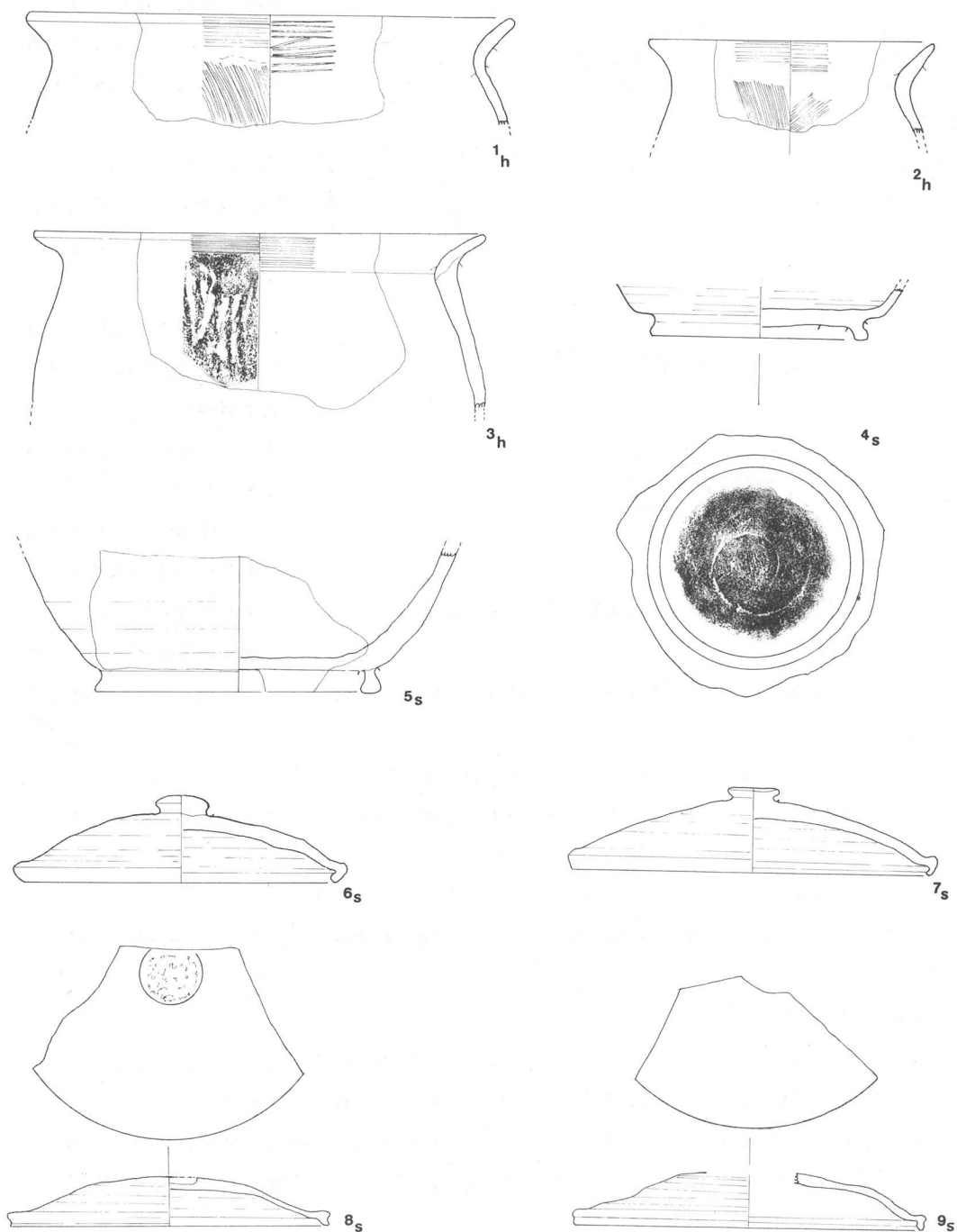
1～3は土師器の甕形土器で口縁部近い小砂片からの図上復元のものである。

1は黄褐色を呈し、胎土中に砂粒を含んでいる。口唇部はやや肥厚し丸味を持つ。外面口唇部には横ナデがみられ、胴部には左上から右下にかけてのハケ目が施される。内面口頸部には粗い横位のハケ目が施される。

2は小形甕である。砂粒を含んで褐色に焼かれている。口唇内外面には横ナデがみられる。胴部内外面には左上から右下にかけてのハケ目が施される。

3は赤褐色を呈し、砂粒を含む。器厚は頸部が厚くなり口唇は薄く丸味を持つ。口唇内外面に横ナデを施している。胴部外面は棒状工具による深い荒いハケ目が縦位に施され、内面はナ





第150図 第28号住居址出土土器 (1/3)

器形	部分	土師	須恵	小計
甕	実測	3	2	5
	胴部	10	1	11
	底部	2		2
坏	口縁	2		2
	胴部	2		2
高台付 坏	実測		1底	1
埴蓋	実測		1底	1
	実測		4	4
小計		19	9	28

第28号住居址出土土器  
数量表

7は非常にゆるやかなカーブを描く天井部で、下端は強く上がって薄い口縁部にいたっている。器厚は中央部が厚くなっている。砂粒を含み暗青色を呈している。

8は天井部の浅いものである。央部はほぼ平らとなり下端部は内屈し、口縁部は直に近い砂粒を含み暗青色を呈している。ロクロは右回りである。鈕の形態は不明である。

9は平らな中央部から一端ゆるくふくらんで下端部が強く内屈して口縁にいたっている。砂粒を含み黒青色を呈している。ロクロは左回転である。6・7には天井部にヘラ削りがみられる。

これらの土器は平安時代初期に位置づけられる。

デツけがされる。

4は須恵器の高台付坏で口縁部を欠く。砂粒多く含んで黒灰色に焼かれている。器厚は底部は厚いが体部では薄くなっている。高台は厚くしっかりとふんばり外反している。底部の切り離しは回転ヘラ切り技法で行われ、その周辺部を5～6回にわたって手持ちのヘラ削りを行っている。高台付け後両側面に回転利用の横ナデをしている。

5ははっきりしないが、須恵器の高台付き埴である。体部の立ち上がり部が非常に厚くなっている。高台は台形を呈し薄いがしっかりとふんばっている。胎土はち密で灰黒色を呈している。ロクロは左回転のものを利用し、底部の切り離しは回転ヘラ切り技法によっている。高台付け後両側面を回転利用の横ナデしている。

6～9は須恵器の蓋である。6は天井部が高くゆるやかに内湾している。鈕は宝珠形であるが中央部の尖りはない。ロクロは右回りである。

## 27 第29号住居址（第148・151図）

### 遺構（第148図）

本住居址は第28号住居址と北側にて重複するもので、複合関係が定かでないことはすでにふれている。

プランははっきりしないが東壁が張り出した隅丸長方形と思われる。大きさは推定5.3×4.2mである。住居址の主軸方向はS-68°-Eである。

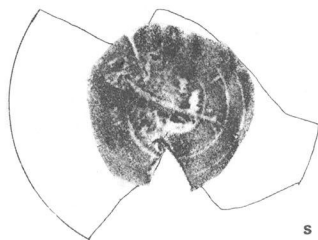
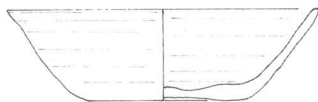
壁高は25cm前後を測り立ち上がりはゆるやかである。床面はほぼ平坦でありタタキはみられず軟弱である。

ピットはP9と南東部に浅い舟底形のものがあるのみで主柱穴はない。

住居址中央部から西壁にかけて 170

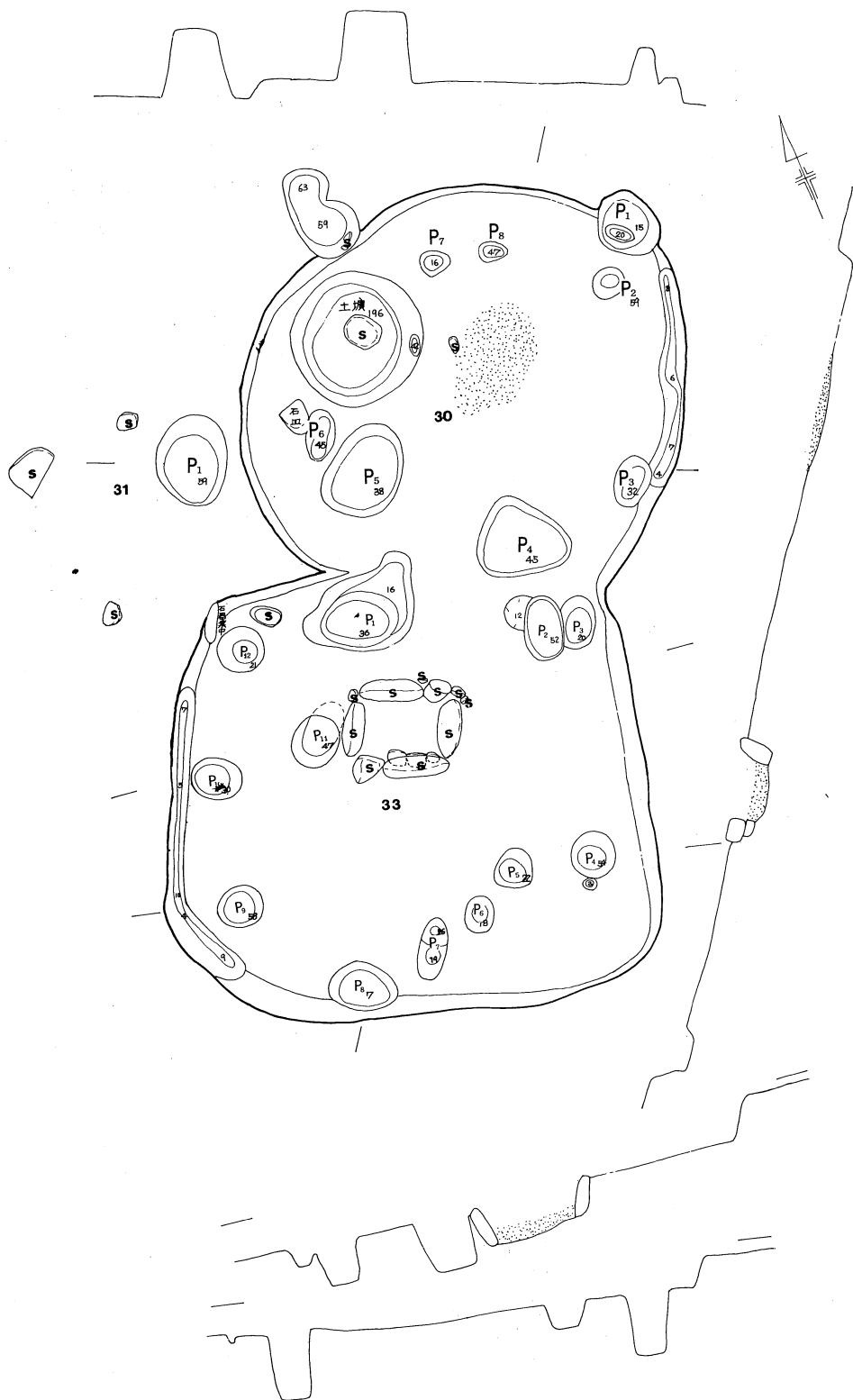
器形	部分	土師	須恵	小計
甕	胴部	2	3	5
坏	実測		1	1
蓋	口縁		1	1
小計		2	5	7

第  
29号住居址出土土  
器数量表



第151図

第29号住居址出土  
土器（ $\frac{1}{3}$ ）



第152图 第30·31·33号住居址实测图 ( $S = \frac{1}{60}$ )

×90cmの範囲で焼土の推積がみられる。壁に近づくほど厚くなり15cmを測る。これが竈の代用であろう。焼土の北側は溝によって切られている。この溝は住居址以後のものであることは明確であるが、性格はまったく不明である。

#### 遺物（第151図）

出土土器は非常に少ない。図示できたものは第151図の坏のみである。その他土師器の甕、須恵器の蓋がある。灰釉陶器はまったく出土していない。

第151図は須恵器の坏で半分ほどからの図上復元である。胎土はち密で白色を呈し、焼きが甘いため土師器と間違えそうである。底部は上げ底である。器厚は体部は一定するが底部周辺は厚い。底部内面は幅広なロクロ痕を残している。底部には回転ヘラ削りによるほぼ等間隔の明瞭な同心文がみられる。切り離し技法は不明である。ロクロの回転方向も不明である。

遺物が少なく時代は明確にできないが、平安時代中期に位置づけられるであろう。

### 28 第30号住居址（第152～156図）

#### 遺構（第152図）

本住居址は第31～34号住居址らと一群となっている。第34号住居址の西にあり、北側は第32号住居址に接し、南側は第33号住居址と重複している。西側には第31号住居址があるが複合関係は不明である。

第33号住居址とは同一床面レベルで重複しており、複合関係はプランからでは判明しない。このように南側部分がはっきりしないが、平面プランは楕円形を呈すと思われ、大きさは東西4.2m、南北推定3.5mを測る。住居址の主軸方向はS-43°-Wである。

現壁高は15～20cmで、東壁の立ち上がりは直に近く、西・北壁はややゆるやかである。床面は若干の凸凹がみられるが全体によくたたきしめられており良好である。

主柱穴はP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>8</sub>がそれと考えられ土坑196による破壊を考えると6本の可能性が強い。

炉は住居址中央やや北東寄りの焼土が考えられる。炉石が抜かれた形跡はまったくないため地床炉である。床面を100×70cmの楕円形にわずかに凹めただけのもので、底部は舟底形である。P<sub>6</sub>の西側床面上に石皿がすえられている。

#### 遺物（第153～156図）

土器・石器とも出土量は比較的多い。

土器はすべて深鉢形の破片で器形を知り得るものはない。

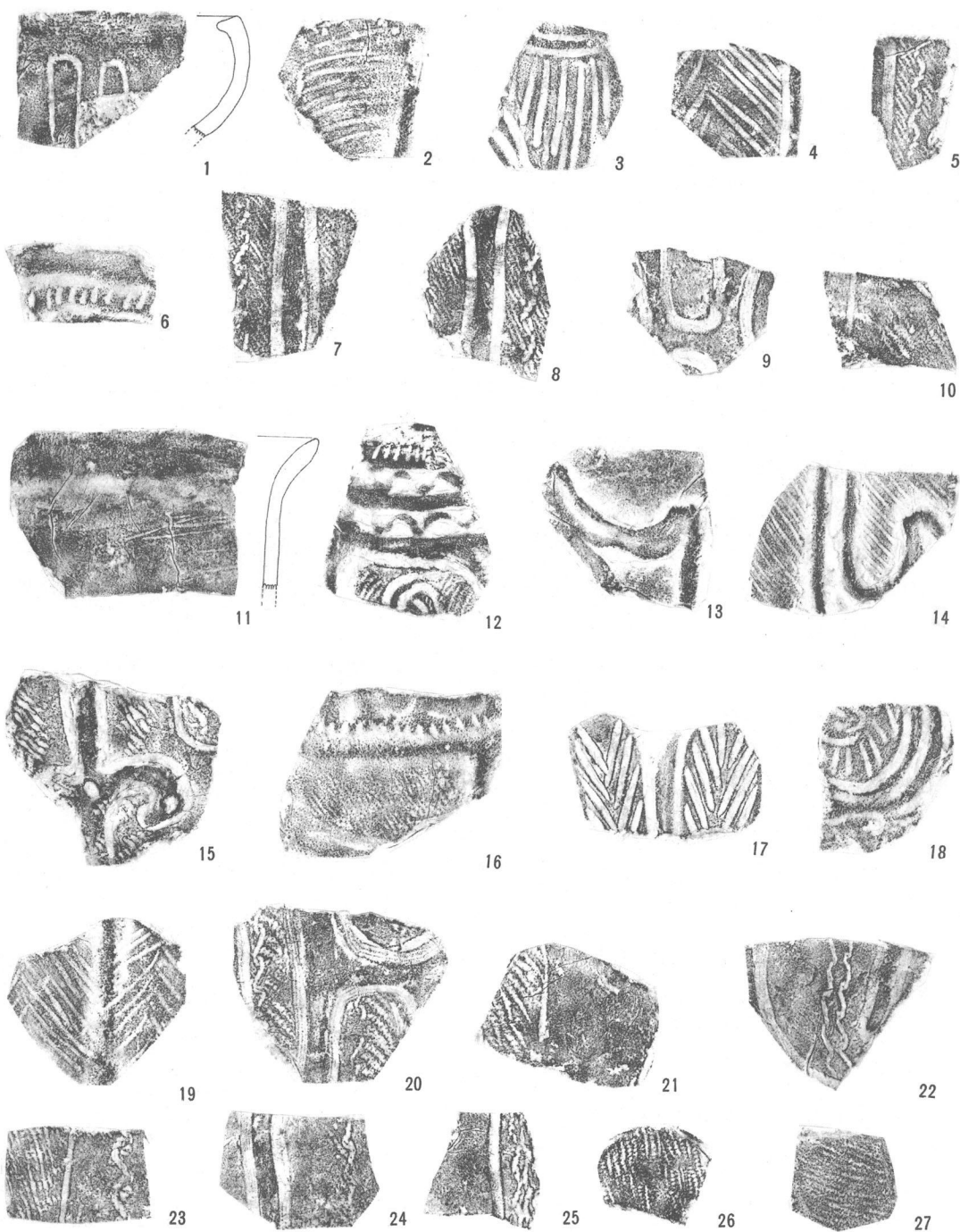
第153図-1～10は覆土、11～27は床面出土のものであるが、時間差はみられない。

2～4、12～14、17～19の曽利的要素を持つものと5、7～10、15・16、20～25の結節縄文を持つものとに大別できる。

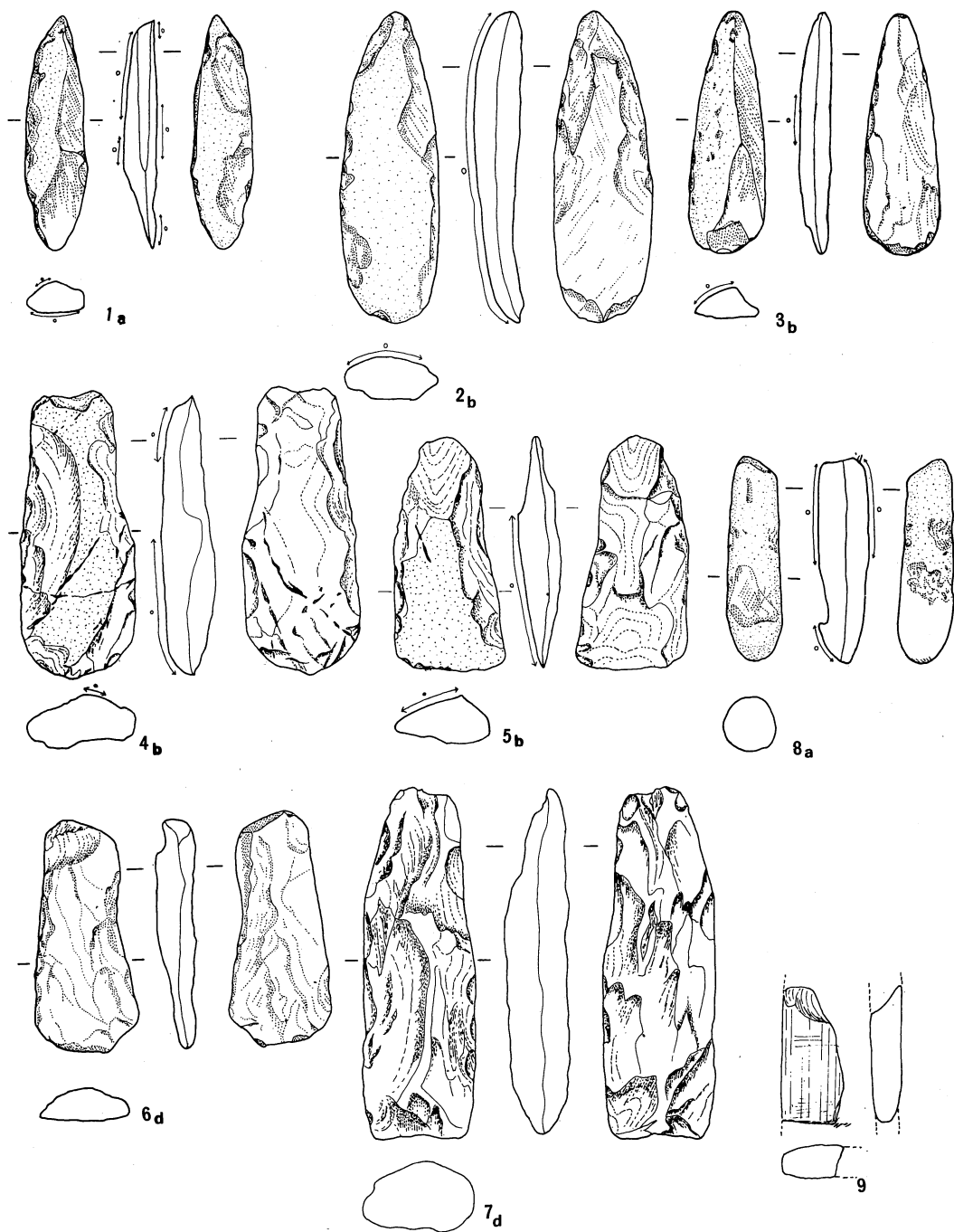
さて住居址の所属時期は曽利Ⅲ式の初め頃に比定できるであろう。

石器は全部で28点している。覆土出土のもの19点、床面出土のもの9点である。

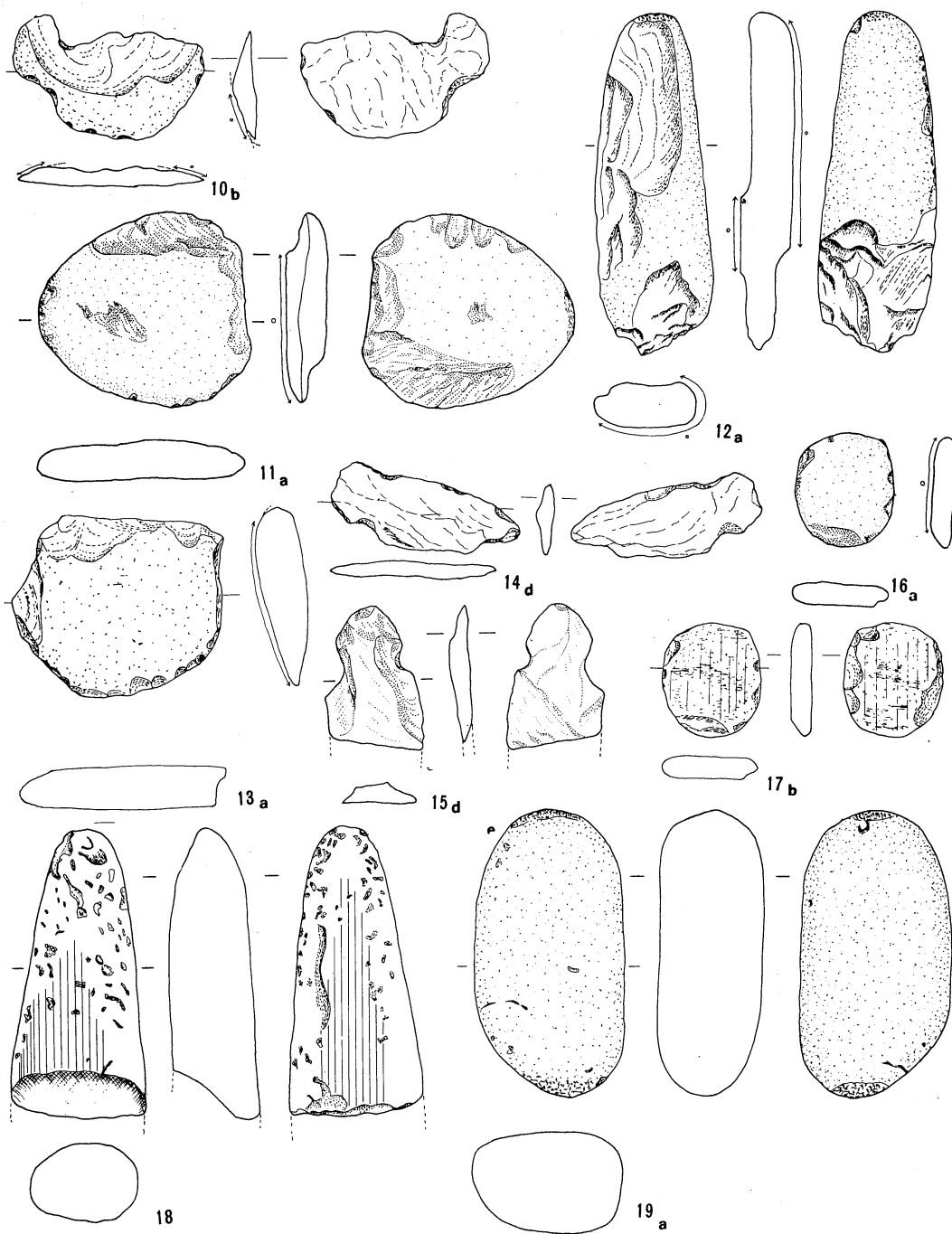
覆土出土の内訳は打製石斧13点、磨製定角石斧・大形粗製石匙・特殊敲打器・横刃形石器各



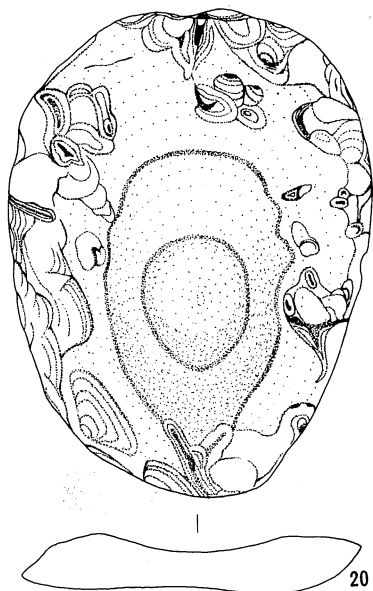
第153図 第30号住居址出土土器（ $\frac{1}{3}$ 、1～10は覆土、11～27は床面出土）



第154図 第30号住居址覆土出土石器 (1/3)



第155図 第30号住居址出土石器（ $\frac{1}{3}$ 、10～13は覆土、14～19は床面出土）



第156図 第30号住居址床面出土石皿(1/8)

1点ずつと敲打器が2点である。打製石斧13点のうち完形のものは7点である。

床面出土の内訳は打製石斧・大形粗製石匙・特殊敲打器各2点ずつと磨製乳棒状石斧・敲打器・石皿各1点ずつである。打製石斧は2点とも破損品である。

1～7は打製石斧で3の撓形を除き短冊形である。1は両端が尖って柳葉状である。1はa類、2～5はb類、6・7はa類である。石質は1～3が緑泥岩、4・5が硬砂岩、6が砂岩、7は緑泥片岩である。

9は磨製の定角石斧、18は乳棒状石斧でともに欠損している。18は中央面のみに磨きがみられ、外は敲打痕が残っている。9は松脂岩製、18は緑泥岩製である。

10・14・15は大形粗製石匙でともに調整は雑である。10・14は横形、15は縦形のものである。石質は10が硬砂岩、14が緑泥片岩、15が砂岩である。10はb類、14・15はd類である。

8・12・19はともにa類の敲打器である。12・19は両端を利用している。8は緑泥岩製、12は砂岩製、9は硬砂岩製である。

11・16・17は特殊敲打器で11・16はa類、17はb類である。石質は11は砂岩、16・17は硬砂岩である。

13は硬砂岩製の横刃形石器でa類のものである。

20は床面上にすえられていた石皿で花崗岩製である。裏面も若干磨った痕跡がある。

## 29 第31号住居址 (第152、157～159図)

### 遺構 (第152図)

本住居址は第30号住居址の西に位置するもので大半は調査未了で終わってしまったものである。第30号住居址の西側ローム面が非常に固く、また土器もかなり出土したため住居址としたもので、調査未了区域が多いため詳細はわからない。北側では壁の存在はない。P1の西側に平盤石皿と思われる花崗岩が床面より発見されている。

### 遺物 (第157～159図)

土器・石器とも調査面積のわりには多く出土している。

第157図は覆土、第158図は床面出土の土器で、大形破片は多いが器形を知り得るものはない。両者の時間差は認め難い。

口縁部文様は加曽利E的モチ一つのものが多く、1・5・6・16の如く結節縄文を口縁部文様に取り入れたものもある。胴部文様も10・11のように結節縄文を持つものが一般的である。